

栃木県埋蔵文化財調査報告第 417 集

篠崎遺跡

- 県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査 -

2024.3

栃 木 県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

しの ざき い せき
篠 崎 遺 跡

- 県営農地整備事業（経営体育成型）葉師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査 -

2024.3

栃 木 県
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



第 64 号竖穴建物跡出土 銅製鈎帶

序

篠崎遺跡は、栃木県南部の下野市薬師寺地内に位置しています。この地域は東に筑波山、西に男体山を仰ぐ豊かな田園地帯であるとともに、日本三戒壇の一つである薬師寺が建立されるなど、古来より開けた地でもあります。

この度、栃木県農政部による薬師寺・柴地区農地整備事業に先立ち、整備地内に所在する遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を実施いたしました。

発掘調査では、縄文時代から中世に至る遺構や遺物が確認できました。縄文時代早期の土器・石器は県内屈指の出土量であり、また、古代の鈿帯は県内最多の7個が出土するなど、地域の歴史を解明する貴重な成果が得られました。

本報告書は、令和4年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして、郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました下野市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに地権者の皆様など関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和6(2024)年3月

栃 木 県

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

例言

- 1 本書は、栃木県下野市葉師寺地内に所在する篠崎遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、令和4（2022）年度および令和5（2023）年度農地整備事業のうち、県営農地整備事業（経営体育成型）葉師寺・柴地区に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する記録調査である。
- 3 調査は、栃木県より公益財団法人とちぎ未来づくり財団へ業務委託され、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが、栃木県生活文化スポーツ部文化振興課（旧教育委員会事務局文化財課）の指導のもと、実施したものである。
- 4 本遺跡の現地調査及び整理報告書作業期間は以下の通りである。

平成29（2017）年度 確認調査

期 間 平成29（2017）年4月3日～平成30（2018）年3月29日

担当者 整理課副主幹兼課長 津野 仁

令和4（2022）年度 発掘調査

期 間 令和4（2022）年9月1日～令和5（2023）年3月30日

担当者 調査課副主幹 篠原 浩恵

調査課嘱託調査員 関口 正明

令和5（2023）年度 整理・報告

期 間 令和5（2023）年4月3日～令和6（2024）年3月28日

担当者 整理課副主幹 篠原 浩恵

- 5 本書の執筆・報告書作成は篠原浩恵が行った。
- 6 篠崎遺跡の調査にあたり、以下の事業を委託した。
令和4（2022）年度 基準点測量及び基準杭設定・航空写真撮影：株式会社シン技術コンサル
自然科学分析（テフラ分析）：株式会社火山灰考古学研究所
遺物洗浄・石器実測：株式会社シン技術コンサル
令和5（2023）年度 石器実測：株式会社シン技術コンサル
鈿帯保存処理：有限会社武蔵野文化財修復研究所
遺物写真撮影：株式会社松井ビ・テ・オ・印刷
（鈿帯） 小川忠博
石材肉眼鑑定：バリノ・サーヴェイ株式会社

委託した出土遺物の詳細は以下のとおりである。

石器実測・・・第69図～第81図

鈿帯写真・・・巻頭カラー・図版三〇

遺物写真・・・図版一九～二九

- 7 発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行った。
- 8 発掘調査・報告書作成にあたっては、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの職員その他、次の方々から御指導・御協力をいただいた。

下野市教育委員会 南河内土地改良区 すずき内科・循環器科（下野市） 芹沢清八 中村信博
山口耕一 領塚正浩

- 9 発掘調査の参加者は、次の通りである。

青柳茂樹 伊藤千景 岩上愛純 宇田川勉 宇都宮剛 大澤利男 大園東太 小平誠治 大塚 明
大橋春夫 片柳耕一郎 川名子正美 坂田文宣 関口翔太 高木文男 高橋麻佐美 直井正行
広澤文雄 柳 秀晴 山内愛子 山口朋子 山中高美夫 吉川聡行 米澤浩一

- 10 整理・報告書作成作業の参加者は次の通りである。

佐藤 愛 塚田幸枝 野中美帆

- 11 本遺跡の調査概要は、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報で報告されているが、本書をもって正式報告とする。

- 12 本遺跡の出土遺物・図面写真等資料等については、栃木県が保有し、栃木県埋蔵文化財センターに保管、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが管理している。

凡 例

1 遺跡

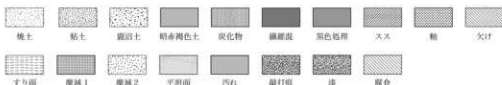
- (1) 遺跡の略号は SM・SN (ShiMotukeshi-ShiNozaki) である。

2 遺構

- (1) 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所が用いる SA (塙・欄列)・SB (建物)・AC (回廊)・SD (溝)・SE (井戸)・SI (住居)・SK (土坑)・SZ (古墳)・SX (性格不明遺構)・P (ピット) に準拠する。また、自然地形等については事実記載の便宜上「S」を付して記述した。
- (2) 遺構図の縮尺は原則として 1/80、カマドは 1/40 を用いる。挿図中にスケールで示す。
- (3) セクション図中の「L.H.」は線上が標高を示す。
- (4) 方位は国家座標に拠っている。
- (5) 土層堆積図の番号は原則堆積の順序を示すが、異なる場合もある。
- (6) 遺構図中の点線は推定ラインを示す。

3 遺物

- (1) 実測図の縮尺は原則として 1/4、陶磁器については 1/3 を用いる。挿図中にスケールで示す。
- (2) 挿図中の遺物番号は、遺構毎の出土番号及び遺物観察表並びに写真図版の番号に対応する。
- (3) 縄文土器の断面図に網掛けしたものは、胎土中に繊維を含む。
- (4) 須恵器の断面図は黒塗りです。
- (5) 施釉の範囲はトーンおよび下端を実線で示す。
- (6) 土器実測図のスクリーントーンは以下を示す。



- (7) 縄文土器実測図・拓影図で内外面を示したものは、左側に外面、右側に内面を基本に表示した。
- (8) 須恵器実測図・拓影図で内外面を示したものは、左側に外面、右側に内面を基本に表示した。
- (9) 石器・礫の左右面は任意であり、観察表中の表面は左面、裏面は右面を指すが、使用状況を示すものではない。
- (10) 土師器以外の酸化焰焼成の土器は土師質土器とした。
- (11) 図版・観察表および本文中の番号は一致する。
- (12) 事実記載及び観察表中の（ ）付き数値は残存値、[]付き数値は推定値を示したものである。
- (13) 胎土の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 1996年版）を参照した。
- (14) 陶磁器の色調は『マンセルシステムによる色彩の定規 拡充版』（一般財団法人日本色彩研究所監修 日本色研事業株式会社発行 2008）を参照した。

目次

序

例言	i
凡例	ii

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 調査の方法	4

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 調査の概要	16
(1) 基本土層	16
(2) 調査の概要	25
第2節 確認調査	29
第3節 竪穴建物跡	31
(1) 調査の概要	31
(2) 竪穴建物跡	31
第4節 土坑	74
(1) 調査の概要	74
(2) 土坑	74
第5節 ビット	85
(1) 調査の概要	85
(2) ビット	85
第6節 溝状遺構	88
(1) 調査の概要	88
(2) 溝状遺構	88

第4章 遺構外の出土遺物

第1節 調査の概要	94
第2節 縄文時代の出土遺物	94
(1) 調査の概要	94
(2) 縄文土器	94
(3) 石器	105

第3節	弥生時代の出土遺物	133
(1)	調査の概要	133
第4節	古墳時代～古代の出土遺物	133
(1)	調査の概要	133
第5節	中・近世以降の出土遺物	143
(1)	調査の概要	143
(2)	中・近世以降の出土遺物	143
第6節	土玉・小礫・粘土塊等	145
(1)	調査の概要	145
第5章	総括	146
第1節	調査の概要	146
第2節	縄文時代	147
第3節	古墳時代～古代	148
(1)	竪穴建物跡	148
(2)	出土遺物	150
(3)	集落の変遷	152
第4節	中世以降	155
(1)	土坑・溝状遺構	155
(2)	出土遺物	155
附章	自然科学分析	157
第1部	篠崎遺跡発掘調査に係る自然科学分析	157
第2部	篠崎遺跡発掘調査に係る出土石器等岩石肉眼鑑定	170

挿図目次

第1図	篠崎遺跡位置図	1	第39図	第58号竪穴建物跡出土遺物実測図	55
第2図	篠崎遺跡調査区図	5	第40図	第62号竪穴建物跡出土遺物実測図	58
第3図	栃木県地形区分図	8	第41図	第62号竪穴建物跡実測図	59
第4図	篠崎遺跡 周辺地形区分図	9	第42図	第64号竪穴建物跡(カマド)実測図(1)	61
第5図	篠崎遺跡周辺の主な遺跡分布図	10	第43図	第64号竪穴建物跡遺物出土状況図	61
第6図	周辺の主な遺跡分布図	13	第44図	第64号竪穴建物跡実測図	62
第7図	調査区全体図・グリッド配置図	18	第45図	第64号竪穴建物跡(カマド)実測図(2)	63
第8図	A区トレンチ等位置図	19	第46図	第64号竪穴建物跡出土遺物実測図	64
第9図	A区トレンチセクション図(1)	20	第47図	第79号竪穴建物跡(カマド)実測図	69
第10図	A区トレンチセクション図(2)	21	第48図	第79号竪穴建物跡実測図	70
第11図	A区調査区壁セクション図	22	第49図	第79・80号竪穴建物跡出土遺物実測図	71
第12図	B区トレンチセクション図	23	第50図	第5・6・14・18・81号土坑実測図	75
第13図	C区トレンチセクション図	24	第51図	第14号土坑出土遺物実測図	76
第14図	D区トレンチセクション図	25	第52図	第16・17・23・45・46・50・51・	
第15図	A区地形復元模式図	26	52・56・57号土坑実測図	77	
第16図	A区遺構配置図	27	第53図	第47・48・49・53・54・82・83・84	
第17図	トレンチ7出土遺物実測図	29	号土坑実測図	79	
第18図	確認調査トレンチ配置図	30	第54図	第66・73・74・86・87・88・89・	
第19図	第4号竪穴建物跡出土遺物実測図	31	90・100・101号土坑実測図	81	
第20図	第4号竪穴建物跡実測図	32	第55図	第72・92・94・95・96・97号土坑実	
第21図	第8号竪穴建物跡実測図(1)	33	測図	82	
第22図	第8号竪穴建物跡実測図(2)	34	第56図	第7・24・25・28・29・31・33・55・	
第23図	第8号竪穴建物跡実測図(3)	35	65・68・69・70・71・98・99号ビット実測		
第24図	第8号竪穴建物跡(カマド)実測図	36	図	42	
第25図	第8号竪穴建物跡出土遺物実測図	37	第27図	第12号竪穴建物跡(カマド)実測図	43
第26図	第9号竪穴建物跡・第11号ビット実測	42	第28図	第12・93号竪穴建物跡・第21号土坑	
第27図	第12号竪穴建物跡(カマド)実測図	43	実測図	44	
第28図	第12・93号竪穴建物跡・第21号土坑	44	第29図	第12号竪穴建物跡出土遺物実測図	45
第29図	第12号竪穴建物跡出土遺物実測図	45	第30図	第15号竪穴建物跡実測図	46
第30図	第15号竪穴建物跡実測図	46	第31図	第15号竪穴建物跡出土遺物実測図	47
第31図	第15号竪穴建物跡出土遺物実測図	47	第32図	第19号竪穴建物跡実測図(1)	48
第32図	第19号竪穴建物跡実測図(1)	48	第33図	第19号竪穴建物跡実測図(2)	49
第33図	第19号竪穴建物跡実測図(2)	49	第34図	第19号竪穴建物跡出土遺物実測図	49
第34図	第19号竪穴建物跡出土遺物実測図	49	第35図	第58号竪穴建物跡実測図(1)	51
第35図	第58号竪穴建物跡実測図(1)	51	第36図	第58号竪穴建物跡実測図(2)	52
第36図	第58号竪穴建物跡実測図(2)	52	第37図	第58号竪穴建物跡実測図(3)	53
第37図	第58号竪穴建物跡実測図(3)	53	第38図	第58号竪穴建物跡(カマド)実測図	54
第38図	第58号竪穴建物跡(カマド)実測図	54			

第71図	石器実測図(3)・・・・・・・・・・	109	第78図	石器実測図(10)・・・・・・・・・・	116
第72図	石器実測図(4)・・・・・・・・・・	110	第79図	石器実測図(11)・・・・・・・・・・	117
第73図	石器実測図(5)・・・・・・・・・・	111	第80図	石器実測図(12)・・・・・・・・・・	118
第74図	石器実測図(6)・・・・・・・・・・	112	第81図	石器実測図(13)・・・・・・・・・・	119
第75図	石器実測図(7)・・・・・・・・・・	113	第82図	遺構外の出土遺物実測図(1)・・・	134
第76図	石器実測図(8)・・・・・・・・・・	114	第83図	遺構外の出土遺物実測図(2)・・・	142
第77図	石器実測図(9)・・・・・・・・・・	115	第84図	A区全体図・・・・・・・・・・	149

表目次

第1表	遺構一覧表・・・・・・・・・・	28	第13表	第80号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	73
第2表	確認調査の遺構・遺物・・・・・・・・	29	第14表	第14号土坑出土遺物観察表・・・・	76
第3表	トレンチ7出土遺物観察表・・・・	29	第15表	第59号溝状遺構出土遺物観察表・・・	90
第4表	第4号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	31	第16表	縄文土器形式別出土個数一覧・・・	106
第5表	第8号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	37	第17表	石器観察表(1)・・・・・・・・・・	120
第6表	第12号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	45	第18表	石器観察表(2)・・・・・・・・・・	132
第7表	第15号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	47	第19表	遺構外出土遺物観察表(1)・・・・	134
第8表	第19号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	49	第20表	遺構外出土遺物観察表(2)・・・・	142
第9表	第58号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	55	第21表	本調査区及び周辺諸遺跡 竪穴建物跡一 覧・・・・・・・・・・	153
第10表	第62号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	58	第22表	気候変動表(1)・・・・・・・・・・	154
第11表	第64号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	65	第23表	気候変動表(2)・・・・・・・・・・	154
第12表	第79号竪穴建物跡出土遺物観察表・・	72			

図版目次

図版一	遺構 調査区全景	図版三	遺構 A区M-9付近(北西から) 第4号竪穴建物跡全景(南西から) 第8号竪穴建物跡全景(南東から) 第8号竪穴建物跡全景(北東から) 第8号竪穴建物跡土層堆積状況(南東から) 第8号竪穴建物跡土層堆積状況(南西から) 第8号竪穴建物跡遺物出土状況(南東から) 第8号竪穴建物跡遺物出土状況(南東から)
図版二	遺構 調査区全景(南西から) 調査区全景(東から) 調査区全景(西から) 調査区全景(北東から) A区北西端部から(北西から) A区南東端部から(南東から) A区西縁中央部付近から(西から) A区M-9付近(南東から)	図版四	遺構 第8号竪穴建物跡遺物出土状況(南から) 第8号竪穴建物跡遺物出土状況(南から)

- 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p1 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p2 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p3 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p4 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p5 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡柱穴 p6 (南東から)
- 図版五 遺構
 第 8 号竪穴建物跡カマド (東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド掘り方 (南東から)
 第 8 号竪穴建物跡カマド掘り方 (東から)
 第 9 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 9 号竪穴建物跡全景 (南西から)
- 図版六 遺構
 第 12・93 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 12・93 号竪穴建物跡全景 (南西から)
 第 12 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (西から)
 第 12 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 (南から)
 第 15 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 15 号竪穴建物跡全景 (南西から)
 第 15 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)
 第 15 号竪穴建物跡土層堆積状況 (北東から)
- 図版七 遺構
 第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘 (北東から)
 第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘 (南東から)
 第 19 号竪穴建物跡全景 (手前) (南西から)
 第 19 号竪穴建物跡全景 (南から)
 第 64 号竪穴建物跡全景 (南西から)
 第 64 号竪穴建物跡全景 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況 (北東から)

- 図版八 遺構
 第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)
 第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)
 第 64 号竪穴建物跡 鈎帯出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 鈎帯出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 鈎帯 (23・24) 出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 鈎帯 (25・26) 出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡 鈎帯 (27・28・29) 出土状況 (北西から)
 第 64 号竪穴建物跡掘り方 (南東から)

- 図版九 遺構
 第 64 号竪穴建物跡掘り方 (北東から)
 第 64 号竪穴建物跡カマド (北から)
 第 64 号竪穴建物跡カマド掘り方 (北から)
 第 79 号竪穴建物跡付近遺物出土状況 (南東から)
 第 79 号竪穴建物跡カマド確認状況 (北西から)
 第 79 号竪穴建物跡カマド (北西から)
 第 79 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南西から)
 第 79 号竪穴建物跡カマド (南西から)

- 図版一〇 遺構
 第 58 号竪穴建物跡全景 (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡全景 (北東から)
 第 58 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡掘り方 (南から)
 第 58 号竪穴建物跡掘り方 (西から)
 第 58 号竪穴建物跡作業風景 (北西から)
 第 58 号竪穴建物跡作業風景 (南東から)
- 図版一一 遺構
 第 58 号竪穴建物跡カマド (南東から)
 第 58 号竪穴建物跡カマド (北東から)

第58号竪穴建物跡カマド材散布状況(南から)

第58号竪穴建物跡カマド土層堆積状況(南東から)

第58号竪穴建物跡カマド遺物(第39図8)出土状況(南東から)

第58号竪穴建物跡カマド遺物出土状況(北東から)

第58号竪穴建物跡カマド掘り方(南東から)

第58号竪穴建物跡カマド掘り方(東から)

図版一二 遺構

第62号竪穴建物跡全景(北西から)

第62号竪穴建物跡カマド(北西から)

第5号土坑全景(南東から)

第6号土坑全景(南から)

第14号土坑全景(南西から)

第21号土坑全景(東から)

第21号土坑土層堆積状況(東から)

第21号土坑土層堆積状況(西から)

図版一三 遺構

第45号土坑全景(西から)

第46号土坑全景(東から)

第47号土坑全景(南東から)

第48号土坑土層堆積状況(南東から)

第50号土坑全景(南東から)

第54号土坑全景(東から)

第81号土坑全景(南東から)

第82・83号土坑全景(南西から)

図版一四 遺構

第84号土坑全景(南東から)

第86号(奥)・87号(手前)土坑全景(南東から)

第92号土坑全景(北西から)

第92号土坑作業風景(北西から)

第94号土坑土層堆積状況(南東から)

第95号土坑土層堆積状況(南西から)

第96号土坑全景(南東から)

第97号土坑全景(東から)

図版一五 遺構

第7号ピット全景(東から)

第11号ピット全景(南西から)

第59号溝状遺構(南西から)

第59号溝状遺構(北から)

第59号溝状遺構(南東から)

第85号溝状遺構(北東から)

第14号土坑作業風景(北から)

A区調査作業風景(南東から)

図版一六 遺構

A西区全景(南から)

B区全景(北東から)

B区全景(南から)

C区全景(東から)

D区全景(南東から)

D区全景(西から)

D東区全景(南から)

D南区全景(東から)

図版一七 遺構

A区トレンチ1(南東から)

A区トレンチ2・第54号土坑土層堆積状況(南西から)

A区トレンチ3(南から)

A区トレンチ4北面(南西から)

A区トレンチ5西面(南東から)

A区トレンチ6南面(北東から)

A区トレンチ7(南東から)

A区トレンチ11(南西から)

図版一八 遺構

B区トレンチ13(南西から)

C区トレンチ15-C・D(南東から)

D区トレンチ19(西から)

D区トレンチ22(東から)

D区トレンチ23(北から)

A区グリッド(南から)

A区グリッド調査作業風景(北西から)

A区作業風景(南西から)

図版一九 遺物

SI-8 3・4・8・9・13・14・18・19

SI-12 1

SI-15 1

SI-58 1・6・7・10・11

SI-64 1～3

図版二〇 遺物

SI-64 4・8・10～14・17～19・21

SI-79 4・5・7・8・10

図版二一 遺物

SI-79 12・13・15

SK-14 1

SK-88

P-11

SD-59 2～11

図版二二 遺物

第1群～第7群

図版二三 遺物

第7群～第12群

図版二四 遺物

第12群～第14群

図版二五 遺物

第15群～第17群

図版二六 遺物

第17群・第18群

第20群・第21群

図版二七 遺物

第17群

第21群～第28群

図版二八 遺物

241～261・263

図版二九 遺物

262・264～269

M-11 1

N-8 1・2

N-9 3

N-10 3

O-9

遺構外 4～7

図版三〇 遺物

鈎帯 23～29

図版三一 自然科学分析 野外調査(一)

図版三二 自然科学分析 野外調査(二)

図版三三 自然科学分析 テフラ分析

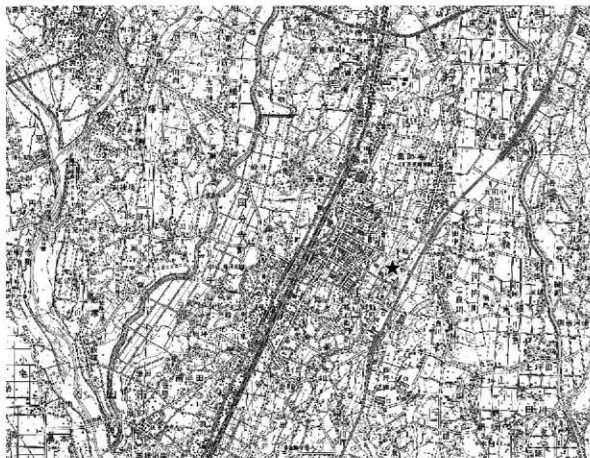
図版三四 自然科学分析 岩石・鉱物

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査の経緯

篠崎遺跡の発掘調査は、栃木県農政部の行う「県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区」に伴い実施した。農地整備にあたっては、調査区を南北に分断する市道が予定されており、これに伴う現農道の付け替え、農地区画の再整備が予定されている。

農地整備事業にあたっては、平成28（2016）年12月12日に下都賀農業振興事務所の立会のもと、栃木県教育委員会文化財課（以下、「県文化財課」現栃木県生活文化スポーツ部文化振興課）が遺跡の所在調査を行い、確認調査の実施および確認調査に基づく遺跡取り扱いについての協議の必要性を報告している。これにより、平成29（2017）年に県文化財課から委託を受けた（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が確認調査を行い、平成30（2018）年4月19日付け文財第57号「農地整備事業「下稲葉地区」「小泉地区」「薬師寺・柴地区」「笹原田地区」地内遺跡の確認調査結果及び取り扱いについて」にて、文化財課長から農地整備課長宛て、確認調査の結果の報告がなされている。これを受けて、令和4（2022）年6月1日付け農整第328号「埋蔵文化財の発掘調査費用について（依頼）」において、農政部長から教育委員会教育長宛て、発掘調査の依頼及び調査費用の積算がなされ、同日付け文財第218号「埋蔵文化財調査について（回答）」にて、教育委員会教育長から農政部長宛て、発掘調査の実施の回答がなされた。同日付け農整第422号「埋蔵文化財の発掘調査費用について（依頼）」にて、農政部長か



第1図 篠崎遺跡位置図

ら教育委員会教育長宛て、調査費用に係る積算書の提出が依頼され、同日付け文財第406号「埋蔵文化財の発掘調査費用について（回答）」にて、教育委員会教育長から農政部長宛て、積算書の提出がなされた。また、同日付け農整第328号の依頼を受けて、文財第442号「農地整備事業薬師寺・柴地区の発掘調査費用の配当替えについて（依頼）」にて、配当替えの依頼がなされた。同日付け農整第642号「埋蔵文化財調査費用負担に係る協定書の締結について（依頼）」にて、農政部長から教育委員会教育長宛て、協議の依頼があり、同日付け文財第447号「埋蔵文化財調査費用負担に係る協定書の締結について（回答）」にて、教育委員会教育長から農政部長宛て、異存のない旨の回答がなされた。

現地調査については、令和4年9月1日付け文財号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（依頼）」にて、文化財課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、調査費用の見積書提出依頼がなされ、同日付けとちぎ文財号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（回答）」にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化財課長宛て、見積書の提出がなされた。同日付け文財号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について」にて、文化財課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、委託契約締結の依頼がなされ、同日付けとちぎ文財号外「令和4（2022）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について（回答）」にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化財課長宛て、契約受諾の回答がなされた。これを受けて、同日付け「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」にて、栃木県知事と（公財）とちぎ未来づくり財団理事長との間で委託契約が取り交わされ、委託業務の契約が締結された。

令和5（2023）年度については、令和5（2023）年4月3日付け農整第94号「埋蔵文化財調査について（依頼）」にて、農政部長から生活文化スポーツ部長宛て、埋蔵文化財の調査依頼がなされ、同日付け文振第98号「埋蔵文化財調査について（回答）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、実施する旨の回答がなされた。同日付け農整第140号「埋蔵文化財調査費用について（依頼）」にて、農政部長から生活文化スポーツ部長宛て、調査費用積算書の提出依頼がなされ、同日付け文振第114号「埋蔵文化財調査費用について（回答）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、回答がなされた。同日付け農整第211号「埋蔵文化財の発掘調査に係る費用負担について」にて、農政部長から生活文化スポーツ部長宛て、協定書締結の依頼がなされ、同日付け文振第163号「埋蔵文化財調査費用負担に係る協定書の締結について（回答）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、回答がなされ、協定書が締結された。また、同日付け文振第163号「農地整備事業に係る発掘調査費用の配当替えについて（依頼）」にて、生活文化スポーツ部長から農政部長宛て、農整第94号に係る調査費用の配当替えについて依頼がなされている。

整理作業・報告書作成作業については、令和5年4月3日付け文財号外「令和5（2023）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（依頼）」にて、文化振興課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、調査費用の見積書提出依頼がなされ、同日付けとちぎ文財号外「令和5（2023）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の費用見積について（回答）」にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化振興課長宛て、見積書の提出がなされた。同日付け文財号外「令和5（2023）年度農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について」にて、文化振興課長から（公財）とちぎ未来づくり財団理事長宛て、委託契約締結の依頼がなされ、同日付けとちぎ文財号外「令和5（2023）年度農地

整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財（篠崎遺跡）の委託契約の締結について（回答）にて、（公財）とちぎ未来づくり財団理事長から文化振興課長宛て、契約受諾の回答がなされた。これを受けて、同日付け「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」にて、栃木県知事と（公財）とちぎ未来づくり財団理事長との間で委託契約が取り交わされ、委託業務の契約が締結された。

以上の契約を執行し、令和6(2024)年3月28日に本書が上梓され、篠崎遺跡農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区）は終了した。なお、整理作業・報告書作成作業中の令和5年9月18日～11月19日には栃木県埋蔵文化財センターの「令和5（2023）年度秋の企画展栃木の遺跡 & 発掘調査」展にて縄文時代早期の土器片の展示を行った。また、10月15日には、これに伴う「発掘調査報告会」を栃木県埋蔵文化財センターで行った。特に、第64号竪穴建物跡から出土した古代の鈴帯7点については、発掘調査報告会の新聞記事に写真とともに掲載された。

第2節 調査の経過

篠崎遺跡発掘調査は、令和4（2022）年度に現地調査を行い、令和5（2023）年度に整理作業・報告書作成作業を行った。以下に概略を記す。

令和4（2022）年度 現地調査

調査範囲 7,226 m²

A区2,123 m²・B区2,196 m²・C区725 m²・D区2,182 m²

調査費用 31,000,000円（うち消費税及び地方消費税の額2,818,181円）

契約期間 令和4（2022）年9月1日～令和5（2023）年3月30日の間の6ヶ月間

調査期間 令和4（2022）年10月1日～令和5（2023）年3月30日

調査の経緯 令和4（2022）年7月12日 栃木県下部賀農業振興事務所、栃木県教育委員会文化財課と事前協議および現地確認

令和4（2022）年10月1日～11月4日 打ち合わせ、諸準備

令和4（2022）年11月7日～11月15日 重機による表土除去（A・D区）

令和4（2022）年11月16日～令和5（2023）年3月17日

発掘作業員による遺構等掘削作業・遺構精査・諸記録

令和4（2022）年11月28日～11月29日 重機による表土除去（C区）

令和4（2022）年12月13日～12月14日 重機による客土除去（A区）

令和5（2023）年1月13日 自然科学分析野外調査（テフラ分析）

令和5（2023）年1月27日 航空写真撮影（A・C・D区）

令和5（2023）年2月1日～2月3日 重機による埋め戻し（C区）

令和5（2023）年2月4日～2月8日 重機による表土除去（B区）

令和5（2023）年3月10日 航空写真撮影（A・B区）

令和5（2023）年3月15日 重機による埋め戻し（B区）

令和5（2023）年3月16日～3月17日 重機による埋め戻し（D区）

令和5（2023）年3月18日～3月24日 重機による埋め戻し（A区）

令和5（2023）年3月20日 栃木県下部賀農業振興事務所、栃木県教育委員会文化財課、南河内土地改良区立ち会いのもと、調査区引き渡し

第1章 調査にいたる経緯と経過

令和5（2023）年度 整理作業・報告書作成作業

調査費用	18,000,000円（うち消費税及び地方消費税の額1,636,363円）
契約期間	令和5（2023）年4月3日～令和6（2024）年3月28日の間の9ヶ月間
調査期間	令和5（2023）年4月3日～11月30日・令和6（2024）年3月1日～3月28日
調査の経過	令和5（2023）年4月3日～11月30日・令和6（2024）年3月1日～3月28日 栃木県埋蔵文化財センターにて実施 令和6（2024）年3月28日 栃木県埋蔵文化財調査報告第417集 『篠崎遺跡・県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査』刊行

第3節 調査の方法

【現地調査】

発掘調査地は畑作を中心とする農地である。現道および農地区画により調査区が分断される状況であるため、便宜的にA～D区の呼称を用いた（第2図）。

調査開始時の現況は休耕地と耕作地である。休耕地はA・C・D（南側を除く）区、耕作地はB区およびD区南側である。このため、栃木農業振興事務所・県文化財課との協議の結果、休耕地であるA・C・D区から調査に着手することとなった。耕作中のD区南側については収穫後速やかに、B区については収穫予定の1月を目途に調査に着手することとした。現道については、農作業用車両等の通行のため調査の着手を見合わせ、調査状況を鑑み、必要に応じて調査を行うこととした。また、A区東端部から約2.0mの範囲については、調査区東側に設けられた農業用水路工事のため調査を見送ることとした。

現地事務所は調査区内における用地の確保が困難であることから、調査区南側に隣接する個人所有の休耕地を借地し、これらに充当した。掘削土置き場は、調査区と耕作区画を同じくする休耕地をあてることとした。

新型コロナウイルス予防については、政府・栃木県の指標のもと、作業時、休憩時等の作業員間の距離の確保、マスクの使用、毎日の健康観察、消毒等を行った。

遺構・遺物の調査は、以下の手順・手法で行った。

【A・B区】

1 表土除去後、遺構確認作業および国家座標に基づくグリッド杭建植。

グリッド杭は10m四方とし、端数にあたる地区にはメートル単位で杭を建植。

A区北西部については、高压電線の架設があり、東京電力からの注意喚起があったため、重機の容量を小さくし、対応した。

2 遺構・遺物については、以下を基本に行った。

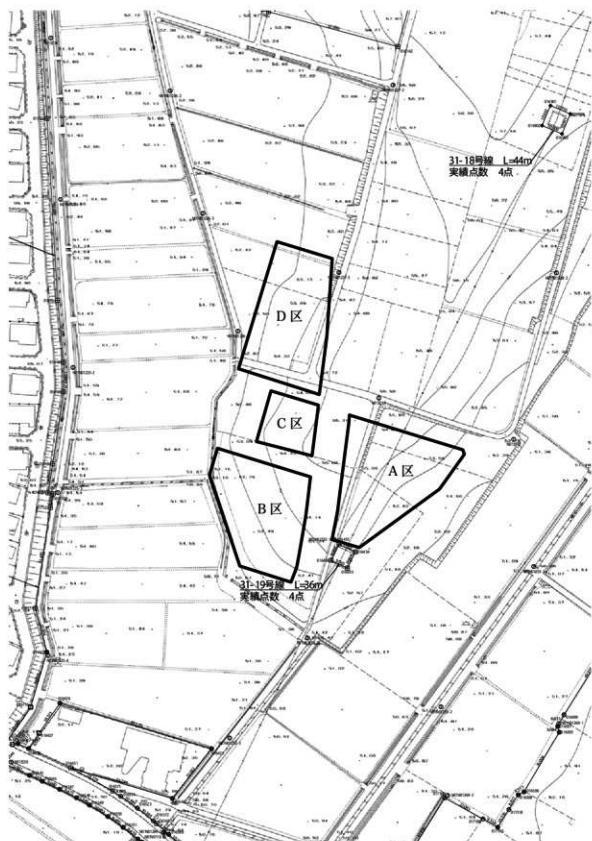
① 遺構の中央に土層観察用ベルト（セクションベルト）を設定、これを残し、覆土の除去。

この間に出土した遺物については、原位置での記録を試みたが、作業の効率等を考慮し、底面に近いレベルから出土するものを優先して原位置で記録した。また、出土層位の判別可能なものは堆積層を記録した。

② 覆土除去後、土層堆積状況を記録（セクション図作成）・写真撮影。

③ セクションベルト除去後、出土遺物の位置・高さを記録（遺物出土状況図作成）。

写真撮影後、遺物取り上げ。



第2図 篠崎遺跡調査区図

第1章 調査にいたる経緯と経過

- ④ 遺構全体の平面図作成・レベルング（遺構内の高さを記録）および写真撮影。
- ⑤ 平面図・遺物出土状況図は平板測量を用いて行った。
- ⑥ 諸作図については、1/20の縮尺を基本に行ったが、カマド図については1/10の縮尺を用いた。

[C区]

- 1 先に行ったC・D区の調査結果を鑑み、トレンチによる遺構・遺物の確認を行った。
重機によるトレンチ掘削後、遺構確認作業および国家座標に基づくグリッド杭建植。
グリッド杭は10m四方とし、トレンチ周辺に建植。端数にあたる地区にはメートル単位で杭を建植。
- 2 遺構・遺物については、A区と同様に調査を行った。

[D区]

- 1 確認調査の成果をもとに重機による表土除去を行った。表土除去の過程で、確認調査時の遺構確認面は客土層上面の誤認であると判断し、表土除去後、トレンチを設定し、遺構確認面の把握および基本土層を記録した。

トレンチ掘削後、遺構確認作業および国家座標に基づくグリッド杭建植。

グリッド杭はトレンチ周辺に建植。

D区の取り扱いについては、県文化財課と協議の結果、今回の農地整備事業においては掘削を伴う工事の施行がないことを確認し、現状の記録を行い、調査を終了することとした。これに伴い、耕作中のため、表土を除去しなかった南側についても、同様の扱いとした。

- 2 遺構・遺物については、A区と同様に調査を行った。

埋め戻しは、現状の耕作地に近い状態に復元し、栃木農業振興事務所、県文化財課、南河内土地改良区の立ち会いのもと、調査区の引き渡しを行った。

【整理作業】

整理作業は栃木県埋蔵文化財センターで行った。

現地作成の実測図は、事実確認後、第二原図を作成、センターにおいてデジタルトレースで図版化し、報告書作成時に修正・補正を行った。

出土遺物の一部は洗浄作業を委託した。洗浄作業後、注記作業、接合作業を行った。欠失部分については、必要に応じて、クレイテックスを充填し、復元および補強した。遺物は実測図を作成し図化、浄書（トレース）し、デジタルデータで図版化した。

上記の作業に併行し、遺構・遺物の事実記載等の原稿執筆、遺物観察表等の表作成・執筆を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。

【報告書作成作業】

報告書刊行に必要な実調査以外の原稿執筆・図版作成を行い、遺構・遺物図版、原稿等と併せ割付し、印刷・校正後、刊行となった。

本報告書に係る遺物、遺構・遺物の実測図・写真、空中写真等の成果品、各種台帳の整理を行い、収蔵庫・記録保管室に収納し、篠崎遺跡発掘調査の全ての作業を完了した。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

篠崎遺跡は栃木県下野市薬師寺地内に所在する。

栃木県は関東平野の最北にあり、東は茨城県、西は群馬県、南は埼玉県、北は福島県に隣接する内陸型である。下野市は、県庁所在地である宇都宮市から南方向約12kmに位置する。平成18(2006)年に隣接する南河内郡南河内町・国分寺町・石橋町が合併し、人口約6万人(令和5(2023)年11月末日現在)の市となった。本遺跡は旧南河内町に所在する。現在の遺跡周辺は、台地では畑地、低地部では水田・畑地が広がる鷹揚な田園地帯である。しかし、近年の開発により自治医科大学および付属病院と自治医大駅周辺を中心とする宅地造成が遺跡西側の台地まで広がっている。また、遺跡の北東約2.7kmには「道の駅しもつけ」があるなど、近年の開発は著しい。

本遺跡の原況は畑地・休耕地である。

【位置】

栃木県は関東平野の北端に位置する。県土を大別すると、東・西・北を囲う山塊である東部山地・西部山地と、中央に開けた南北に長い中央部平地とからなる。東部山地はいわゆる八溝山地であり、福島県・茨城県との県境に沿って北から八溝山塊・鷲子山塊・鶏足山塊が南北に連なる。西部山地は下野山地と足尾山地とからなり、福島県・群馬県との県境に沿って北から那須岳・高原山・帝釈山・男体山・足尾山と連なる。中央部平地は北から高久丘陵、那須野が原、喜連川丘陵、鬼怒川流域の中南部の台地・低地からなり、南半は関東平野の北限となる。本遺跡は祇園原台地に所在する。祇園原台地は妻川と田川台地に挟まれた南北に長い丘陵であり、本遺跡は台地を細かく開析する小支谷に挟まれた舌状部の突端に位置する。

中央部平地は洪積台地とそれを開析する河川が形成する沖積台地とからなる。河川の南流に伴い、台地は概ね平坦で南北に延び、且つ、南に向かって緩やかに傾斜する。台地の縁辺部は崖線を形成するものの、台地と低地の高低差は少なく、斜面は緩やかである。本遺跡周辺の地形もこれに類するものであるが、各調査区における基本土層(第3章第1節)の観察結果からは台地は単調に南北帯状方向に延びるのではなく、小さな起伏や浅い埋没谷が複雑に入り組む地形であったことが想定された。本遺跡の位置する台地の東・西側の低地部分については、「谷」の呼称を用いる。

本調査区の遺構確認面の標高は、台地頂部(A西区)で55.55mである。これより東側は、谷の落ち際とみられる第58壑穴建物跡付近55.55m、A区東端部(谷部)55.55mである。台地西端部付近(C区西側)55.55m、台地南端部(B区南部)55.55mである。調査区東側の低地面の標高は約55.55m・比高約11.1m、西側の標高は約55.55m・比高約11.1mである。

【地質】

中央部平地は、主として台地と低地から構成される。台地は河成段丘面(古期のものから宝積寺段丘礫層・宝木段丘礫層・田原段丘礫層)と火山灰層の堆積(いわゆる関東ローム層で古期のものから宝積寺ローム・宝木ローム・田原ローム)とによって形成されるが、これらが継続して行われた結果、台地面の高度、侵食度、表部を覆う火山灰層の層序関係を基準に、宝積寺面(上位面)・宝木面(中位面)・田原面(下位面)・低地に区分される。本遺跡は、段丘礫層の上位に火山灰層(田原・宝木ローム)を堆積する宝木面(中位面)に載る。東・西側の小支谷は礫・砂・泥からなる谷底平野堆積物である。

表層の土壌堆積状況は多湿黒ボク土鹿畑統・石本統である。鹿畑統は表層腐植層であり、非固結火成岩お

よび非固結堆積岩を母材とする水積の水田土壌であり、土性は壤質から砂質とされる。石本統は粘性が強い表層腐植質で水積の水田土壌である。

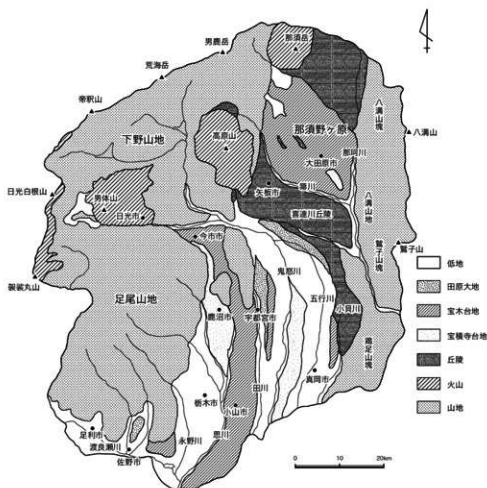
【参考文献】

- 1991年 栃木県企画部資源対策課『土地分類基本調査 壬生』栃木県
- 2010年 下野市教育委員会『下野市内遺跡発掘調査報告書』下野市埋蔵文化財調査報告第8集
- 2018年 下野市教育委員会『落内遺跡第3次調査』下野市埋蔵文化財調査報告第13集

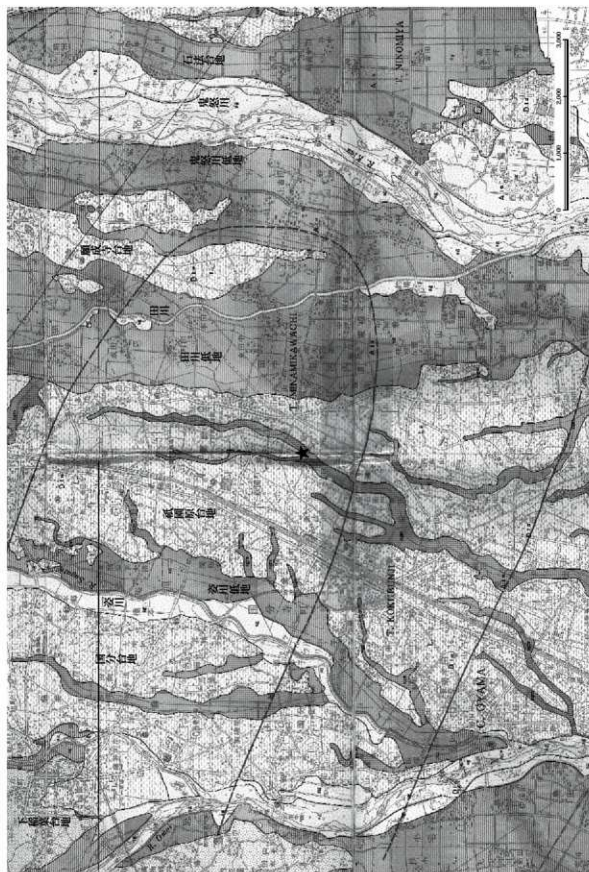
第2節 歴史的環境

篠崎遺跡からは、縄文時代草創期～後期、古墳時代終末期～平安時代、中世以降近代までの遺物の出土が確認されている。また、調査区の至近には下野薬師寺跡が位置する。テフラ分析からは旧石器時代の堆積層の存在の可能性が指摘されており、その時代幅は長期に亘る。

本遺跡周辺の遺跡の様相は、昭和53（1978）年～平成2（1990）年に確認調査・現地調査が実施された自治医科大学周辺地区遺跡群の発掘調査によるところが大きい。また、下野市内の埋蔵文化財包蔵地の分布状況については、『下野市遺跡分布調査報告』（2007年）にて、詳細な調査が行われている。本遺跡周辺の歴史的動向については、下野市教育委員会発行の『下野市内遺跡発掘調査報告書』および『落内遺跡第3次



第3図 栃木県地形区分図



第4図 篠崎道跡 周辺地形区分図

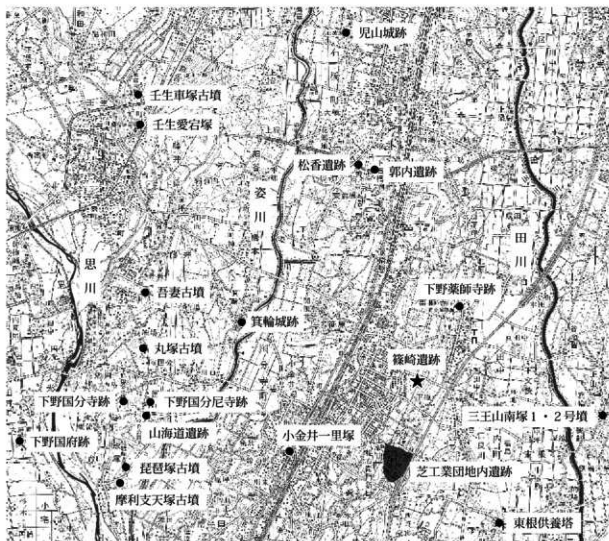
調査』に緻密な分析のもと詳細な記述がなされており、本節はこれらを参考に記述する。

【旧石器時代】

自治医科大学周辺地区遺跡群のうち、三ノ谷東遺跡、谷館野東遺跡、諏訪山遺跡、烏森遺跡において確認されている。特に、三ノ谷東遺跡は、本調査区と小支谷を挟む西側の丘陵に位置する。ハードローム層下位・中位・ソフトローム層上位～漸移層下位の3面の文化層が確認されている。このうち、ハードローム層中位の文化層は角錐状石器、ナイフ形石器、搔器、礫群などが出土した。本遺跡における旧石器時代の遺構・遺物の確認はないが、C区トレンチ（第3章第1節基本土層参照）の遺物包含層の可能性が指摘されている。谷館野東遺跡では、ソフトローム層下部からハードローム層上部に遺物集中地点8ヶ所が確認され、ナイフ形石器や彫器などの遺物が出土する。諏訪山遺跡では調査区内からナイフ形石器が出土する。烏森遺跡ではナイフ形石器や剥片の散布が確認されている。多功南原遺跡では石器集中地点13地点などが確認されている。高原山系黒曜石によるナイフ形石器の製作と信州系黒曜石による尖頭器の製作跡が確認された。砂川期の集団の関与が想定されている。

【縄文時代】

草創期は、薬師寺稲荷台遺跡の調査（平成19年度）において、土坑4基、土坑内から爪形文土器、石鏃・石核・



第5図 篠崎遺跡周辺の主な遺跡分布図

剥片等が出土する。早期・前期は、自治医科大学周辺地区遺跡群のうち、烏森遺跡から早期・前期（浮島式・諸磯式等）・中期（加曾利E式）・晩期（大洞A'式）の土器片が確認されている。後期は三ノ谷東遺跡で竪穴建物跡1軒が確認されている。自治医科大学周辺地区遺跡群では、二ノ谷遺跡・三ノ谷遺跡・三ノ谷東遺跡・諏訪山遺跡・諏訪山北遺跡などで、草創期後半～早期初頭の陥穴状土坑が多数確認されており、総数は80基を超える。茂木町登谷遺跡群で確認された同規模、同形状の土坑に類似する。集落跡等の確認は、自治医科大学周辺地区遺跡群のような広範囲に亘る調査においても少なく、本遺跡において一定量の土器およびこれらと同時期とみられる石器・剥片等が確認されたことは、その出土量とともに特筆される事例といえる。

遺跡西側の交川周辺では、下野国分寺跡（第5図）において中期末葉から後期前半の埋壙や陥穴状土坑、中期末葉の袋状土坑が確認されている。出土遺物は前期から後期の土器片、打製石斧が出土する。

【弥生時代】

柴工業団地内遺跡（第5図）では中期の再葬墓6基、後期の竪穴建物跡3軒が確認されている。自治医科大学周辺地区遺跡群では、中期末葉～後期前半の竪穴建物跡が烏森遺跡で4軒、谷館野北遺跡で2軒、谷館野東遺跡・上芝遺跡で1軒が確認されている。谷館野東遺跡では多量に剥片、破片が出土しており、石器製作の一端を示す好資料である。諏訪山遺跡では土器棺とみられる壺埋納土坑が確認される。交川付近では、山海道2号遺跡（第5図）で後期の小型壺、箕輪城遺跡（第5図）では竪穴建物跡4軒および二軒屋式土器や十王台系土器、南関東系土器、樽式系土器が出土するほか、土師器との共伴が確認されている。分布調査の成果からは、交川付近の箕輪地区、国分地区で遺物の分布が確認されている。

【古墳時代】

古墳時代になると遺跡数の増加がみられる。

集落跡は、前期では柴工業団地内遺跡（第5図）、自治医科大学周辺地区遺跡群（烏森遺跡・谷館野北遺跡）、薬師寺南遺跡、大坂遺跡がある。中期では自治医科大学周辺地区遺跡群（烏森遺跡・二ノ谷遺跡・谷館野北遺跡）がある。自治医科大学周辺地区遺跡群では後期の集落跡の確認はない。下野市の文化財を統括する下野市教育委員会は「この地域の弥生時代後期から古墳時代前・中期にかけての集落の様相は、台地を幾つかに分割する小支谷を農業生産基盤として活用し、その台地上に非常に小さな単位（5軒前後）の集落を営んでいる。この低地の生産基盤の広がり及集落域が1つのセットとなり、この幾筋かの低地に集落が散在的に分布していることがこれまでの研究によっても指摘されている。」とする（山口2010・2018）。

古墳は、古墳時代の早い段階から、数多くの古墳、かつ、大型の古墳が築造されるが、本遺跡の位置する薬師寺地区の古墳の築造は少ない。早い段階で築造されるのは、本遺跡東方の田川・鬼怒川に挟まれた台地上の三王山南塚1・2号墳（第5図）等の前方後方墳である。3世紀代とみられる2号墳の周溝からは弥生時代後期の二軒屋式土器と古式土師器の共伴が確認されており、県内でも最古級の古墳である。本遺跡西方の思川・交川に挟まれた地域では5世紀末葉～7世紀前半にかけて大形の前方後方墳が築造される。5世紀末葉～6世紀前半の摩利支天塚古墳（第5図）、琵琶塚古墳（第5図）、6世紀後半の吾妻古墳（第5図）、壬生愛宕塚古墳（第5図）などである。吾妻古墳（第5図）は栃木県最大の前方向後方墳であることが確認されている。思川左岸の台地上には後期になると群集墳が形成され、終末期には丸塚古墳（第5図）、壬生車塚古墳（第5図）など切石積の横穴式石室を持つ大形方墳が築造される。本遺跡北方の多功南原遺跡では、終末期に多功大塚山古墳、多功南原1号墳などの方墳が築造される。

本遺跡周辺の古墳は道鏡塚古墳、二月堂古墳、薬師寺南遺跡内の円墳が築造される程度であり、交川周辺に比べて疎らな状況にある。

【奈良・平安時代】

本遺跡周辺での集落については、集落の時間的な継続と集落規模の安定性が確認できる遺跡と確認できない遺跡に二分される傾向が指摘されている。集落規模の拡大がみられない遺跡としては、本遺跡北方の石橋地区に位置する郭内・松香遺跡（第5図）があげられる。道路幅部分の調査であるため詳細は不明であるが、7世紀中葉の竪穴建物跡3～5軒が1単位となるが、これ以上に集落の規模が大きくなるということが指摘されている。また、存続期間の短い集落跡としては、自治医科大学周辺地区遺跡群のうち谷館野北遺跡・三ノ谷遺跡・三ノ谷東遺跡・二ノ谷遺跡・谷館野東遺跡などがあげられる。これらの遺跡は竪穴建物跡2～7軒程度で、遺物の出土量が少ない傾向にあるが本遺跡も同様の傾向がみられる。集落の時間的な継続と安定性が確認できる遺跡としては薬師寺南遺跡があげられる。7世紀後半～9世紀後半にかけてを中心とする集落跡である。30年単位の時期区分による集落の構成単位の検討からは、8世紀後半～9世紀前半はやや疎らになるものの、各時期20～25軒の規模の集落の継続が確認されている。約200年間、同一規模の集落が継続した要因として下野薬師寺跡との関連が指摘されている。

本遺跡周辺の9世紀中葉～10世紀代の集落跡は、柴工業団地内遺跡（第5図）や上芝遺跡などがあげられる。上芝遺跡は大形の掘立柱建物跡と数棟の竪穴建物跡により構成されている。同時期の集落跡としては、北方の多功南原遺跡などがある。多功南原遺跡は7世紀中葉～9世紀第3四半期の集落跡であり、大形掘立柱建物跡の配置などから、「役所に関わる一族に関連する集落跡」との見解がある。また、「千」字を記した墨書土器が約100点出土するが、9世紀中葉前後の遺跡については、墨書土器や身分を表象するような遺物の出土が特徴的にみられる。「千」字を記した墨書土器は三仏遺跡からも出土が確認されている。下野薬師寺跡に近接する落内遺跡は7世紀前半～10世紀の集落跡である。100軒を超える竪穴建物跡や水室とされる円形有段遺構が確認され下野薬師寺跡に先行する居宅あるいは官衙的施設を有する集落跡とみられる。これらの集落跡の特徴として、弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡と同様、台地を幾つかに分割する小支谷を農業生産基盤とし、集落が展開することがあげられる。本遺跡や、本遺跡東側の谷を挟んで位置する大坂遺跡は竪穴建物跡の主軸は谷の方向を意識したことを示すものであろう。狭小ではあるが肥沃な低地の開発に成功し、富家層へと成長していった集落跡の可能性から集落の階層性も指摘されている。これらの集落跡については下野薬師寺跡の推移に連動する傾向があることが指摘されている。

本遺跡の所在する下野市の北隣に位置する上三川町には、官衙的性格が想定される多功遺跡、上神主・茂原遺跡が所在する。

本遺跡西方の交川西岸には下野国分寺跡（第5図）・下野国分尼寺跡（第5図）が建立される。国分二寺、下野薬師寺跡周辺の集落の様相に共通する特徴として、7世紀末葉～8世紀前半の遺構が少なく、9世紀後半～10世紀後半にかけての遺構の確認が多いことが指摘されている。国分二寺周辺では8世紀中葉以後、9世紀前半～中葉の遺構が多いことが明らかとなっており、本遺跡や自治医科大学周辺地区遺跡群の状況と同様である点、留意される。

【中世】

本遺跡周辺は、中世においては福田郷・平塚郷などからなる薬師寺荘に含まれ、小山氏の一族である薬師寺氏の勢力下にあったと推定されている。本遺跡北方の至近する薬師寺城は薬師寺氏の居館とされ、寛喜年間（1229～1231年）創建の伝承がある。その北方には、多功城や上三川城など宇都宮氏の居館が築造される。

自治医科大学周辺地区遺跡群内の下古館遺跡は、周囲を溝状遺構に囲われ、中心部を南北に道（うしみち）が貫通する。溝状遺構は上幅約4.7m・深さ約2.0mの薬研堀、範囲は東西約175m・南北約480mで南北に長い。



第6図 周辺の主な道跡分布図

溝状遺構の内部には掘立柱建物跡や土坑がエリアを形成する。また堂宇とみられる掘立柱建物跡、青磁碗の出土が確認されている。井戸跡から出土した「烏帽子」は国内でも屈指の残存状況である。これらの遺構は14世紀には成立していた可能性が高い。遺跡の性格は判然としなが、「奥大道」に面し「市」の機能を備えた「宿」の可能性が指摘されている。

この他、出土銭の確認がある。昭和39年に小金井地内で確認された渡来銭16,000枚(第6図)、平成2年に国分地内で確認された渡来銭12,000枚、上芝遺跡から97枚、65枚の出土銭である。これらが埋納銭であるのか、備蓄銭であるのかは判然としなが、これだけの銭を収集できるだけの勢力基盤があったことが読み取れる。また、本遺跡東方の田川東岸には、県指定文化財に登録されている東根供養塔(第5図)が造立される。凝灰岩製の宝塔で、銘文によると元久元(1204)年に佐伯伴行と妻に藤原氏が、亡父と在世の母の菩提のために造立したことがわかる。佐伯氏についての詳細は不詳であるが、これだけの規模の造塔を行える勢力を保持した一族と考えられ、小山氏・結城氏との関係が伺われている。

【近世】

日光道中の整備に伴い、現在の国道4号沿いに江戸から88番目の一里塚(第5図)が築造される。現道の西側に沿う。また、日光道中から分かれて、薬師寺村、仁良川村を経て結城に至る関宿通多功道などが整備された。古記録等によると本遺跡西方の姿川の氾濫原の低地部(現在の川中子地区周辺)から日光道中沿線に集住地区の移動があったことが明らかとなっている。「日光道中は幕府や諸藩、朝廷や日光山関係の役人・僧侶の日光への登下山や参勤交代をはじめとする大名・旗本往来、それに付随する物資の輸送を目的とする公用通路としての性格が強い。これに対して、「細道筋」や「中道筋」は江戸廻米や江戸入用物資の輸送のために新たに開発された交通路であり、領主的商品流通路としての性格が強い」との指摘がある。

また、下古館遺跡北側には鉄火裁判の碑(第6図)が残る。江戸時代初期に起こった小金井宿と薬師寺村の入会地を巡る論争に小金井村が勝利した事を記す、後世に造立された顕彰碑である。

明治時代以降には、鉄道の開通により、現国道4号を中心とする旧宿場町的景観から駅を中心とする町並みへと変貌する。

【参考文献】

- 「別願院文書」『栃木県史資料編・中世二』 栃木県 昭和50(1975)年
- 「薬師寺南遺跡」『栃木県文化財報告第23集』 栃木県教育委員会(財) 栃木県文化振興財団 昭和54(1979)年
- 「築業団地内遺跡調査報告」『栃木県文化財報告第43集』 栃木県教育委員会編(財) 栃木県文化振興財団 昭和56(1981)年
- 「郭内遺跡 松香遺跡」『栃木県文化財報告第943集』 栃木県教育委員会(財) 栃木県文化振興財団 昭和63(1988)年
- 自治医科大学周辺地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書
- 住宅・都市整備公団・栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- 「烏森遺跡発掘調査概報」『栃木県埋蔵文化財調査報告第47集』 昭和61(1986)年
- 「三ノ谷遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第87集』 昭和62(1987)年
- 「二ノ谷遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第97集』 昭和63(1988)年
- 「三ノ谷東・谷館野北遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第112集』 平成2(1990)年
- 「谷館野東・谷館野西・上芝遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第137集』 平成5(1993)年

- 「諏訪山・諏訪山北遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 147 集』平成 6 (1994) 年
- 「下古館遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 166 集』平成 7 (1995) 年
- 「多功南原遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 222 集』栃木県教育委員会 (財) 栃木県文化振興財団
平成 11 (1999) 年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 41 平成 29 (2017) 年度」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 392 集』
栃木県教育委員会 平成 31 (2019) 年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 42 平成 30 (2018) 年度」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 395 集』
栃木県教育委員会 令和 2 (2020) 年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 43 平成 31・令和元 (2019) 年」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 404 集』
栃木県教育委員会 令和 3 (2021) 年
- 「栃木県埋蔵文化財保護行政年報 44 令和 2 (2020) 年」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 404 集』
栃木県教育委員会 令和 4 (2022) 年
- 「大坂遺跡・向台遺跡」『下野市埋蔵文化財調査報告第 4 集』下野市教育委員会 平成元 (1989) 年
- 「落内遺跡第 3 次調査 史跡下野薬師寺跡関連調査」『下野市埋蔵文化財調査報告第 13 集』下野市教育委員会
平成 30 (2018) 年
- 「下野市内遺跡発掘調査報告書 三仏遺跡・館野前遺跡・薬師寺城」『下野市埋蔵文化財調査報告第 8 集』
下野市教育委員会 令和 2 (2010) 年

第3章 確認された遺構と遺物

第1節 調査の概要

(1) 基本土層 (第2章参照)

基本土層の確認から、第2章第1節地理的環境に記載したとおり、調査区の現況は、土地の改変に伴う削平、客土により、本来の地形と大きく異なっていることが明らかとなった。基本土層は、A区調査区端部の遺構確認面までの土層、および、各区に設定したトレンチの土層により確認した。C区については、調査区全面に亘る表土除去を実施していないため、遺構確認のためのトレンチで基本土層の確認を行った。主な堆積層は黒色土層および鹿沼軽石層、鹿沼軽石層下の黄色粘土層である。遺構の土層注記に表記する「ルーム」は、鹿沼軽石層下の黄色粘土層に相当する可能性が高い。

以下に報告するA～D区の基本土層の確認から、調査区およびその周辺は、削平・盛り土による地形の改変が行われたことが明らかである。客土層下位が水平な堆積であることや、確認調査(D区トレンチ10)にキャタピラ痕が確認されていることから、重機を使用した改変である可能性も考えられよう。

本来の地形は、第15図の模式図に示したような、台地(山)と低地(谷)が近接する地形であったと考えられる。遺構の確認されたA区L-10・M-9グリッド付近は台地部と谷部に挟まれた狭量な平坦面あるいは緩斜面であった可能性があり、7世紀代とみられる第8・58号竪穴建物跡は谷部の向きに合せて建てられた可能性があり、両建物跡の主軸の差異は谷の形状を示すものかも知れない。B・C区は南側および西側へ傾斜する。B区南側は調査区の載る台地の東・西側の低地の合流点であることに起因しよう。丘陵の頂部はA区北西部-C区東端部-D区T22付近であったと想定される。D区以北の状況は明らかではないが、D区トレンチ21・22の高低差や確認調査トレンチ16に客土が確認されていることなどから、大小の起伏が想定される。調査区および調査区周辺は起伏と小さな谷が入り組む地形であった可能性もあろう。

【A区】

A区では、表土除去後の遺構確認面に、鹿沼軽石層の露出するJ・K・L-9・10・11グリッドを中心とする範囲と黒色土の範囲とが確認された。A西区は調査区内全面に鹿沼軽石層が確認された。トレンチ(以下T)はA区にT1～6・10・11、A区西にT7～9を設定し、基本土層の確認を行った。

T1は遺構確認面に鹿沼軽石層の露出するK-9グリッドに設定した。最大深さ0.84mまでの掘り下げ、鹿沼軽石の単一層を確認した。鹿沼軽石層上にはハードルームやソフトルームなどの複数のルーム層、黒色土層の堆積が想定でき、改変前の地表面は現状の地面より数m上位にあったと推定できる。

T2は調査区北端K-12・13グリッドに設定した。トレンチ北西部にSK-54を確認したため、後日、北側に拡張したが、図示したセクション図は拡張以前の堆積層を示す。表土下に客土層が堆積し、最も深い部分で表土下0.6mに達する。地山となる黒色土は、旧地形の傾斜に沿った谷部に向かう斜方向の堆積であろう。T2-24層はルーム層とみられる。T2-24層上面のレベルは丘陵側の西壁で52.6m付近、谷側の東壁で52.3m付近である。トレンチ掘削下面下に堆積すると想定される鹿沼軽石層上面のレベルやT1付近のT2-24層に相当するレベルは測りかねないが、T1・2の標高差は2.0m以上と推定される。

T3は調査区北東端L-14グリッドに設定した。谷部にあたる。ルーム層とみられるT2-24層の堆積はなく、地山の黒色土と水分量の多い白色粘土が堆積する。テフラ分析の結果、T3-2層に榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA 6世紀初頭)、T3-4層に鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah 約7300年前)、T3-5層に浅間板鼻黄色軽石(As-YP 約1.5～1.65万年前)が検出された。T3-5層はT4-14層に対応するとみられる。

T4は調査区北半中央部L-11・12グリッドに設定した。谷部にあたる。上層の1～6層は客土である。客土は複数層で各層の特徴は異なる。T4-8層はT3-7層に対応すると考えられる。T4-7層はT4-8層上位の谷部に堆積する黒色土であろう。

T5は調査区中央部M-10・N-11に設定した。谷部にあたる。T5-1～5層は客土である。T4同様、複数層で各層の特徴は異なる。地山最上層T5-14層はテフラ分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah 約7300年前)が検出されている。T3-5層に対応する層とみられる。縄文時代早期末葉と考えられる。鬼界アカホヤ火山灰が検出されたT5-14層上面のレベルは52.2m付近、T3-5層上面のレベルは51.7m付近であり、谷部の傾斜が看取される。

T6は調査区南西端部P-8グリッドに設定した。確認面はローム層である。テフラ分析の結果、T6-10層に榛名八崎軽石(Hr-HP)が検出されるため、赤城鹿沼軽石(Ag-KP)以下の土層と分析されている。

T7・8・9はA西区調査区西端部K・L・M-8グリッドに設定した。T7・8・9は同一層とみられる。T9からはテフラ分析によって赤城鹿沼軽石(As-PP)が検出された。

T10・11は第80号竪穴建物跡の遺構の可否を判断するため設定した(第8図・SI-79平面)。堆積層は遺構覆土ではなく自然堆積層、かつ、トレンチ底面で観察された粘土質面と黒色面の境を谷部への落ち込みと判断した。第80号竪穴建物跡の取り扱いについては第3章第3節に記載した。

この他、第15号竪穴建物跡壁面となる地層については、テフラ分析から赤城鹿沼軽石(Ag-KP)下位と判断されている。

A区調査区端部の堆積層をみると、北側(SP-A)の表土直下は鹿沼軽石層である。西側では客土下に鹿沼軽石層(SP-C:3層)の西側に向けての立ち上がりが見て取れる。東側(SP-B)は谷の最下部に面する位置にある。複数層に亘る厚い客土下に谷部の堆積層がみられる。現地調査の所見では、客土と谷部堆積層(8層)の間に僅かに残る7層に古代の層である可能性が指摘されている。

A区は、トレンチ調査および調査区端部の土層の堆積、竪穴建物跡壁面の地山の観察、遺構確認面の観察から、第15図のとおり、調査区北西部・南西部は台地部、遺構確認面のコンタ図52.4m付近より下位(太線)は谷部であることが明らかである。第58号竪穴建物跡西半部から第19号竪穴建物跡南西隅部にかけては平坦面あるいは緩斜面であったと考えられる。

【B区】

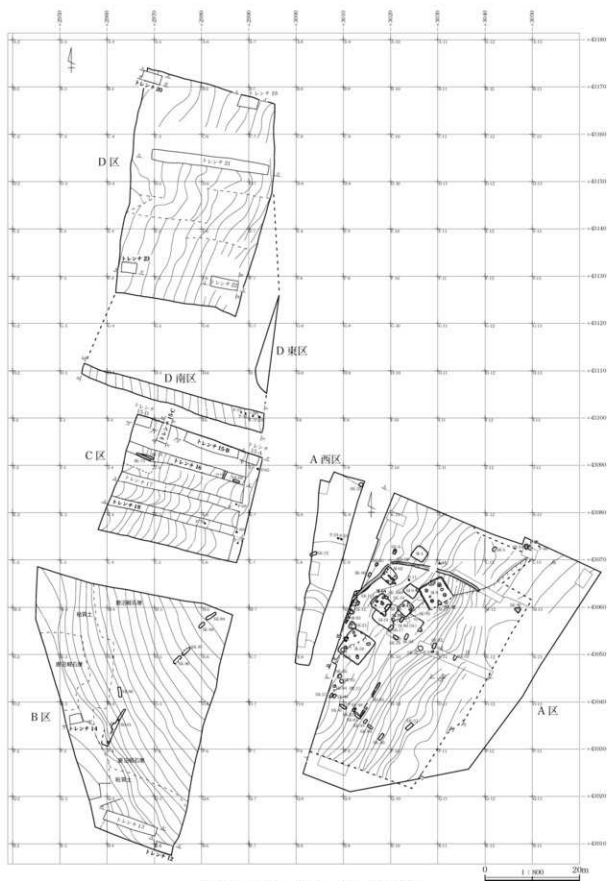
B区は、調査区東・西側の谷部がB区南側で合流する位置にあり、遺跡の載る丘陵の末端部となる。表土に鹿沼軽石層および粘質土層が確認される。北東部から谷の合流点となる南西部に向けて傾斜する。

トレンチは12～14をR-5グリッド、Q-4・5グリッド、O-3グリッドに設定した。T12・13でテフラ分析を行った。

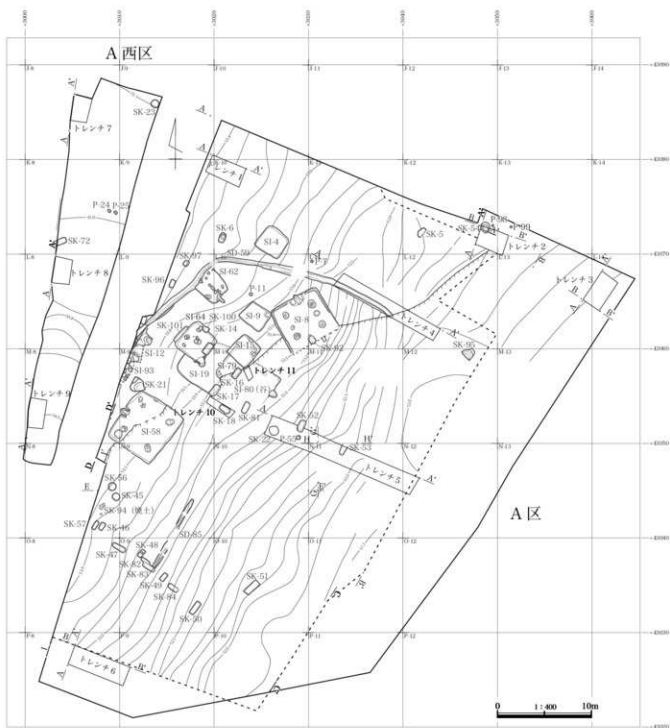
【C区】

C区は先に調査を行ったA・D区の状況を鑑み、トレンチ(T15～18)による調査を行った。基本土層はこの調査トレンチにおいて確認した。

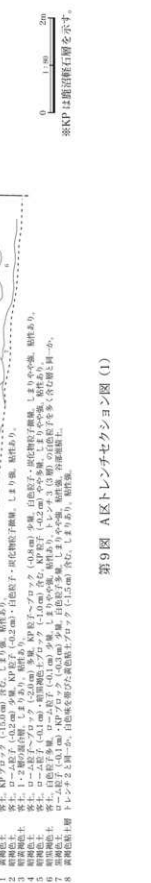
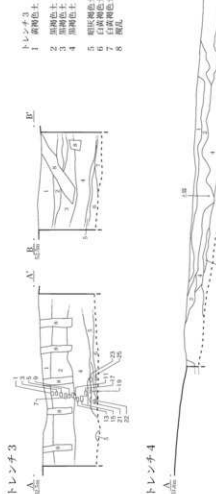
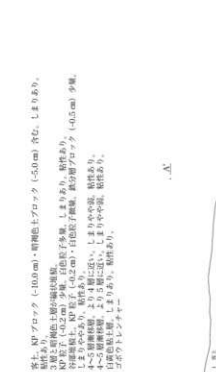
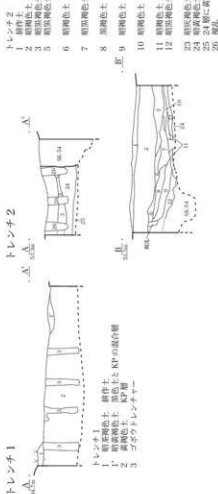
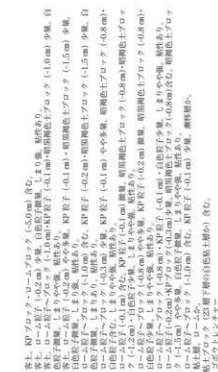
T15は調査区北壁に沿ってA～Dを設定した。東側のT15-Aは丘陵の上位、西側のT15-Dは調査区西側の谷に面する位置にある。A15-A・B・C東壁付近は表土直下に鹿沼軽石層、C西壁付近より西側・Dは地山となる暗褐色土層を挟み粘質土層・鹿沼軽石層に至る。鹿沼軽石層の堆積状況を見ると、T15-Aは現在よりも高い標高で、A区T1に準ずる高さであると判断される。A区T1～C区T15-A付近が丘陵の頂部であったと推定できよう。T15-BからDは調査区西側の谷に向かう斜面地であり、T15-C付近が谷の落ち際であっ



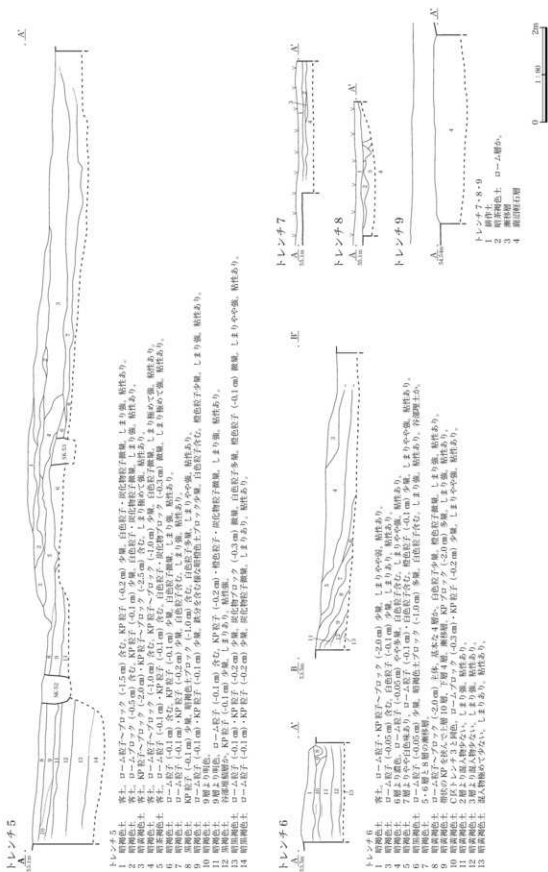
第7図 調査区全体図・グリッド配置図



第8図 A区トレンチ等位置図

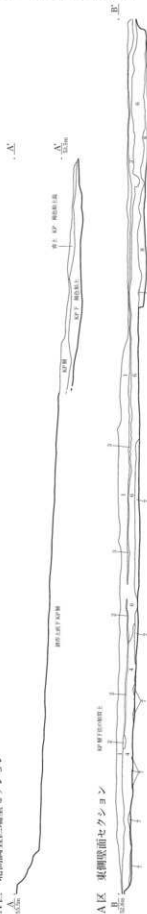


第9図 A区トレンチセクション図(1)

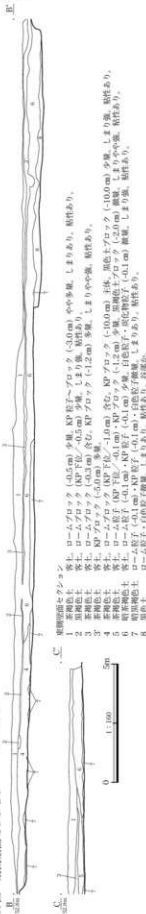


第10図 A区トレンチセクション図(2)

A区 北側調査区竪断セクション

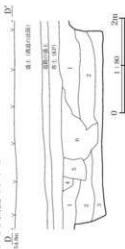


A区 東側竪断セクション



- 東側調査区セクション
- 1 暗赤褐色土
 - 2 暗赤褐色土
 - 3 暗赤褐色土
 - 4 暗赤褐色土
 - 5 暗赤褐色土
 - 6 暗赤褐色土
 - 7 暗赤褐色土
 - 8 黒色土

N-8C 西面セクション



- N-8C 西面セクション
- 1 暗赤褐色土
 - 2 暗赤褐色土
 - 3 暗赤褐色土
 - 4 暗赤褐色土
 - 5 暗赤褐色土
 - 6 暗赤褐色土

A区西側調査区横断セクション

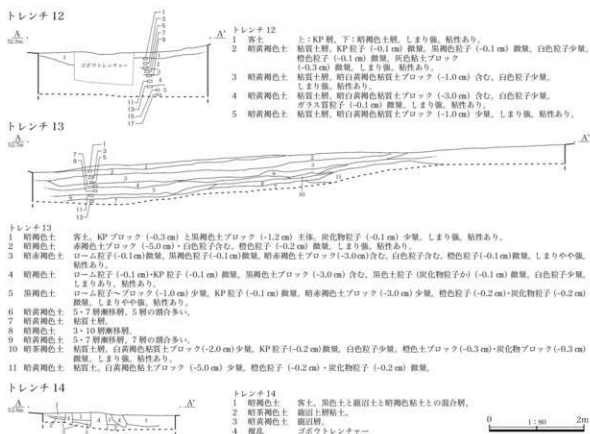


- A区西側調査区横断セクション
- 1 暗赤褐色土
 - 2 暗赤褐色土
 - 3 暗赤褐色土
 - 4 暗赤褐色土

- 東側調査区セクション
- 1 ムームプロッタ (0.5m) 少量
 - 2 ムームプロッタ (0.5m) 少量
 - 3 ムームプロッタ (0.3m) 各段
 - 4 ムームプロッタ (0.1m) 少量
 - 5 ムームプロッタ (0.1m) 少量
 - 6 ムームプロッタ (0.1m) 少量
 - 7 ムームプロッタ (0.1m) 少量
 - 8 ムームプロッタ (0.1m) 少量

- N-8C 西面セクション
- 1 暗赤褐色土
 - 2 暗赤褐色土
 - 3 暗赤褐色土
 - 4 暗赤褐色土
 - 5 暗赤褐色土
 - 6 暗赤褐色土

第11図 A区調査区横断セクション図



第12図 B区トレンチセクション図

たと推定できる。T15-Aは、テフラ分析を行うあたり、第13図よりも掘り下げ、標高53.3mまで赤城鹿沼軽石 (Ag-KP) の堆積を確認した。T15-Bはテフラ分析の結果、旧石器時代の堆積層である可能性が指摘されている。T15-Cはトレンチ西側で基本土層の確認を行った。テフラ分析の結果、暗褐色土の堆積層の上位から浅間Bテフラ (As-B)、榛名ニッ岳渋川テフラ (Hr-FA)、浅間C軽石 (As-C) が検出されている。T15-Dにおいても、T15-Cと同様、テフラ分析の結果、暗褐色土の堆積層の上位から浅間Bテフラ (As-B)、榛名ニッ岳渋川テフラ (Hr-FA) が検出されている。

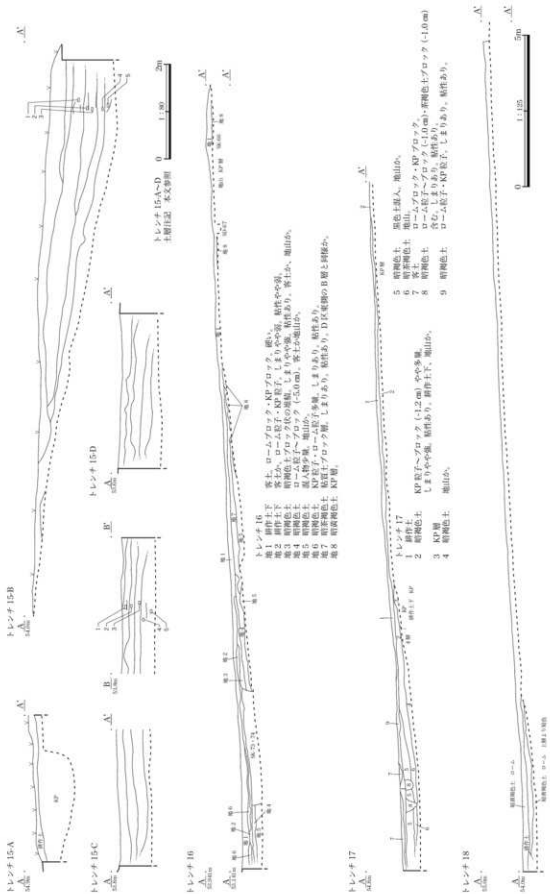
T16～18の堆積状況においても、T15同様の地形、堆積状況が観察される。T18については、南側への傾斜があった可能性を考える。

【D区】

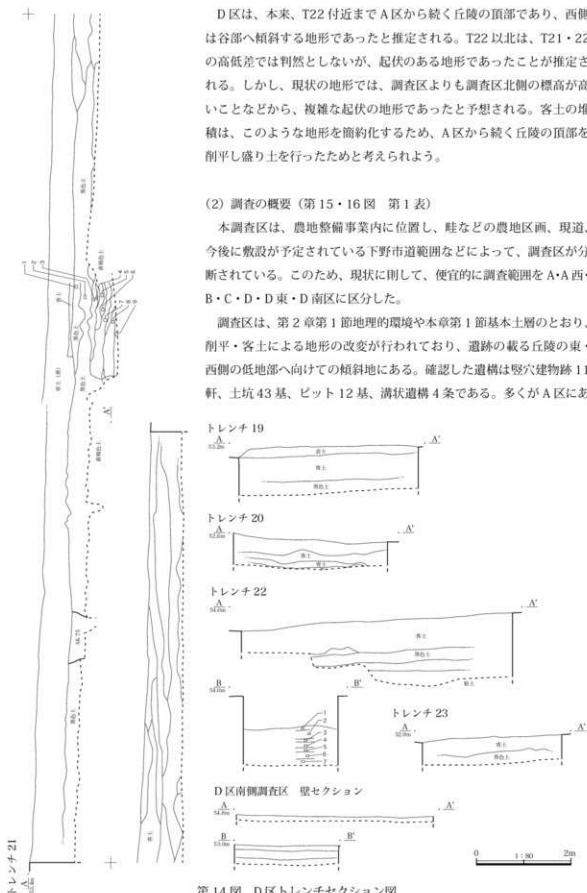
D区は表土下に客土が確認される。トレンチは客土面を上面としてT19～23を設定した。

客土は確認調査において、ローム面と認識した黄褐色土層であり、D区全面に及ぶ。最大厚は約0.6mである。西側の谷部に近いT20・21西側では黄褐色土と黒色土が混在する箇所もあるが、個別の土層は記録していない。第14図の破線は客土を盛った際の段差である。旧地割の可能性を考え図示する。黄褐色土客土下には黒色土が堆積する。最大厚は約0.4mである。T22のテフラ分析の結果、上層に浅間Bテフラ (As-B)、榛名ニッ岳渋川テフラ (Hr-FA)、浅間C軽石 (As-C) が検出されている。T21よりもT22が高い地形であった可能性が考えられる。

D南区は表土下に暗褐色土層が観察され、調査区西側の谷へ向けた斜面地となる。D東区は表土下に暗褐色土層が観察され、概ね平坦である。



第13図 C区トレンチセクション図



第14図 D区トレンチセクション図

D区は、本来、T22付近までA区から続く丘陵の頂部であり、西側は谷部へ傾斜する地形であったと推定される。T22以北は、T21・22の高低差では判然としないが、起伏のある地形であったことが推定される。しかし、現状の地形では、調査区よりも調査区北側の標高が高いことなどから、複雑な起伏の地形であったと予想される。客土の堆積は、このような地形を簡約化するため、A区から続く丘陵の頂部を削平し盛り土を行ったためと考えられよう。

(2) 調査の概要 (第15・16図 第1表)

本調査区は、農地整備事業内に位置し、畦などの農地区画、現道、今後に敷設が予定されている下野市道範囲などによって、調査区が分断されている。このため、現状に則して、便宜的に調査範囲をA・A西・B・C・D・D東・D南区に区分した。

調査区は、第2章第1節地理的環境や本章第1節基本土層のとおり、削平・客土による地形の改変が行われており、遺跡の載る丘陵の東・西側の低地部へ向けての傾斜地にある。確認した遺構は竪穴建物跡11軒、土坑43基、ピット12基、溝状遺構4条である。多くがA区にあ



第15図 A区地形復元模式図



第16図 A区遺構配置図

第3章 確認された遺構と遺物

り、台地と谷に挟まれた狭量な平坦面あるいは緩斜面を選地した結果と考えられる。

出土遺物は、縄文土器・石器、土師器、須恵器、陶磁器、鈔帯など遺物収納箱（35×55×10cm）約48箱を数える。遺構に伴う出土遺物のほか、遺構確認時の精査に伴うものやグリット調査に伴うものが多い。遺構の覆土中からは明らかに遺構の年代と異なる遺物の出土があるが、これらについても、遺構外出土遺物として時代ごとに報告する。

B・C・D区の調査については、第1章第3節調査の方法、本章第1節基本土層の記載のとおり、地形が改変されている。このため、遺跡の様相は不明であるが、集落地などは既に失われた可能性があろう。遺構・遺物の確認もあるが、改変以降の所産、混入とみられる。

第1表 遺構一覧表

欠番	1			欠番	35			P	69	C	
欠番	2			欠番	36			P	70	C	
欠番	3			欠番	37			P	71	C	
SI	4	A		欠番	38			SK	72	A西	
SK	5	A		欠番	39			SK	73	C	
SK	6	A		欠番	40			SK	74	C	
P	7	A		欠番	41			SK	75	D	
SI	8	A		欠番	42			欠番	76		
SI	9	A		欠番	43			欠番	77		
欠番	10			欠番	44			欠番	78		
P	11	A		SK	45	A		SI	79	A	
SI	12	A		SK	46	A		(SD)	80	A	谷部落ち込みライン
欠番	13			SK	47	A		SK	81	A	
SK	14	A		SK	48	A		SK	82	A	
SI	15	A		SK	49	A		SK	83	A	
欠番	16			SK	50	A		SK	84	A	
SK	17	A		SK	51	A		SD	85	A	
SK	18	A		SK	52	A		SK	86	B	
SI	19	A		SK	53	A		SK	87	B	
欠番	20			SK	54	A		SK	88	B	
SK	21	A	SI-93に記載	P	55	A		SK	89	B	
SK	22	A		SK	56	A		SK	90	B	
SK	23	A西		SK	57	A		SD	91	B	
P	24	A西		SI	58	A		SK	92	A	
P	25	A西		SD	59	A		SI	93	A	
欠番	26			欠番	60			SK	94	A	
欠番	27			欠番	61			SK	95	A	
SK	28	D南		SI	62	A		SK	96	A	
SK	29	D南		欠番	63			SK	97	A	
欠番	30			SI	64	A		P	98	A	
SK	31	D南		P	65	C		P	99	A	
欠番	32			SK	66	C		SK	100	A	
SK	33	D南		SD	67	C		SK	101	A	
欠番	34			P	68	C					

第2節 確認調査

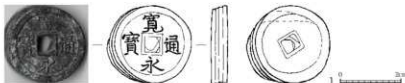
発掘調査に先立ち、平成29(2017)年度に確認調査を行った。農地整備事業地内に幅1.5m・長さ3.0～10mのトレンチ16本を設定し、遺構・遺物の状況を確認した。確認された遺構は第2表に記す。表中、時期や用途の判別が可能であったものは明記した。出土遺物のうち土師器等の記号は第5章に記載する。

トレンチ8で確認された竪穴建物跡はA区第8号竪穴建物跡、溝状遺構は第59号溝状遺構とみられる。トレンチ8出土遺物が第59号溝状遺構出土2・不掲載の薄片に接合する。また、3と同じ文様・大きさの中丸碗が出土する。土坑1基は現地調査において特定できなかった。トレンチ9で確認された土坑1基・性格不明遺構1基は現地調査において確認できなかった。トレンチ11・12は谷部にあたる。トレンチ11の出土遺物は東側の丘陵部からの転落等によるものと考えられる。トレンチ4・5・10はD区にあたるが、確認調査において遺構確認面とした黄褐色土層は、当該調査に伴う基本土層の確認から、地形改変に伴う客土層をロームと誤認したことが明らかとなった。トレンチ4・5からの出土遺物は地形改変時に混入したものと判断される。

この結果に基づき、A区はトレンチ8、C区はトレンチ6、D区はトレンチ4・5・10 D南区はトレンチ9に相当する。B区にかかるトレンチの設定はない。これ以外の区域については、調整に結果、農地整備事業の施行に伴い立会調査等を行う予定である。

第2表 確認調査の遺構・遺物

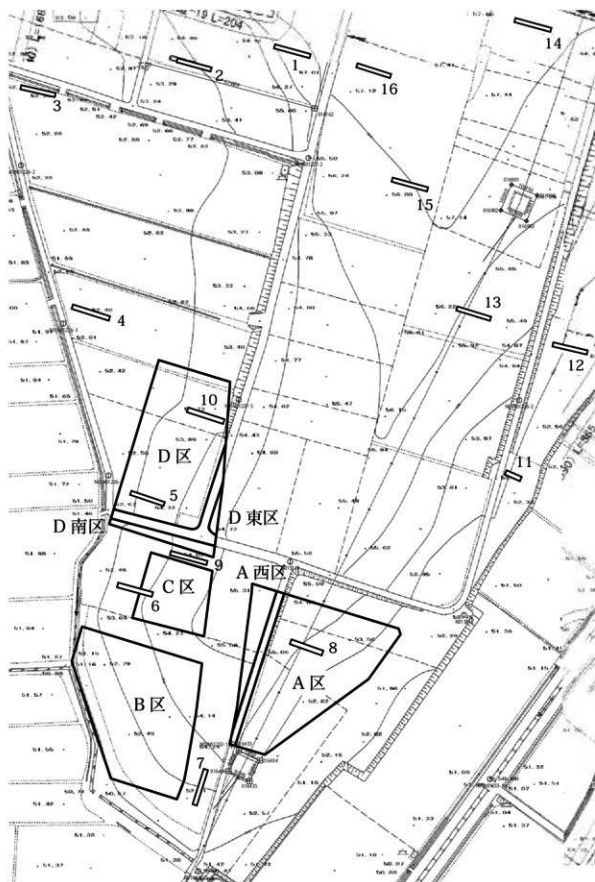
T	遺構	遺物
1	なし	
2	なし	土師器片 8片 72.14g 粘土に金雲母を含む体部 1片 3.77g
3	なし	
4	竪穴	土師器体部 1片 8.11g 陶器皿類 (内面無釉・外面透明釉) 体部 1片 9.95g (外面土付石割箸)
5	なし	石皿 1片 (266に似る) 安山岩製
6	なし	
7	小穴1基	内耳土師底片 1片 7.18g (粘土に金雲母混入) 古銭 4枚(注)
8	竪穴建物跡1基(7 別記)・土坑1基・溝状遺構	土師器杯(口縁部)1片①a・体部1片 7.91g 土師器とみられる編片 8片 23.31g
9	土坑1基・性格不明遺構1基	
10	なし 確認面にキタビラ飯	
11	なし	土師器碗 (ロクロ使用・ウルクシ塗布) 1片 1.72g 須恵器杯 1片 7.69g (灯明用転用か)
12	なし	
13	なし	
14	土坑2基・窠瓦1基	
15	土坑2基	
16	なし 盛り土確認	



第17図 トレンチ7出土遺物実測図

第3表 トレンチ7出土遺物観察表

番号	特徴	(単位: cm・g)
1	寛永通宝 4枚(注)	出土状況 残存状況 集跡寺7トレンチNo.1
古銭	長:2.6 幅:2.8 厚:0.5 重:13.5	



第18図 確認調査トレンチ配置図

第3節 竪穴建物跡

(1) 調査の概要

A区に10軒が確認される。第8・58・64号竪穴建物跡はカマドを付設し、住居跡と判断できる。カマドの付設がなく、壁際に階段状の施設が確認される第9・15号竪穴建物跡については、遺構の用途を特定し得ない。

竪穴建物跡は、現状で、東側の谷に続く斜面地に位置する。遺構の主軸は磁北ではなく、概ね、現状の谷に沿う。第3章基本土層の記載のとおり、谷に面した狭小な緩斜面あるいは平坦地が選地されたと考えられる。第4・62号竪穴建物跡は大きく削平されるが張り方面が重溜軽石層であることから、選地面より上側の斜面も利用されたと判断される。

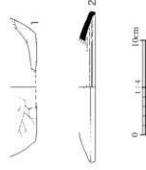
第80号竪穴建物跡については、第79号竪穴建物跡床面に確認される堆積層から遺構番号を付して調査を行ったが、四壁を確認し得なかったことやトレンチ10・11から、谷部への落ち込みと判断し、欠番とした。第79号竪穴建物跡については、第80号竪穴建物跡と同様に谷部への落ち込みである可能性が考えられたが、竪穴建物跡として調査を行った。第79・80号竪穴建物跡にかかるSP-Bのテラフラ分析(附章参照)では、本調査区で確認される竪穴建物跡の年代感にそぐう、榛名二ツ岳渋谷テフラ(Ht-FA 6世紀初頭)より上位で浅間Bテフラ(As-B 1108年)より下位の可能性が指摘されている。また、カマドに、平面プラン、堆積火床レベルが相対的であることから第79号竪穴建物跡に付随すると判断した。しかし、上面プラン、堆積層中の遺構の立ち上がりがあり不明瞭であること、カマドの位置や重複する第15号竪穴建物跡のステップ状施設的位置などの物理的要因から、現地調査においては遺構の範囲を把握しきれなかった。整理作業の過程における記録類の精査から、第80号竪穴建物跡同様、谷部への落ち込みと判断されるが、報告を行うこと出土遺物を第79号竪穴建物跡として取り上げたことなどから、便宜的に遺構番号を賦し、報告を行うこととする。カマドについてはカマドに似た土層堆積ではあるが、谷部に散見される破土に類する堆積の可能性も異なる。また、散見される破土層も同様である。

(2) 竪穴建物跡

第4号竪穴建物跡(SI-4)(第19・20図 第4表 写真図版三)

位置 A区K・L-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模 階平により建物跡の壁・床面は失われ、掘り方底面に近い状況といえる。

平面形状・規模 方形形であるが、谷に向けてやや窄まる。東西2.8～2.96m・南北2.55～2.74m。深さは0.2m前後である。主軸 N-37°Eである。床面 鹿沼



第19図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図

第4表 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 遺構	寸法	材質	色調	肌土 組成	(単位:cm)
1 上階跡 跡分	口一 底(11.4) 高(2.7) 跡分	体部 内:玉子ナシ 外:胎ナデナデ 体にはナデが施されない部分があり、胎面・面ナデが散見 底部へナデナシ(4年層) 32.12g 内:15.8 外:1.2	内%:100S/8 赤 外%:胎ナデナシ少 又肌土少 肌	肌土 組成 白色胎子・肌土少 又肌土少 肌	A.R.S-4 肌部1/8 肌跡
2 築造跡	口(15.8) 底一 高(1.7)	内%:100S/1 灰 外%:胎子少肌、少 又肌土少 肌	内%:100S/1 灰 外%:胎子少肌、少 又肌土少 肌	肌土 組成 白色胎子少肌、少 又肌土少 肌	A.R.S-4 肌部1/12 肌 跡

軽石層は底面とする。掘り方底面の可能性が高い。概ね平坦である。覆土 3層を確認した。何れも鹿沼軽石を多量に含む。

付属施設 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から、土師器鉢類1、須恵器蓋2が出土する。接合しないが同一個体の可能性がある破片が出土する。胎土に白針の混入は観察されないが、南那須産の可能性が考えられる。8世紀第4四半期の可能性が考えられるが、小片であり判断としない。

火処 確認されなかった。

第8号竪穴建物跡(SI-8) (第21～25図)

第5表 写真図版三～五・一九)

位置 A区L・M・10・11に位置する。現

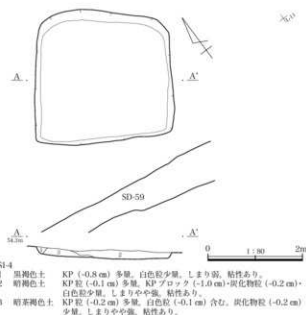
状で東に向けた斜面に立地する。重複関係 SK-92と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 方形であるが、南壁は埋没谷堆積層中にありサブレンチの立ち上がりで確認した。東西5.7m前後・南北(5.2)m、深さは確認面の斜度により0.5～0.3mである。主軸 N-32° -Wである。

床面 鹿沼軽石層下の粘土層および埋没谷堆積層を床面とする。南東隅部から西壁中央部付近にかけては谷部堆積層が床面となる。床面覆土と谷部堆積層の見分けが難しく、南壁はサブレンチでの立ち上がりで確認した。柱穴の配置などから2時期以上が推定できるが、調査時の床面の痕跡は廃絶時とみられる一時期分である。廃絶時期の床面をa期、これ以前の床面をb期として報告する。床面レベルは52.9m前後、カマド前付近から東壁付近は約52.95mである。

覆土 99層を確認した。1～49層は床面、50～59層は掘り方、60～99層は柱穴の覆土である。

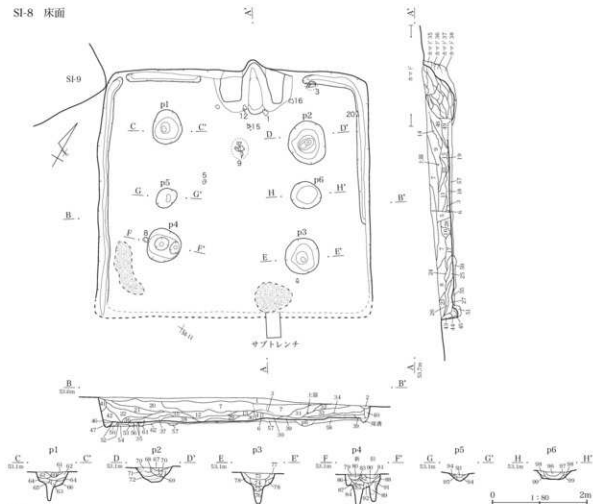
床面は、東・西壁寄りの中央部付近の黒色土層35～39層(A群)が堆積後、壁寄りにロームを含む20～30層(C群)、カマド前から中央部付近に粒径に小さなロームを少量含む12～19層(D群)が堆積する。31～34層(B群)は土器片を含むがロームの大きさや30層下にあることからC群に類する堆積層であろう。A～D群の堆積によって床面は周溝部分を除き被覆される。48・49層はカマドを被覆する堆積土で、49層はカマド7層に対応する。後述するが、カマド7層はカマドを壊した後のカマド埋土とみられ、この上に堆積する48層はカマドを被覆する堆積土とみられる。カマド上にB・C群を挟まずD群が堆積することなどから、A～D群の堆積をカマド被覆後の建物跡の埋め戻しに関わる堆積層と考えておきたい。周溝付近に堆積する40～49層は40層の堆積状況から床面が被覆されるまで使用状況を留めていた可能性を考え得る。中央部に堆積する7～11層(E群)は茶褐色ブロックを含むことから近世以降の堆積とも考えられたが、不掲載の土師器坏片の中に7層(E群)と18層(D群)の接合が認められたことや5の接合関係から覆土最上層と判断したい。ピット状に堆積する3～6層はE群堆積後の掘り込みであろう。最上層の1・2層は、確認面直上が客土であることから近・現代の堆積層の可能性がある。

掘り方は周溝付近と床面の掘り方が観察できる。55～59層で床を作出、52～55層で周溝付近、51層で周溝を作出する。



第20図 第4号竪穴建物跡実測図

SI-8 床面



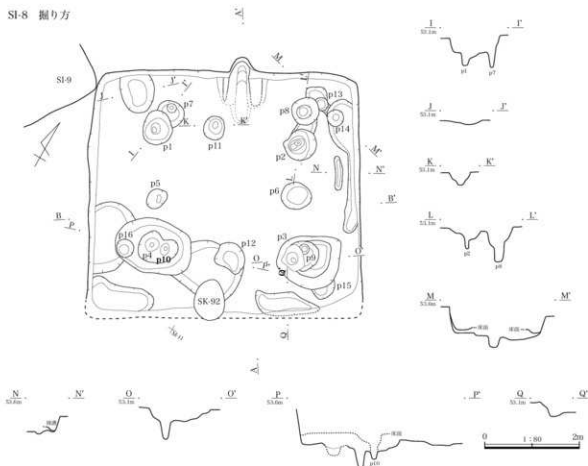
SI-8

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 若干, 白色粒子 (-0.05m) 少量, しまりあり, 粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP粒子 (-0.1m)・白色粒子少量, しまり強, 粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 含む, KP粒子微細, 茶褐色土ブロック (-1.0m) 少量, 白色粒子微細, しまりやや強, 粘性あり。
- 4 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 含む, KP粒子 (0.1m) 少量, 黒色土ブロック (1.0m) 含む, 白色粒子少量, しまりやや弱い, 粘性あり。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.05m)・KP粒子 (-0.1m) 少量, 茶褐色土ブロック (2.0m) 含む, 炭化物粒子ごく微細, しまりやや強, 粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 含む, KP粒子微細, 白色粒子少量, しまり強, 粘性あり。
- 7 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 若干, KPブロック (-0.3m)・茶褐色土ブロック (-1.0m)・白色粒子 (-0.05m) 含む, しまりあり, 粘性あり。
- 8 28層に似る
暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 少量, KP粒子 (-0.2m)・茶褐色土ブロック (-1.2m) 含む, 暗茶褐色土ブロック (-0.8m) 少量, 白色粒子含む, しまりやや強, 粘性あり。
- 10 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 微細, KPブロック (-0.3m) 少量, 茶褐色土ブロック (-1.5m) 含む, 暗茶褐色土粒子 (-0.2m) 微細, 白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 11 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP粒子 (-0.1m) 微細, 茶褐色土ブロック (-1.0m) 少量, 白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 微細, しまりやや強, 粘性あり。
- 12 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-0.5m) 含む, KP粒子 (-0.2m) 少量, 黒色土ブロック (-0.5m) 微細, 白色粒子少量, しまり強, 粘性あり。
- 13 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m)・KP粒子 (-0.1m)・白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m)・KP粒子 (-0.2m) 少量, 黒色土ブロック (-0.3m) 微細, 白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり。
- 15 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.2m)・ロームブロック (-1.5m)・KPブロック (-0.5m)・茶褐色土ブロック (-1.5m)・白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 16 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m)・KPブロック (-0.5m) 少量, 白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 微細, しまりやや強, 粘性あり。
- 17 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (-0.5m) 少量, KP粒子 (-0.2m) 微細, 茶褐色土ブロック (-1.0m) 少量, 白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 微細, しまり強, 粘性あり。
- 18 暗茶褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP粒子 (-0.1m) 微細, 茶褐色土ブロック (-1.2m) やや多い, 白色粒子微細, しまりあり, 粘性あり。
- 19 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP粒子 (-0.1m) 少量, 白色粒子少量, 白色土ブロック (-0.3m) 少量, 黄土粒子 (-0.1m) 微細, しまり強, 粘性あり。
- 20 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-0.5m) 含む, KP粒子 (-0.1m) 少量, 白色粒子含む, しまりあり, 粘性あり。
- 21 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 含む, ロームブロック (-1.0m)・KP粒子 (-0.2m)・茶褐色土ロームブロック (-1.0m)・白色粒子 (-0.05m) 少量, 炭化物ブロック (-0.5m) 微細, しまり強, 粘性あり。
- 22 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP粒子 (-0.1m) 少量, 茶褐色土ブロック (-1.5m) 含む, 暗茶褐色土粒子 (-0.2m) 微細, 白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 23 暗褐色土 28層よりロームが少なく。
- 24 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (-1.0m) 少量, KP粒子 (-0.1m)・白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 微細, しまりあり, 粘性あり。
- 25 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 少量, 白色粒子・黄土粒子 (-0.1m)・炭化物粒子 (-0.1m) 微細, しまりやや強, 粘性あり。
- 26 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 含む, 白色粒子微細, しまりやや強, 粘性あり。
- 27 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (-0.5m) 含む, 黄土ブロック (-0.3m) 微細, 炭化物ブロック (-0.3m) 少量 (付近に黄土層あり) しまりやや強, 粘性あり。
- 28 暗茶褐色土 ローム粒子・ブロック (-1.0m) やや多量, KP粒子 (-0.2m) 少量, 炭化物粒子微細, しまり強, 粘性あり。
- 29 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (-1.5m) 含む, KP粒子 (-0.1m) 少量, 黒色土ブロック (-0.3m) 微細, 炭化物粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 30 暗褐色土 ローム粒子含む, ロームブロック (-1.2m) 少量, KP粒子 (-0.1m)・黒色粒子 (-0.1m)・白色粒子・黄土粒子 (-0.1m) 微細, しまりやや強, 粘性あり。
- カマド35 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (-0.8m) 少量, KP粒子・ブロック (-0.8m) 含む, 白色粒子微細, しまり強, 粘性あり。
- カマド36 暗褐色土 KPブロック (-1.0m) 多量, 黄土 (-0.2m) 微細, しまり強, 粘性あり。
- カマド37 暗茶褐色土 粘土質, KP・ローム粒子 (-0.2m) 微細, しまりやや強, 粘性あり。
- カマド38 暗茶褐色土 粘土質, KP粒子 (-0.2m) 少量, しまりやや強, 粘性あり。

第21図 第8号竪穴建物跡実測図(1)

第3章 確認された遺構と遺物

SI-8 掘り方



SI-8

- 31 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.8cm)・KP粒子(-0.2cm)少量、黒色土ブロック(-0.3cm)微量、白色粒子少量、棕色色(土層分)微量、しまりや中強、粘性あり。
- 32 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.3cm)・KP粒子(-0.1cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)・白色粒子少量、焼土粒子(土層分)微量、しまりや中強、粘性あり。
- 33 暗褐色土 32層に焼土粒子・土層分多量、黒色土ブロックなし。
- 34 暗褐色土 33層に土層分少量。
- 35 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.5cm)少量、KP粒子(-0.2cm)多量、KPブロック(-0.8cm)微量、白色粒子少量、炭化物粒子(-0.2cm)微量、しまりや中強、粘性あり。
- 36 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)・KP粒子(-0.1cm)・白色粒子少量、炭化物粒子(-0.1cm)微量、しまりあり、粘性あり。
- 37 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.5cm)含む、KP粒子(-0.1cm)少量、白色粒子微量、固くしまり、粘性あり。
- 38 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む、ロームブロック(-1.5cm)・KP粒子(-0.1cm)少量、黒色土ブロック(-0.3cm)微量、白色粒子少量、しまり強、粘性あり。
- 39 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.8cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・白色粒子・棕色色(-0.1cm/土層分)少量、しまりあり、粘性あり。
- 40 暗黄褐色土 ローム粒子含む、ロームブロック(-2.0cm)・KPブロック(-0.3cm)・白色粒子・土層分少量、しまりあり、粘性あり。
- 41 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.1cm)微量、茶褐色土ブロック(-1.0cm)含む、白色粒子少量、しまりあり、粘性あり。
- 42 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、KP粒子(-0.1cm)・茶褐色土ブロック(-1.0cm)・白色粒子少量、しまりあり、粘性あり。
- 43 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.1cm)微量、暗茶褐色土ブロック(-1.0cm)少量、しまりや中強、粘性あり。
- 44 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、暗褐色土ブロック(-1.0cm)含む、焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微量、しまりや中強、粘性あり。
- 45 暗茶褐色土 44層のローム粒子・ロームブロック(-0.5cm)少量。
- 46 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.2cm)や中多量、KP粒子(-0.1cm)微量、しまりや中強、粘性あり。
- 47 暗茶褐色土 ロームブロック(-0.5cm)含む、KP粒子(-0.1cm)少量、しまりや中強、粘性あり。
- 48 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)・白色粒子少量、棕色色(-0.1cm)微量、白色粘土ブロック(-1.5cm)少量、しまり強、粘性あり。
- 49 暗茶褐色土 白色粘土粒子〜ブロック(-1.0cm)主体の48層、しまりや中強、粘性あり。
- 50 暗茶褐色土 ロームブロック(-0.5cm)多量、KP粒子(-0.2cm)微量、黒褐色土ブロック(-0.5cm)少量、しまりや中強、粘性あり。
- 51 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.1cm)微量、暗褐色土ブロック(-1.0cm)や中多量、炭化物粒子(-0.1cm)微量、しまりあり、粘性あり。
- 52 暗茶褐色土 ローム粒子〜ロームブロック(-1.0cm)主体、KP粒子(-0.2cm)少量、焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
- 53 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)・ロームブロック(-0.5cm)少量、KP粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微量、しまりや中強、粘性あり。
- 54 暗褐色土 ローム粒子〜ロームブロック(-0.3cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
- 55 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)少量、KP粒子(-0.1cm)微量、焼土ブロック(-1.0cm)含む、しまりあり、粘性あり。
- 56 暗褐色土 ロームブロック(-1.5cm)と暗茶褐色土の混合層。
- 57 暗茶褐色土 ローム層、上面に暗褐色土が層ら、しまり強、粘性あり。
- 58 暗茶褐色土 ロームブロック主体、KP粒子(-0.2cm)少量、黒褐色土ブロック(-1.5cm)含む、白色粒子・棕色色(-0.1cm)・ガラス質粒子(-0.1cm)微量、しまり強・粘性あり。
- 59 暗褐色土 ロームブロック(-0.0cm)や中多量、KP粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。

SI-8 柱穴

- 60 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量、KP粒子(-0.2cm)含む、茶褐色土ブロック(-1.2cm)・白色粒子少量、白色粘土粒子〜ブロック(-0.5cm)微量、しまりあり、粘性あり。
- 61 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)・黒褐色土ブロック(-1.0cm)・白色粒子少量、しまりや中強、粘性あり。

第22図 第8号竪穴建物跡実測図(2)

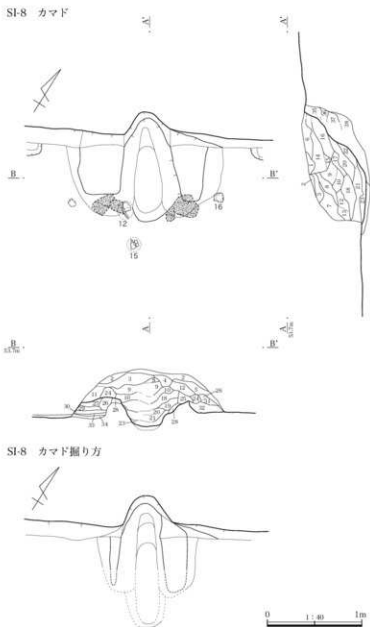
- 62 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-2.0m)・KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子少量。白色粘土粒子→ブロック (-0.3m) 含む。炭化物粒子 (-0.3m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 63 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-0.5m) 少量。KP 粒子 (-0.1m)・白色粘土粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 64 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m)・ロームブロック (-1.0m) 含む。KP 粒子 (-0.1m)・黒褐色土ブロック (-0.5m) 散見。白色粘土ブロック (-0.5m) 含む。しりやや中強。粘性あり。
- 65 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子少量。しりやや中強。粘性あり。
- 66 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.0m) 主体。しりやや中強。粘性あり。
- 67 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.0m) 少量。KP 粒子→ブロック (-0.5m) 少量。白色粒子・褐色粒子 (-0.1m) 散見。白色粘土粒子 (-0.2m) 含む。炭化物粒子 (-0.2m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 68 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 少量。KP 粒子 (-0.2m) 少量。白色粒子散見。白色粘土粒子→ブロック (-0.3m) 含む。しりやや中強。粘性あり。
- 69 暗褐色土 68層の白色粘土少量の層。
- 70 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・白色粒子少量。白色粘土粒子→ブロック (-0.8m) 少量。炭化物粒子 (-0.1m) 散見。土層断面に少量。しりやや中強。粘性あり。
- 71 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.0m) 少量。KP 粒子 (-0.2m) 散見。白色粘土粒子→ブロック (-1.0m) 含む。炭化物粒子 (-0.3m) 散見。土層断面に少量。しりやや中強。粘性あり。
- 72 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.0m) 少量。KP 粒子 (-0.2m)・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 73 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 含む。KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子少量。褐色粒子 (-0.1m) 散見。炭化物粒子 (-0.2m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 74 暗褐色土 ローム粒子 (-0.3m) 含む。ロームブロック (-0.8m)・KP 粒子 (-0.2m) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.2m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 75 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.5m) 含む。KP 粒子 (-0.1m) 少量。褐色粒子 (-0.1m)・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 76 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.5m) 中や多量。KP 粒子 (-0.1m) 少量。炭化物粒子含む。しりやや中強。粘性あり。
- 77 暗褐色土 ロームブロック (-0.3m)・KP 粒子 (-0.1m) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。土層断面に少量。しりやや中強。粘性あり。
- 78 暗褐色土 ロームブロック (-0.4m) 含む。KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 79 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-0.5m) 含む。KP 粒子 (-0.1m)・黒褐色土ブロック (-0.3m) 少量。白色粒子・褐色粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 80 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 中や多量。KP 粒子 (-0.2m) 散見。黒褐色土ブロック (-0.3m) 少量。白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 81 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 含む。KP 粒子 (-0.1m) 少量。褐色粒子 (-0.1m)・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 82 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 含む。KP 粒子 (-0.1m) 少量。褐色粒子 (-0.1m)・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 83 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 含む。KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 84 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 含む。ロームブロック (-0.5m)・KP 粒子 (-0.1m) 少量。黒色土ブロック (-0.3m)・白色粒子・炭化物粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 85 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-0.8m) 含む。KP 粒子 (-0.3m) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 86 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 含む。KP 粒子 (-0.1m) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 87 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.2m) 主体。褐色粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 88 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP 粒子 (-0.1m) 少量。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 89 暗褐色土 ローム粒子 (-0.5m)・KP 粒子 (-0.1m) 少量。白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 90 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 少量。KP 粒子 (-0.3m)・白色粒子・炭化物粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 91 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-0.8m) 含む。KP 粒子 (-0.2m) 少量。黒褐色土 (-0.2m) 少量。黒褐色土 (-0.2m) 少量。白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 92 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 含む。白色粒子・炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 93 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 含む。KP 粒子 (-0.1m) 少量。黒褐色土 (-0.2m) 少量。白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 94 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-0.5m) 含む。KP 粒子 (-0.1m) 少量。黒褐色土 (-0.2m) 少量。白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- 95 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.5m) 含む。KP 粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 96 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-0.5m) 中や多量。KP 粒子 (-0.2m)・黒褐色土 (-0.2m) 少量。白色粒子散見。土層断面に少量。しりやや中強。粘性あり。
- 97 暗褐色土 白色粒子 (-0.3m) 少量。KP 粒子 (-0.1m) 散見。黒褐色土→ブロック (-1.0m) 少量。白色粒子散見。白色粘土 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 98 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-0.5m) 含む。KP 粒子 (-0.1m)・黒色土 (-0.3m) 少量。土層断面に少量。しりやや中強。粘性あり。
- 99 暗褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.2m) 多量。白色粒子散見。しりやや中強。粘性あり。
- S3-8 カマド
- 1 暗褐色土 建物跡跡土か。
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP 粒子 (-0.1m) 散見。赤色変化した白色粘土粒子→ブロック (-0.5m) 含む。炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 散見。KP 粒子 (-0.2m) 少量。黒褐色土ブロック (-0.8m) 散見。白色粒子少量。白色粘土粒子 (-0.2m) 中や多量。焼土ブロック (-0.3m) 含む。しりやや中強。粘性あり。
- 4 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP 粒子 (-0.2m) 少量。白色粘土粒子→ブロック (-0.5m) 多量。焼土粒子→ブロック (-0.5m) 含む。炭化物粒子 (-0.1m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m)・KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子散見。白色粘土ブロック (-0.3m)・焼土粒子 (-0.2m) 少量。炭化物粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 6 暗赤灰褐色土 18層に似る。
- 7 灰褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 散見。KP 粒子 (-0.2m) 少量。白色粒子散見。白色粘土粒子→ブロック (-0.5m) 含む。焼土粒子 (-0.2m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 8 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 少量。KP 粒子 (-0.1m) 少量。白色粒子散見。白色粘土ブロック (-0.3m) 中や多量。焼土粒子 (-0.2m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 9 灰褐色土 白色粘土粒子主体。KP 粒子 (-0.1m) 散見。黒褐色土ブロック (-1.0m) 少量。白色粘土ブロック (-1.0m) 含む。焼土ブロック (-0.3m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 10 灰褐色土 白色粘土粒子主体。白色粘土ブロック (-0.8m) 含む。ローム粒子 (-0.1m) 散見。KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子→焼土ブロック (-1.0m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 11 灰白色土 13層より白色粘土ブロック多量。
- 12 灰白色土 白色粘土粒子→ブロック (-1.0m) 主体。KP 粒子 (-0.1m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 13 灰白色土 12層のKPブロック (-0.4m) 散見。焼土ブロック (-0.3m) 含む。しりやや中強。粘性あり。
- 14 暗赤灰褐色土 KP 粒子 (-0.1m) 散見。焼土で薄赤色に変化した白色粘土ブロック (-5.0m) 多量。白色粘土ブロック (-5.0m)・焼土ブロック (-0.5m) 少量。しりやや中強。粘性あり。焼土が薄赤色。
- 15 14層のブロックが5-61層。
- 16 暗赤灰褐色土 KP 粒子 (-0.2m) 散見。焼土で薄赤色に変化した白色粘土ブロック (-1.0m) 多量。白色粘土ブロック (-1.0m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 17 16層より薄赤色強。
- 18 暗赤褐色土 ローム粒子 (-0.2m)・KP 粒子 (-0.2m)・白色粒子散見。白色粘土粒子 (-0.2m) 含む。焼土粒子→ブロック (-3.0m) 多量。しりやや中強。粘性あり。
- 19 灰白色土 白色粘土粒子→ブロック主体。KP 粒子 (-0.2m) 散見。焼土粒子→ブロック (-0.5m) 含む。炭化物粒子 (-0.2m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 20 灰白色土 灰白色土 (図4) 主体。焼土ブロック (-0.3m) 多量。しりやや中強。粘性あり。
- 21 暗赤褐色土 白色粘土粒子→ブロック (-1.0m) 主体。焼土ブロック (-0.5m) 少量。炭化物ブロック (-1.0m) 多量。しりやや中強。粘性あり。
- 22 灰褐色土 焼土ブロック (-0.8m) 多量。灰土に似る。
- 23 暗褐色土 ロームブロック (-0.8m) 含む。KP 粒子 (-0.2m)・白色土ブロック (-0.8m) 少量。
- 24 灰白色土 白色粘土ブロック主体。白色粘土の純層ではないので、ソド外観に限り付けたらのみ。
- 25 暗赤灰褐色土 25層と灰褐色土層。
- 26 暗赤褐色土 KP 粒子 (-0.3m)・暗赤褐色土ブロック多量。白色土ブロック (-1.0m)・炭化物粒子 (-0.2m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 27 暗褐色土 ロームブロック (-1.0m) 少量。白色粒子散見。白色粘土ブロック (-1.0m) 含む。焼土ブロック (-0.5m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 28 暗赤褐色土 ロームあるいはKP下層土。
- 29 暗赤褐色土 27層の間の炭化物層。
- 30 暗赤褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.0m) 少量。KP 粒子 (-0.2m)・34層の暗褐色土ブロック (-1.0m) 少量。焼土ブロック (-0.3m) 散見。しりやや中強。粘性あり。
- 31 30層と同層。
- 32 暗赤褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.0m) 多量。KP 粒子 (-0.2m)・黒褐色土ブロック (-0.8m) 少量。焼土ブロック (-0.3m) 散見。炭化物粒子 (-0.2m) 少量。しりやや中強。粘性あり。
- 33 暗赤褐色土 KP 粒子 (-0.5m) 主体層。下層の暗赤褐色土の上部に附つたもの。しりやや中強。粘性あり。
- 34 灰褐色土 ローム粒子→ブロック (-1.0m) 含む。KP 粒子 (-0.5m) 少量。しりやや中強。粘性あり。

柱穴は可能性のあるものを含めて p1～16 を確認した。各柱穴の堆積土は似るが、土層の斉一性は観察できない。p1 は 60～62 層が抜き穴、63 層が柱痕あるいは抜き穴、64～66 層が掘り方、p2 は 67～69 層が柱痕、70～72 層が掘り方、p3 は 1 層が抜き穴、74～76 層が柱痕、77・78 層が掘り方とみられる。p4 は新・旧 2 穴が切り合う。79～89 層は新しい柱穴の堆積とみられ、79～82 層は抜き穴、83～85 層は柱痕、86・87 層は掘り方であろう。88～92 層は古い柱穴の堆積とみられ、88 層は抜き穴、89 層は柱痕、91・92 層は掘り方であろう。

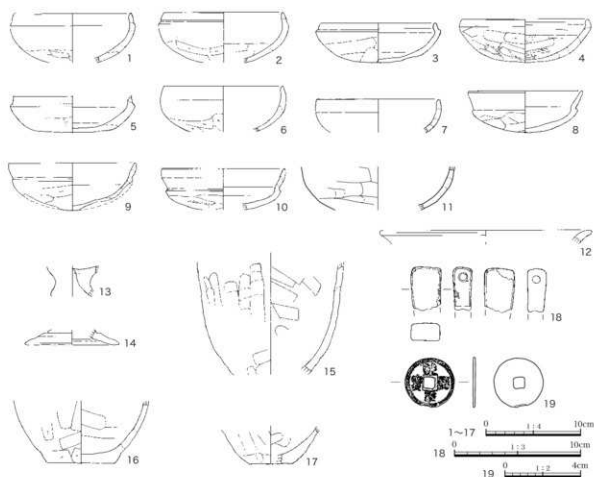
南壁寄りに焼土の堆積が確認される。堆積レベルは、南西隅部付近で 52.895m、南壁中央部付近で 52.92m であり、カマド前付近の堆積土層 A 群と同様である。

柱穴 前述のとおり p1～16 を付した。p1～4 は a 期、重複する p7～10 は b 期の主柱穴であろう。

p4・10 は床面精査の際に 2 穴を確認し、覆土を除去したため、両穴とも平面図に図示した。底面のレベル・現状の床面からの深さは、p1:52.3m・64.5cm、p2:52.51m・44.0cm、p3:52.22m・66.5cm、p4:52.14m・69.5cm、p7:52.27m・66.0cm、p8:52.25m・76.5cm、p9:52.3m・54.0cm、p10:52.23m・55.0cm である。北列は b 期が深く、南列は a 期が深い。柱穴間の距離は、a 期では、p1-2:3.0m、p2-3:2.46m、p3-4:3.0m、p4-1:2.44m である。東西 3.0m 前後・南北 2.44～2.46m であり、東西が長く、南北が短い建物跡の規模に物理的に合う。b 期では、p7-8:2.8m、p8-9:2.9m、p9-10:2.95m、p10-7:2.95m である。柱間と壁までの距離は、残存する a 期で約 120cm である。b 期では、EP 6・10 の掘り込みを壁溝などの床面施設とした場合、70～80cm である。平面図に図示した p5・6、掘り方図に図示した p11・12 の帰属は明確にできなかった。p12 については柱穴であるか判然としない。底面のレベル・現状の床面からの深さは、p5:52.705m・18.5cm、p6:52.76m・13.0cm、



第24図 第8号竪穴建物跡(カマド)実測図



第25図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5表 第8号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	土質 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 杯	口: 12.5 底: 一 高: (5.2)	内: 口~体ヨコナデ 外: 底ヘラケズリ 体ヒビ (焼成前に乾かし過ぎたか) 口~口縁下ヨコナデ	内: 10YR7/3 濃い 黄緑 外: 10YR6/1 暗灰	細密 白色粒子・黒色 粒子・ガラス質粒 子 やや粗	A区 SI-8 No.4 口~体部 1/6 残 存
2 土師器 杯	口: 12.6 底: 一 高: (5.3)	内: 体ヘラナデ~口~体ヨコナデ 口~体ウルシ仕上げ 口一部を除き すでに剥がれていて断面が薄黒い程度 外: 体ヘラケズリ (ヨコ) → 体上ナデ~口ヨコナデ	割れ口: 10YR8/3 浅 黄緑 内: 10YR5/2 灰黄緑 外: 10YR4/1 暗灰	白色粒子・黒色ガラ ス質粒子少量	A区 SI-8 北西・ 北東 2 層 口~体部 1/3 残 存
3 土師器 杯	口: 12.4 底: 一 高: 4.2	内外面焼熟により劣化 外面底部は顕著な発泡状の割れ この為断面には 小さな凹凸が顕著に残る 内面底部も底部を中心に発泡状の割れ この為 仕上げの痕跡は不明瞭 内: ヨコナデ 焼成時とみられる黒面がみられるため不明瞭であるが一部 漆が残るか 外: 口ヨコナデ 体ヘラケズリ (ヨコ) が一部残る	内外: 5YR7/6 黒	白色粒子・黒色粒子・ 透明ガラス質粒 子	A区 SI-8 No.5 完存
4 土師器 杯	口: 13.4 底: 一 高: 4.6	内: 断面 体ヘラナデか~口ヨコナデ 焼熟により赤色変化する部分もあ るが、ウルシ仕上げのように黒い 外: 体ヘラケズリ 口ヨコナデ	内外: 10YR7/4 比 しい黄緑	細密 白色粒子・黒 色粒子少量、赤色 粒子少量 やや粗	A区 SI-8 No.5.カ マド 口~体部 2/3 欠 損
5 土師器 杯	口: 12.5 底: 一 高: (3.9)	口: 内傾か直立 楕圓形 底・やや扁平気味 内: ヨコナデ 底所減 体下~底 発泡状割れ少量 外: 底~底 発泡状割れ 特に底部に顕著 体ヘラケズリ 口ヨコナデ	内外: 10YR8/3 浅黄 緑	細密 白色粒子・赤 色粒子・黒色ガラ ス質粒子微量 やや粗	A区 SI-8 No.2.2 層 SB.南西 口~体部 1/3 残 存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 品類	寸法	特徴	色調	粘土 構成	出土状況 存在状況
6 土師器 杯	口：[12.6] 底：一 高：(4.8)	内：口→体ヨコナデ 外：体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 体上にヒビ 成形時の乾縮によるものか 内→外（口）ウルシ仕上げ ほぼ割がれており、断面が薄肉の程度	明灰口・10YR8/3 浅 内外・10YR5/1 褐色	やや硬質 白色粒子・黒色ガラス質粒子少量、砂粒微量	A区S18 2層 口→体部 1/4 残存
7 土師器 杯	口：(13.0) 底：一 高：[3.5]	底不明 内：口→体ヨコナデ 口端の一部に漆が残る 外：口ヨコナデ 体 成形時の乾縮によるヒビか 口端の一部にウルシが残る	内外・10YR7/4 に近い黄褐色	白色粒子・黒色粒子微量	A区S18 北西 口縁部 1/6 残存
8 土師器 杯	口：12.2 底：一 高：4.4	外面口→内 ウルシ処理 内：口→体ヨコナデ→ウルシ処理 底部は凹状に小さくくぼむ 外：口ヨコナデ 体ヘラケズリ後 口下をナデか 体部ウルシ処理は上ナデ部分に施されるがヘラケズリ上段にも部分的に観察される 口と口直下の体ナデ部を白土に塗られたものか 口ヨコナデは軸直上をヨコナデした際に薄白に入り込み凹状となる	内外・10YR8/3 浅黄褐色	白色粒子・黒色ガラス質粒子少量	A区S18 No.1 口縁部一部欠損
9 土師器 杯	口：13.4 底：一 高：5.0	内：磨滅 底ヒビ 体ナデか→口ヨコナデ 外：体割面露出 体ヘラケズリ→口ヨコナデ・体上ナデか	内外・5YR6/6 褐色	硬質 白色粒子・黒色粒子・ガラス質粒子（微粒）	A区S18 No.3, 北西 1/2 残存
10 土師器 杯	口：[13.2] 高：(4.3)	内：ナデか→口→体ヨコナデ 外：体ヘラケズリ→体軸下ナデ→口ヨコナデ ヘラケズリの深さが不規則で、厚さ2.5mmほどの部分もある 体上色に金属製品によるとみられる刃跡状の痕跡 内→外（口上）ウルシ仕上げ 内底部のウルシは割がれているか	内外・10YR7/3 に近い黄褐色	やや硬質 白色粒子少量、黒色ガラス質粒子微量	A区S18 北東 1/3 残存
11 土師器 杯	口：一 底：一 高：(5.7)	最大径(16.3) ウルシ仕上げ 内：磨滅 外：磨滅 体ヘラケズリ（ヨコ）か	内外・10YR8/3 浅黄褐色	黒色ガラス質粒子少量、白色粒子微量	A区S18 カマド No.4, 南西 体部 1/4 残存
12 土師器 甕	口：[22.0] 底：一 高：(1.5)	頸部がゆるやかな「く」になると思われるので、7世紀代（7世紀前期）の可能性が高い	内外・10YR7/4 に近い黄褐色	白色粒子・赤色粒子少量、砂粒・黒色ガラス質粒子微量 且	A区S18 カマド No.3 口縁部 1/6 残存
13 土師器 高杯	口：一 底：一 高：(3.2)	杯縁接合部 杯 内：底ヘラナデ→口→体ヨコナデ 痕跡薄い 外：磨滅のため不明 脚 内：ヨコナデ 外：接合部 ヘラケズリ（タテ）	内外・10YR7/4 に近い黄褐色	やや硬質 白色粒子・透明ガラス質粒子微量	A区S18 2層 脚部 1/2 残存
14 土師器 高杯	口：一 底：[10.0] 高：(1.6)	脚縁部 内：割ヨコナデ 外：割ヨコナデ 脚部は僅かに残る 仕上げ不明だが、深く入り込んだ跡が残るため、ヘラケズリの可能性が考えられる 仕上げは断面の充分な乾縮によるとみえるヒビが見られる	内外・2.5Y7/2 灰黄	やや硬質 白色粒子・透明ガラス質粒子微量	A区S18 P2 底部 1/6 残存
15 土師器 甕	口：一 底：一 高：(12.0)	最大径(15.0) 体：発芽型 16と同一個体か 内：ヘラケズリ→ナデか ヘラケズリの痕跡が僅かに残る 発芽状の剥離面露 外：ヘラケズリ 体タテ 体下ヨコ タテのヘラケズリは粘土に工具が引っかけた痕跡あり 粘土の乾縮によるためか	内・7.5YR7/6 褐色 外・5YR6/6 褐色	粗 砂粒多量・黒色ガラス質粒子微量	A区S18 カマド、カマド2、カマド3, 南東 体部 1/3 残存
16 土師器 甕	口：一 底：7.0 高：(6.6)	最大径(7.2) 底部からの立ち上がり丸味がある 内：磨滅 剥離 ヘラケズリ（ヨコにみえる） 外：体ヘラケズリ（タテ）→底現ヘラケズリ（ヨコ） 底：ヘラケズリ 縦紐一方向	内・10YR8/3 浅黄褐色 外・10YR7/4 に近い黄褐色	やや粗 白色粒子少量、砂粒多量、黒色ガラス質粒子微量	A区S18 カマド No.1 底部完存
17 土師器 甕	口：一 底：[4.5] 高：(4.0)	15と同一個体の可能性あり	内・7.5YR7/6 褐色 外・5YR6/6 褐色	粗 砂粒多量、白色粒子少量、黒色ガラス質粒子微量	A区S18 カマド No.19 底部 1/3 残存
18 石製品 底石	長：3.3 幅：2.3 厚：1.4	最大長 3.5 最大幅 2.45 2078g 破砕面以外全面磨滅 欠損部に向けて窄まる形状かつ磨滅が薄くなるため、欠損部付近が個体の中央部とみられる 頂上の裏面の磨滅が著しく、主前面であろう もしくは同上表面の右から左側面に向けて片側磨滅とみられる			A区S18 床下 下半部欠損
19 古銭	長：2.6 幅：2.6 厚：0.1	明造元寶 重：2.76g			A区S18 北東隅 一部欠損

p11:52.61m・38.0cm, p12:52.6m・26.0cmである。東西列・南北列の底面のレベルはほぼ同様である。主柱穴に比べ浅いが、柱の配置はa期のラインに沿う。p13～16は柱穴であるか判然としない。p13・14は第22図に図示、p15・16の底面レベルは52.75m・52.54m、周辺の掘り方からの深さは2.0cm・11.0cmである。

壁溝 南・南東壁を除き確認した。谷部にあたり把握しきれなかった可能性が残る。貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から1527.66gが出土する。特に、覆土33層を主体とする西壁付近の堆積層31～34層は土師器の薄片を包含する。第21図に示した遺物20は不掲載であるが便宜上番号を付した。

推定できる出土層序は、堆積土A群:3・4・8・39層中から土師器環(1片1.37g)・土師器甕(1片28.88g)、堆積土B群:33層中から土師器環口縁部a(蓋模倣1片・体部1片12.08g)、粘土塊2.17g、堆積土C群:20層中から土師器環a(口縁部身模倣1片)2.64g・土師器甕(1片4.27g)、21層中から土師器環a(1片3.84g)、土師器甕(1片5.24g)、堆積土C・D群:9、堆積土D群:18層中から土師器環a(1片18.96g)7層中から出土の薄片と接合。堆積土E群:5・6・7層中から土師器環b(口縁部身模倣1片5.24g)、土師器環高環脚接合部(1片12.72g)・土師器甕(1片12.02g)・土師器微細片(3.74g)土師器とみられる破片(1片8.13g)、粘土塊2.24gである。

床面直上からは土師器環b口縁部片(蓋模倣)が出土する。A～D群からの出土とみられる。

柱穴からは、p1:土師器環a口縁部片(身模倣1片3.86g)、p2:土師器環b口縁部(蓋模倣)1片・体部b2片・d1片22.34g、粘土塊11.29g、p3:土師器環b口縁部(蓋模倣)1片・a体部1片6.22g、土師器甕体部1片6.56g、p6:土師器環d体部2片4.03gが出土する。

覆土からの出土遺物は、セクションベルトを基準に4区画から取り上げた。南東部からは、土師器環11片(a5片・b2片・c4片)59.81g、土師器甕(薄手)2片5.18g、土師器甕13片191.34g、土師器鉢類1片20.39g、土師器微細片1.63gが出土する。南西部からは、土師器環頸21片(a10片・b8片・不明3片)148.8g、土師器甕(薄手)10片51.37g、土師器甕5片52.47g、土師器甕(常総形)1片5.42g、土師器微細片4.31g、須恵器甕2片16.42g、粘土塊2片5.6gが出土する。不掲載の土師器環aは北西部・北東部の破片が接合、5は北西部・南西部の破片が接合する。北東部からは4・7・8・10の他、土師器環42片(a口縁部身模倣5片12.65g・体部10片76.58g d口縁部身模倣8片44.96g・蓋模倣3片13.44g・体部16片81.76g)・土師器高環脚部片1片4.7g・土師器甕類20片153.24g・土師器微細片7片1.46g・粘土塊7片36.7gが出土する。北西部から土師器環8・9の他、土師器環25片(a10片28.19g・b1片2.49g・d11片33.37g・e1片0.73g・不明2片6.52g)、土師器鉢類4片27.18g、土師器甕(薄手)5片12.94g、土師器甕8片55.75g、土師器甕(常総形)1片2.85g、土師器微細片26.4g、粘土塊15.01gが出土する。

この他、覆土中から土師器甕体部2片6.52gが出土する。第21図20は土師器長胴甕小片である。

掘り方からは、土師器環4片16.5g(a2片・b2片)、土師器甕体部8片84.38g、須恵器環口縁部1片(益子産)2.14g、砥石18、粘土塊3片8.58gが出土する。

堆積土E群については、7層・床面2～3cm上(5)、E群・18層(不掲載)が接合したため、廃絶に關わる埋め戻し土である可能性を留意したい。

なお、土師器環7は何れも極めて小さい破片であり、図に復元した大きさに誤差が伴う可能性があるが、時期を判別するため掲載した。

出土遺物 須恵器環1片、須恵器甕2片、図示した土師器環の他、112片602.43g、土師器高環13・

14の他2片 17.423g、土師器鉢類5片 57.57g、土師器甕類80片 678.34g、器種不明の土師器片4片 12.21g、土師器微細片 37.54g、粘土塊 103.59gが出土する。北東部からの出土が多い。出土する平面的な位置や高さ、接合状況、器種の出土比からは建物跡に伴う遺物は廃絶時に建物跡外に持ち出された可能性が考えられる。

須恵器は掘り方から環1片が出土する。口縁部の小片で寸法・時期は判然としにくい。益子産とみられる。

土師器環は寸法や時期の特定が困難な小片も多いが、何れも模倣環とみられる。概ね、内面～外面口縁部をヨコナデ、外面はヘラケズリを施す。外面稜下はヘラケズリの痕跡が薄くナデが施されたとみられる。また、ナデとみられる部分にヒビが観察される個体があり、整形前の乾燥による可能性も考えられる。口縁端部に剥落がみられる個体、片口状の欠け口が観察される個体がある。器面の様子は、9が緻密な胎土で色調が赤色である以外は、やや緻密な胎土で色調が橙色・白色である。ウルシ処理を施すものは内面から外面口縁部にかけて観察される。このうち、器面が橙色の個体:9他11片、橙色でウルシ処理の個体:30片、白色の個体:5他16片、白色で推定を含めウルシ処理の個体:1・7・8・10・11他46片である。

本遺構の時期は概ね7世紀前葉と考えられるが、掘り方から出土する小片は6世紀末葉～7世紀前葉の可能性がある。南西部からの出土遺物には常陸型の甕1片、須恵器甕2片を含む。常陸型の甕片は口縁端部を積み上げる小片、甕片はタテ方向に平行たきが施される。8世紀以降の破片とみられ、混入した可能性が考えられる。また、北東隅から北宋銭19「明道元寶」が出土する。層序は未確認であるが40層に相当する位置にある。後世の混入遺物の可能性が考えられる。

火処 カマドを火処とする。北壁中央付近に位置する。煙道は北壁を掘り込み建物跡外へ延びる。覆土の堆積状況から2時期以上が推定される。現状のカマドはa期に伴うが、構築時期は定かではない。覆土は39層を確認した。1層はカマド被覆土あるいは攪乱層、2～5層は焼土・白色粘土を含む。カマドの被覆層であろう。6～11層も白色粘土・焼土を含む。7層は床面覆土48層から続く層であろう。カマドの埋土とみられる。12～15層は全体的に被熱する。12・13層は壊れたカマド材、14・15層は天井部あるいは崩落したカマド材と考えられる。16～19・22層は焼土、20・21層は灰とみられる覆土、23層はロームを含む。16～19・22層は焚き口に近いほど堆積する焼土の量が多い。火床に関連する堆積と判断できる。24～34層はソデの構築層、35～39層は掘り方層であろう。覆土の堆積状況からは、廃絶時に火床を洩い、洩った土である23層(ロームを含む)→20・21層(灰・焼土を含む)→16～19・22層(焼土を含む)で火床を埋め戻し、焚き口付近のカマド前部を破壊、12～15層堆積後、6～11層でカマドを埋めた可能性を指摘できる。6～11層は床面覆土48層下にあることからカマド部分のみの埋土と判断できる。カマド最上層部の2～5層は床面覆土48・49層上に堆積することから、床面と並行してカマドを埋め戻した、建物被覆層と考えられる。また、床面の項目で記述した南壁付近の焼土は床面覆土最下層となるA群のレベルに相当する層である。火床を洩った際の焼土であるとすれば、6～11層でカマドを埋め戻した後、床面の埋め戻しが始まり、建物が埋没した可能性が考えられる。

ソデは、地山の粘土層をソデ芯として掘り残す。ソデは、下層の29～34層と上層の24～27層に大別できる。下層の29～34層を見ると、右ソデは粘土を多く含む31・32層(ローム主体層)が上下に堆積し、左ソデは34層(ロームを含む)・33層(KP主体層)・30層(ローム主体層)・29層(炭化物主体層)が薄く水平に堆積する。左右のソデとも水平な堆積であるが、左ソデの方が密な堆積であり、左右のソデの堆積には相違がある。作業の手間数が多い造りを構築時と仮定するならば、左ソデはカマド古段階、右ソデはa期の床面に伴う可能性が考えられる。左ソデ構築土に含まれる炭化物が旧カマドに由来するものであるとす

れば、右ソデはカマド構築時、左ソデはa期の床面に伴う可能性が考えられる。28層はソデ芯上に堆積し、粘土の量が多い点は左右ソデに共通する。a期の床面に伴う構築であろう。上層の24～27は左右で堆積順が異なるが同一層であり、a期の床面に伴う構築層と考えられる。

掘り方は35～39層を確認した。39層は38層と大過ないとの現地所見がある。火床下部から奥壁を粘土層(37～39層)で、カマド上部をロームや鹿沼軽石層などの地山層(35・36層)を構築する。

本カマドは、a期に伴い、右ソデ及び左ソデ芯上部までを壊し作り替えたものと判断できる。

遺物出土状況 覆土中から135.91gが出土する。土師器環は1・11の他5片43.4g(a2片・b身模倣1片・体部2片)、土師器甕は12・15・16・17他4片73.27g及び被熱の著しい微細片16.21g、土師器高環1片3.03gが出土する。土師器甕のうち1片は掘り方出土の破片と接合する。

1はカマド7層・床面48層に相当する高さから出土する。11はカマド12層と床面南西部から出土する破片が接合する。12・15・16はカマド前面から出土する。15は床面49層に相当する高さでカマドから出土する破片が接合する。16は床上6.0cm上から出土する。17は床面39層(A群)とカマド内から出土する破片が接合する。床面49層・カマド12・13層に相当する左右ソデ前方には構築材とみられる粘土塊が出土する。何れもカマド埋土中のものであろう。後述のとおり、カマドと床面出土の接合片があり、遺物は散在する状況にある。本遺構の遺物は覆土の堆積に伴う遺物と考えられ、廃絶にあたって遺物は建物外に持ち出されたと推測される。カマドと掘り方出土の接合については床面直上の堆積土と掘り方土を見誤った可能性が残る。

出土遺物 不掲載の土師器環は床面出土の環と同じ特徴が観察される。口縁部片は2片で何れも口縁部の形状は②で口縁部は丸みを持って内傾する。器面の色調は白色である。体部～底部は4片で、色調は白色、ウルシ仕上げが観察される個体は2片、観察されない個体は2片である。土師器高環は裾部の小片である。13・床面出土の不掲載小片と似るが接合しない。

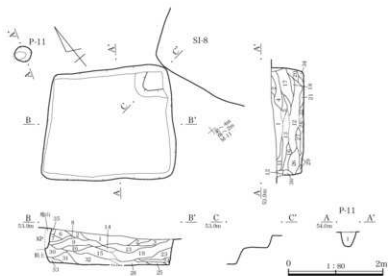
土師器甕12・15は近接して出土するが同一個体であるかは判然とし難い。15・17は胎土・焼成が極めて似ており、同一個体の可能性が高い。また、15・17と似た体部片がカマド内2片、北東部1片、掘り方1片ある。この他の甕類は、カマドと掘り方からの体部接合片、この体部接合片と似た体部片1片、頸部片2片、被熱し赤色変化する小片12片16.21gが出土する。

土師器高環は裾部の小片である。

第9号竪穴建物跡(SI-9)(第26図 写真図版五)

位置 A区L-10に位置する。現状で東側の谷に向けた斜面地にある。東側の谷に並行し、磁北には沿っていない。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模 方形形状であるが、谷に向けてやや広がっている。一辺の長さは、東西2.46～2.82m、南北2.25～2.44mである。深さは谷部への傾斜のため、丘陵側0.72m・谷側0.53mである。確認面のレベルは丘陵側53.78m・谷側53.55mである。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。N-37°Eである。床面 鹿沼軽石層下の粘土層を床面とする。掘り方は確認されない。壁は確認面から地山・鹿沼軽石層・鹿沼軽石層下の粘土層に至る。床面のレベルは概ね53.0mである。谷部へ向かう傾斜等は確認されないが、西隅部付近の床面レベルは53.05mであり、やや高い。東隅部の確認されたステップ状の掘り残しの対角にあたる。床面中央部に炭化物が確認される。火熱の痕跡は認められない。

覆土 36層を確認した。35・36層は壁の崩落層であろう。SP-A・Bでは土層の特徴は似るが、交点以外の土層の異同については判じ得なかった。このため、交点の土層に先に番号を付し、SP-A・Bごとに付番した。



SI9

- 1 暗褐色土 ローム段～ロームブロック(-1.0m)・KPブロック(-0.5cm)少量, KP段(-0.2cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子・暗褐色ブロック(-0.5cm) 散見, しまりあり, 粘性あり。
- 2 暗褐色土 1層より濃色, ローム段・ロームブロック(-1.0m)・KP段～ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.8m)含む, 暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.5cm)少量, 白色粘土ブロック(-0.8cm)・白色粒子散見, しまりややあり, 粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム段(-0.3m)・白色粒子散見, 暗褐色ブロック(-1.2m)多量, KP段(-0.2cm)少量, しまりややあり, 粘性あり。
- 4 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)少量, KP段～ブロック(-1.2m)中々多量, 暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)・KP段～ブロック(-0.5m)・暗褐色ブロック(-1.0m)少量, 暗褐色ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)含む, KP段(-0.2cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-1.0m)少量, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 7 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)少量, 暗褐色ブロック(-0.8m)・KP段(-0.2cm)含む, 白色粒子散見, しまり強, 粘性あり。
- 8 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.8cm)・暗褐色ブロック(-0.8cm)含む, KP段～ブロック(-0.8cm)・暗褐色ブロック(-0.5m)少量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 9 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)・KP段～ブロック(-1.0m)少量, 暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.8m)含む, 白色粒子散見, しまりややあり, 粘性あり。
- 10 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-1.0m)少量, KP段～ブロック(-1.2cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 11 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)多量, KP段(-0.5cm)含む, 暗褐色ブロック(-1.2cm)少量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 12 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)・KP段(-0.2cm)少量, 炭化物粒・白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 13 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.8cm)少量, 暗褐色ブロック(-1.0m)含む, KP段～ブロック(-1.2m)多量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.3cm)・KP段～ブロック(-0.8cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.8cm)少量, 白色粒子・炭化物粒散見, しまりあり, 粘性あり。
- 15 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)・KP段(-0.2cm)少量, 暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 16 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.8cm)・KP段～ブロック(-1.0m)含む, 暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.8cm)少量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 17 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)・KP段～暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.8cm)含む, KPブロック(-1.0m)少量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 18 暗褐色土 ローム段(-0.2cm)・暗褐色ブロック(-0.5cm)少量, KP段(-0.3cm)含む, 白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり, KPなど黄色粒多く, 暗褐色に混じり。
- 19 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.2cm)・KP段(-0.2cm)多量, 白色粘土段～ブロック(-0.5cm)・暗褐色ブロック(-0.5cm)少量, 暗褐色ブロック(-3.0m)含む, しまりあり, 粘性やや弱。
- 20 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)含む, KP段～ブロック(-1.0m)中々多量, 暗褐色ブロック(-1.0m)少量, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 21 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.3cm)・KP段～ブロック(-0.8cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 22 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.8cm)・KP段～ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-0.5cm)少量, 白色粒子・炭化物粒(-0.3cm)散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 23 暗褐色土 ローム段(-0.3m)多量, KP段～ブロック(-1.2m)含む, 暗褐色ブロック(-0.8cm)少量, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 24 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.2cm)多量, KP段(-0.2cm)少量, しまりやや弱, 粘性やや弱。
- 25 暗褐色土 ローム段・KP段少量, しまりあり, 粘性あり。
- 26 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)多量, KP段～ブロック(-0.8m)含む, 暗褐色ブロック(-1.5m)少量, しまりやや弱, 粘性あり。
- 27 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5m)含む, KP段少量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 28 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)・KP段(-0.2cm)多量, 暗褐色ブロック(-1.2m)少量, しまりあり, 粘性あり。
- 29 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)中々多量, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 30 暗褐色土 ローム段(-0.2cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-1.0m)少量, KP段(-0.3cm)多量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 31 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)・暗褐色ブロック(-1.5cm)・暗褐色ブロック(-1.0m)少量, KP段～ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 32 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)少量, KP段(-0.2cm)・KPブロック(-2.0m)含む, 暗褐色ブロック(-1.0m)・暗褐色ブロック(-1.0m)含む, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 33 暗褐色土 ローム段～ブロック(-1.0m)含む, KP段～ブロック(-0.5m)・暗褐色ブロック(-1.0m)少量, 白色粒子散見, しまりあり, 粘性あり。
- 34 暗褐色土 ローム段(-0.3m)・KP段～ブロック(-1.2m)少量, 暗褐色ブロック(-1.0m)少量, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。
- 35 暗褐色土 KP段(-0.2cm)少量, しまりあり, 粘性あり。
- 36 暗褐色土 ローム段～ブロック(-0.5cm)・KP段(-0.1m)含む, 暗褐色ブロック(-0.8cm)少量, 白色粒子散見, しまりやや弱, 粘性あり。

P11

- 1 暗褐色土 KP段(-0.2cm)中々多量, 白色粒子散見, 炭化物粒(-0.2cm)少量, しまりやや弱, 粘性あり。

第26図 第9号竪穴建物跡・第11号ピット実測図

覆土は混入物によってA～G群に分別が可能である。最上層はA群(1～5層)で暗褐色土および暗茶褐色土、B群(6～11層)は黒褐色土、C群(13・14・19・21・22層)は白色粘土や炭化物、D群(15～18層)はローム・鹿沼軽石・暗褐色土および暗茶褐色土・黒褐色土、E群(23・24・26～29層)はローム、F群(20・30～32層)は鹿沼軽石、G群(25・33・34層)はローム・鹿沼軽石を含む。最下層付近に混入物の少ないG群が堆積後、SP-AではF・E群、SP-BではE・F群の間にC群、追って、D群、C群が堆積する。建物跡埋土と考えられる下層のC～G群と上層のA・B群とで覆土は大別が可能と判断される。

付属施設 東隅部にステップ状の部分が掘り残される。遺構確認面からの深さ約0.27m、床面からの高さ約0.35mである。ステップ部のレベルは壁際35.36m、床面側35.35mでほぼ平坦である。

壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝は確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から18片89.88gが出土する。出土位置は明らかではない。

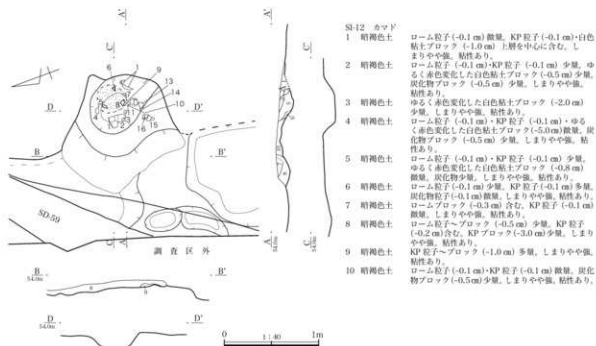
出土遺物 何れも小片で、図示し得なかった。土師器甕は7片41.85g、土師器甕(常総型)2片16.83g、土師器微細片7片12.25g、須恵器甕1片11.56g、須恵器瓶類1片7.39gが出土する。土師器甕(常総型)は胎土に金雲母を含み、外面にタテ方向のヘラミガキを施す。須恵器甕は外面にタテ方向の平行叩きを施す。産地は判然としないが、新治産の可能性が残る。9世紀代の可能性が考えられる。須恵器瓶類は益子産とみられ、内面に水挽き痕が観察できる。器壁は7.0mmである。

火旭 確認されなかった。

第12号竪穴建物跡(SI-12) (第27～29図 第6表 写真図版六・一九)

位置 A区L・M-9に位置する。A区西端にあり、遺構の2/3は調査区外にある。平坦面にあるが、削平による可能性もあろう。重複関係 SI-93重複し、本遺構が新しい。SD-59と重複し、本遺構が古い。

平面形状・規模 削平により建物跡の壁・床面は失われ、掘り方底面に近い状況といえる。掘り方は凹凸が著しく、細かな凹凸は図化し得なかった。このため、調査区西壁の土層の堆積状況から確認した南壁を基



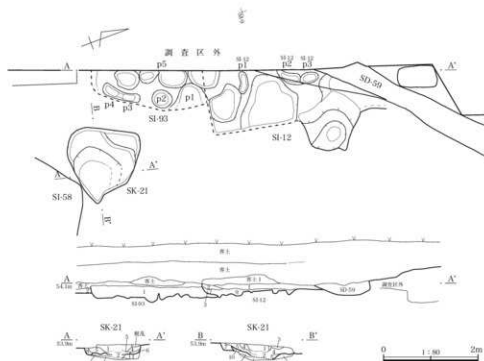
第27図 第12号竪穴建物跡(カマド)実測図

第3章 確認された遺構と遺物

準に掘り方の凹凸によって平面形を推定した。推定される平面形状は方形である。南側に重複するSI-93との新旧関係は調査区西壁の掘り方面の土層の堆積で確認した。現状での規模は、最大値で東西1.36m・南北(2.4)mである。カマドが東壁中央部であったとすれば、5mほどの規模と推定できる。掘り方底面の凹凸の深さは何れも15.0cm前後、p1とした掘り込みは11.0cm、p2は4.5cm、p3は6.0cmである。主軸N-13°-Eである。床面 鹿沼軽石層を掘り方面とする。遺構確認面の標高は53.85m。付近にあるSI-59の床面レベルより低い。覆土 客土下に掘り方埋土4層を確認した。総じてブロック状の混入物が少なく、貼床状の堆積も確認されない。覆土最上層は床面直下ではなく、床面は更に上位にあったものと判断される。

柱穴 掘り方に痕跡は見られない。位置的にも調査区外にあると判断される。柱穴・壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。



- SI-12
- 1 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KPブロック(-0.3cm)含む、KPブロック(-0.8cm)少量、白色粒子・黒色粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、KPブロック(-0.3cm)含む、KPブロック(-1.0cm)少量、白色粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 3 ローム粒子(-0.1cm)微量、KP粒子(-0.2cm)少量、KPブロック(-3.0cm)含む、白色粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 9 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、KP粒子(-0.2cm)少量、KPブロック(-2.0cm)含む、白色粒子・黒色粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 客土1 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、KP粒子(-0.2cm)含む、白色粒子・焼土粒子(-0.1cm)微量、炭化物粒子(-0.2cm)少量、炭化物ブロック(-2.5cm)微量、しまり強、粘性あり。

- SI-93
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、KPブロック(-0.5cm)含む、KPブロック(-3.0cm)少量、黒色土ブロック(-1.0cm)微量、白色粒子・黒色粒子(-0.2cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、KP粒子(-0.2cm)少量、茶褐色土ブロック(-3.0cm)含む、白色粒子微量、しまり強、粘性あり。

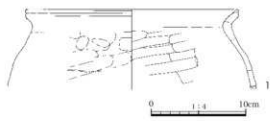
- SK-21
- 1 暗赤褐色土 焼土主体、ローム粒子〜ブロック(-1.2cm)多量、白色粒子・炭化物粒子(-0.2cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 2 暗赤褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.2cm)含む、白色粒子微量、焼土多量、炭化物粒子(-0.2cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 3 暗赤褐色土 KP粒子(-0.1cm)含む、焼土多量、しまり強、粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.0cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・焼土粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.5cm)含む、KP粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)含む、KP粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 7 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)少量、KP粒子(-0.1cm)・焼土粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量、KP粒子(-0.1cm)微量、しまり強、粘性あり。
 - 9 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微量、KP粒子(-0.1cm)少量、しまり強、粘性あり。
 - 10 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)少量、KP粒子(-0.1cm)多量、しまり強、粘性あり。
 - 11 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)少量、KP粒子(-0.1cm)含む、KPブロック(-0.3cm)少量、しまり強、粘性あり。
 - 12 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)少量、KP粒子(-0.1cm)含む、KPブロック(-1.0cm)少量、しまり強、粘性あり。

第28図 第12・93号竪穴建物跡・第21号土坑実測図

火処 カマドを火処とする。東壁に位置する。煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。削平により火床・ソデ芯などカマド構築物は失われており、掘り方面が残る。火床下部とみられる位置には深さ 15.0cm ほどの掘り込みがある。掘り込み上層に土器片、焼土、被熱により赤色変化したカマド材とみられる粘土片が散材する。覆土は 10 層を確認した。1～6 層は火床下部とみられる掘り込みに堆積する。1 層はカマド材とみられる白色粘土、3・5 層は被熱により赤色変化したカマド材を含む。出土する土器片・カマド材は 3・5 層に伴う。7～9 層はロームや鹿沼軽石など地山土を含み、カマド前の床面作出土と考えられる。10 層は掘り方埋土と判断される。堆積状況から、カマドは建物跡廃絶時に火床を洗い、土器やカマド材を含みつつ埋め戻された可能性が考えられる。

遺物出土状況 覆土中から 72.43g が出土する。土師器甕（常陸形）1・No.1～16 は火床下部の掘り込み上層から出土する。出土レベル 52.825～52.914m の 10cm 弱でカマド材とともに確認される。

出土遺物 土師器甕 1 と同一個体とみられる No.1～16 及びカマド出土の小片 28 片 44.40g がある。また、1 とは別個体の土師器甕微細片 8.19g、粘土塊 2 個体 15.02g、鉄製品 4 片が出土する。鉄製品は径約 3mm の円或いは隅丸形状で、付着物を含む重さは 4.82g である。



第29図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図

第6表 第12号竪穴建物跡出土遺物観察表

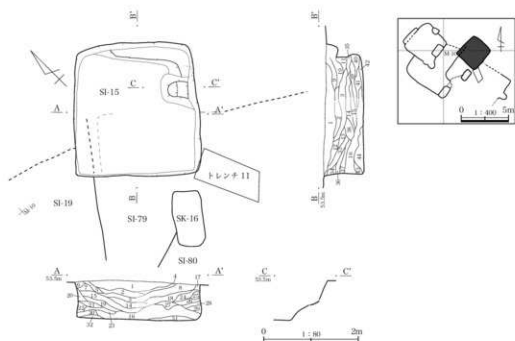
番号 器種	寸法	特徴	色調	(単位:cm)	
				胎土 構成	出土状況 残存状況
1 土師器 甕 常陸型	口: 22.4 底: 一 高: 8.5	口縁内面受口状 内:ヘラケズリ(3コ) 縁跡は薄い ナデか埋め込 外:ヘラケズリ(3コ) →ナデ(胎土面) →口ヨコナデ	内外 SRY65 態	白色粘土・黒色ガラス質粒子多量。透明ガラス質粒子微量	A 区 SI-12 カマド No.7, カマド No.8 口縁部 1/5 残存

第15号竪穴建物跡(SI-15) (第30・31図 第7表 写真図版六・一九)

位置 A区 L・M-10 に位置する。現状で東側の谷に向けた斜面地にある。東側の谷に並行し、磁北には沿っていない。重複関係 SI-19・79 と重複する。本遺構が新しい。平面形状・規模 方形状である。一辺約 2.65～2.8m で、谷に直交する向きが若干長い。確認面からの深さは 0.85m である。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。N-46° -E である。床面 鹿沼軽石層下の粘土層を床面とする。掘り方は確認されない。建物跡痕は確認面から地山・鹿沼軽石層・鹿沼軽石層下の粘土層に至る。床面のレベルは 53.55m 前後であり、谷部へ向かう傾斜等は確認されない。床面中央部に炭化物が確認される。火熱の痕跡は認められない。

覆土 44 層を確認した。SP-A・B では土層の特徴は似るが、交点以外の土層の異同については判じ得なかった。このため、交点の土層に先に番号を付し、SP-A・B ごとに付番した。堆積土はロームの混入量が多い下層(B群)と上層(A群)に大別できる。さらに、A・B群は黒褐色土・暗褐色土の有無により、①(黒褐色土・暗褐色土を含む)、②・⑤(黒褐色土を含む)、③・⑥(暗褐色土を含む)、④・⑦(黒褐色土・暗褐色土を含まない)に細別が可能である。詳細な層序は不明であるが、上層から、SP-A 堆積土 A 群:〈交点①(1層)〉→④(4層)→〈交点②(2層)〉→④(5・6層)・③(7層)→〈交点③(3層)〉→③(8層)→堆積土 B 群⑦(17・18層)→〈交点⑥(14・15層)〉→⑤ 19～23 層・〈交点(16層)〉・(24～30層)・(31層)

第3章 確認された遺構と遺物



- SI-15
- 1 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm)～ロームブロック (-1.5cm) 少量。暗褐色土ブロック (-1.0cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 含む。白色粒子・炭化物粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 2 暗黒褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 含む。暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 3 暗黒褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.5cm) 含む。暗褐色土ブロック (-2.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 4 暗黒褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm)・白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 含む。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 6 暗黒褐色土 ローム粒子 (-0.2cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 7 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 多量。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 少量。KP 粒子 (-0.2cm) 散見。暗褐色土ブロック (-1.5cm) 含む。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 9 暗褐色土 ローム粒子 (-0.4cm) 含む。ロームブロック (-1.0cm)・KP 粒子 (-0.1cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.5cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.5cm) 含む。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 10 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2cm)・ロームブロック (-1.2cm)・KP 粒子 (-0.1cm)・暗褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.5cm) 含む。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 11 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1cm) 含む。ロームブロック (-0.5cm) 散見。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。暗褐色土ブロック (-1.0cm) 含む。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 12 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 含む。KP 粒子 (-0.2cm)・暗黒褐色土ブロック (-2.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 13 暗黒褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 含む。KP 粒子 (-0.2cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 14 暗黒褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 含む。KP 粒子 (-0.2cm)・暗黒褐色土ブロック (-2.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 15 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) や中多量。ロームブロック (-2.0cm)・KP 粒子 (-1.0cm)・暗褐色土ブロック (-2.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 16 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.5cm) 多量。KP 粒子～ブロック (-1.0cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 含む。白色粒子・炭土粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 17 暗褐色土 ローム粒子・KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 18 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 19 暗褐色土 ローム粒子や中多量。ロームブロック (-1.0cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 20 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.5cm) や中多量。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 21 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.5cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 22 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2cm) 含む。ロームブロック (-1.0cm)・KP 粒子 (-0.2cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 23 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 多量。KP 粒子 (-0.1cm)・白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 24 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 多量。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。白色粒子散見。暗褐色土ブロック (-1.0cm) 含む。しまりや中弱。粘性あり。
 - 25 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm)・KP 粒子 (-0.2cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.2cm) 多量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 26 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) や中多量。KP 粒子 (-0.1cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 27 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 多量。KP 粒子 (-0.1cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 28 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.5cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.5cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 29 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) や中多量。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 30 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 多量。KP 粒子 (-0.1cm)・暗黒褐色土ブロック (-0.8cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 31 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm) 散見。暗黒褐色土ブロック (-1.5cm) 含む。しまり強。粘性あり。
 - 32 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-2.0cm) 多量。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。しまりあり。粘性あり。
 - 33 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 多量。ロームブロック (-1.0cm) 含む。KP 粒子 (-0.3cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.5cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 34 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2cm) や中多量。ロームブロック (-0.5cm) 含む。KP 粒子 (-0.1cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 35 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.8cm) 少量。KP 粒子 (-0.1cm)・白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 36 暗褐色土 ローム粒子 (-0.8cm) 多量。KP 粒子 (-0.1cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 37 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2cm) 多量。ロームブロック (-0.8cm)・KP 粒子 (-0.2cm)・暗黒褐色土ブロック (-1.2cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 38 暗褐色土 ローム粒子～ブロック や中多量。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 39 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) や中多量。ロームブロック (-1.5cm)・KP 粒子～ブロック (-1.0cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 含む。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 40 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) や中多量。ロームブロック (-2.0cm) 含む。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 含む。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 41 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-1.0cm) 多量。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。暗黒褐色土ブロック (-1.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 42 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.5cm) や中多量。暗褐色土ブロック (-2.0cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。
 - 43 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.5cm) 含む。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。白色粒子散見。しまりや中弱。粘性あり。
 - 44 暗褐色土 ローム粒子～ブロック (-0.5cm) 多量。ロームブロック (-1.2cm) 含む。KP 粒子 (-0.2cm) 少量。白色粒子散見。しまりあり。粘性あり。

第30図 第15号竪穴建物跡実測図

→⑦(32層)、SP-B堆積土A群：〈交点①(1層)〉→②(9層)→③(10層)→④(11層)→〈交点⑥(14・15層)〉→〈交点⑤(16層)〉・(39・41層)→⑥(42層)→⑦(43・44層)である。最下層に⑦が堆積し、A群①～④、B群⑤～⑦が交互に堆積することが確認できる。本遺構は廃絶に際し、埋め戻された可能性が指摘できる。

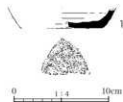
付属施設 北壁から北東隅部にかけてはテラス状、および、これに続くステップ状の部分の掘り残される。テラス状の部分の幅はテラス中央となる平面形の隅部(以下、隅部)で約0.3mから徐々に狭くなり端部では0.12m前後である。遺構確認面からの深さは隅部で0.425m、レベルは隅部52.98m、北壁側端部53.0m、東壁側端部53.07mである。東側端部とステップ状の部分には傾斜があるが、本来は平坦であったと判断できる。ステップ状の部分はテラス状の部分より0.1mほど床面に張り出す。幅0.2m、遺構確認面からの深さは壁際で0.4m、先端部で0.56mで、床面に向かい傾斜する。壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝は確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から34片153.95gが出土する。何れも小片である。出土位置の明らかな遺物は2片ある。何れも不掲載の小片である。1片5.14gは2層から出土する土師器甕体部片で胎土に金雲母を含む。1片16.28gは18層から出土する土師器甕は常総型の口縁部である。9世紀代であろう。

出土遺物 須恵器環1は8世紀第4四半期の益子産とみられる。

図示し得なかった遺物は、前述の層中から出土する土師器甕片2片のほか、土師器環5片41.27g、土師器甕16片62.3g、土師器甕(常総型)3片12.3g、土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)1片4.68g、須恵器環1片2.63g、粘土塊6片9.35gが出土する。土師器環は7世紀代の模倣環とみられウルシ処理を施す。橙色の器面1片、白色の器面4片である。本建物跡の時期の判別は難しいが、9世紀前半以降と捉えておきたい。

火処 確認されなかった。



第31図 第15号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7表 第15号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	(単位:cm)
					出土状況 残存状況
1 須恵器 環	口:一 底:[8.8] 高:(2.2)	ロクロ成形 益子産 内:底スス付着 有明動転用か 外:底部回転ヘラズリ	内外S/S/1 灰	白色粘土・黒色粘土 良	A区SI-15 底部1/6残存

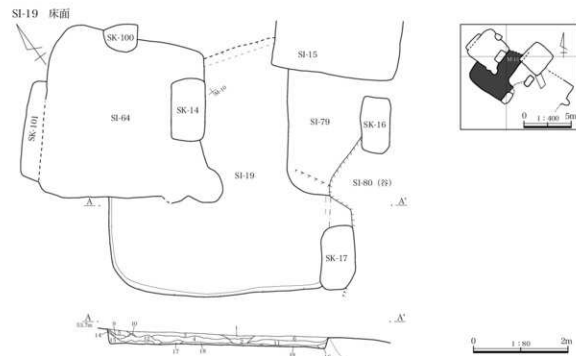
第19号竪穴建物跡(SI-19)(第32～34図 第8表 写真図版七)

位置 A区M・9・10に位置する。現状で東側の谷に向けた斜面地にある。重複関係 SI-64・79と重複する。本遺構が古い。平面形状・規模 方形状であるが、重複等で判然としない。壁の立ち上がりを確認できるSPAで一辺約4.7m、東西は現地調査の所見では5.0m前後である。SI-64との重複によりカマドは失われたと判断される。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。SPAに直交するラインではN36°Eである。

床面 建物跡西壁からSI-64カマド前付近までは鹿沼軽石層下の粘土層へ至る漸移層、これより以東は鹿沼軽石層下の粘土層を床面とする。南壁も同様である。床面のレベルは53.2m前後である。谷部側53.14m、反対側53.24mで、谷部に向けての傾斜がみられる。床面下の掘り込みは部分的で、鹿沼軽石層をそのまま床面とする割合が多い。

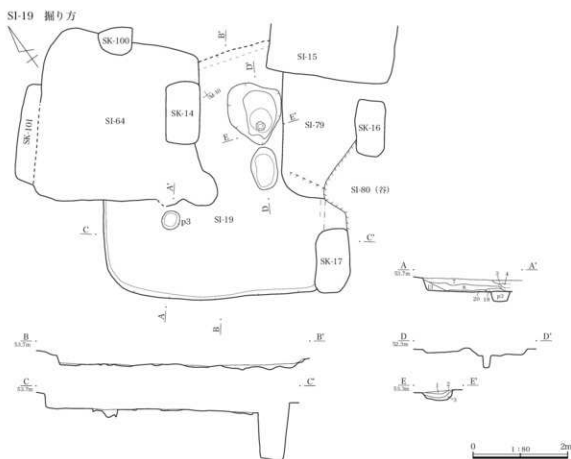
覆土 21層を確認した。1～20層は床面、21層は掘り方である。床面最下層20層(A群)はロームブロックと鹿沼軽石ブロックの混合層である。この後、微～少量の焼土や炭化物を含むB～F群、焼土や炭化物を含まない(A群)が堆積する。17～19層(F群)は鹿沼軽石・炭化物を含む層とローム層・焼土を含む層が交互に堆積する。13～16層は壁際の堆積層である。15・16層(E群)は焼土を含む。13・14層(D群)は鹿沼軽石を含み、焼土や炭化物は観察されない。9～12層(C群)は焼土と炭化物を含む。6～8層(B群)は、6層はローム粒子と焼土、7・8層は鹿沼軽石と炭化物を含む。堆積順は不明である。3～5層(A群)は鹿沼軽石を含む。ローム粒子と焼土(6・18層)、鹿沼軽石層と炭化物(7・8・17・19層)の層が認められる。F群の堆積順序からは西壁側から埋め戻された可能性を指摘できる。1・2層は後世の掘り込みの可能性がある。

掘り方の覆土は焼土を含む層と炭化物を含む層が交互に堆積する。

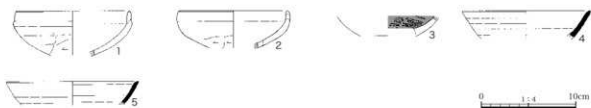


- SI-19
- 1 暗褐色土 ローム粒子微量、KP粒子(-0.2m)少量、白色粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子・KPブロック(-1.0m)微量、茶褐色土ブロック(-1.0m)含む、白色粒子・焼土粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.2m)微量、KPブロック(-1.0m)少量、茶褐色土ブロック(-0.5m)微量、黒褐色土ブロック(-0.5m)少量、白色粒子微量、しまりやや強、粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子・白色粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック(-1.0m)微量、KPブロック(-0.3m)含む、白色粒子少量、しまり強、粘性あり。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(-0.5m)・KP粒子・白色粒子・焼土粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 7 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)少量、KPブロック(-0.3m)含む、茶褐色土ブロック(-0.8m)微量、白色粒子含む、炭化物粒子少量、しまりやや強、粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)微量、KP粒子(-0.2m)含む、茶褐色土ブロック(-1.0m)・白色粒子・炭化物粒子少量、しまりやや強、粘性あり。
 - 9 暗褐色土 ローム粒子・KPブロック(-0.3m)・白色粒子少量、焼土粒子(-0.2m)・炭化物粒子微量、しまりやや強、粘性あり。
 - 10 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子・白色粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量、しまりやや強、粘性あり。
 - 11 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(-0.5m)微量、KP粒子(-0.2m)少量、白色粒子・炭化物粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 12 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(-0.6m)含む、KP粒子(-0.2m)少量、白色粒子・焼土粒子微量、炭化物粒子(-0.2m)少量、しまり強、粘性あり。
 - 13 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)微量、KP粒子(-0.2m)・KPブロック(-1.2m)少量、茶褐色土ブロック(-0.5m)・白色粒子微量、しまりやや強、粘性あり。
 - 14 暗褐色土 ローム粒子微量、ロームブロック(-0.8m)含む、KPブロック(-0.5m)少量、白色粒子・炭化物粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 15 暗褐色土 ローム粒子含む、ロームブロック(-0.8m)少量、KP粒子(-0.2m)・KPブロック(-4.0m)含む、白色粒子微量、焼土ブロック(-0.3m)少量、炭化物粒子微量、しまり強、粘性あり。
 - 16 暗褐色土 ローム粒子微量、KP粒子(-0.2m)少量、白色粒子・焼土ブロック(-0.5m)微量、しまり強、粘性あり。
 - 17 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)少量、KPブロック(-0.3m)含む、茶褐色土ブロック(-0.8m)微量、白色粒子含む、炭化物粒子少量、しまりやや強、粘性あり。
 - 18 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)・ロームブロック(-0.3m)少量、KP粒子・茶褐色土ブロック(-0.5m)微量、白色粒子・焼土粒子(-0.2m)少量、しまり強、粘性あり。
 - 19 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(-0.8m)微量、KP粒子(-1.0m)少量、白色粒子・炭化物ブロック(-0.5m)微量、しまり強、粘性あり。
 - 20 暗茶褐色土 ローム粒子微量、ロームブロック(-0.8m)少量、KP粒子微量、KPブロック(-0.8m)少量、白色粒子微量、しまりやや強、粘性あり。

第32図 第19号竪穴建物跡実測図(1)



第33図 第19号竪穴建物跡実測図(2)



第34図 第19号竪穴建物跡出土物実測図

第8表 第19号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 品名	寸法	特徴	色調	粘土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 鉢	口: [12.6] 底: [—] 高: [4.7]	体中〜ドヘラケズリ 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内〜外: [1] ウルシ仕上げ	内外:10YR6/3 にぶ い黄緑	白色粘土・砂粒・透 明ガラス質粒子微量 良	A区 SI-19 口〜体部 1/8 残 存
2 土師器 鉢	口: [12.0] 底: [5.2] 高: [3.9]	体ドヘラミダキ 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ(ヨコ)→体上ナデ→口ヨコナデ 内〜外: [1] ウルシ仕上げ	内外:10YR7/3 にぶ い黄緑	白色粘土・黒色ガラ ス質粒子微量 良	A区 SI-19 口縁部 1/6 残存
3 土師器 鉢	口: [10.8] 底: [6.0] 高: [2.2]	ロクロ使用 内面黒色処理 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ(ヨコ)→体上ナデ→口ヨコナデ 内〜外: [1] ウルシ仕上げ	内: N1.5/0 黒 外: 10YR5/3 にぶい 黄緑	白色粘土少量・砂粒・ 透明ガラス質粒子微 量 良	A区 SI-19 体部 1/4 残存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 残存状況
4 須恵器 坏	口：(13.6) 底：一 高：(3.0)	ロクロ成形 益子産?	内外 2.5Y6/2 灰黄	白色胎子・黒色胎子 やや良	A区 SI-19.5B 口縁部 1/6 残存
5 須恵器 坏	口：(14.0) 底：一 高：(2.5)	ロクロ成形 益子産	内外 2.5Y6/2 灰黄	白色胎子・黒色胎子・ 砂雜 やや良	SI-19 口縁部 1/7 残存

柱穴 確認し得なかった。掘り方面に図示した p1・3 の可能性が考えられるが判然としない。床面からの深さ・底面のレベルは p1:0.2m・53.04m、p3:0.54m・52.74m である。

壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から 24 片 302.84g が出土する。何れも小片である。層位やレベルの明らかな遺物はない。出土量は少ないが 7 世紀前葉から 9 世紀前半の遺物が混在する。掘り方からは土師器甕体部 1 片 35.43g が出土する。

出土遺物 土師器坏 1・2 は 7 世前葉・中葉、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）3 は 9 世紀中葉、須恵器坏 4・5 は 9 世紀前後・9 世紀前半とみられる。

図示し得なかった遺物は、土師器坏 5 片 96.39g、土師器甕 10 片 57.91g、土師器甕（常総型）3 片 18.17g、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）2 片 8.01g、須恵器 1 片 35.61g、瓦 1 片 49.55g、陶器 1 片 1.77g である。土師器坏は 1 と似た口縁部片、模倣口縁部 2 片、内面ヨコナデ後ウシ仕上げの体・底部である。何れも 7 世紀代と考えられる。土師器甕は緻密な胎土の破片が 3 片あり鉢類の可能性もあろう。常総型と判断した破片は口縁端部を積み上げる小片と金雲母を含む体部 2 片である。土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）片は内面にヨコ方向にミガキを施し黒色処理を施す。須恵器坏は回転糸切りの底部である。推定される底径は 6.0～6.4 cm。産地は不明であるが三養産の可能性が考えられる。瓦は焼成不良の男瓦あるいは女瓦の端部小片である。布目痕が観察される。陶器は近世以降の灰軸の微細片である。図示し得なかった出土遺物も、掲載遺物と同様、7 世紀代・9 世紀代と判断される。陶器片が近世以降とみられるため、本建物跡の時期を推察するのは難しいが、9 世紀中葉と判断した SI-64 に先行すること、想定されるカマドの位置から 7 世紀代である可能性を指摘しておきたい。

火処 確認し得なかった。出土遺物の時期、また、SI-8・58 などの覆土の堆積状況から、床面覆土中への焼土や炭化物はカマドに由来する可能性が指摘できることから、カマドが設えられていた可能性が高いと考えられる。想定されるカマドの位置は、建物跡西側に焼土や炭化物の堆積がみられることから、SI-64 カマドに相当する東壁南寄りより、SI-8・58 同様の北カマドの可能性が合理的と判断される。カマドの埋没については、床面 F 群の堆積順序から西壁（カマド）側から埋め戻された可能性が指摘でき、カマド→床面の順に埋め戻しが行われたと判断しておきたい。床面直上覆土の焼土や炭化物が少量であることは、大方が先に埋め戻されたカマドに使われた可能性が考慮されよう。

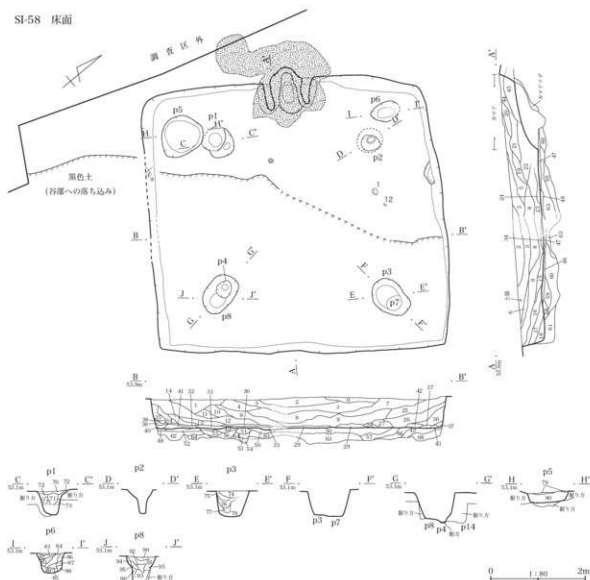
遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。

第 58 号竪穴建物跡（SI-58）（第 35～39・80 図 第 9・18 表 写真版一〇・一一・一九・二八）

位置 A 区 M・8・9 に位置する。現状で東に向けた斜面地に立地する。重複関係 重複する遺構はない。

平面形状・規模 方形で、カマドは北西辺に設けられる。推定される地形的条件から、カマドの設置は北辺を意図した可能性が考えられるため、方位の記載はカマドのある辺を北とする。南壁は埋没谷堆積層中にありサブトレッチの立ち上がりで確認した。サブトレッチを設定したセクションラインでの規模は、東西 6.29m・南北 5.6m、深さは南側 0.5m～北側 0.7m であり、確認面の傾斜による相違は見られる。カマド付

SI-58 床面



SI-58

- 1 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)少量, 茶褐色土ブロック(-1.0 cm)・黒褐色土ブロック(-0.8 cm)含む, 白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)少量, 黒褐色土ブロック(-5.0 cm)・白色粒子含む, 白色粘土ブロック(-0.8 cm)・焼土粒子(-0.1 cm)・炭化物粒子(-0.1 cm) 散見, しまりやや強, 粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.3 cm)含む, KP粒子(-0.2 cm)少量, 茶褐色土ブロック(-0.8 cm)含む, 黒褐色土ブロック(-1.0 cm)少量, 白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり。
- 4 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.2 cm)・白色粒子少量, 白色粘土ブロック(-0.5 cm)・炭化物ブロック(-0.3 cm) 散見, しまりあり, 粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.2 cm)少量, 茶褐色土ブロック(-1.0 cm) 散見, 白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)少量, 暗褐色土ブロック(-0.5 cm) 散見, 白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 7 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)・白色粒子少量, 褐色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 8 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.2 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量, 黒褐色土ブロック(-0.8 cm)含む, 白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり。
- 9 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)少量, 黒褐色土ブロック(-0.5 cm) 散見, 白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 10 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・黒褐色土ブロック(-0.5 cm)・白色粒子・白色粘土ブロック(-0.3 cm)少量, しまりあり, 粘性あり。
- 11 暗褐色土 ロームブロック(-0.3 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり。
- 12 暗褐色土 ローム粒子(-0.2 cm)多量, ロームブロック(-0.5 cm)少量, KP粒子(-0.1 cm)含む, 白色粘土粒子(-0.1 cm) 散見, 白色粘土ブロック(-0.3 cm)少量, しまりあり, 粘性あり。
- 13 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.2 cm)含む, 白色粒子少量, 白色粘土粒子(-0.2 cm) 散見, しまりあり, 粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子・白色粘土ブロック(-0.3 cm)少量, しまりやや強, 粘性あり。
- 15 暗褐色土 ローム粒子(-0.2 cm)含む, ロームブロック(-0.6 cm) 散見, KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子少量, 白色粘土ブロック(-0.3 cm) 散見, しまりやや強, 粘性あり。
- 16 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)含む, KP粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量, 黒褐色土ブロック(-0.8 cm) 散見, 白色粒子少量, 褐色粒子(-0.1 cm) 散見, しまりやや強, 粘性あり。
- 17 暗褐色土 ロームブロック(-0.3 cm)含む, KPブロック(-0.3 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)・白色粒子少量, 褐色粒子 散見, しまりやや強, 粘性あり, 層厚より薄い, ローム粒子(-0.2 cm)・KP粒子(-0.1 cm)・白色粒子・白色粘土ブロック(-0.5 cm)少量, しまりあり, 粘性あり。
- 18 暗褐色土 ローム粒子(-0.1 cm)やや多量, KP粒子(-0.1 cm)・茶褐色土ブロック(-1.0 cm)少量, 白色粘土粒子, 炭化物粒子(-0.2 cm) 散見, しまりやや強, 粘性あり。
- 20 暗褐色土 ローム粒子(-0.2 cm)少量, KPブロック(-0.3 cm)含む, 2層ブロック部分(-0.3 cm), 白色粒子少量, 白色粘土ブロック(-0.5 cm) 散見, しまりやや強, 粘性あり。

第35図 第58号聚穴建物跡実測図(1)

第3章 確認された遺構と遺物

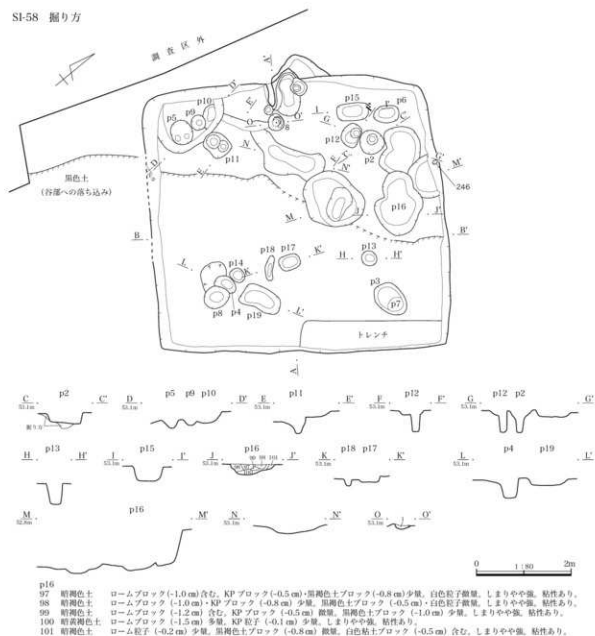
21 暗褐色土	ローム粒子 (0.2cm)・KP 粒子 (0.2cm) 含む。白色粒子・白色粘土粒子→ブロック (0.5cm) 少量。しりや中強。粘性あり。
22 暗褐色土	ローム粒子 (0.2cm)・白色粘土粒→ブロック (0.5cm) 含む。KP 粒子 (0.2cm)・白色粒子少量。棕色粘土ブロック (0.8cm) 少量。
23 暗褐色土	ローム粒子 (0.1cm) 含む。ロームブロック (0.3cm)・KP 粒子 (0.1m) 微量。茶褐色土ブロック (1.5cm) 少量。黒褐色土ブロック (0.8cm) 微量。白色粒子少量。白色粘土土ブロック (0.3cm)・炭化物粒子微量。しりや中強。粘性あり。
24 暗褐色土	ローム粒子 (0.1cm) 含む。ロームブロック (0.3cm) 少量。KP 粒子 (0.1m) 微量。茶褐色土ブロック (1.0cm)・黒褐色土ブロック (1.0cm) 少量。白色粒子微量。白色粘土土ブロック (0.5cm) 少量。しりや中強。粘性中強。
25 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 含む。ロームブロック (0.3cm) 微量。KP 粒子 (0.2cm) 少量。黒褐色土ブロック (1.2cm)・白色粒子含む。棕色粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
26 暗褐色土	ローム粒子 (0.1cm) 含む。ロームブロック (0.5cm)・KP 粒子 (0.2cm) 少量。黒褐色土ブロック (0.8cm) 含む。白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
27 暗褐色土	ローム粒子 (0.2cm) 多量。ロームブロック (0.5cm) 少量。KP 粒子 (0.1m) 微量。白色粒子少量。下層に白色粘土ブロック (0.5cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
28 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・ロームブロック (1.0cm) 少量。KP 粒子 (0.1m) 微量。白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
29 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・ロームブロック (1.0cm) 少量。KP 粒子・白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
30 暗褐色土	ローム粒子 (0.2cm) 含む。KP 粒子 (0.1cm)・白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
31 暗茶褐色土	ローム粒子 (0.2cm) 含む。KP 粒子 (0.1cm)・白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
32 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (1.0cm) 多量。黒褐色土ブロック (1.0cm) 微量。白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
33 暗褐色土	32層のロームブロック (0.8cm) 少量。しりや中強。粘性あり。
34 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 少量。KP 粒子 (0.1cm) 微量。黒褐色土ブロック (1.0cm) 含む。白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
35 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・KP 粒子 (0.2cm) 微量。茶褐色土ブロック (2.0cm) 含む。黒褐色土ブロック (0.8cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
36 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・KP 粒子 (0.1m) 少量。茶褐色土ブロック (1.5cm)・白色粒子含む。棕色粒子 (0.1cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
37 暗茶褐色土	ロームブロック (0.3cm) 含む。KP 粒子 (0.1m)・黒褐色土ブロック (1.2cm)・白色粒子 (0.1m) 少量。しりや中強。粘性あり。
38 35層の茶褐色土ブロックのない層	
39 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・KP 粒子 (0.1m)・白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
40 暗褐色土	38層に白色粘土土ブロック (0.5cm) 微量。
41 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 含む。KP 粒子 (0.1m)・白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
42 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 含む。ロームブロック (0.5cm) 微量。KP 粒子少量。黒褐色土ブロック (0.8cm) 微量。白色粒子少量。白色粘土土ブロック (0.5cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
43 37層にロームブロック (0.5cm) 多量。	
44 暗褐色土	21層に茶褐色土。茶褐色土ブロック (1.0m)・炭化物ブロック (0.5cm) 少量。しりや中強。粘性あり。
45 暗褐色土	44層の白色粘土土ブロック (0.6cm) 多量。
46 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (1.0m) 含む。KP 粒子 (0.2m)・白色粒子・棕色土ブロック (0.5m) 微量。ロームブロックは31層よりは現状。しりや中強あり。粘性あり。
47 暗褐色土	黒褐色土ブロック (1.2cm) 含む。
48 暗褐色土	ローム粒子 (0.2cm) 含む。KP 粒子 (0.2cm) 少量。暗茶褐色土ブロック (1.5m) 含む。黒褐色土ブロック (0.5m)・棕色粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
49 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (3.0m) 含む。KP 粒子→ブロック (0.3m) 少量。黒褐色土ブロック (1.5m) 含む。白色粒子少量。棕色粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
50 暗茶褐色土	ローム粒子 (0.1m) 含む。KP 粒子 (0.2cm)・KP 粒子 (0.3cm) 少量。黒褐色土ブロック (1.0cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
51 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 含む。KP 粒子 (0.1m) 微量。白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
52 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 少量。KP 粒子 (0.1m)・白色粒子微量。炭化物粒子 (0.1m) 少量。しりや中強。粘性あり。
53 暗褐色土	51層に茶褐色土ブロック (1.5m) 含む。しりや中強。粘性あり。
54 暗褐色土	53層の黒褐色土ブロック (1.5cm) 多量。黒褐色土ブロック (1.5cm) 5/4。
55 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 微量。茶褐色土ブロック (2.0cm)・黒褐色土ブロック (2.0cm) 少量。白色粒子少量。しりや中強。粘性あり。
56 暗褐色土	22層の黒褐色土ブロック・茶褐色土ブロック (7/3)。
57 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (1.0m)・KP 粒子 (0.2m) 少量。暗茶褐色土ブロック (1.2m)・黒褐色土ブロック (1.2m) 5/5。棕色土ブロック (0.3cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
58 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 少量。KP 粒子 (0.1m)・棕色粒子 (0.1m)・炭化物粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
59 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (1.0m) 含む。ロームブロック (1.5cm) 少量。KP 粒子 (0.2cm) 微量。黒褐色土ブロック (0.8cm) 少量。しりや中強。粘性あり。
60 暗茶褐色土	ローム粒子→ブロック (5.0m) 含む。KP 粒子 (0.2m) 少量。棕色粒子 (0.2m) 微量。しりや中強。粘性あり。
61 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 含む。ロームブロック (0.8cm) 少量。KP 粒子 (0.1m) 微量。棕色粒子 (0.2m) 少量。しりや中強。粘性あり。6層の方角明。62層に在る。
62 暗褐色土	48層の暗茶褐色土ブロックを含まない層。
63 暗茶褐色土	暗茶褐色土ブロック (1.5cm)・黒褐色土ブロック (1.5cm) 6/4。
64 暗褐色土	63層に黒褐色土ブロック (1.5cm) 含む。棕色土ブロック (0.5m) 微量。17層に対応。
65 暗茶褐色土	ローム粒子→ブロック (1.2cm) 含む。KP 粒子 (0.1m)・棕色粒子 (0.2m) 少量。炭化物粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
66 暗茶褐色土	ローム粒子→ブロック (1.5cm) 含む。KP 粒子→ブロック (0.5m) 微量。黒褐色土ブロック (0.8cm) 少量。棕色粒子 (0.2cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
67 暗茶褐色土	ローム粒子→ブロック (1.5m) 含む。KP 粒子 (0.1m) 少量。棕色土ブロック (0.3m)・炭化物粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
68 66層に在るが、ロームブロック (3.0m) がより主体的。	
69 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (1.2cm) 含む。KP 粒子 (0.2cm) 微量。しりや中強。粘性あり。
70 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (0.8cm)・白色粘土土ブロック (1.0cm) 少量。しりや中強。粘性あり。
71 暗褐色土	ローム粒子 (0.5cm) 含む。白色粘土土ブロック (0.5m) 少量。しりや中強。粘性あり。
72 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (1.5cm) 含む。しりや中強。粘性あり。
73 暗褐色土	ロームブロック (0.3cm) 含む。しりや中強。粘性あり。
74 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・KP 粒子 (0.1m) 微量。上層に黒褐色土ブロック (0.5m) 少量。床面か。白色粒子・棕色粒子微量。上面 (深さ 2.0cmまで) しりや中強。粘性あり。
75 黒褐色土	ローム粒子 (0.1m)・KP 粒子 (0.1m)・棕色粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
76 黒褐色土	75層+ロームブロック (1.0m) 少量。上から流れ込むように堆積。75層より。粘性あり。
77 黒褐色土	75層に在る。ロームブロック (0.3m) まで。しりや中強。粘性あり。
78 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 微量。KP 粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
79 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 含む。ロームブロック (0.3cm) 少量。
80 暗褐色土	ロームブロック (10.0m) 多量。
81 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (0.5cm) 含む。KP 粒子 (0.2cm) 少量。白色粒子・白色粘土粒子 (0.2cm)・焼土粒子 (0.1cm)・炭化物粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
82 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・ロームブロック (0.5m)・KP 粒子 (0.2cm) 少量。白色粒子・焼土粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
83 暗褐色土	焼土粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
84 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・KP 粒子 (0.1m) 少量。白色粒子微量。白色粘土粒→ブロック (0.5cm) 含む。焼土粒子 (0.1m)・炭化物粒子 (0.3m) 少量。しりや中強。粘性あり。
85 暗褐色土	84層の白色粘土を含まない層。しりや中強。粘性あり。
86 暗褐色土	ローム粒子含む。ロームブロック (1.0m) 少量。KP 粒子 (0.1m)・白色粒子・白色粘土粒子 (0.1m)・炭化物粒子 (0.1m)・焼土粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
87 暗褐色土	ロームブロック (0.3cm) 少量。KP 粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
88 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・ロームブロック (1.0m) 少量。KP 粒子 (0.1m)・白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
89 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (5.0m) 多量。しりや中強。粘性あり。
90 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・KP 粒子 (0.2cm)・白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
91 黒褐色土	ローム粒子→ブロック (0.3cm) 少量。KP 粒子 (0.1m) 微量。茶褐色土ブロック (1.0m) 含む。白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
92 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m) 微量。茶褐色土ブロック (1.0m) 少量。白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
93 暗褐色土	81層より暗茶褐色土ブロック少量。しりや中強。粘性あり。
94 暗褐色土	ローム粒子→ブロック (5.0m) 含む。KP 粒子 (0.1m) 微量。しりや中強。粘性あり。
95 暗褐色土	ローム粒子 (0.1m)・白色粒子微量。しりや中強。粘性あり。
96 暗褐色土	ローム粒子 (0.1cm) 微量。しりや中強。粘性あり。

第36図 第58号竪穴建物跡実測図(2)

近はカマドの廃絶の際の被覆層の厚さにより約0.8mである。主軸 N-33°-Wである。

床面 鹿沼軽石層下の粘土層（以下ローム層）および埋没谷堆積層を床面とする。東辺中央部付近と西辺北西隅部寄りを結ぶライン以南は谷部堆積層の床面となる。床面覆土と谷部堆積層の見分けが難しく、北壁以外はサブトレンチでの立ち上がりで確認した。柱穴の配置などから3時期以上が推定でき、廃絶時をa期、これ以前をb・c期として報告する。後述する覆土や柱穴の堆積状況などから、廃絶時の床面はa・b期の床面と判断される。c期の柱穴が床面下で確認され、掘り方埋土にc期の床面の痕跡を確認し得なかったため、c期の床面を作り直してa・b期の床面が作出されたと考えられる。掘り方は、谷部の黒色土と掘り方埋土の特徴が似ており、南西部を掘り過ぎている。廃絶時の床面レベルは52.9m前後、カマド前付近から東壁付近は約53.0mである。

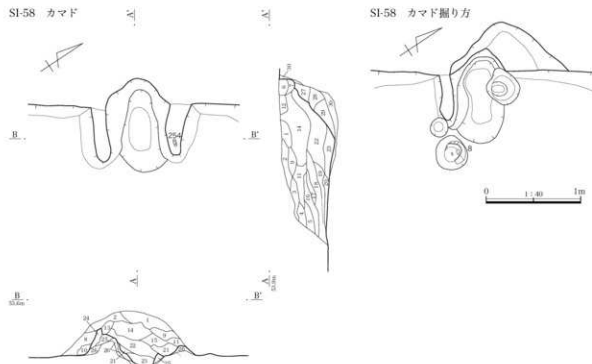
SI-58 掘り方



第37図 第58号竪穴建物跡実測図(3)

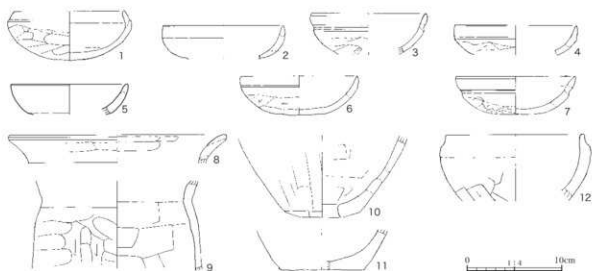
第3章 確認された遺構と遺物

覆土 101層を確認した。1～45層は床面、46～69層は掘り方、70～101層は柱穴及び掘り込みの覆土である。床面は、まず、建物壁際の37～43層が堆積する。周溝関連の堆積層と判断されるが、周溝付近の掘り方土の可能性のある37・40～43層(A群)、周溝とみられる38・39層(B群)、黒色土・ロームを含む34～36層(C群)に大別できる。床面上にはロームを含む25～33層(D群)が床面中央部付近



- SI-58 カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)・KP粒子(-0.1m)・白色粒子微塵。白色粘土粒子-ヘブロック(-1.5cm)多量。焼土ブロック(-0.3cm)・炭化物粒子(-0.1m)少量。しまりや中強。粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)・KP粒子(-0.1m)・白色粒子少量。白色粘土ブロック(-0.3cm)やや多量。白色粘土ブロック(-1.0cm)少量。焼土ブロック(-0.4cm)含む。しまり強。粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック(-0.3cm)少量。KP粒子(-0.1m)・白色粒子微塵。白色粘土ブロック(-0.5cm)多量。焼土粒子(-0.2cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
 - 4 暗褐色土 3層+白色粘土ブロック(-1.5cm)含む。焼土ブロック(-0.5cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
 - 5 暗褐色土 3層+白色粘土ブロック(-1.5cm)含む。焼土ブロック(-0.5cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
 - 6 暗褐色土 白色粒子微塵。白色粘土ブロック(-0.5cm)やや多量。焼土ブロック(-0.3cm)含む。しまりあり。粘性あり。
 - 7 暗褐色土 白色粒子微塵。白色粘土ブロック(-0.5cm)含む。焼土ブロック(-0.5cm)やや多量。焼土ブロック(-1.0cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)・KP粒子(-0.1m)・白色粒子微塵。白色粘土ブロック(-0.5cm)含む。焼土粒子(-0.1m)少量。しまり強。粘性あり。
 - 9 暗褐色土 8層に対応。焼土ブロック(-0.8cm)含む。しまりあり。粘性あり。
 - 10 暗褐色土 8層+焼土少量。白色粘土やや多量。しまりあり。
 - 11 暗褐色土 10層に対応。ローム粒子(-0.1m)少量。KP粒子(-0.1m)・白色粒子微塵。白色粘土粒子(-0.2cm)やや多量。焼土ブロック(-0.5cm)少量。しまりや中強。粘性あり。
 - 12 暗褐色土 白色粘土ブロック(-0.5cm)多量。焼土粒子(-0.2cm)少量。炭化物粒子(-0.2cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 13 26層に近。天井部に続く部分。焼したカマド材の埋積か。
 - 14 暗褐色土 白色粒子微塵。白色粘土粒子-ヘブロック(-2.0cm)主体。焼土ブロック(-0.8cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 15 暗褐色土 白色粘土粒子-ヘブロック(-0.4cm)多量。焼土ブロック(-0.3cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 16 暗褐色土 白色粘土粒子-ヘブロック(-1.0cm)主体。焼土ブロック(-0.5cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
 - 17 暗褐色土 灰色粘土ブロック(-1.0cm)主体。白色粘土ブロック(-1.0cm)少量。焼土粒子(-0.2cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
 - 18 暗褐色土 14層と同層。
 - 19 暗褐色土 ロームブロック(-1.0cm)含む。白色粘土ブロック(-0.3cm)少量。焼土粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.1m)微塵。しまりあり。粘性あり。
 - 20 暗褐色土 ロームブロック(-1.2cm)少量。白色粘土ブロック(-0.3cm)微塵。焼土粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.1m)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 21 暗褐色土 ロームブロック(-0.5cm)含む。ロームブロック(-1.0m)少量。KP粒子(-0.2cm)微塵。白色粘土粒子-ヘブロック(-1.0cm)含む。焼土粒子(-0.1m)・炭化物粒子(-0.2cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 22 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)・KP粒子(-0.1m)・白色粒子微塵。焼土ブロック(-0.5cm)少量。白色粘土粒子-ヘブロック(-1.0cm)含む。しまりあり。粘性あり。
 - 23 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)・ロームブロック(-1.0m)〔2層のロームと同じ〕少量。白色粒子微塵。白色粘土ブロック(-0.5cm)含む。炭化物粒子(-0.1m)微塵。焼土粒子(-0.2cm)含む。しまりや中強。粘性あり。
 - 24 暗褐色土 ツデをくぐるカマド材積層土。白色粘土ブロック(-1.0cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 25 暗褐色土 ローム。ツデ。しまり強。粘性あり。
 - 26 暗褐色土 ツデをくぐるカマド材積層土。白色粘土ブロック(-1.0cm)少量。しまり強。粘性あり。
 - 27 暗褐色土 ロームブロック(-2.0cm)微塵。灰色土ブロック(-1.0cm)少量。白色粘土ブロック(-0.5cm)含む。焼土ブロック(-0.5cm)少量。炭化物ブロック(-1.0cm)含む。しまりあり。粘性あり。
 - 28 暗褐色土 ローム粒子-ブロック(-0.5m)微塵。灰色土ブロック(-1.0m)含む。白色粘土粒子-ブロック(-1.0m)含む。赤色化した白色粘土ブロック(-1.0m)・焼土ブロック(-0.3cm)少量。しまりあり。粘性あり。
 - 29 暗褐色土 ロームブロック(狭)・(-1.0m)少量。KP粒子(-0.1m)微塵。白色粘土ブロック(-0.5cm)少量。焼土ブロック(-0.5cm)やや多量。しまりや中強。粘性あり。
 - 30 暗褐色土 ローム粒子-ヘブロック(-1.2cm)多量。上面中心に白色粘土ブロック(-0.8cm)含む。黒溝付のせい・しまり弱。粘性あり。

第38図 第58号竪穴建物跡(カマド)実測図



第39図 第58号竪穴建物跡出土遺物実測図

第9表 第58号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 地成	出土状況 現存状況
1 土師器 底一 高:(5.8)	口:11.6 底一 高:(5.8)	内:ヨコナデ 外:体ナデ→体上以外ヘラケズリ(ヨコ)→口ヨコナデ	内外:7.5YR7/4 にぶ い橙	白色粒子・黒色粒子 含む	A区SI-58 No.2 覆土 1/3欠損
2 土師器 底一 高:(3.5)	口:[12.8] 底一 高:(3.5)	内外:磨減面ヨコヨコナデ ウルシ仕上げ 4・6同様の仕上げか	内外:10YR8/3 浅黄 橙	白色粒子・黒色粒子 含む	A区SI-58,船床 下 口縁部1/4残存
3 土師器 底一 高:(4.3)	口:[12.2] 底一 高:(4.3)	立ち上がり丸味強 小形 内:ヨコナデ 外:体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内→外(口) ウルシ仕上げ	内外:5YR6/6 橙	白色粒子・灰白色粒 子・黒色粒子含む	A区SI-58 口一底部1/4残 存
4 土師器 底一 高:(3.1)	口:[13.0] 底一 高:(3.1)	立ち上がり丸味強 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内→外(体上) ウルシ仕上げ	別れ口:10YR8/3 浅 黄橙 内:10YR5/3 にぶ い黄橙 外:10YR6/3 にぶ い黄橙	白色粒子・黒色粒子 含む	A区SI-58 口縁部1/3残存
5 土師器 底一 高:(3.2)	口:[12.4] 底一 高:(3.2)	粗製土器か 磨減面強 立ち上がり丸味 深口 ウルシ仕上げ 内:磨減 外:磨減 体下ヘラケズリ	内外:10YR8/3 浅黄 橙	白色粒子・黒色粒子 含む	A区SI-58 口縁部1/8残存
6 土師器 底一 高:4.1	口:[12.4] 底一 高:4.1	立ち上がり丸味強 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ 口ヨコナデ 内→外(口) ウルシ仕上げ	内外:10YR8/3 浅黄 橙	白色粒子・黒色粒子 含む	A区SI-58 1/4残存
7 土師器 底一 高:(4.0)	口:[12.6] 底一 高:(4.0)	内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ	内外:5YR6/6 橙	白色粒子・灰白色粒 子・黒色粒子含む	A区SI-58 1/4残存
8 土師器 底一 高:(3.0)	口:[22.8] 底一 高:(3.0)	内外:ヘラケズリ→ヨコナデ ヘラケズリ残る	別れ口:2.5YR4/6 赤 褐 内外:5YR3/2 暗赤 やう黄	白色粒子・金雲母 粒子・礫(φ1~ 3mm)多量 黒色ガラス質粒子少 量	A区SI-58 カマ 下2 口縁部1/2残存
9 土師器 底一 高:(9.2)	口:[17.4] 底一 高:(9.2)	内:ヘラナデ(ヨコ) 外:ヘラケズリ(タテ)→指ナデか→口ヨコナデ 内外:部分的にヌ付着	内外:7.5YR6/6 橙	白色粒子・砂粒多量 黒色ガラス質粒子少 量	A区SI-58 底部1/4残存
10 土師器 底一 高:(8.7)	口: 底:[4.6] 高:(8.7)	内:ヘラケズリ(ヨコ)→ナデか 外:ヘラケズリ(体下ヨコ→体タテ)	内:N1.5/0 黒 外:7.5YR7/4 にぶ い橙	白色粒子・砂粒(φ1 ~2mm)多量, 黒色 ガラス質粒子少量	A区SI-58 底一底部3/4残 存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 図種	寸法	特徴	色調	粘土 構成	出土状況 残存状況
11 土師器 甕	口:一 底:一 高:44.3	内:発色剥離 外:滑潤	内:7.5YR7/6 橙 外:10YR7/3 に近い 黄橙	白色粒子少量、砂粒 多量、透明ガラス質 粒子微量 珪	A区SI-58 底部1/2残存
12 土師器 鉢	口:14.6 底:一 高:17.0	内:滑潤 ヘラナデ ヨコナデの境不明瞭 外:ヘラケズリ 体上ヨコ 体中ナメー口ヨコナデ 状態で整形したとみられる	内:7.5YR6/4 に近い 橙 外:10YR7/4 に近い 黄橙	白色粒子少量、砂粒 多量、透明ガラス質 粒子微量 珪	A区SI-58 口縁部1/6残存

を中心に堆積し、順次、ローム・白色粘土を含む10～24層（F群）、茶褐色土を含む7～9層（G群）が堆積する。カマドを被覆する44・45層（E群）と実質的な床面最下層D群との層序は判然としなが、同時期のSI-8同様、カマド被覆後に床面が埋没する可能性があろう。最上層である黒色土を含む2～6層（H群）は床面埋没後の堆積層、1層は近・現代の堆積層の可能性がある。

掘り方は、37・40～43層（床面A群）、46～49層（貼床）、50～52層（貼床のない部分の最上層であり床面作出層）、55～69層（掘り方埋土）である。53・54層は床面作出土に封じられたピット状の土層であり、ローム・黒色土・茶褐色土のブロックを含む。柱穴の項目で後述するc期に関わる土層の可能性が考えられる。層序から確実に53・54層以前の堆積である65・69層も同様にc期に関わる可能性があろう。

柱穴は、柱穴状の掘り込みを含めp1～19を付した。掘り方に関わる掘り込みには発番していない。70～73層はp1（a期）、74～78層はp3（a期）、79～80層はp5（b期）、81～89層はp6（b期）、90～96層はp8（b期）、97～101層はp16（掘り方掘り込み）の堆積土である。p1は71層が柱痕あるいは抜き穴、72・73層は掘り方とみられる。71層以下の土層は掘り込みが狭く確認し得なかった。p3は74～77層が柱痕あるいは抜き穴、78層が掘り方、p5は79層が床面作出土、80層が掘り方埋土とみられる。p6は81層が床面作出土、82～85層が柱痕あるいは抜き穴、89層が掘り方埋土、86～88層は掘り方埋土として調査したが地山の誤認であったかもしれない。p8は90～92層が柱痕あるいは抜き穴、94～96層は掘り方埋土、93層は掘り込みが狭く、判然としない。p16は掘り方埋土とみられる97～101層を確認した。

柱穴 前述のとおりp1～19を付した。p1～4はa期、p5～10はb期、p11～14はc期の柱穴、p15～19は掘り方と考えられる。p1～8は床面上に確認できたため、第35図に図示した。谷部の黒色土を床面とする建物跡南半部は柱穴のプランや掘り込みが明確でなく、p3・7は2穴の重複が不明瞭である。p6の最上層はロームを含む81層で床面作出土と考えられる。床面覆土A群については周溝付近の掘り方埋土の可能性を指摘したが、a・b期は基本的に同じ床面を使い、柱穴や周溝などが掘り直されたと考えられる。p11はp1の覆土を除去する過程で確認したため第37図に図示したが、c期の柱穴は床面下に確認される。各柱穴の底面レベル・現状の床面からの深さは以下のとおりである。p1:52.44m・50.0cm、p2:52.48m・50.0cm、p3:52.48m・52.5cm、p4:52.295m・55.0cm、p5:52.57m・32.0cm、p6:52.757m・32.0cm、p7:52.4m・38.0cm、p8:52.33m・57.0cm、p9:52.665m・30.0cm、p10:52.64m・24.0cm、p11:52.46m・46.0cm、p12:52.49m・48.0cm、p13:52.18m・75.0cm、p14:52.27m・63.0cmである。a期の深さは50.0～55.0cm、b期の深さは30.0～57cm、c期の深さは46.0～75.0cmである。各時期で斉一性はないが、大まかな傾向は読み取れよう。柱穴間の距離は、a期では、p1-2:3.3m、p2-3:3.3m、p3-4:3.35m、p4-1:3.15m、b期では、p5-6:4.2～4.4m、p9-6:3.9m、p10-6:3.7m、p6-7:4.0m、p7-8:3.9m、p8-5:3.4～3.45m、p8-9:3.9m、p8-10:3.9mである。a期は3.3m、b期は3.9m、c期は2.8mである。厳密ではないが、東西に長い平面形に即した柱間といえる。b期の北東柱穴については、p5・9・10の3穴に可能性があるが、柱間

や床面上の位置からは p9 の可能性が高い。

壁溝 明確に確認し得なかった。床面覆土 A 群 (37・40～43 層) が掘り方埋土であれば、堆積状況から 37・40 層に壁溝の可能性を指摘できよう。37・40 層上に堆積する 38・39・36 層の下面が僅かに凹状であることに留意し、37・40 層に b 期、36・38・39 層に a 期の壁溝である可能性を考えておきたい。

貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から 8200.46g が出土する。土師器環 1 はほぼ床面、粘土塊 12 は床面より約 10.0cm 上位から出土する。土師器環 2 は覆土中の破片と掘り方の破片とが接合したが、現地調査の際、床面を逸した部分があるため、接合関係については不明瞭である。

出土遺物 土師器環 3 は小片であり復元した大きくなるが、やや小形である可能性が高い。不掲載の土師器環は 96 片が出土する。胎土が白色でウルシ仕上げ (a) を施す破片が 78 片 502.02g ある。口縁部片 25 片のうち、口縁部の形状①が 7 片、②が 7 片、③が 9 片、不明が 2 片である。胎土が白色 (b) の破片は 10 片 66.12g ある。このうち口縁部片は 6 片で、① 2 片、③ 3 片、不明 1 片である。胎土が橙色でウルシ処理 (c) を施す破片は 6 片 36.07g ある。胎土が橙色 (d) の破片は 4 片 21.53g あり、そのうち口縁部片は 2 片あり①と③である。この他、赤褐色の胎土で、赤彩の可能性のある破片が 2 片 10.11g ある。このうち 1 片は口縁部③である。

土師器高坏部片は 2 片である。1 片白色の胎土で 3.43g、1 片は橙色の胎土で 1.83g である。土師器甕は粗い胎土の破片が 78 片 749.29g、薄手の器壁が 50 片 367.52g、緻密な胎土が 20 片 322.89g ある。土師器鉢類は 12 の他、体部片 8 片 176.28g ある。5 は小片であるが粗製土器と判断した。須恵器環は 9 片が出土する。益子産 4 片、三義産とみられる 2 片、新治産 1 片、産地不明 1 片である。三義産の 1 片は丸底気味で比較的大きな径と推定される。7 世紀末葉～8 世紀初頭と考えられる。産地不明の 1 片は底部糸切り・体部下端にヘラケズリを施す。雲母の混入は少ない。この他、土師器微細片 31.83g、粘土塊 135.47g が出土する。

掘り方からは、土師器 (a) 5 片 (① 2 片を含む)・(c) ③ 1 片 54.02g、土師器微細片 2.53g が出土する。

本遺構の時期は床面や掘り方から出土する土師器環から概ね 7 世紀前葉と考えられる。

火処 カマドを火処とする。北壁中央部付近にする。煙道は北壁を掘り込み建物跡外へ延びる。火床の位置は現状の落ち込み部分であるが、カマド左ソデ前から出土する土師器甕 8 をソデ芯とする位置までであるか判然としないが、土師器甕 8 は伏せた状況の口縁部のみが出土し、建物跡覆土中から体部や底部とみられる破片の出土がないことから、現状の落ち込み部と判断したい。併せて、8 を取り払った時期 (a 期) とソデ芯とする時期 (b 期以前) の 2 時期が推定できよう。現状のカマドは a 期に伴うが、構築時期は定かではない。しかし、床面と掘り方の遺物出土状況からは大きな時期差は想定されない。覆土は 30 層を確認した。1～5 層は白色粘土を含む層で、カマド被覆する最上層である。6・7 層は白色粘土や焼土を含む。煙道に関連する堆積層の可能性が考えられる。8～11 層は白色粘土を含む。カマド外側から前面に堆積する。12～15 層は白色粘土ブロックや焼土を含む。火床上部に堆積する。16～18 層の主体は白色粘土である。19・20 層ともに火床前方に堆積する。20 層は粘土の混入が少ない。21～23 層は焼土・ローム・白色粘土を含み、火床に堆積する。24 層はソデから立ち上がるカマド材、25・26 層は粘質土で作られたソデ芯である。27～30 層は掘り方埋土層である。掘り方は、現況では奥壁を中心に成形され、火床下の埋土は少ない。焼土や灰、炭化物を主体とする層は確認されておらず、火床は掘り方埋土ごと取り扱われた可能性が考えられる。ソデは地山を掘り残し、同種の粘質土で成形する。24 層は天井部に繋がるカマド材とみられ、ソデ材と

同種の粘質土が用いられる。覆土の堆積状況からは、火床を洗い、天井部を取り払い、埋め戻したものと考えられる。6・7層が煙道関連の堆積であれば、煙道付近の天井部は取り払われず、カマド内部を埋め戻す際に塞がれた可能性が考えられる。火床はロームを含む23層・粘土や焼土を含む22層・ロームを含む21層が交互に堆積する。この後、火床前方の19・20層までを16～18層、14・15層で埋め戻す。建物跡の埋没は、先述のとおり、カマド1層堆積後と判断される。カマド被覆する最上層1～5層については、本来、カマド埋土8～10層をすっぱり覆う状況であったと考えられる。

遺物出土状況 覆土中から土師器甕8、小礫254（図版二八）、粘土塊135.47gが出土する。カマド前方から出土する土師器甕8は口縁部を下に伏せた状態であることからカマドのソデ芯材であろう。口縁部のみで、同一個体の出土がないことから、現状のカマド以前の材と判断される。右ソデから長形の白色礫第80図254が長軸を立てて出土する。被熱の痕跡はない。カマド芯材とも考えられるが、小礫が単独で出土することからは芯材の役割を担えるか疑問が残る。カマド構築の際の目印、呪具や鎮魂具の可能性を指摘しておきたい。

出土遺物 図示した遺物のほか、土師器甕8の同一個体とみられる21片88.88gが出土する。

第62号竪穴建物跡（SI-62）（第40・41図 第10表 写真図版一ニ）

位置 A区L・9・10に位置する。現状で東に向けた斜面地に立地する。重複関係 第59号溝状遺構と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 方形状で、東西[2.8]m・南北2.46～2.78mである。第59号溝状遺構との重複部付近にSP-B壁際に堆積する4層が確認できるため、西壁に近い堆積と判断できよう。削平のため床面は失われている。遺構確認前から掘り方底面の深さは0.1m前後、レベルは53.72～53.8mである。主軸 N-45°-Eである。床面 床面作出層とみられるカマド17層上面のレベルが床面と判断される。レベルは53.83mである。掘り方は鹿沼軽石層下を掘り込む。

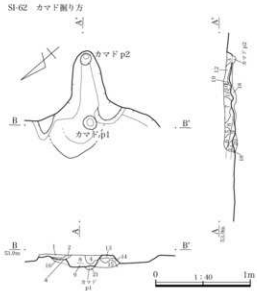
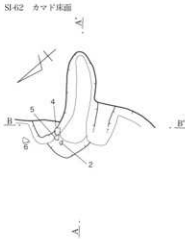
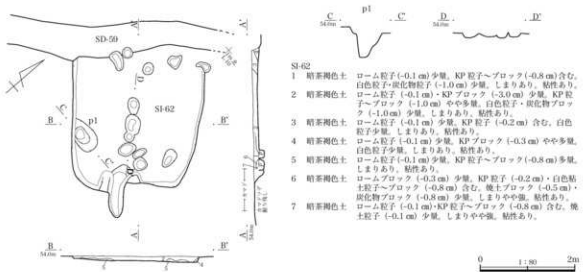
覆土 掘り方埋土とみられる7層を確認した。6層は白色粘土や焼土、炭化物を含む。後述のとおり、カマドの作り替えが指摘できるが、床面の作り替えの想定も可能であろう。柱穴 判然としなない。掘り方底面には複数のビット状の凹凸が観察される。作図のないビット状の凹凸のレベルは、第59号溝状遺構沿いで53.59～53.68mでEP-2に近い。SP-B北側は53.2mである。壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。



第40図 第62号竪穴建物跡出土遺物実測図

第10表 第62号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号 図種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	(単位:cm) 出土状況 残存状況
1 築造器 坯	口:[13.4] 底:[7.6] 高:4.0	ロクロ成形 三和産 ヘラケズリ幅広 外:体下ヘラケズリ(ヨコ)	内外-2.5Y7/1 灰白	白色粒子多量、黒色 粒子・砂礫 良	A区SI62 口縁部1/4、底部 一部残存
2 築造器 坯	口:[12.4] 底:[7.0] 高:4.1	ロクロ成形 三和産 外:体下ヘラケズリ(ヨコ)	内外-2.5Y6/1 黄灰	白色粒子多量、若干 又質粒子・砂礫 良	A区SI62カマ ドNo.3、覆土SI- 64 口～体部1/4、底 部一部残存
3 土師器 甕	口:[13.2] 底:— 高:(3.7)	台付甕か 口「コ」の字状 内:口ヨコナデ 口スス付着 外:ヘラケズリ(ヨコ)→口ヨコナデ 体:(口ヨコナデ 下) ナデ	内外-5YR4/4 にぶ い水肌	白色粒子・黒色若干 又質粒子少量 良	A区SI62 口縁部1/6残存



SI-62 カマド

- 1 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量, KPブロック(-0.3cm)やや多量, しまりや中強, 粘性あり。
 2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量, 茶褐色粘土ブロック(-0.5cm)含む, 白色粒子少量, しまりや中強, 粘性あり。
 3 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量, KP粒子(-0.2cm)含む, 焼土粒子(-0.3cm)少量, しまり強, 粘性あり。
 4 黒褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む, KP粒子(-0.1cm)少量, 白色粒子微細, 焼土粒子・炭化物粒子(-0.1cm)少量, しまりや中強, 粘性あり。
 5 暗茶褐色土 KPブロック(-1.0cm)少量, 暗茶褐色土ブロック(-1.0cm)含む, 焼土ブロック(-0.6cm)・炭化物ブロック(-0.6cm)少量, しまりや中強, 粘性あり。
 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微細, KP粒子(-0.1cm)少量, 白色粒子・炭化物粒子微細, しまりや中強, 粘性あり。
 7 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量, KP粒子(-0.2cm)・茶褐色土ブロック(-3.0cm)含む, 白色粒子・焼土粒子(-0.1cm)微細, 炭化物粒子(-0.2cm)少量, しまり強, 粘性あり。
 8 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子~ブロック(-0.8cm)含む, 白色粒子微細, 白色粘土ブロック(-0.5cm)少量, 焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微細, 土跡あり, しまり強, 粘性あり。
 9 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子~ブロック(-1.0cm)少量, 焼土粒子(-0.2cm)微細, 炭化物ブロック(-0.3cm)少量, しまりや中強, 粘性あり。
 10 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量, KP粒子(-0.1cm)含む, 焼土粒子(-0.2cm)少量, 炭化物粒子(0.2cm)微細, しまり強, 粘性あり。
 11 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量, KPブロック(-0.8cm)含む, 炭褐色土ブロック(-0.3cm)・白色粒子微細, 炭化物粒子(-0.5cm)少量, しまり強, 粘性あり。
 12 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.1cm)少量, 白色粒子微細, 焼土ブロック(-0.3cm)やや多量, 炭化物ブロック(-0.3cm)少量, しまり強, 粘性あり。
 13 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)やや多量, KP粒子(-0.1cm)・暗茶褐色土ブロック(-0.6cm)・白色粒子・白色粘土ブロック(-0.3cm)少量, 焼土粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微細, しまりや中強, 粘性あり。
 14 暗茶褐色土 茶褐色粘土主体, 白色粒子微細, 白色粘土粒子~ブロック(-0.3cm)少量, 炭化物粒子微細, しまり強, 粘性あり。
 15 暗茶褐色土 14層にKP粒子~ブロック(-1.0cm)含む, 白色粘土ブロック(-0.6cm)・焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)少量, しまり強, 粘性あり, 21層にKP粒子やや多量。
 16 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量, KP粒子(-0.2cm)やや多量, 白色粒子・焼土粒子(-0.1cm)微細, 炭化物粒子(-0.2cm)少量, しまりや中強, 粘性あり。
 17 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微細, KP粒子(-0.2cm)含む, しまりや中強, 粘性あり。
 18 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)微細, KPブロック(-0.3cm)やや多量, 焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微細, しまり強, 粘性あり。
 20 暗褐色土 KP粒子~ブロック(-3.0cm)主体, しまり強, 粘性あり。
 21 暗茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量, KP粒子~ブロック(-1.2cm)含む, 黒褐色粒子(-0.2cm)・焼土粒子(-0.2cm)微細, しまりや中強, 粘性あり。

第41図 第62号聚穴建物跡実測図

遺物出土状況 覆土中から472.14gが出土する。掘り方からの出土とみられるが、現地調査の所見からは概ねカマド付近からの出土である。須恵器環2は、第64号竪穴建物跡出土の1片と接合する。注記を添った可能性も残るが、本遺構が新しい可能性も考えられる。小片ではあり時期は不詳であるが、須恵器環1に新しい要素がみられることも看過できない。p1から須恵器環片が出土する。

出土遺物 土師器甕3は9世紀前葉～中葉、須恵器環2は9世紀中葉、須恵器環1は9世紀中葉もしくは後葉の特徴も観察できる。

図示し得なかった遺物は土師器、須恵器の小片である。p1から出土する須恵器環は三義産の可能性も指摘できるが、時期を含め、判然としにくい。灯明皿に転用されるが、煤状の付着物は本遺構以外の出土遺物と同様の特徴が観察される。須恵器環はこれ以外に6片が出土する。益子産とみられる破片(12.21g)は口縁部が外反気味で9世紀第2四半期、体下位にヨコ方向のヘラケズリを施す破片(7.79g)は9世紀中葉の三和産とみられる。この他の破片の産地は判然としにくい三義産の可能性が考えられる。p1出土片と併せ33.5gである。時期の判別は難しいが、1片は9世紀代であろう。土師器環はロクロ成形の3片9.89gが出土する。1片は内面にミガキを施し9世紀前半、1片はミガキ後に黒色処理を施し9世紀前葉以降、1片は9世紀中葉以降であろう。土師器甕は38片127.94gが出土する。「コ」字状の口縁部とこれと同一個体とみられる体部片は9世紀前葉～中葉であろう。これ以外に「コ」字状の口縁部は3片が出土する。常総型とみられる口縁部、胎土に金雲母を含む体部片外面にタテ方向のヘラミガキを施す13片(101.89g)が出土する。体部片のうち17片は外面にタテ方向のヘラミガキを施す。9世紀前葉～中葉であろう。出土遺物は9世紀前葉～中葉が主体であるが、須恵器環1に後出する特徴がみられよう。この他、粘土塊55.95gが出土する。

火処 カマドを火処とする。東壁南東隅部寄りに位置する。煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。カマド左ソデは地山を掘り残し、焼土を含まない1層で構築されるが、地山の掘り残しは確認されず、焼土や炭化物を含む14層を最下層にして構築される。カマドの作り替えが示唆される。覆土は21層を確認した。1・2層は鹿沼軽石、白色粘土を含む。カマド被覆層であろう。3層は堆積状況から煙道覆土と考えられる。4～9層は焼土や炭化物、暗茶褐色土・白色粘土を少量ながら含む。10～12層は煙道に堆積する焼土層である。13～16層はカマドソデの構築層である。17・18層は建物跡床面の構築層と判断される。19～21層は掘り方の堆積層である。21層はカマドp1の覆土であるが、カマド底面を構築する20層との層序は不明である。カマドp2は位置的に煙道に関連する可能性が考えられるが、層序等、不詳な点が多い。17・18層から、カマド底面を構築後建物跡床面が作出されたと判断できる。ソデは、建物構築時には地山を掘り残し、白色粘土と鹿沼軽石(16層)で作られる。右ソデの作り替えを想定するならば、地山の掘り残しは壁際まで取り去り、白色粘土を主体にロームや暗茶褐色土(13～15層)で作出したと考えられる。火床は奥壁側には焼土(10～12層)が堆積するが火床部分への目立った堆積(4～9層)は確認されない。カマドは虎絶に伴い火床を洩い、天井部分を取り去り、カマド材や火床に堆積した焼土や炭化物で埋め戻されたと判断される。その際、奥壁部の天井部が取り払われたか否かは不明である。火床部分の埋め戻し後カマド全体を被覆したと考えられるが、21層はカマドの被覆に伴う堆積とみられる。

遺物出土状況 覆土中から出土する。4～6はカマド覆土2層に相当する高さから出土する。カマド被覆土中の遺物であろう。

出土遺物 須恵器環2は前述のとおり9世紀中葉の三和産であろう。図示し得なかったが、4は土師器甕片で金雲母を含む外面にタテ方向のヘラミガキを施す。9世紀前葉～中葉の常総型であろう。5は土師器甕、6は胎土に金雲母を含む土師器甕(常総型)であろう。この他、4同様の土師器甕1片、6同様の土師器甕1片、

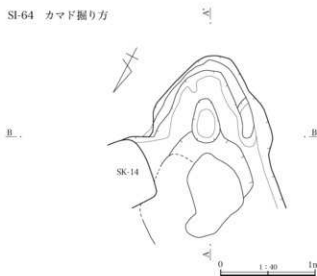
器種不明の土師器片1片6.95gが出土する。土師器甕は2.37g、土師器甕(常総型)は5.8gである。時期的には床面出土遺物と同様である。その他、粘土塊41.12gが出土する。

第64号竪穴建物跡(SI-64)(第42～46図 第11表 写真図版七～九・一九・二〇・三〇)

位置 A区・M-9に位置する。東側の谷に向けた斜面地にある。重複関係 SI-19・79と重複する。SI-19より新しい。SK-14・100・101(SK-100・101土層注記は81頁に記載)と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 方形で、3.26～3.66m、深さは0.5mである。主軸 谷に並行し、磁北には沿っていない。カマドの位置を東壁とした場合、N-50°Eである。

床面 鹿沼軽石層下のローム層を床面とする。建物跡壁は鹿沼軽石である。柱穴と考えられる小穴の重複、

SI-64 カマド掘り方

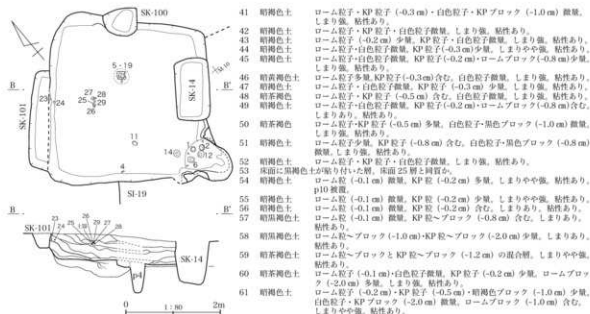


第42図 第64号竪穴建物跡(カマド)実測図(1)

床面作出層とみられる54層に被覆された小穴状の55・56層から複数時期が想定される。床面レベルは53.0m前後である。西側はやや高く53.04m、重複するSK-14付近は低く52.9mである。西側に堆積する25層は掘り方埋土ではなく床面覆土と判断した。

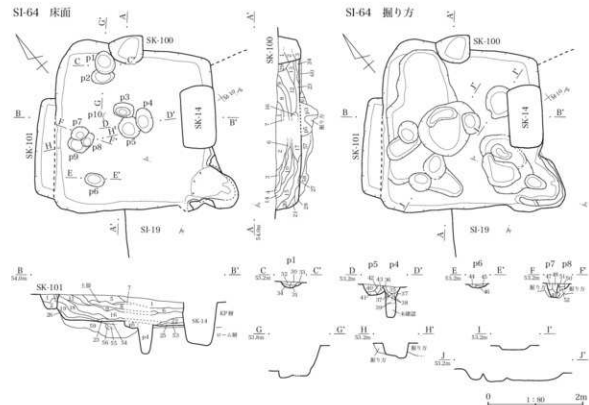
覆土 61層を確認した。1～29層は床面、30～52層は柱穴掘り方、53～61層は掘り方である。

床面は、ロームブロックを含む25～28層(E群)が堆積後、茶褐色土ブロックを含む11～24層(D群)、鹿沼軽石を含む7～10層(C群)、炭化物を含む黒色土5・6層(B群)、1～4層(A群)が堆積する。29層は重複するSK-14覆土



第43図 第64号竪穴建物跡遺物出土状況図

第3章 確認された遺構と遺物



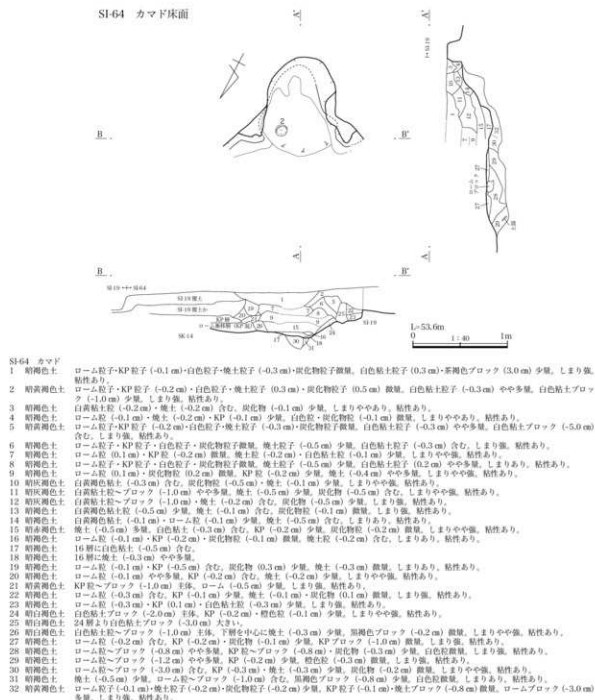
SI-64

- 1 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.1cm)含む。白色粒子少量。白色粘土ブロック(-0.5cm)・炭化物ブロック(-0.3cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子微塵。KP粒子(-0.2cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)少量。白色粒子微塵。しまり中強。粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量。KP粒子(-0.1cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)含む。暗褐色土(-0.2cm)微塵。白色粒子少量。しまり中強。粘性あり。
- 4 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.1cm)・茶褐色土ブロック(-1.0cm)少量。白色粒子含む。炭化物粒子(-0.2cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子微塵。KP粒子(-0.2cm)含む。暗褐色土微塵。炭化物ブロック(-0.8cm)含む。しまりや中強。粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KPブロック(-0.3cm)少量。茶褐色土ブロック(ロームに似る)(-1.0cm)微塵。白色粒子少量。炭化物ブロック(-0.3cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
- 7 暗褐色土 KP粒子含む。しまりあり。粘性あり。
- 8 暗褐色土 ローム粒子微塵。KPブロック(-0.5cm)少量。炭化物ブロック(-0.3cm)少量。しまりや中強。粘性あり。
- 9 暗褐色土 ローム粒子微塵。KPブロック(-0.5cm)含む。茶褐色土ブロック(-1.2cm)少量。白色粒子微塵。しまり強。粘性あり。
- 10 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量。KP粒子(-0.3cm)含む。白色粒子・炭化物ブロック(-1.0cm)少量。しまりあり。粘性あり。
- 11 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.2cm)含む。白色粒子少量。褐色粒子(-0.1cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 12 暗褐色土 ローム粒子微塵。KP粒子(-0.2cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)少量。白色粒子微塵。しまり強。粘性あり。
- 13 暗褐色土 ローム粒子微塵。KP粒子(-0.2cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.2cm)含む。白色粒子・炭化物粒子(-0.1cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KPブロック(-0.3cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)少量。黒褐色土ブロック(-1.0cm)・白色粒子・炭化物粒子(-0.2cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
- 15 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.2cm)含む。褐色粒子(-0.2cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
- 16 暗褐色土 ローム粒子微塵。KP粒子(-0.1cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.5cm)含む。白色粒子・炭化物粒子(-0.1cm)微塵。しまり強。粘性あり。
- 17 15層・炭化物粒子(-0.2cm)少量。
- 18 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量。KP粒子(-0.2cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)含む。黒褐色土ブロック(-0.3cm)微塵。白色粒子少量。しまりあり。粘性あり。
- 19 茶褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.5cm)少量。暗褐色土ブロック(-0.3cm)微塵。白色粒子少量。褐色粒子(-0.1cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 20 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)・KP粒子(-0.2cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)少量。しまりあり。粘性あり。
- 21 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量。KP粒子(-0.2cm)含む。KPブロック(-0.3cm)・茶褐色土ブロック(-1.0cm)・白色粘土ブロック(-0.5cm)少量。しまりあり。粘性あり。
- 22 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)少量。ロームブロック(-0.8cm)微塵。KP粒子(-0.2cm)少量。KPブロック(-1.0cm)微塵。茶褐色土ブロック(-1.0cm)含む。白色粒子少量。粘性あり。
- 23 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.2cm)微塵。茶褐色土ブロック(-1.0cm)少量。白色粒子・炭化物粒子(-0.1cm)微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 24 暗褐色土 ローム粒子微塵。ロームブロック(-1.2cm)・KPブロック(-0.3cm)少量。KPブロック(-2.0cm)少量。白色粒子微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 25 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量。KP粒子(-0.1cm)・ロームブロック(-1.0cm)含む。黒褐色土ブロック(-1.0cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
- 26 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量。暗褐色土(-0.2cm)少量。暗褐色土(-0.2cm)微塵。しまりあり。粘性あり。
- 27 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)・ロームブロック(-1.2cm)・KP粒子(-0.1cm)・KPブロック(-1.2cm)少量。白色粒子微塵。しまりあり。粘性あり。
- 28 27層のロームブロック・KPブロック主層。
- 29 暗褐色土 ローム粒子微塵。KP粒子(-0.2cm)少量。茶褐色土ブロック(-1.5cm)含む。白色粒子少量。しまりや中強。粘性あり。
- 30 暗褐色土 ローム粒子微塵。KP粒子(-0.2cm)少量。KPブロック(-0.8cm)微塵。白色粒子微塵。しまり強。粘性あり。
- 31 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(-0.8cm)・KP粒子(-0.1cm)・白色粒子少量。粘性あり。
- 32 暗褐色土 ロームブロック(-0.5cm)微塵。KPブロック(-0.5cm)含む。白色粒子微塵。しまり強。粘性あり。
- 33 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)含む。ロームブロック(-1.0cm)少量。KP粒子(-0.2cm)・白色粒子少量。白色粒子微塵。しまり強。粘性あり。
- 34 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)少量。KP粒子(-0.1cm)微塵。黒色土ブロック(-0.8cm)少量。白色粒子微塵。しまり強。粘性あり。
- 35 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(-0.8cm)少量。黒色土ブロック(-0.5cm)・白色粒子・焼土粒子(-0.2cm)・炭化物粒子微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 36 暗褐色土 ローム粒子・KPブロック(-0.3cm)・白色粒子・炭化物ブロック(-0.5cm)・焼土粒子微塵。しまり強。粘性あり。
- 37 暗褐色土 ローム粒子含む。KP粒子・白色粒子・焼土粒子微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 38 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.2cm)・白色粒子・焼土粒子微塵。しまりや中強。粘性あり。
- 39 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子・白色粒子・焼土粒子(-0.8cm)微塵。しまり強。粘性あり。
- 40 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量。白色粒子微塵。しまり強。粘性あり。

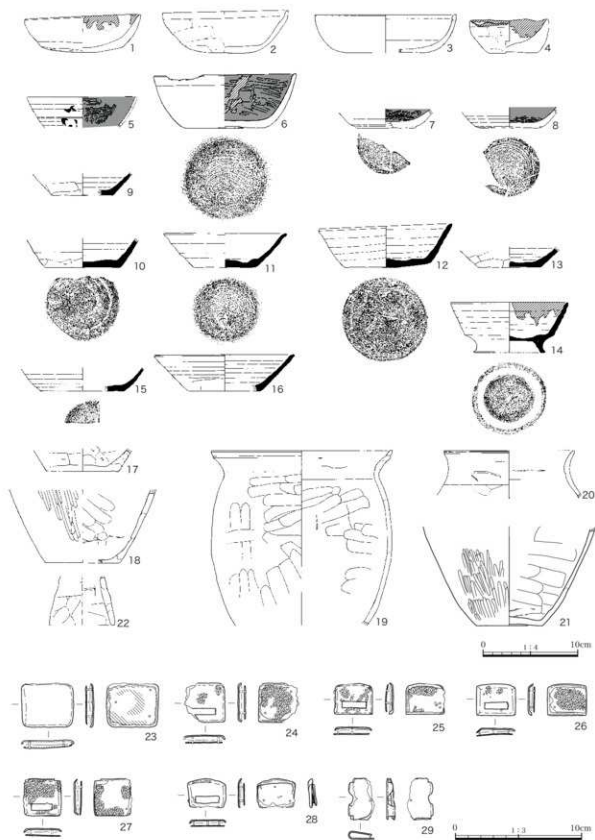
第44図 第64号竪穴建物跡実測図

の可能性がある。C～E群は建物跡廃絶に関わる埋め戻し土と考えられる。A・B群は建物跡廃絶後の覆土とも判断できるが、5層に炭化物を含む点、後述するA・B群から出土する袴帯7点を考慮するならば、廃絶に伴う埋土の可能性も残る。

掘り方は西半部が深い。西半部はロームと鹿沼軽石の混合層59層、鹿沼軽石主体の54・57・58層が堆積する(F群)。60・61層はロームを主体とする(G群)。54・57・60・61層は床面作出層であろう。54層に被覆される55・56層が旧床面に付随する覆土である場合、F群は廃絶時の床面を作出する新期の掘り



第45図 第64号聚穴建物跡(カマド)実測図(2)



第46图 第64号竖穴建物跡出土遺物実測図

第11表 第64号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 遺物	寸法	特徴	色調	粘土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 杯	口:12.4 底:9.6 高:3.8	有明面転用 内:ヨコナデ(口→底 最後底面から口に向けてナデながら指を抜く) 外:ヘラケズリ(体→底 体ヨコナデ 直交する2方向に大削できる) スス付着(内面1ヶ所及び内口と外口)	内外:7.5YR7/6 橙	白色粘土・黒色ガラス質粘土少量	A区SI-64 No.11 残存
2 土師器 碗	口:13.3 底:5.0 高:4.5	内:ヨコナデ ウルシ仕上げ 体下→底面は覆に失っている 外:ヘラケズリ(ヨコ)3段(上→下)→ナデ→ヨコナデ 体上断面に成 形の小ヒビが残る 底ヘラケズリ→方向→底面に沿ってヘラケズリ	内外:10YR6/3 にぶ い黄橙	白色粘土・黒色ガラス質粘土少量 黒 粘土	A区SI-64 方 下No.1 残存
3 土師器 碗	口:15.0 底:一 高:(4.0)	体丸底あり 内外断面割着 内:割着面の割落あり ヘラケズリ→体ヨコナデ 口端下 横 外:割着面の割落顯著 割着のため判断しないうちヘラケズリか 底部 回転ヘラケズリ	内外:10YR8/3 浅黄 橙	白色粘土・透明ガラス質粘土微量	A区SI-64 1/2 残存
4 粗製土師器	口:8.4 底:5.6 高:3.6	内面上位→口端スス付着 有明面転用 スス付着(内面1/4強) 内:(筋?)ナデ→上半ヨコナデ(無い) 口端割でつまんで整形か 外:ヘラケズリ(体上→下2段→ナデ(指か 下長め 上短め)→ヨコ ナデ 底部回転転用) 元々の面の整形が粗く凸凹あり 断面やや割着	内外:10YR8/3 浅黄 橙	黄白色粘土・ガラス質粘土含む	A区SI-64 No.14 残存
5 土師器 碗	口:15.4 底:一 高:(4.4)	ロクロ使用 底部欠損 内:ヘラミガキ(タテ→体中ヨコ)→ヨコナデ 黒色処理 外:割着あり	内:N2/0 黒 外:5YR5/6 明赤橙	白色粘土・黒色ガラス質粘土微量	A区SI-64 No.8 口縁部1/8 残存
6 土師器 碗	口:15.0 底:8.6 高:5.7	ロクロ使用 有明面転用 転用時期不明 内:ヘラケズリ→ミガキ(体ヨコ 直交する2方向)→口端部割着 ス ス付着 外:割着面割着 部分的に割落 ロクロ→ヨコナデ 底部回転転用切り 底面ヘラナデ 内→外(口) 黒色処理 口端 片口状に欠ける部分1ヶ所 わずかに凸む 程度の欠け3ヶ所 断面は割着	内外:7.5YR1.7/1 黒 外:7.5YR6/6 橙	白色粘土・透明ガラス質粘土微量	A区SI-64 No.10 残存
7 土師器 碗	口:一 底:(6.0) 高:(2.0)	最大径:5.0 口クロ使用 内:ミガキ(底→一方→体ヨコ(幅約4cm一単位)) 外:ロクロ 底:底部回転技法? 回転転用切り	内:N2/0 黒 外:7.5YR4/4 橙	白色粘土微量、黒色ガラス質粘土少量	A区SI-64 破い 5・6・7層と同じ層 底部1/2 残存
8 土師器 碗	口:一 底:(6.4) 高:(2.2)	最大径:5.0 口クロ使用 内:ミガキ(底→一方→体ヨコ(幅約5cm一単位)) 外:ロクロ 底:底部回転技法? 回転転用切り	内:N2/0 黒 外:7.5YR5/4 にぶ い橙	白色粘土少量	A区SI-64 底部3/4 残存
9 須恵器 杯	口:一 底:(6.4) 高:(2.4)	最大径:10.0 三和産 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(手持ちヘラケズリ) 底:ヘラケズリ(一方向)	内外:7.5YR6/6 橙	白色粘土少量	A区SI-64 No.8 底部1/4 残存
10 須恵器 杯	口:一 底:7.8 高:(3.1)	最大径:11.0 新治産 薬師寺段割 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ 底:底部回転ヘラ切り	内外:2.5Y6/2 灰黄	雲母粘土多量、砂粒微量	A区SI-64 底部存在
11 須恵器 杯	口:13.0 底:6.6 高:3.6	曇子産 ロクロ成形 内外割着 外:体下底からの粘土土上げていている 底:底部回転転用切り	内外:2.5Y6/2 灰黄	黒色粘土・砂粒	A区SI-64 No.13 口→体部1/4 残 存、底部存在
12 須恵器 杯	口:14.6 底:9.0 高:4.6	曇子産 ロクロ成形 内:底中央ボタニ状に突出 外:体底下の水引溝 上段と壁を形成 底:底部ヘラ切り	内外:10YR7/3 にぶ い黄橙	白色粘土・黒色粘土・砂粒	A区SI-64 No.12 残存
13 須恵器 杯	口:一 底:(10.5) 高:(2.1)	最大径:10.5 三和産 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(手持ちヘラケズリ) 底:ヘラケズリ(一方向)	内外:2.5Y4/2 暗灰 黄	白色粘土・雲母粘土・砂粒多量 やや含む	A区SI-64 底部ほぼ存在
14 須恵器 高台付杯	口:12.5 底:7.7 高:5.3	曇子産 有明面転用 ロクロ成形 内面底中央部にボタニに盛り上がる 器形は耳直縁にQしよける 内面 口→体下にスス付着 底:底部ヘラ切り	内外:5PB5/1 青灰	白色粘土・黒色粘土・砂粒	A区SI-64 No.9 残存
15 須恵器 杯	口:一 底:(8.8) 高:(2.5)	最大径:11.0 曇子産 ロクロ成形 内:割着 底:底部回転転用切り	内外:7.5Y5/1 灰	白色粘土少量、黒色雲母粘土微量	A区SI-64 13層 上面 底部1/6 残存
16 須恵器 杯	口:14.6 底:(7.6) 高:3.8	瓶之内産 ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(ヨコ)か 底:底部ヘラ切り	内:2.5Y7/2 灰黄 外:2.5Y6/2 灰黄	白色粘土・黒色粘土・雲母粘土 やや含む	A区SI-64 口→体部1/8、底 部一部残存
17 土師器 甕	口:一 底:(7.5) 高:(2.4)	内:ヘラナデ 外:体下ヘラケズリ(ヨコ) 底:底部ヘラケズリ(一方向)	内:10YR4/1 褐 外:7.5YR6/4 にぶ い橙	赤雲母混入 雲母粘土・砂粒多量	A区SI-64 13層 上面・甕土 底部1/2 残存

第3章 確認された遺構と遺物

番号 図種	寸法	特徴	色調	粘土 構成	出土状況 残存状況
18 土師器 甕	口:— 底: [7.6] 高: [7.8]	最大径(15.0) 頸短型 内:ヘラケズリ→ヘラナデ 接合痕不明 外:ミガキ(タテ) 又又付着	内:7.5YR6/4 に近い 緑 外:10YR3/2 黒褐色	金雲母顕大 雲母 粒子・砂粒多量 貝	A区 SI-64 体下～底部 1/4 残存
19 土師器 甕	口: [19.2] 底:— 高: [18.4]	内:ヘラケズリ(口コ)→口ヨコナデ 外:ヘラケズリ(タテ)→体上部分的に口コ→口ヨコナデ 酒罎あるいは 最後ナデか 工具痕不明 中位粘土質 カマド跡が部か 内外とも粘土粒の凸凹が残る(図示した所はあまり残らない) 使用頻度減少	内外:7.5YR6/6 橙	金雲母・小礫・黒色 粘土含む	A区 SI-64 No.8 口～体部 1/4 残存
20 土師器 甕	口: [13.8] 底:— 高: [5.0]	武蔵型 胴部不明 内:ヨコナデ 外:ヘラケズリ 部分的に指ナデ	内外:10YR5/4 に 近い黄褐色	白色粘土少量、雲母 粘土多量 貝	A区 SI-64 No.8 口縁部 1/8 残存
21 土師器 甕	口:— 底:7.0 高: [10.5]	最大径(18.2) 頸短型か 底部から直行的に立ち上がる形状で逆卵形には見えない 内:酒罎 一部割落 接合痕不明で粘土粒の凸凹残る ヘラケズリ(口コ) 外:ヘラケズリ(タテ)→ミガキ(タテ) 煎煎あり 底:酒罎	内:7.5YR6/4 に近い 橙 外:7.5YR3/1 黒褐色	金雲母顕大 白色粘 土・透明ガラス質 粘土・砂粒多量 やや貝	A区 SI-64 体下部 3/4 残存、 底部完存
22 土師器 台付甕	口:— 底: [6.8] 高: [5.2]	時期不明(8世紀後半～9世紀中葉か) 内:ヘラケズリ→ナデ 外:ヘラケズリ→ナデ 焼熱により断面まで赤色変化 煎煎劣化	内外:2.5YR5/6 明赤 褐色	金雲母顕大 白色粘 土少量、雲母粘土多 量、砂粒・透明ガラ ス質粘土微量 貝	A区 SI-64 胴部 1/4 残存
23 踏帯	長:4.15 幅:3.4 厚:6.5				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
24 踏帯	長:3.1 幅:3.25 厚:6.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
25 踏帯	長:2.5 幅:3.1 厚:6.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
26 踏帯	長:2.5 幅:3.1 厚:5.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
27 踏帯	長:3.0 幅:3.0 厚:6.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
28 踏帯	長:2.3 幅:3.0 厚:5.0				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損
29 踏帯	長:3.3 幅:2.0 厚:6.5				A区 SI-64 SB 西 側 一部欠損

方埋土、G群はこれ以前の古期の掘り方埋土の可能性が考えられる。53層は床面に貼り付いた黒色土の可能性もあろう。

柱穴は可能性のあるものを含めて p1～9 を確認した。床面 55・56層、p6 は柱穴覆土であるか不詳である。堆積状況を確認し得たのは p1・4～8 である。各柱穴の堆積土は似るが、土層の斉一性は観察できない。p1 は 30・31 層が柱痕、32～34 層が掘り方とみられる。p4・5 は p4 の堆積が新しい。p4 は 35・36 層に抜き穴、37～39 層に柱痕及び掘り方、p5 は 40・41 層に柱痕、42・43 層に掘り方の可能性が考えられる。p7・8 は p7 の堆積が新しい。p7 は 48 層に柱痕、47・49 層に掘り方の可能性が考えられる。

柱穴 前述のとおり p1～9 を付した。廃絶時の床面に伴うと判断できるのは p4・7 で、これ以外は判然としれない。柱間是不詳であるが、小穴の重複からは、床面中央に 1 穴 (p3～5)、西壁中央部に 1 穴 (p7～8) が主柱穴と想定される。p4・7 の距離は約 1.4m である。延長線上に位置する柱穴が重複する SK-14 の掘り込みによって失われた可能性も否めないが、p4・7 と等間隔であれば壁に近接することとなり、p1 に似た位置取りとなる。壁からの距離を勘案すると、p2・6・9 は約 50cm で似た数値である。建物跡周囲に補助穴等は確認し得なかった。現状の床面からのレベル・深さは、p1:52.91m・9.0cm、p2:52.88m・12.0cm、

p3:52.66m・34.0cm, p4:52.32m・68.0cm, p5:52.78m・22.0cm, p6:52.67m・33.0cm, p7:52.74m・26.0cm, p8:52.7m・30.0cm, p9:52.77m・23.0cmである。

壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。

遺物出土状況 覆土中から 1205.83g が出土する。多くは 8 世紀中葉～9 世紀後半の土器類であるが、p4 出土の土師器甕小片を含む。また、袴帯 7 点が近接して出土する。

土器類は層位を確認できる遺物は少ない。11 は 10 あるいは 14 層、4 は 20 あるいは 21 層、7 は 5 層の出土とみられる。7 は袴帯 3～7 に近接して出土する。17 は 2 層の出土とみられる。5・19 は 1 層中の出土とみられ、破片が近接して出土する。19 と同位置からは土師器甕小片 4 片が出土する。このうちに 1 片は薄く、3 片は微細片である。p4 の掘り下げに伴い、土師器甕 1 片が出土する。タテ方向の粗いヘラケズリを施す小片で時期は不明である。

袴帯 7 点は SP8 ベルト西側から出土する。1・2 は 1 あるいは 2 層中から、3～7 は 5 層中から出土する。3・4 は 1・2 の東側 0.6m 付近、確認面からは同様の深さで近接して、5～7 は 3 の直下に近接して出土する。1 は蛇尾、2～6 は巡方であるが、3・6 は 2～5 より小形である。7 は鉸貝であるが、縦向きの半分を欠する。7 点は平面、高さとも近接して出土し、袴帯の 1 本分の可能性もあるが、1・2 と 3～7 に約 0.6m の距離があること、3～7 がほぼ同位置の上下で出土することから使用状態（一本のベルト状）の出土ではないとの現地所見がある。また、各個体の表裏面が留められた状態であることから、革帯を挟んだ状態であった可能性も考えられる。その場合、袴帯は革帯に帯金具が付けられたまま切られたことも想定できよう。

出土遺物 粗製土器 4 は 6 世紀末葉～7 世紀初頭とみられ、出土遺物のうちで最も古手であろう。灯明皿に転用される。須恵器環 10・15 は 8 世紀第 4 四半期、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）3 は 8 世紀後葉、土師器台付甕 22 は 8 世紀後葉～9 世紀中葉、須恵器環 11 は 9 世紀第一四半期、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）5、土師器甕 19 は 9 世紀前葉、不掲載の土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）は 9 世紀前葉の可能性、須恵器環 9・13・16 は 9 世紀中葉、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）7・8、土師器甕 18・21 は 9 世紀中葉の可能性、不掲載の土師器甕は 9 世紀中葉～後半、土師器甕 20 は 9 世紀後半の可能性、土師器甕 17・21・木葉痕は胎土に金雲母を含む。常陸型であろう。時期不明である。木葉痕は体・底部の積み上げ部に布目痕が残る。布を挟み込んだままでは底部と体部が密着しないと考えられるため、底部を成形し体部を立ち上げる際に布が被せられたとする判断が合理的であろう。現状で観察できる布目の糸は 0.3mm、糸の間隔は 0.1mm である。現状では細密であるが、焼成時の縮小率を考慮するならば、麻布とも考えられる。不掲載の須恵器甕は 9 世紀代とみられる。袴帯 7 点は銅製で、塗布された黒漆が部分的に残る。『養老令衣服令』に定められた六位以下の袴帯であろう。延暦 5（797）年に六位以下の金属製の飾りが禁止されることから、これ以前に使用されたものと考えられる。

図示し得なかった遺物は土師器、須恵器の小片である。器種の判断の難しい破片もあり、器種は想定を含む。また、多くは時期不明である。土師器は環 5 片 8.41g、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）18 片 130.54g、高環脚裾部 1 片 1.74g、甕の可能性のある小片 1 片 16.52g である。土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）は内黒であり、9 世紀前半以降とみられる。甕は口縁部 14 片 94.91g、体部 10 片 125.61g、薄手の体部 33 片 146.71g である。常総型甕とみられる破片は口縁部 2 片 11.32g、体下半に縦方向のミガキを施す破片 26 片 242.03g、胎土にガラス質粒子を含む体部片 40 片 268.95g である。タテ方向にミガキを施す破片は 9 世紀前葉～中葉であろう。須恵器は、益子産・三和産・産地不明の破片である。益子産は環口縁部 3 片 10.98g、蓋 2 片 13.78g である。三和産は環口縁部 3 片 9.32g・体部 3 片 7.32g・底部 3 片

30.57gである。産地不明は口縁部1片6.67g・体部1片1.23g・底部1片11.63gである。口縁部は三稜産の可能性も考えられる。底部は回転系切りが観察できる。この他、粘土塊19片67.59gが出土する。繊維が抜けた痕跡や棒状工具、先端の鋭い棒状工具の痕跡が観察できる。

出土遺物の時期をみると、主に8世紀第4四半期から9世紀後半までの遺物が混在する状況にある。覆土の堆積状況から、本建物跡は廃絶に際して埋め戻されたと判断されることから、本建物跡の廃絶は最も新しい時期とみられる土師器甕（不掲載）から9世紀中葉から後半、あるいは、出土遺物が量的に多い9世紀中葉の可能性を考えておきたい。

土師器壺（ロクロ使用・内面黒色処理）7（9世紀中葉）は袴帯3～7と5層中から近接して出土する。また、土師器壺（ロクロ使用・内面黒色処理）5（9世紀前葉）、土師器甕17（時期不明）は袴帯1・2と同じ層からの出土とみられる。5層は炭化物を含み、1・2層はその直上に堆積する点、遺物の出土状況を考慮する上で留意される。

土師器杯1など、後述するカマド出土を含めた5個体は灯明皿に転用される。粗製土器4（6世紀末～7世紀初）、須恵器杯13（9世紀中葉）、カマド出土の土師器杯1・土師器壺（ロクロ使用・内面黒色処理）6（8世紀中葉）、須恵器高台付杯14（9世紀第2四半期）、器種・時期等ばらつきがある。付着する煤は外観の観察からは高粘度と見受けられる。土器自体の使用の痕跡は薄い。廃絶の際の祭祀に伴う可能性も考慮すべきであろう。

火処 カマドを火処とし、建物跡の南東隅部にある。東壁の南隅部への設置が意図されたと考えられる。煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。ソデの堆積状況からは作り替えの可能性も考慮し得る。覆土は33層を確認した。1・2層は建物跡覆土、3・4層は煙道覆土と考えられる。5～9層はカマド被覆土であろう。白色粘土を含む5・6層と8層が7層を挟み交互に堆積する。9層は焼土を含む。カマド後方部への堆積は確認できない。カマド前方部の天井を取り払い後に堆積する、カマド本体の被覆最下層にあたると考えられる。10～12層は白黄色粘土を含む。カマド材とみられ、カマド前方部への堆積は確認できない。カマド後方の天井部であろう。13～18層は焼土・白色粘土を含む。炭化物や灰の堆積が確認されないことから、火床を洗い、埋め戻した火床被覆土と判断される。17層で火床を被覆後、13～15層で煙道奥壁まで埋め戻したと考えられる。19～26層はカマドソデである。基底部および火床側を白色粘土主体の24～26層で作出する。左ソデは鹿沼軽石主体の19・21層、右袖はローム主体の22・23層を用いる。左ソデには右ソデ25層に相当する層が確認できず、26層上に21層が堆積する。主要構築材が異なることも考え合わせ、ソデ左右の違いはカマドの作り替えに関わる可能性が指摘できよう。27～32層は掘り方である。ロームを主体とする同質材とみられる。ローム主体の左ソデと同時期の構築の可能性が考えられる。カマド前面に堆積する27層は床面作出土とも考えられる。28・29層はカマド前面、30・31層は火床、32層は煙道の掘り方で、奥壁側から構築されたことがわかる。26層上位のロームブロックは26層に伴うと考えられる。

カマドの構築は、地山を掘り込み後、ロームを主体に火床、煙道、白色粘土を芯にソデを作出する。左右のソデの差異から作り替えが推定されるが新旧は判然としない。

カマドの廃絶は、カマド前方のソデ～天井部を取り払い、埋め戻したと考えられる。カマド前方部を取り払うにあたっては、火床は奥壁までを渡った後、焼土と白色粘土の混合土で埋め戻したものと推定できる。カマド後方のカマド材（10～12層）の堆積がカマド前方部を取り払ったための崩落であるのか、故意の崩落であるのかは判然としないが、煙道奥壁の埋土（13・14層）上に間層を挟まず堆積しており、火床を洗い埋め戻した後にカマド前方部を取り払ったと推測できる。この場合、火床埋土（10～18層）の焼土や

白色粘土が、カマド使用に伴う火床堆積物や取り払ったカマド材であるとも考えられよう。後方部カマド材(10～12層)の直上には建物跡覆土とみられる1・2層が堆積する。火床埋め戻し後、除去したカマドの高さ(ソデの高さ)まで被覆し、建物跡とともに埋没したと判断される。1・2層に対応する床面覆土は判然とせず、建物跡とカマドの埋没の工程の順序は不明である。

遺物出土状況 図示した遺物以外に土師器甕2片20.62gが出土する。1片は2(土師器坑)と同位置、1片は覆土から出土する。何れもタテ方向に粗いヘラケズリを施す小片で、覆土出土の方が厚手である。

土師器坑(ロクロ使用・内面黒色処理)6はカマド7層、土師器坑2・須臾器高台付環14はカマド7・9層境付近、須臾器環12はカマド9層、土師器環1はカマド15層から出土する。何れもカマド廃絶に伴う遺物と考えられる。

出土遺物 土師器環1は8世紀中葉、土師器坑(ロクロ使用・内面黒色処理)6は8世紀後葉、土師器坑は8世紀中葉～後葉、須臾器高台付環14は9世紀第2四半期であろう。須臾器環12は8世紀後葉の可能性があろう。8世紀中葉が主体となるが、床面出土の遺物同様、8世紀中葉～9世紀第2四半期の時期幅がある。また、土師器環1・土師器坑(ロクロ使用・内面黒色処理)6・須臾器高台付環14は灯明皿に転用される。床面出土遺物同様、煤上の付着物は粘性が高く、器種・時期幅にばらつきがあり、土器自体の使用頻度も低い。カマドの廃絶、建物自体廃絶に伴う祭祀が行われた可能性も考慮すべきであろう。

第79号竪穴建物跡(SI-79)(第47～49図 第12・13表 写真図版七・九・二〇・二一)

位置 A区M-10に位置する。東側の谷に向けた斜面にあり、(1)調査の概要に記載したとおり、谷部への落ち込みである可能性が高い。重複関係 第19号竪穴建物跡・旧跡第80号竪穴建物跡との間に位置する。平面形状・規模 第48図の破線は現地調査時に第79号竪穴建物跡として掘り下げた範囲である。床面までの深さは0.45m前後である。主軸 谷の落ち際とみられる西壁はN-36°Eである。床面 鹿沼軽石層下の粘土層から黒色土層にいたる。散在する焼土塊のレベル(上部・下部)は、焼土塊①52.36m・52.2～52.26m、焼土塊②52.3m・52.55mである。谷部に散在する焼土溜まりに類する可能性が高い。覆土 18層を確認した。9～18層は掘り方理土とみられる。谷部へ向けた堆積が確認できる。白色粘土塊を含む1～5層(A群)、白色粘土塊を含まない6～18層(B・C・D群)に大別できる。焼土・炭化物を

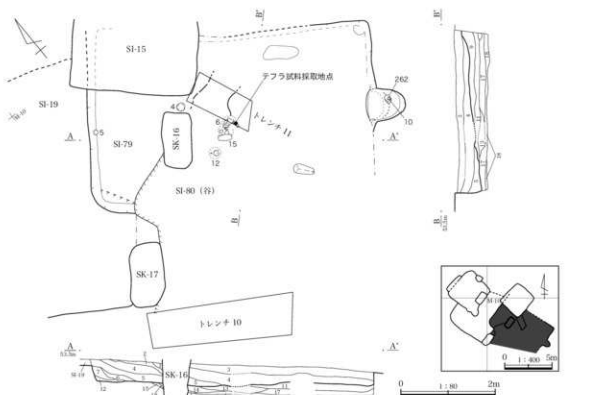


第47図 第79号竪穴建物跡(カマド)実測図

含まないB群(6・7層)・D群(16～18層)とこれらを含まないC群(9～15層)が交互に堆積する。
付属施設 確認されない。

遺物出土状況 遺構確認面及び覆土中から588.86gが出土する。時期の判別が可能な破片は7世紀代、8世紀第4四半期～9世紀代に大別できる。番号を付して取り上げた遺物は覆土A群から出土する。本遺構、旧称第80号竪穴建物跡として取り上げた遺物の接合が認められる。併せて、旧称第80号竪穴建物跡として取り上げた遺物の報告を行う。

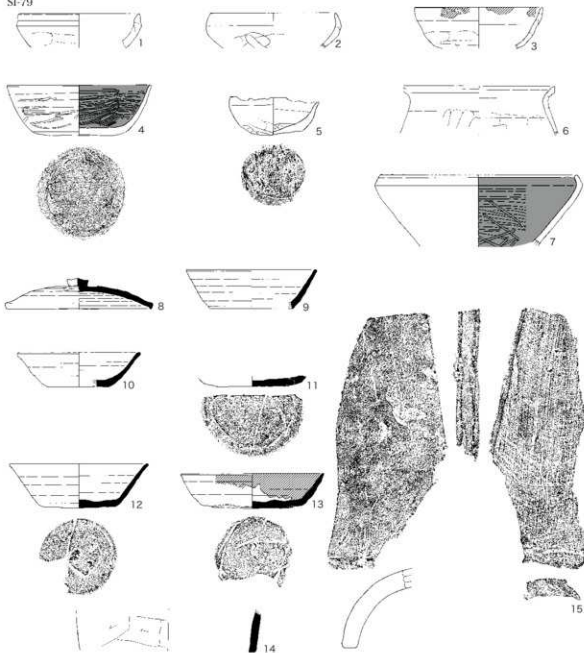
出土遺物 粗製土器5は6世紀末葉～7世紀初頭とみられ、出土遺物のうちで最も古手であろう。灯明皿に転用される。土師器環1・2は小片であるが、7世紀中葉の可能性があろう。土師器環3は7世紀後葉、須恵器環12・13は8世紀第4四半期、土師器環4は9世紀前葉、土師器環6は9世紀中葉、須恵器環10は9世紀第2四半期～中葉とみられる。また、同一個体とみられる須恵器残片が本遺構、旧称第80号竪穴建物跡から1片16.31gが出土する。9世紀代であろう。須恵器14は底部を欠損しており裏あるいは幅であ



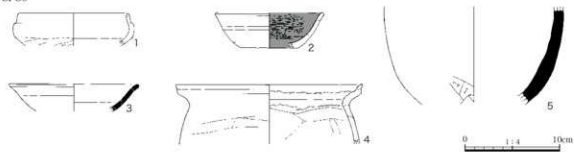
- SI 79
- 1 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)・KPブロック(-0.3cm)・茶褐色土ブロック(-1.2cm)少量、白色粒子微細、白色粘土粒子(-0.2cm)含む、炭化物ブロック(-0.3cm)微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・KP粒子(-0.2cm)少量、白色粒子微細、白色粘土ブロック(0.3cm)少量、焼土粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.2cm)微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量、白色粒子・白色粘土ブロック(-0.3cm)・焼土粒子(-0.2cm)微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)含む、ロームブロック(-0.5cm)微細、KP粒子(-0.1cm)少量、白色粒子微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・白色粒子少量、しまりや中強、粘性あり。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量、焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 7 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・白色粒子少量、しまりや中強、粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.2cm)少量、焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 9 暗褐色土 18層KP粒子微細。
 - 10 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・白色粒子・焼土粒子(-0.1cm)・炭化物ブロック(-0.5cm)少量、しまりあり、粘性あり。
 - 11 暗褐色土 ローム粒子→ブロック(0.5cm)含む、KPブロック(-0.3cm)少量、白色粒子微細、しまりあり、粘性あり。
 - 12 暗褐色土 ローム粒子→ブロック(0.5cm)含む、KPブロック(-0.3cm)少量、白色粒子・焼土粒子・炭化物粒子微細、しまりあり、粘性あり。
 - 13 暗褐色土 ローム粒子(-0.2cm)・KP粒子(-0.2cm)少量、白色粒子・焼土粒子(-0.2cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微細、しまりあり、粘性あり。
 - 14 暗褐色土 ローム粒子→ブロック(-0.5cm)含む、KP粒子(-0.2cm)・焼土粒子(-0.1cm)・炭化物粒子(-0.1cm)微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 15 暗褐色土 ローム粒子→ブロック(-1.2cm)少量、白色粒子微細、しまりあり、粘性あり。
 - 16 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)含む、KP粒子(-0.1cm)・白色粒子微細、しまりや中強、粘性あり。
 - 17 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.1cm)・白色粒子微細、しまりあり、粘性あり。
 - 18 暗褐色土 ローム粒子(-0.1cm)・KP粒子(-0.1cm)・白色粒子微細、しまりあり、粘性あり。

第48図 第79号竪穴建物跡実測図

SI-79



SI-80



第49图 第79・80号聚穴建物跡出土遺物実測図

第12表 第9号壁穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 保存状況
1 土師器 杯	口:[12.6] 底:一 高:(3.6)	内:ヨコナデ 外:(ナデ)体中〜ヘラケズリ(ヨコ) 口ヨコナデ 内〜外(口)ウルシ仕上げ	割れ口:10YR7/3 に 近い黄褐色 内外:10YR8/2 灰白 良	黒色ガラス質粒子微量	A区 SI-79 口縁部 1/8 残存
2 土師器 杯	口:[13.4] 底:一 高:(3.7)	「く」の字状 丸味を持って立ち上がる 内:ヨコナデ 外:ナデ→体中〜ヘラケズリ(ナメ) 口ヨコナデ 内〜外(口)ウルシ仕上げ	割れ口:10YR8/3 浅 黄褐色 内:10YR5/3 に近い 黄褐色 外:10YR4/1 褐色	白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子・透明 粒子微量	A区 SI-79 口縁部 1/4 残存
3 土師器 杯	口:[13.6] 底:一 高:(4.3)	灯明皿転用 内:ヨコナデ 外:ナデ→体下ヘラケズリ(ヨコ) 口〜体上ヨコナデ 内(口)〜外(口) スス付着 内〜外(口)ウルシカ	内外:7.5YR7/6 橙	白色粒子微量	A区 SI-79,SI-80B 口〜体部 1/4 残存
4 土師器 杯	口:15.4 底:7.0 高:5.3	ロクロ使用 黒色処理 内:ロクロ成形焼ミガキ(ヨコ) 6単位 右→左 底ミガキ→方向 外:ロクロ成形焼ミガキ 内面より長く長い単位 割傷により判然としな い。5〜6単位 右→左	内:N2/0 黒 外:10YR6/6 明黄褐色	白色粒子・黒色ガラ ス質粒子少量、赤色 粒子微量 良	A区 SI-79 No.2 完存
5 粗製土器 高	口:[9.5] 底:6.0 高:4.1	灯明皿転用 内:体ヘラケズリ→指ナデ→口ヨコナデ 口〜体上スス付着 外:体ヘラケズリ→指ナデ→口ヨコナデ スス付着か 底部回転糸切り 底中央部を除きヘラケズリ(底質は体下に見る)	内:10YR8/3 浅黄褐色 外:2.5Y7/2 灰黄	透明ガラス質粒子・ 黒色粒子微量 良	A区 SI-79 No.1 口縁部 1/2 欠損
6 土師器 甕	口:[16.0] 底:一 高:(5.2)	環状型 口縁立ち上がり丸味 内:ヨコナデ 外:体ヘラケズリ(タテ)→口ヨコナデ ヨコナデ下に体のヘラケズリ見 える 口(中位)スス付着	内:5YR6/6 橙 外:7.5YR6/4 に近い 橙	金雲母混入	A区 SI-79 No.3, 覆土 口縁部 1/4 残存
7 土師器 鉢	口:[20.8] 底:一 高:(7.6)	ロクロ使用 内:ミガキ(ヨコ)→黒色処理	内:N1.5/0 黒 外:7.5YR6/6 橙	白色粒子多量 良	A区 SI-79 口縁部 1/8 残存
8 須恵器 蓋	口:[15.4] 底:一 高:3.3	つまみ部高さ2.3cm 益子産 カスガ人か ロクロ成形 つまみ母蓋の中心軸からずれて付けられている 内:周部の一部に不整な自然釉 外:外側回転ヘラケズリ	内外:7.5Y6/1 灰 良	白色粒子・砂礫(φ 1〜3mm)少量 良	A区 SI-79 カマ ド 1/4 残存
9 須恵器 杯	口:[13.8] 底:[8.8] 高:4.1	益子産 ロクロ成形 底部ヘラ切りか	内外:5Y5/1 灰 良	白色粒子・白色礫(φ 1〜2mm)微量	A区 SI-79,SI-80B 口〜体部 1/4 残存
10 須恵器 杯	口:[12.6] 底:(6.4) 高:3.65	ロクロ成形 底部回転糸切り	内外:2.5Y5/2 暗灰 黄	白色粒子・黒色ガラ ス質粒子・透明ガラ ス質粒子少量 良	A区 SI-79,カマ ド No.1 1/6 残存
11 須恵器 杯	口:一 底:7.0 高:(1.1)	益子産 ロクロ成形 破面に赤色変色 破砕後散在か 底部回転糸切り後ヘラ切り	内:10YR4/1 褐色 外:2.5Y7/3 浅黄	礫(φ1〜4mm)微量, 白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子ごく微 量 良	A区 SI-79 カマ ド No.1,覆土 底部 1/2 残存
12 須恵器 杯	口:[14.7] 底:7.7 高:4.7	ロクロ成形 外:体下ヘラケズリが施されている可能性あり 底部回転ヘラ切り	内外:2.5Y7/1 灰白 良	黒色粒子・白色・褐色 小礫 やや良	A区 SI-79,SI-80B 口〜体部 1/4 残 存、底部 1/4 欠 損
13 須恵器 杯	口:[15.2] 底:[8.4] 高:3.7	灯明皿転用 ロクロ成形 内:口〜体・底一部スス付着 外(口)スス付着 底:二次底部面か 回転糸切り後ヘラ切りか ヘラ記号のような線があるが 不詳	内:2.5Y6/3 に近い 黄	白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子微量、 礫(φ1〜2mm) やや良	A区 SI-79 No.5, 覆土,SI-80B,C 口縁部 1/4,底部 一部欠損
14 須恵器 不明	口:一 底:一 高:(4.5)	最大径(19.0) ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(ヨコ) ヘラ幅は3.0cm前後か 底面の欠損は打ち欠けた可能性がある	内:7.5YR5/4 に近い 黄褐色 外:10YR7/3 に近い 黄褐色	白色粒子微量、透明 ガラス質粒子・砂礫 (φ0.5〜1mm)少量 良	A区 SI-79 体部 1/6 残存
15 男瓦	長:(26.8) 幅:(10.9) 厚:1.8	768.35g 粘土層仕上げ 産地不明 技術欠損 凹面:布目痕 凸面:押印き後タテ方向のヘラナデ 指痕あり 側面・凸端面:釉い面取り 特に凸端面は釉い	10YR6/3 に近い黄 褐色	黒色鉱物・白色粒子 多量	A区 SI-79 No.4 1/2 残存

るのか器種が判然としない。9世紀代の新治産であろう。土師器鉄鉢形土器7は時期は不詳であるが、内面に黒色処理を施すことから9世紀代の可能性が考えられよう。

図示し得なかった遺物は土師器、須恵器の小片、粘土塊 14.34gである。土師器、須恵器の小片は器種の判断の難しい破片もあり、器種は想定を含む。また、多くは時期不明である。土師器環は12片 82.12gが出土する。7世紀中葉までとみられる2片、7世紀代の8片を含む。何れもウルシ仕上げを施す。7世紀代に通行する内面～外面口縁部にウルシを塗布する模倣環であろう。胎土は白色のもの10片、橙色のもの2片である。土師器高環裾部の可能性のある破片1片 11.77g、台付き甕底部片1片 25.78gが出土する。土師器甕は、外面にタテ方向の粗いヘラミガキを施す破片が12と同じ位置から10片 156.76g、口縁部～頸部片5片 25.88g、甕と判断される破片5片 48.0g、胎土に金雲母を含む破片4片 13.4gが出土する。器種は不明であるが緻密な胎土の破片17片 138.94g、土師器とみられる微細片4片 7.68gが出土する。土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）2片 3.21g、内面黒色処理を施す2片 11.36gが出土する。須恵器環は新治産とみられる2片 12.09g、産地不明5片 17.16gが出土する。産地不明の5片は焼成が不良である。須恵器甕は益子産とみられる1片 7.51gが出土する。その他、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）あるいは須恵器環の破片とみられる4片 11.86gが出土する。

旧称第80号竪穴建物跡からは土師器環1、土師器碗（ロクロ使用・内面黒色処理）2、土師器甕4、須恵器環3、須恵器大型鉢5の他 124.85gが出土する。土師器環4は9世紀前半の常総型であろう。須恵器環3は詳細は不明であるが、8世紀前葉の三養産の可能性があろう。

図示し得なかった小片は土師器環8片 29.85g・甕15片 19.51g・常総型3片 17.06g、胎土が緻密な器種不明片3片 17.82g、土師器碗（ロクロ使用・内面ウルシ処理）2片 10.13g、須恵器環4片 14.17g・甕1片 16.31gである。土師器環は何れも胎土が白色で、ウルシ処理を施す破片が4片ある。須恵器環のうち1片は益子産、1片は三和産である。須恵器甕は平行肌を施す。第79号・第80号竪穴建物跡から出土する特徴の似た須恵器甕とは別個体である。

火処 4・5・7層をソデ、6層を火床と考え、カマドと判断したが判然としない。床面想定した部分に散在する焼土同様、谷部の焼土溜まりである可能性は否めない。焼土を含む層（3・6層）、白色粘土塊を含む層（2・4・5・7層）が交互に堆積する。

第13表 第80号竪穴建物跡出土遺物観察表

(単位:cm)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 現存状況
1 土師器 環	口: [11.6] 底: ー 高: (3.4)	内: ココナデ 外: ナデー体ヘラケズリ 口ココナデ 内～外 (口) ウルシ仕上げ	割れ口 10YR8/3 浅黄緑 内外 10YR6/3 に近い黄緑	白色粒子・黒色粒子 微量	A区 SI-80C 口縁部 1/6 現存
2 土師器 碗	口: [11.4] 底: ー 高: (3.7)	ロクロ使用 黒色処理 内: ミガキ 底部回転糸切り	内 A2/0 黒 外 10YR4/2 灰黄緑	白色粒子・ガラス質 粒子少量	A区 SI-80B 口縁部 1/4 現存
3 須恵器 環	口: [11.6] 底: ー 高: (3.6)	口外反 器高低い 三養産か	内 7.5YR5/4 に近い黄緑 外 10YR5/3 に近い黄緑	白色粒子少量、黒色 ガラス質粒子多量	A区 SI-80C 口縁部 1/6 現存
4 土師器 甕	口: [19.6] 底: ー 高: (6.3)	頸部型 口面つまみ上げ部 内面受口状 内: ヘラケズリ→ナデー→口ココナデ (ナデーよりヘラケズリは薄い) 外: ヘラケズリ→(ナデー)→口ココナデ	内外 7.5YR6/4 に近い黄緑	雲母個人 量	A区 SI-80C 口縁部 1/6 現存
5 須恵器 大型鉢	口: ー 底: ー 高: (10.3)	最大径: (19.0) 益子産 ロクロ成形 外: ヘラナデ後ロクロか ヘラナデは不規則に施される	内外 5Y5/1 灰	白色粒子・砂礫 (φ1～3mm) 少量	A区 SI-80B 体部 1/8 現存

第3章 確認された遺構と遺物

遺物出土状況 不掲載ではあるが、須恵器片カマド1はカマド10層あるいは12層から、須恵器蓋カマド2は覆土中から出土する。

出土遺物 須恵器環は8世紀第4四半期、須恵器蓋は9世紀第1四半期の可能性が考えられる。

第93号竪穴建物跡(SI-93)・第21号土坑(SK-21)(第28図 写真図版六・一二)

位置 A区M-9に位置する。A区西端にあり、遺構の1/2位上は調査区外にある。平坦面にあるが、削平による可能性もあろう。東約0.8mにSK-21がある。別遺構として調査を行ったが、SK-21をカマドとする建物跡である可能性があり、本項目で報告を行う。重複関係 SI-12と重複し、本遺構が古い。平面形状・規模 削平により建物跡の壁・床面は失われ、掘り方底面に近い状況といえる。掘り方は凹凸が著しく、細かな凹凸は図化し得なかった。このため、調査区西壁の土層の堆積状況や掘り方の凹凸によって平面形を推定した(第28図破線)。SK-21がカマドである場合、壁は推定より南・東側にあると推定され、一辺5mほどの建物跡と想定される。底面の凹凸の深さは5.0cm前後、p1は7.5cm、p2は14.5cm、p3は10.0cm、p4は11.5cm、p5は13.0cmである。主軸 N-25°-Eほどと推定される。床面 鹿沼軽石層を掘り方面とする。遺構確認面の標高は53.85m。SI-12と同様、付近にあるSI-59の床面レベルより低い。覆土 客土下に2層を確認した。鹿沼軽石層や茶褐色土など地山土のブロック状の混入物が多い。貼床状の堆積は確認されない。覆土最上層は床面直下ではなく、床面は更に上位にあったものと判断される。柱穴・壁溝・貯蔵穴・入り口施設・間仕切り溝 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

火処 明確に確認できなかったが、先述のとおり、SK-21がカマドである可能性がある。この場合、東壁に位置し、煙道は東壁を掘り込み建物跡外へ延びる。削平により火床・ソデ芯などカマド構築物は失われ掘り方向が残る状況である。覆土は12層を確認した。焼土を含む1～3層、ロームを含む4～6層、鹿沼軽石層を含む10～12層が順次堆積する。SK-21の掘り込みは鹿沼軽石層には達していない。

遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第4節 土坑

(1) 調査の概要

総数で39基を確認した。A区30基・B区5基・C区3基・D区1基である。第14・72号土坑からは陶磁器類、第46号土坑からはビー玉の出土があったことや、堆積する覆土の状況から古代以前の遺構の可能性は低いと判断される。また、古墳時代～古代の竪穴建物跡に伴う遺物が重複あるいは近接する土坑へ混入する可能性を考え、土坑から出土する古代以前の遺物については遺構外の遺物として扱うこととする。

A区丘第94・95号土坑は焼土が堆積し、周囲への焼土の散在も確認される。第94号土坑は丘陵部、第95号土坑は谷部に位置するが、谷部には遺構確認時に消滅した同種の焼土の堆積が数か所みられたことを付記する。

なお、A区第21号土坑については、近接する第93号竪穴建物跡のカマドの可能性を考慮し、第93号竪穴建物跡の項目中に記載する。

(2) 土坑

第5号土坑(SK-5)(第50図 写真図版一二)

位置 A区K-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形状で、西壁が影らむ。確認面の規模は長軸約1.11m・短軸約0.6m、底面の規模は長軸約1.0m・短軸約0.47m、確

認面からの深さは約0.19m、底面のレベルは53.0mである。主軸はN-38°-Eである。覆土 西壁寄りに残る。以西は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)で失われる。2層に分層される。ロームブロックを含む。

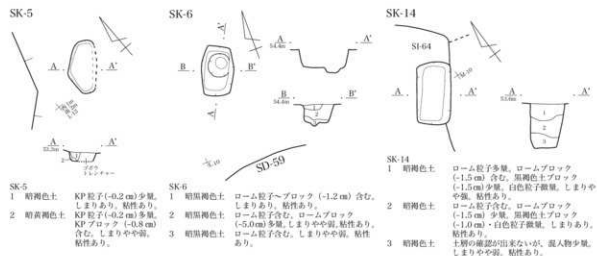
遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第6号土坑 (SK-6) (第50図 写真図版一二)

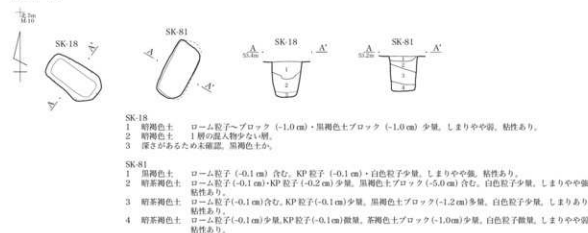
位置 A区K-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、東・西壁がやや膨らむ。底面中央北よりにピット状の掘り込みが確認される。確認面の規模は長軸約1.05m・短軸約0.7m、底面の長軸約0.84m・短軸約0.57m、確認面からの深さは約0.4m・ピット状の掘り込みまで約0.5m、底面のレベルは53.85m・ピット状の掘り込み53.77mである。主軸はN-28°-Eである。覆土 西壁寄りに残る。以西は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)で失われる。3層に分層される。ロームブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第14号土坑 (SK-14) (第50・51図 第14表 写真図版一二・一五・二一)

位置 A区M-10に位置する。重複関係 第64号壁穴建物跡と重複する。平面形状・規模・主軸 長方形で、長軸は谷に平行する。確認面の規模は長軸約1.3m・短軸約1.16m、底面の長軸0.72m・短軸約0.46m、確認面からの深さは約0.92m、底面のレベルは52.48mである。主軸はN-34°-Eである。



SK-18・81

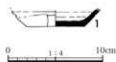


0 1:80 2m

第50図 第5・6・14・18・81号土坑実測図

第3章 確認された遺構と遺物

覆土 3層に分層される。下層の3層は深さがあるため十分な観察をし得なかった。何れの層もロームブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、須恵器環1の他、須恵器環口縁部(益子産)1片 1.19g、体部(産地不明)1片 3.84g、土師器環(a)1片 1.32g、埴(ロクロ使用ウルシ仕上げ)1片 1.78g、鉢類(胎土緻密)2片 54.86g、甕類4片 11.65g、甕類(常総型)2片 18.7gが出土する。須恵器環1は9世紀中葉とみられ、重複する第64号竪穴建物跡に関わる遺物があるものと考えられる。この他、陶器片が1片 16.6gが出土する。香炉などの鉢類とみられ、外面にオリブ軸を施し、施軸下端に半菊状の文様を陰刻する。内面は無軸である。本遺構は近世以降と判断される。



第51図 第14号土坑出土遺物実測図

第14表 第14号土坑出土遺物観察表

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	(単位:cm) 出土状況 残存状況
1 須恵器 環	口:一 底:[6.0] 高:(1.85)	新産産か ロクロ成形 外:体下ヘラケズリ(ココ)	内:N5/O 灰 外:S56/I 灰	白色粒子多量、砂粒・ 透明ガラス質粒子微 量	A区SK-14 底部 2/3 残存

第17号土坑 (SK-17) (第52図)

位置 A区M-9・10に位置する。南東側に位置する谷部に並行する。重複関係 SI-19と重複し、本遺構が新しい。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.34m・短軸約0.7m、底面の規模は長軸約1.18m・短軸約0.46m、確認面からの深さは約1.3m、底面レベル 52.09mである。主軸はN-39°-Eである。覆土 遺構が深く下半部の堆積状況は確認できなかったが、3層に分層される。ロームブロックや黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第18号土坑 (SK-18) (第51図)

位置 A区M-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、西南部がやや歪む。確認面の規模は長軸約1.24m・短軸約0.44m、底面の規模は長軸約1.0m・短軸約0.4m、確認面からの深さは0.78m、底面のレベルは53.47mである。主軸はN-54°-Wである。覆土 3層に分層される。遺構が深く2・3層の分層部は確認できなかった。ロームブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器環(a)1片 2.71g・鉢類1片 5.88gが出土する。本遺構に伴う遺物ではないと判断される。

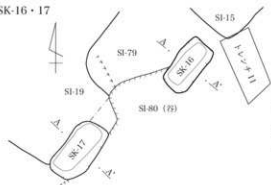
第22号土坑 (SK-22) (第16図)

位置 A区K-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。トレンチ5北西隅部に確認し、トレンチを拡張して調査を行った。平面形状・規模・主軸 円形状で、トレンチ5底面での径約1.0mである。遺構確認面から1.5mほど下位にトレンチ底面での確認であるため、安全を配慮し、覆土の除去は見合わせた。土坑としたが、形状や深さから井戸跡の可能性も残る。覆土 黒色土で粘性を帯びる。特に水分を含む等の所見はない。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第23号土坑 (SK-23) (第52図)

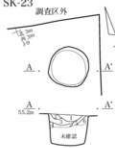
位置 A区西K-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形状で、確認面の径は約0.84m、底面の径は0.71～0.74m、確認面からの深さは0.67m、底面のレベルは53.47mである。覆土 遺構が深く下半部の堆積状況は確認できなかったが、上部は3層に分層される。ロームブロックや黒褐色土ブロック、暗褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

SK-16・17



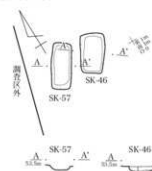
- SK-16
- SK-17
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック (-1.0 cm)・白色粒子微量、しまりあり、粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子含む、ロームブロック (-1.2 cm) 微量、白色粒子微量、黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 含む、しまりあり、粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm) 含む、ロームブロック (-3.0 cm)・黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量、白色粒子微量、しまりあり、粘性あり。

SK-23



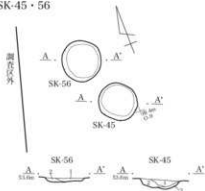
- SK-23
- 1 暗黒褐色土 ローム粒子へブロック (-1.0 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 含む、暗黒褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量、しまり強、粘性あり。
 - 2 暗黒褐色土 ローム粒子へブロック (-1.5 cm) 含む、KP 粒子 (-0.2 cm) 少量、しまり強、粘性あり。
 - 3 暗黒褐色土 ローム粒子へブロック (-0.8 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 少量、暗黒褐色土ブロック (-1.0 cm) の中多量、しまりやや強、粘性あり。
 - 4 暗黒褐色土 ローム粒子へブロック (-0.5 cm)・暗褐色土ブロック (-1.0 cm) 少量、しまりやや強、粘性あり。
 - 5 暗黒褐色土 ローム粒子へブロック (-0.5 cm)・KP 粒子 (-0.2 cm) 含む、暗黒褐色土ブロック (-0.5 cm) 少量、しまりやや強、粘性あり。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子へブロック (-1.0 cm) 含む、KP 粒子 (-0.2 cm) 少量、しまりやや強、粘性あり。

SK-46・57



- SK-46
- 1 暗茶褐色土 KP 土ブロック (-0.3 cm) 多量、黒色土ブロック (-0.5 cm) 少量、しまりやや弱、粘性あり。
 - 2 暗黒褐色土 地山+1割。

SK-45・56



- SK-45
- 1 暗黒褐色土 KP 粒子 (-0.2 cm) 微量、暗茶褐色土(地山)ブロック (-1.5 cm) 少量、白色粒子微量、しまりあり、粘性あり。
 - 2 暗褐色土 KP 粒子 (-0.1 cm) 微量、暗茶褐色土(地山)ブロック (-1.5 cm) 含む、炭化物粒子 (-0.2 cm) 微量、しまりあり、粘性あり。
 - 3 暗黒褐色土 KP 粒子 (-0.2 cm) 微量、白色粒子少量、しまりやや強、粘性あり。

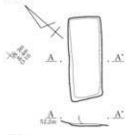
- SK-56
- 1 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1 cm)・白色粒子 (-0.1 cm) 微量、しまりあり、粘性あり。
 - 2 暗褐色土 1割より明色、ローム粒子 (-0.1 cm)・白色粒子 (-0.1 cm) 微量、1割より微量、しまりあり、粘性あり。

SK-50



- SK-50
- 1 茶褐色土 SK-49の1割と同様。

SK-51



- SK-51
- 1 茶褐色土 SK-49と同様、SK-49よりKP大きい (-0.3 cm)。

SK-52



- SK-52
- 1 茶褐色土 黒色土ブロック (-2.0 cm) 少量、しまりあり、粘性あり。
 - 2 茶褐色土 黒色土ブロック (-2.0 cm) 多量、しまりあり、粘性あり。

0 1:80 2m

第52図 第16・17・23・45・46・50・51・52・56・57号土坑実測図

第45号土坑 (SK-45) (第52図 写真図版一三)

位置 A区N-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 やや東西に長い円形形状で、確認面の径は東西約0.82m・南北約0.76m、底面の径は東西約0.7m・南北約0.64m、確認面からの深さ0.2m前後、底面レベル53.31mである。覆土 3層に分層される。ロームブロックや黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器環 (b) 体部1片2.26gが出土する。本遺構に伴う遺物ではないと判断される。

第46号土坑 (SK-46) (第52図 写真図版一三)

位置 A区N-8に位置する。南東側に位置する谷部に並行する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約0.46m・短軸0.3～0.32m、底面の規模は長軸約0.72m・短軸約0.38m、確認面からの深さは約0.12m、底面レベル53.28mである。主軸はN-28°-Eである。覆土 1層が堆積する。鹿沼軽石ブロックを含む。遺物出土状況 ガラス製のビー玉(径約1.2cm)が出土する。

第47号土坑 (SK-47) (第53図 写真図版一三)

位置 A区O-8・9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形形状で、東壁がやや膨らむ。確認面の規模は長軸約1.57m・短軸約0.52m、底面の長軸約1.30m・短軸約0.36m、確認面からの深さは約0.53mである。主軸はN-60°-Wである。覆土 2層に分層される。暗茶褐色である。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第48号土坑 (SK-48) (第53図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形形状で、底面中央部にビット状の掘り込みが確認される。確認面の規模は長軸約0.90m・短軸約0.30m、底面の長軸約0.80m・短軸約0.40m、確認面からの深さは約0.24m、底面からビット状の掘り込みまで約0.50m、底面のレベルは52.83m・ビット状の掘り込み52.77mである。主軸はN-39°-Eである。覆土 2層に分層される。第47号土坑と同様の覆土である。底面のビット状の掘り込みは覆土下層の2層が堆積する。遺物出土状況 覆土中から、土師器甕3片9.67gが出土する。本遺構に伴うか判断としない。

第49号土坑 (SK-49) (第53図)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形形状で、確認面の規模は長軸約0.94m・短軸約0.32m、底面の長軸約0.83m・短軸約0.36m、確認面からの深さは約0.24m、底面のレベルは53.37mである。主軸はN-38°-Eである。覆土 2層に分層される。上面は近代以降のゴミの混入が確認される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

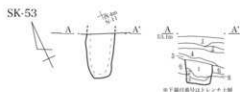
第50号土坑 (SK-50) (第52図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。掘乱土下に確認される。平面形状・規模・主軸 長方形形状で、確認面の規模は長軸約1.51m・短軸約0.56m、底面の長軸約1.35m・短軸約0.45m、確認面からの深さは約0.26m、底面のレベルは52.00mである。主軸はN-37°-Eである。覆土 茶褐色土の1層が堆積する。遺物出土状況 覆土中から、土師器環 (a) 1片2.41g、土師器塊 (ロクロ使用・内面黒色処理) 1片2.84g、土師器微細片4片7.87gが出土する。本遺構に伴うか判断としない。

第51号土坑 (SK-51) (第52図)

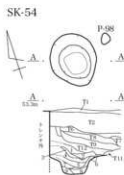
位置 A区O-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。掘乱土下に確認される。平面形状・規模・主軸 長方形形状で、確認面の規模は長軸約1.82m・短軸約0.71m、底面の長軸約1.65m・短軸約0.56m、確認面からの深さは約0.05m、底面のレベルは52.02mである。主軸はN-37°-Eである。覆土 茶褐色

土の1層が堆積する。遺物出土状況 覆土中から、土師器環(c)1片2.12g、土師器微細片1片6.03g、粘土塊1.49gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。



SK-53

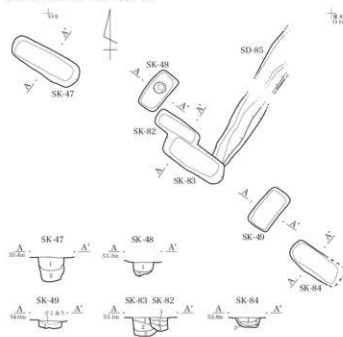
- SK-53
1 茶褐色土 KP 粒子微細、茶褐色土ブロック(地山/-1.0m)含む、黒色土ブロック(-1.0m)少量、しまりあり、粘性あり。
2 1層より茶褐色土ブロック多量、しまりあり、粘性あり。
3 2層より黒色土ブロック(-1.5m)やや多量、しまりあり、粘性あり。



SK-54

- SK-54
1 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)微細、KP 粒子(-0.2m)・暗褐色土ブロック(-1.0m)少量、暗褐色土ブロック(-1.2m)やや多量、白色粒子微細、しまり強、粘性あり。
2 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)微細、KP 粒子(-0.2m)・暗褐色土ブロック(-0.8m)・暗褐色土ブロック(-0.8m)・白色粒子少量、褐色粒子微細、しまりあり。
3 暗褐色土 ローム粒子(-0.1m)含む、ロームブロック(-0.8m)・KP 粒子(-0.1m)・暗褐色土ブロック(-1.0m)少量、白色粒子・炭化物粒子微細、しまりあり、粘性あり。
4 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-0.8m)微細、KP 粒子(-0.2m)・暗褐色土ブロック(-1.0m)少量、白色粒子・褐色粒子微細、しまり強、粘性あり。
5 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.0m)・KP 粒子(-0.2m)・暗褐色土ブロック(鉄分/-1.0m)・暗褐色土ブロック(-2.0m)少量、白色粒子微細、帯状に地盤方向(下方向)に沿って堆積、しまりやや弱、粘性あり。
6 暗褐色土 ローム粒子(-0.2m)含む、暗褐色土ブロック(-2.0m)・白色粒子微細、しまりあり、粘性あり。
7 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.0m)多量、暗褐色土ブロック(-0.8m)少量、しまりやや弱、粘性あり。
8 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.0m)やや多量、暗褐色土ブロック(-0.3m)含む、18層間隔、地盤方向に沿って帯状堆積、しまりあり、粘性あり。
9 暗褐色土 ローム粒子〜ブロック(-1.2m)やや多量、しまりあり、粘性あり。

SK-47・48・49・82・83・84



SK-47

- SK-47
1 暗茶褐色土 KP 微粒子含む、白色微粒子少量、しまりやや弱、粘性あり。
2 暗茶褐色土 KP 微粒子・白色微粒子少量、しまりやや弱、粘性あり。

SK-48

- SK-48
1 暗茶褐色土 KP ブロック(-0.3m)多量、黒色土ブロック(-0.5m)少量、しまりやや弱、粘性あり。
2 暗茶褐色土 地山+1層。

SK-49

- SK-49
1 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)少量、しまり弱、粘性弱。

SK-82

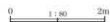
- SK-82
1 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-0.8m)少量、しまりやや弱、粘性あり。
2 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-1.0m)少量、しまりやや弱、粘性あり。
3 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-2.0m)少量、しまりやや弱、粘性あり。

SK-83

- SK-83
1 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-0.8m)少量、しまりやや弱、粘性あり。
2 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-1.2m)少量、しまりやや弱、粘性あり。
3 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-1.0m)少量、しまりやや弱、粘性あり。

SK-84

- SK-84
1 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-1.5m)含む、しまりやや弱、粘性あり。
2 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-1.2m)やや多量、しまりあり、粘性あり。
3 茶褐色土 KP 粒子(-0.1m)微細、茶褐色土ブロック(-1.0m)多量、しまりあり、粘性あり。



第53図 第47・48・49・53・54・82・83・84号土坑実測図

第52号土坑(SK-52)(第52図)

位置 A区M-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。南半部はトレンチ4内にある。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.28m・短軸0.72m、底面の規模は長軸約0.98m・短軸約0.48m、確認面からの深さは約0.62m、底面レベル52.15mである。主軸はN-26°-Eである。覆土 2層に分層される。黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器環(a)1片2.0g・(b)1片1.88g、土師器甕2片8.37gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第53号土坑(SK-53)(第53図)

位置 A区N-11に位置する。重複関係 重複する遺構はない。南半部はトレンチ4内にある。平面形状・規模・主軸 北半部を確認出来なかったが長方形で、確認面の規模は長軸約0.92m以上・短軸0.6m、底面の規模は短軸約0.47m、確認面からの深さは約0.5m、底面レベル52.02mである。主軸はN-35°-Eである。

覆土 3層に分層される。茶褐色土ブロック・黒褐色土ブロックを含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第54号土坑(SK-54)(第53図 写真図版一三・一七)

位置 A区K-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。トレンチ2内にある。トレンチの北西角部に遺構南西部1/4を確認した。セクション図作成後、トレンチを拡張し、平面図の作成を行った。平面形状・規模・主軸 円形状で、やや南北に長い。確認面の規模は長軸約0.12m・短軸約0.97m、中間部の長軸約0.76m・短軸約0.65m、底面の長軸約0.46m・短軸約0.42mである。トレンチ底面からの深さは約0.35m、トレンチ壁面の土層で確認できる深さは、1層以下0.67mである。底面のレベルは51.71mである。覆土

覆土は遺跡周辺の地形改変に伴う盛り土層下に残存する。1～9層に分層される。1・2層は暗褐色土や暗黒褐色土、6～9層はローム層の混入が多い。遺物出土状況 覆土中から、土師器環(a)1片22.23g、環(b)1片5.88gが出土する。本遺構に伴うか判然としない。

第56号土坑(SK-56)(第52図)

位置 A区N-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形状で、確認面の径は東西約0.82m・南北約0.83m、底面の径東0.7m前後、確認面からの深さは0.08m前後、底面レベル53.44mである。覆土 2層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第57号土坑(SK-57)(第52図)

位置 A区N-8に位置する。南東側に位置する谷部に並行する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約1.0m・短軸0.4～0.42m、底面の規模は長軸約0.85m・短軸約0.32m、確認面からの深さは約0.1m、底面レベル53.29mである。主軸はN-34°-Eである。覆土 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

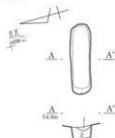
第66号土坑(SK-66)(第54図)

位置 C区J-7に位置する。重複関係 トレンチ2内にある。重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸方形状で、確認面の規模は長軸約1.5m・短軸約0.42m、底面の規模は長軸約0.32m・短軸約0.36m、確認面からの深さは約0.27m、底面レベル54.256mである。主軸はN-69°-Eである。覆土 2層に分層される。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第72号土坑(SK-72)(第55図)

位置 A区西側K-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、北壁はややオーバーハングする。確認面の規模は長軸約1.48m・短軸0.54m、底面の規模は長軸約1.46m・

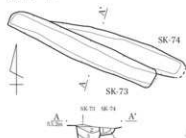
SK-66



SK-66

- 1 暗褐色土 KP 粒子~ブロック (-0.3m) 少量, 白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。
2 暗褐色土 KP 粒子~ブロック (-1.0m)・暗褐色土ブロック (-1.2m) 含む, 白色粒子微量, しまりやや強, 粘性あり。

SK-73・74



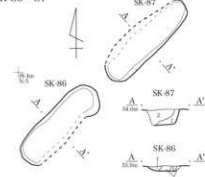
SK-73

- 1 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.6m) 含む, 暗褐色土ブロック (-0.8m) 少量, しまりやや強, 粘性あり。
2 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-1.0m) 含む, 暗褐色土粒子 (-0.2m) 少量, 1・3層より褐色, しまりやや強, 粘性あり。
3 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-1.5m) 中や多量, 暗褐色土ブロック (-1.0m) 少量, しまりやや強, 粘性あり。
4 暗褐色土 ロームブロック (-0.5m) 含む, ロームブロック (-1.5m) を斜に含む, しまりやや強, 粘性あり。

SK-74

- 1 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.5m) 含む, 暗褐色土ブロック (-1.0m) 少量, しまりあり, 粘性あり。
2 暗褐色土 ローム粒子~ブロック (-0.5m) 少量, しまりやや強, 粘性あり。

SK-86・87



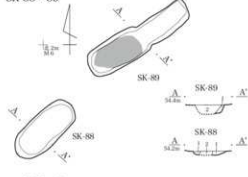
SK-86

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-0.5m) 微量, KP ブロック (-1.0m) 多量, 白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。
2 覆瓦 ゴボウトレンチャー

SK-87

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量, KP ブロック (-0.5m) 多量, 白色粒子微量, しまりやや強, 粘性あり。
2 覆瓦 ゴボウトレンチャー

SK-88・89



SK-88・89

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量, KP ブロック (-1.0m) 含む, 白色粒子微量, しまりあり, 粘性あり。
2 覆瓦 紙面, 暗褐色土に変色あり, ゴボウトレンチャー

SK-90



SK-90

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量, ロームブロック (-1.0m) 少量, KP ブロック (-1.0m) 含む, 黒色土ブロック (-0.8m)・白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。
2 暗褐色土 ローム粒子微量, ロームブロック (-0.5m) 少量, KP ブロック (-1.0m) 多量, KP ブロック (-7.0m) 少量, 黒色土ブロック (-0.5m)・白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-0.8m) 微量, KP ブロック (-1.0m)・KP ブロック (-3.0m) 含む, 白色粒子・黒色土ブロック (-0.5m) 微量, しまりやや強, 粘性あり。
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (-2.0m) 微量, KP ブロック (-0.8m) 少量, KP ブロック (-2.0m)・黒色土ブロック (-0.3m)・白色粒子微量, しまりあり, 粘性あり。
5 黒褐色土 ローム粒子・KP ブロック (-0.3m)・白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。

0 1:80 2m

SK-100・101 (遺構実測図: 第44図)

SK-100

- 1 暗褐色土 ローム粒子・KP 粒子 (-0.1m) 微量, 茶褐色土ブロック (-1.2m) 含む, 白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。
2 暗褐色土 ローム粒子微量, KP ブロック (-0.3m) 含む, 白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。
3 暗褐色土 ローム粒子・KP 粒子 (-0.1m)・白色粒子微量, しまり強, 粘性あり。

SK-101

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 微量, KP 粒子~ブロック (-1.0m) 多量, 白色粒子少量, しまりやや強, 粘性あり。
2 暗褐色土 ローム粒子 (-0.2m) 少量, KP 粒子~ブロック (-1.0m) 中や多量, 白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり。
3 暗褐色土 ローム粒子 (-0.1m) 微量, KP 粒子 (-0.1m) 少量, 茶褐色土ブロック (-2.0m)・白色粒子少量, しまりあり, 粘性あり。

第54図 第66・73・74・86・87・88・89・90・100・101号土坑実測図

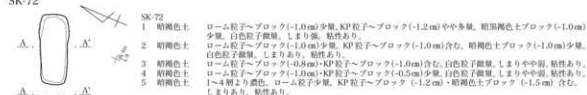
短軸約0.55m、確認面からの深さは約0.74mである。底面レベルは54.20mである。主軸はN-18°-Eである。

覆土 5層を確認した。ロームブロックが堆積する。遺物出土状況 覆土中層から、陶器脚部裾とみられる破片が1片4.87gが出土する。外面に白濁軸を施す。内面は無軸であるが、一部にオリーブ軸が残る。本遺構は近世以降と判断される。

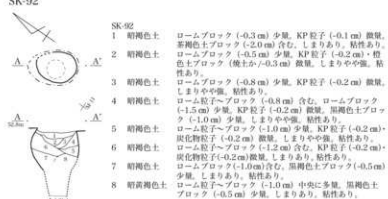
第73号土坑 (SK-73) (第54図)

位置 C区I-4に位置する。重複関係 第74号土坑と重複する。本遺構が新しい。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約3.38m・短軸0.5m、底面の規模は長軸約3.25m・短軸約0.24m、

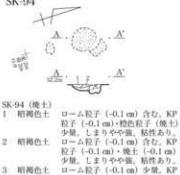
SK-72



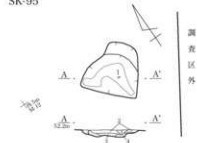
SK-92



SK-94



SK-95



SK-96



SK-97



第55図 第72・92・94・95・96・97号土坑実測図

確認面からの深さは約0.42mである。底面レベルは東端部で52.79m、SP-A付近52.69m、西端部52.62mで、東から西方向への傾斜がみられる。主軸はN-25°-Eである。形状や大きさは、第73号土坑・第74号土坑の特徴は共通点が多い。深さに差異があるが、同様に用途の遺構と判断される。覆土4層を確認した。ロームの堆積が観察される。遺物出土状況 第73号・第74号土坑の覆土中から、内耳土器底部片1片11.82gが出土する。胎土に金雲母を含む。本遺構に伴うか判断としない。

第74号土坑 (SK-74) (第54図)

位置 C区1-4に位置する。重複関係 第73号土坑と重複する。本遺構が古い。平面形状・規模・主軸 第73号土坑との重複のため不詳である。長方形で、確認面の規模は長軸約3.0m以上・短軸0.48m、底面の規模は長軸約2.56m・短軸約0.35m、確認面からの深さは約0.17mである。底面レベルは東端部で52.95m、中央部付近52.88m、現状での西端部52.72mで、東から西方向への傾斜がみられる。主軸はN-18°-Eである。形状や大きさは、第73号土坑・第74号土坑の特徴は共通点が多い。深さに差異があるが、同様に用途の遺構と判断される。覆土2層を確認した。ロームの堆積が観察される。遺物出土状況 第73号・第74号土坑の覆土中から、内耳土器底部片1片11.82gが出土する。胎土に金雲母を含む。この他、陶器脚部裾とみられる破片が1片4.87gが出土する。本遺構に伴うか判断としない。

第75号土坑 (SK-75) (第14図)

位置 D区に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 トレンチ21に確認した。円形状で、A区SK-22と同種とみられる。客土下の規模は径約1.10mである。トレンチ底面までの深さ約0.9m・レベル51.2m付近までを確認した。遺物出土状況 覆土中から、土師器甕底部1片96.48gが出土する。

第81号土坑 (SK-81) (第50図 写真図版一三)

位置 A区M-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形状で、北～東壁はオーバーハングする。確認面の規模は長軸約1.21m・短軸約0.63m、底面の規模は長軸約1.24m・短軸約0.63m、確認面からの深さは0.75m、底面レベル52.375mである。主軸はN-28°-Eである。覆土3層に分層される。黒色土ブロックを含む。遺物出土状況 覆土中から、土師器甕2片8.79gが出土する。本遺構に伴うか判断としない。

第82号土坑 (SK-82) (第53図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 第82・83号土坑が長軸方向に平行して重複する。また、SD-53と重複する。新旧関係は不明である。平面形状・規模・主軸 長方形状で、確認面の規模は長軸約1.45m・短軸約0.57m、底面の長軸約1.11m・短軸約0.40m、確認面からの深さは約0.38m、底面のレベルは52.60mである。主軸はN-57°-Wである。覆土3層に分層される。茶褐色土が堆積する。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第83号土坑 (SK-83) (第53図 写真図版一三)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 第82・83号土坑が長軸方向に平行して重複する。平面形状・規模・主軸 長方形状で、確認面の規模は長軸約1.04m・短軸約0.30m、底面の長軸約0.88m・短軸約0.26m、確認面からの深さは約0.26m、底面のレベルは52.75mである。主軸はN-56°-Wである。覆土3層に分層される。茶褐色土が堆積する。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第84号土坑 (SK-84) (第53図 写真図版一四)

位置 A区O-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 南東部の上端を失うが長方形状で、確認面の規模は長軸[1.24]m・短軸約0.40m、底面の長軸約1.06m・短軸約0.38m、

確認面からの深さは約0.20m、底面のレベルは52.47mである。主軸はN-56°-Wである。覆土3層に分層される。茶褐色土が堆積する。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第86号土坑 (SK-86) (第54図 写真図版一四)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸方形で、北壁の一部はオーバーハングするが、攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)に起因する可能性がある。また、西壁は同様の攪乱により部分的に失われている。確認面の規模は長軸約2.23m・短軸約0.72m、底面の規模は長軸約(2.16)m・短軸約(0.5)m、確認面からの深さは0.32m、底面レベル53.80mである。主軸はN-45°-Eである。覆土1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 確認されなかった。

第87号土坑 (SK-87) (第54図 写真図版一四)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸方形で、北東部が膨らむ形状にある。東壁の一部は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)により部分的に失われている。確認面の規模は長軸約2.1m・短軸約0.72m、底面の規模は長軸約(0.93)m・短軸約(0.47)m、確認面からの深さは0.11m、底面レベル53.74mである。主軸はN-45°-Eである。覆土1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第88号土坑 (SK-88) (第54図 写真図版二一)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 隅丸方形で、部分的に攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)により失われている。確認面の規模は長軸約1.32m・短軸約0.68m、底面の規模は長軸約1.32m・短軸約0.54m、確認面からの深さは0.1m、底面レベル53.995mである。主軸はN-45°-Eである。覆土1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。遺物出土状況 陶器1片5.3gが出土する。器種は判然としないが、緩い曲面の内側は灯明皿状の受け部を持ち、オリーブ軸を施す。曲面外側は無軸である。本遺構は近世以降と判断される。

第89号土坑 (SK-89) (第54図)

位置 B区M-5に位置する。重複関係 2坑が長軸方向で重複するような形状であるが、詳細は不明である。平面形状・規模・主軸 南側は隅丸方形、北側は長方形である。南側の西壁の一部は攪乱(牛蒡耕作のトレンチャー)により部分的に失われている。長軸は確認面で長軸約2.44m・底面で約2.3mである。南側部分は長軸[1.4]m・短軸約0.68m、底面の長軸約[1.2]m・短軸約0.55m、北側部分は長軸[1.2]m・短軸約0.52m、底面の長軸約[1.1]m・短軸約0.38mである。確認面からの深さは南・北側ともに約0.2m、底面レベルは南側54.06m、北側54.08mである。主軸はN-54°-Eである。覆土 中央部の堆積を確認した。1層が堆積する。鹿沼軽石を含む。南側の底面は暗赤褐色の変色が観察される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第90号土坑 (SK-90) (第54図)

位置 B区N-4に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形である。セクション図作成時には壁～底面にオーバーハングが観察されるため、平面図作成時までに降霜等によって原形状が失われたと判断される。このため、本遺構の平面図・断面図は図面として整合させていない。確認面の規模は長軸約2.1m・短軸約0.62m、底面の規模は長軸約2.0m・短軸約0.58m、確認面からの深さは約0.48m、底面レベル52.64mである。主軸はN-7°-Wである。覆土 5層が堆積する。主に鹿沼軽石を含む。底面に炭化物が散在する。北側の炭化物は床面から0.14mほど上位にあるが、これ以外は床面付近にある。

遺物出土状況 覆土中から、瓦側端部1片14.58gが出土する。内面に布目が残る。器種は判断し得ない。

また、磁器中丸碗1片3.75gが出土する。白磁で内外面は無文である。大正時代～昭和初期の量産品とみられる。本遺構の埋没時期と推定される。

第92号土坑 (SK-92) (第55図 写真図版一四)

位置 A区L-11に位置する。重複関係 第8号竪穴建物跡と重複する。本土坑が新しい。平面形状・規模・主軸 第8号竪穴建物跡床面で確認した。楕円形状で、オーバーハングする。深さ約1.45mまで覆土の除去を行ったが底面の確認には至らなかった。第8号竪穴建物跡床面での規模は長軸約0.84m・短軸約0.64m確認し得た最大規模は第8号竪穴建物跡床面から約0.4m下位で長軸約1.06m・短軸約0.69mである。第55図に示した堆積層下は底面を確認するために覆土を除去した範囲であり、断面形を示すものではない。主軸はN-35°-Wである。覆土 8層を確認した。遺物出土状況 覆土中から、須恵器甕1片5.69gが出土する。外面に平行叩きを施す。本遺構に伴うか判然としなない。

第94号土坑 (SK-94) (第55図 写真図版一四)

位置 A区N-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形状の浅い掘り込みで周囲に焼土が散在する。掘り込み部分の規模は径0.45m前後、深さ約0.48mである。覆土 4層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第95号土坑 (SK-95) (第55図 写真図版一四)

位置 A区M-12に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 平面形・底径とも不整な浅い掘り込みである。掘り込み部分1.1mほどの範囲で、深さ1.2mである。覆土 3層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第96号土坑 (SK-96) (第55図 写真図版一四)

位置 A区L-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約0.89m・短軸約0.50m、底面の長軸約0.74m・短軸約0.39m、確認面からの深さは約0.70m、底面のレベルは53.62mである。主軸はN-23°-Eである。覆土 5層に分層されるが1層は耕作土である。遺物出土状況 覆土中から、磁器中丸碗1片1.22gが出土する。文様は確認されない。

第97号土坑 (SK-97) (第55図 写真図版一四)

位置 A区L-9に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長方形で、確認面の規模は長軸約0.66m・短軸約0.36m、底面の長軸約0.45m・短軸約0.35m、確認面からの深さは約0.50m、底面のレベルは53.79mである。主軸はN-32°-Eである。覆土 3層に分層される。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第5節 ビット

(1) 調査の概要

総数で14基を確認した。A区5基・B区0基・C区5基・D南区4基である。何れも散在する傾向にある。径が小さく、覆土の堆積状況を記録し得たものは少ない。形状・配置等から欄列や掘立柱建物跡、建物跡などの柱穴となるものは認められなかった。

(2) ビット

第7号ビット (P-7) (第56図 写真図版一五)

位置 A区L-11に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、

確認面の径約0.30m、底面の径約0.17m、確認面からの深さは約0.10m、底面レベル53.68mである。

覆土1層を確認した。遺物出土状況 確認されなかった。

第11号ピット (P-11) (第16図 写真図版一五)

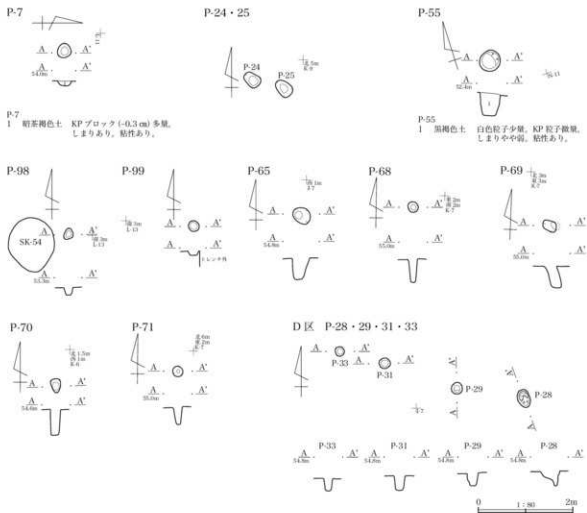
位置 A区L-10に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 確認面は円形状で径0.4m前後、底面は西側にオーバーハングし、東西0.3m・南北約0.16mである。確認面からの深さは約0.32m、底面レベル56.48mである。覆土1層を確認した。遺物出土状況 確認されなかった。

第24号ピット (P-24) (第56図)

位置 A西区K-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、確認面の長軸約0.36m・短軸約0.65m、底面の径約0.16m、確認面からの深さは約0.12m、底面レベル54.91mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第25号ピット (P-25) (第56図)

位置 A西区K-8に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、



第56図 第7・24・25・28・29・31・33・55・65・68・69・70・71・98・99号ピット実測図

確認面の長軸約0.36m・短軸約0.40m、底面の長軸約0.20m・短軸約0.14m、確認面からの深さは約0.85m、底面レベル54.95mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第28号ビット (P.28) (第56図)

位置 D南区H-7に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、確認面の長軸約0.4m・短軸約0.25m、確認面からの深さは約0.32m、底面レベル54.195mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第29号ビット (P.29) (第56図)

位置 D区H-7に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 長円形状で、確認面の長軸約0.26m・短軸約0.23m、確認面からの深さは約0.06m、底面レベル54.185mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第31号ビット (P.31) (第56図)

位置 D区H-6に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.2m、底面の径約0.1m、確認面からの深さ約0.26m、底面レベル54.075mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第33号ビット (P.30) (第56図)

位置 D区H-6に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.26m、底面の径約0.17m、確認面からの深さ約0.3m、底面レベル54.11mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第55号ビット (P.55) (第56図)

位置 A区M-10に位置する。トレンチ4内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径0.35m前後、底面径約0.13m、確認面からの深さ約0.48m、底面レベル51.71mである。覆土 堆積状況は確認し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第65号ビット (P.65) (第56図)

位置 C区J-7に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.22m、底面の径約0.12m、確認面からの深さ約0.54m、底面レベル54.10mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 確認されなかった。

第68号ビット (P.68) (第56図)

位置 C区J-6に位置する。トレンチ3内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.22m、底面の径約0.12m、確認面からの深さ約0.48m、底面レベル54.16mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第69号ビット (P.69) (第56図)

位置 C区K-6に位置する。トレンチ4内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 東西に長い円形で、確認面の長軸約0.29m、底面の長軸約0.22m、底面の長軸約0.22m、底面の長軸約0.16m、確認面からの深さ約0.45m、底面レベル54.27mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第70号ビット (P.70) (第56図)

位置 C区K-6に位置する。トレンチ4内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・

第3章 確認された遺構と遺物

主軸 東西に長い円形で、確認面の長軸約0.29m、底面の長軸約0.22m、底面の長軸約0.22m、底面の長軸約0.16m、確認面からの深さ約0.45m、底面レベル54.27mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第71号ピット (P-71) (第56図)

位置 C区K-6に位置する。トレンチ4内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.2m、底面の径約0.16m、確認面からの深さ約0.56m、底面レベル53.96mである。覆土 遺構が小さくセクションベルトを設けられず、観察し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第98号ピット (P-98) (第56図)

位置 A区K-13に位置する。トレンチ2内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 不整な円形で、確認面の長軸約0.23・短軸約0.18m、底面の長軸約0.13・短軸約0.1m、確認面からの深さ約0.16m、底面レベル51.95mである。覆土 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第99号ピット (P-99) (第56図)

位置 A区K-13に位置する。トレンチ2内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模・主軸 円形で、確認面の径約0.23m、底面の径約0.16m、確認面からの深さ約0.09m、底面レベル52.17mである。覆土 確認し得なかった。遺物出土状況 遺物の出土は確認されなかった。

第6節 溝状遺構

(1) 調査の概要

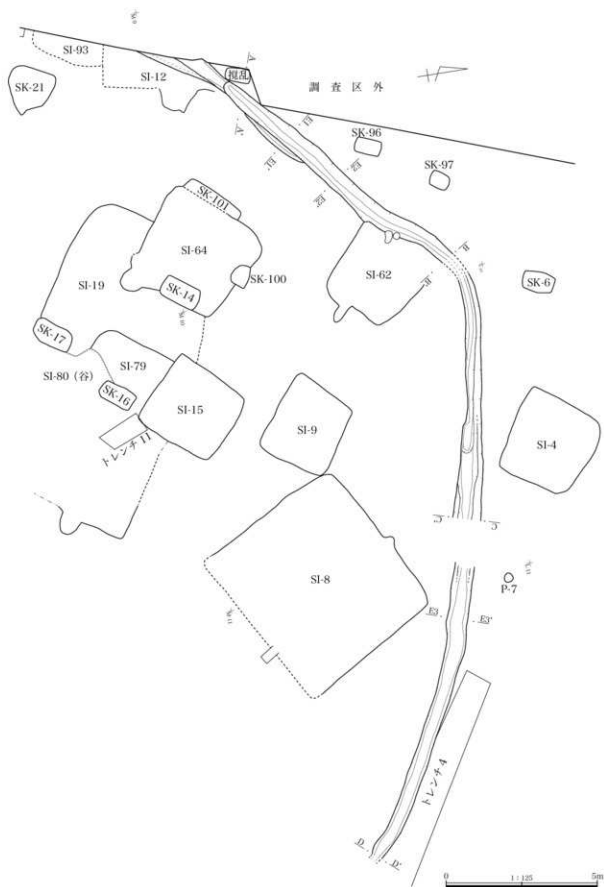
総数で4条が確認される。A区2条、B区1条、C区1条である。

A区第85号溝状遺構はA区内の土坑の主軸と同様であるとともに、丘陵東側の谷が延びる方向に沿う。また、C区第67号溝状遺構も丘陵西側への傾斜に平行して延びる。谷の延びる方向を意識したものと考えられる。B区第91号溝状遺構は、溝であるか判然としない。C区SD-67は詳細は不詳であるが、主軸がB区の土坑とあう。

(2) 溝状遺構

第59号溝状遺構 (SD-59) (第57～59図 第15表 写真図版一五・二一)

位置 A区L-9～12に位置する。重複関係 第12号・第62号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。平面形状・規模 L-10杭付近で屈曲する鉤の手状で、東側は谷部、西側は調査区外に延びる。SP-Dは谷部にかかる斜面下方であるが、これ以东の谷部では掘り込みが確認されなかった。SP-Dの観察からは本遺構の覆土と谷部の堆積土は異なる特徴であり、掘り込みを持たず谷部へ流れ込む可能性、或いは、削平のため失われた可能性が考えられる。長さは、西壁から屈曲部(西半部)まで約11.0m、屈曲部から谷部(東半部)まで直線で約19.6mである。東半部は北に膨らむ形状で、屈曲部での角度は145度前後である。底面からの立ち上がりはEP-1付近でテラス状、SP-C付近で屈曲する。調査時期が厳冬期であったため、霜等に溝壁の端部が失われた箇所もある。幅は概ね0.2～0.3mであるが、調査区西壁・東端部で0.2m、EP-1付近のテラス状の部分で0.4m、SP-C付近で0.46mである。本遺構付近の遺構確認面は、削平のため、南側に比べ北側が高い。北側の遺構確認面からの深さは、調査区西壁付近で0.15m、SP-A付近で0.545m、EP-

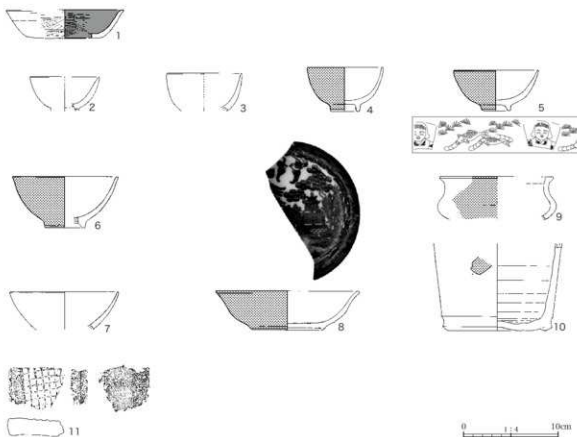


第57図 第59号溝状遺構実測図(1)

第3章 確認された遺構と遺物



第58図 第59号溝状遺構実測図(2)



第59図 第59号溝状遺構出土遺物実測図

第15表 第59号溝状遺構出土遺物観察表

番号 図種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 残存状況
1 土師器 坏	口:[12.4] 底:— 高:[3.0]	内面黒色処理 内:口端までミガキ 右→左 外:白ヨコナデ→ミガキ 右→左	内:外:7.5YR6/4 棕色 い相	白色粒子少量, 炭色 ガラス質粒子微量 炭	A区SD-59 口縁部1/8残存
2 磁器 小瓶	口:7.3 底:[3.0] 高:[3.6]	丸形 内:貫通 口縁部 形文様 体部の文様は帯状で蓋弁状に配する 外:無文	内:10BG8/0 外:10Y9/1 柄:5PB3/10		A区SD-59, 確認 調査8トレ溝 口→体部一部, 底 部1/2欠損

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 地成	出土状況 現存状況
3 磁器 小碗	口: [8.0] 底: [一] 高: (4.0)	丸形 内: 呉須 市松文様状の区画内に松葉文様・梅文様を型紙で配する 外: 無文	内外: 5B8/1 柄: 5PR2/8		A区 SD-59 口縁部 1/4 残存
4 磁器 小碗	口: 8.0 底: 3.2 高: 4.7	丸形 内: 呉須 短冊 短冊内「葉詠句 因富壽延」5と同時代か	内外: 5BG9/0		A区 SD-59 口～体部 2/3 残存、底部完存
5 磁器 小碗	口: 9.0 底: 3.2 高: 4.3	丸形 染料使用 大正末葉～昭和初期の量産品か 内: 無文 外: 人物・鹿・松? スタンプ、色調不明 高台底部は無軸	内外: 5PB9/0		A区 SD-59 口～体部 2/3 残存、底部完存
6 磁器 小碗	口: [11.2] 底: [4.2] 高: 5.4	丸形 無文 高台底部は無軸 高台底無軸である点から5と同時代か	内外: 5BG3/6		A区 SD-59 1/6 残存
7 磁器 小碗	口: [11.6] 底: [一] 高: (4.0)	丸形 内外: 雷文を地文とし、梅枝を型紙で配する	内外: 5PB3/8.5B9/1		A区 SD-59 口縁部 1/5 残存
8 陶器 皿類	口: 15.2 底: 7.6 高: 4.2	内: 呉須 椀底と底面の周囲にオシドリ 口縁緑珠文と格子文・幾何学文様・七宝文を型紙で配する 外: 無文 高台底部は無軸	外: 5B9/0 結柄: 5PR2/8		A区 SD-59 1/2 残存
9 磁器 鉢類	口: [12.0] 底: [一] 高: (4.5)	口縁上端～外面体部にかけて藍色軸を施軸 底部はベタ高台	内: 10Y9/1 外: 5PR2/8		A区 SD-59 口縁部 1/10 残存
10 陶器 瓶類	口: [一] 底: [10.4] 高: (9.2)	ロクロ成形 益子産 大正末葉～昭和初期くらいか 内外: 灰色軸施軸 外面全面に施軸されるが底面近く(梗下)にからかな 形あり 外: 鉄軸で文様を施す 底部回転ヘラ切り 施軸が均一 新しくない量産品	内: 5Y8/2 外: 10Y8/1		A区 SD-59 底部 1/2 残存
11 製斗瓦	長: (4.0) 幅: (6.0) 厚: 1.8	凸面: 格子文 側縁は無加工 側面はヘラケズリ、面取 凹面: 布目縁 側縁はヘラケズリ	7.5Y4/1 灰	石質・長石粒微細	A区 SD-59 一部残存

1-2間が最も深く0.62m前後、SP-B付近で0.5m、これ以东SP-C付近までに0.23mと浅くなる傾向にある。SP-C付近で谷部に向けて遺構確認とも深くなるためEP-3付近で0.58m、これ以东は徐々に浅くなり、東半部端では0.015mである。主軸 方位には沿っておらず、東半部N-98°-E、西半部N-120°-Wである。底面 底面は多少の凹凸が確認されるが、霜等の影響で詳細は確認しなかった。底面のレベルは、調査区西側端部53.82m、SP-A付近53.68m、EP-1-2間が最も深く53.5m、SP-B付近53.705m、SP-C付近53.53m、東半部端52.3mである。最も深いEP-1-2間から東西への傾斜がみられる。覆土 SP-A～Dは似た特徴を持つが、各層の異同を判じえず、各セクションごとに層番を付した。SP-A～Cは下層に多量の鹿沼軽石を含むが、SP-Dへの鹿沼軽石の混入は少ない。SP-Dが谷部にあたるためと判断できる。

遺物出土状況 覆土中から1072.07g出土する。

出土遺物 土師器環1は9世紀前半とみられる。陶磁器類は大正～昭和初期の量産品であろう。6は同種の破片が不掲載1片・A区表採4片・確認調査T8-1片(あわせて89.0g)ある。図示し得なかった遺物は何れも小片で、土師器環1片9.77g、土師器甕2片9.43g、土師器甕(常陸型)1片10.12g、須恵器甕2片35.6g、須恵器大型鉢1片20.18g、陶器23.02g、磁器60.64g、ガラス片3片5.85gである。

土師器環の胎土は白色でウルシ処理は施されない。須恵器甕は外面にタテ方向の平行叩きを施す。9世紀代の新治産であろう。陶器は急須片4片、内外面に灰白色軸を施す中丸碗片1片である。磁器は、中丸碗高台(二重割線・呉須・型紙)、中丸碗体部片(外面唐草文状・呉須・型紙)1片、小高碗(無文)、碗類(内外面青緑軸(Hue 5GB3-6)2片である。図示した陶磁器類と同時期であろう。ガラス片の時期は不明である。本遺構は陶磁器類の時期に埋没状態にあった溝状遺構である可能性が高い。

第67号溝状遺構(SD-67)(第60図)

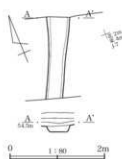
位置 C区J-7に位置する。トレンチ2内にある。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模

トレンチ2内南北方向に延びる。トレンチの短軸に沿うため、溝状遺構であるかどうかも判然としない。現状の長さは1.91m、幅は確認面で約0.37m、底面で約0.27m、確認面からの深さは約0.1mである。底面レベルは南端部54.294m・中央部54.278m・北端部54.9mで一方方向への傾斜はみられない。主軸はN-26°-Eである。覆土層番は2層を付したが、単層であろう。遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。

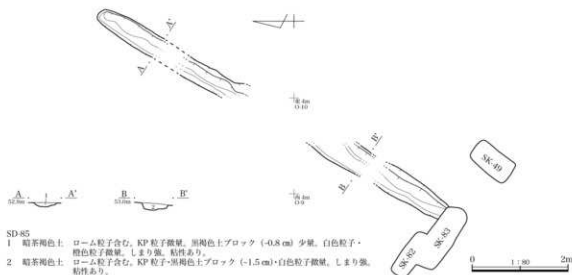
第85号溝状遺構 (SD-85) (第61図 写真図版一五)

位置 A区N・O-9に位置する。重複関係 第82・83号土坑と重複する。重複部は僅かとみられ、新旧関係は不明である。

平面形状・規模 北東-南西に直線的に延びる。第82・83号土坑以南は確認されない。重複部の幅と北端部の幅が同程度であることから、重複部付近が南端部に当たる可能性が考えられる。遺構確認面の高さはSP-A付近は平坦であるが、SP-B付近は斜面に沿って、やや西側が高い。長さは約8.28mである。幅は0.35～0.57mである。最も狭いのは南・北端部で約0.35m、最も広いのはSP-B南付近で約0.57mである。深さは、標高の低い谷側の遺構確認面から0.5～1.0mである。主軸 N-30°-Eである。底面 底面のレベルは、南端部52.75m、SP-B付近52.78m、SP-A付近52.73m、北端部52.75mである。多少の高低差はあるが、僅かではあるが南から北への傾斜は認められる。覆土層番は2層を付したが、単層であろう。遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。



第60図 第67号溝状遺構実測図



SD-85

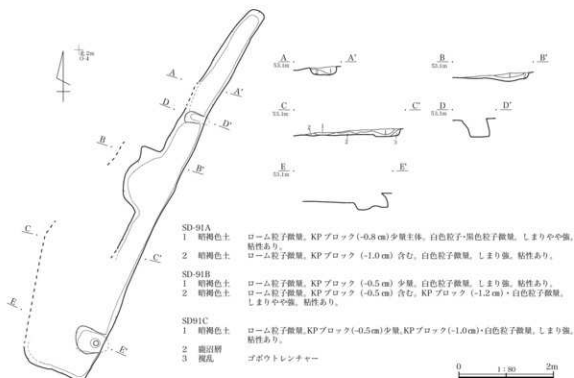
- 1 暗茶褐色土: ローム粒子含む、KP粒子微量、黒褐色土ブロック(-0.8cm)少量、白色粒子・橙色粒子微量、しまり強、粘性あり。
- 2 暗茶褐色土: ローム粒子含む、KP粒子・黒褐色土ブロック(-1.5cm)・白色粒子微量、しまり強、粘性あり。

第61図 第85号溝状遺構実測図

第91号溝状遺構 (SD-91) (第62図)

位置 B区O-3～4に位置する。重複関係 重複する遺構はない。平面形状・規模 南西-北東方向に直線的に延びる。東壁は直線的であるが、西壁は不整である。北半部の幅は狭いが南半部は幅広であり、南半部西壁から続く部分が北半部で失われたと考えられる。溝状遺構としたが、本調査以前の地形改変の痕跡である可能性もあろう。確認面での長さ約8.7m、底面での長さ約8.5m、幅は南半部での最大幅が約2.05m、

北半部は約0.43m、深さは東壁寄りで約0.16mである。主軸 N25°Eである。底面 多少の凹凸は確認される。地形に沿って北から南へ傾斜する。底面のレベルは、北端部52.99m、SP-A付近52.78m、SP-B付近52.67m、SP-C付近52.51m、南端52.39mである。覆土 2層を確認した。遺物出土状況 遺物の出土は確認されない。



第62図 第91号溝状遺構実測図

第4章 遺構外の出土遺物

第1節 調査の概要

遺構確認時およびグリッド調査、トレンチ調査、調査区内で出土した遺物を記載する。多くは図示し得ない小片である。図示した遺物については掲載番号を付して記載する。

グリッド調査はA区において実施した。

A区については、表土除去後の遺構確認面に縄文土器・石器、土師器、須恵器、陶磁器などが露出して確認される状況にある。第3章基本土層のとおり、調査区(A～D区)及び遺跡周辺の地形は大きく改変されており、遺物を包含する遺構や集落地は既に失われた箇所がある可能性が考えられる。改変以前は、小支谷が入り組み、比較的起伏に富んだ地形であったと推定され、集落域は谷に面した台地上にも立地したとの想定もできよう。

グリッドから出土する遺物の主体は縄文時代の土器・石器であるが、古墳時代～古代の竪穴建物跡が確認されたM-11、N-9・10・11グリッドを中心に土師器、須恵器が出土する。グリッド調査が遺跡全般に亘るものではなく、且つ、遺物包含層底面までの調査を行ったグリッドがM-11-cのみであることを考え合わせるならば、縄文時代の包含層であるのか、削平によって失われた台地上などからの転落、流入であるのか、明らかにし得ない。

当該調査においては、改変により失われた集落域の復元を期して、グリッドを設定し、遺構・遺物の確認作業を行った。調査は、A区内に打設した10m間隔の杭を基準に4分割し、第63図のとおり4m×4mのグリッドを設定した。グリッド番号のアルファベットは南北、数字は東西を表す。数字の大きいグリッドほど谷部に近い。確認された遺物のついでには、出土位置が明らかなものはグリッドごとに報告を行う。また、グリッド内で番号を付して取り上げた遺物はNo.を明記する。記載はアルファベット順に従って行う。なお、調査期間等の制約から、調査区全面に亘るグリッド設定、および、遺物包含層底面までの確認はなし得ない。また、各グリッドの堆積土除去は一律ではなく、各グリッドの土層除去深さは区別である。

B・C・D区については、遺構確認時、トレンチ調査時に確認した遺物について記載する。改変による土壌の移動、耕作等による人為的な流入の可能性が考えられる。

第2節 縄文時代の出土遺物 (第67・68図 第16表)

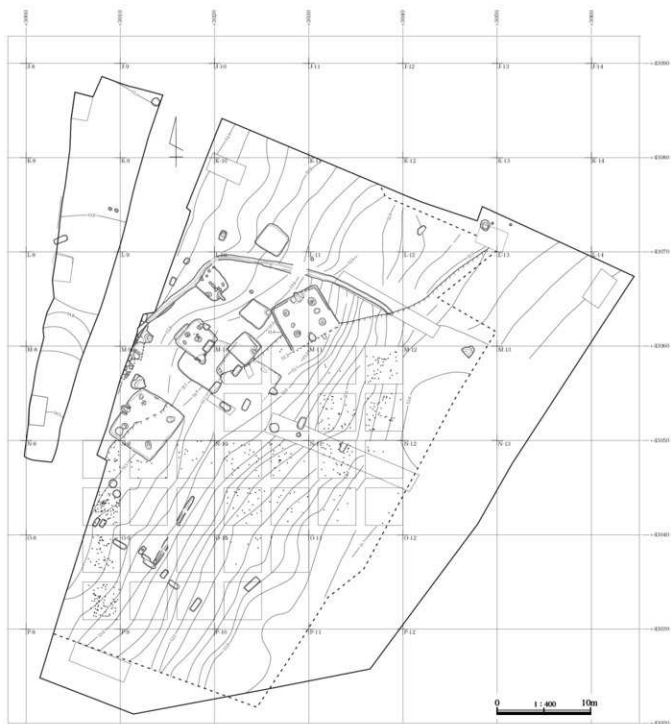
(1) 調査の概要

縄文時代の遺物は主にA区の遺構確認面およびグリッド調査、古墳時代以降の遺構覆土から出土する。縄文土器は早期を主体に小片で散在した状況で出土する。石器は縄文土器に並行する時期とみられ、土器同様に散在した状況で出土する。土器型式の細別については中村信博氏にご教示をいただいた。早期の遺跡については、概して、台地上に遺物が確認される傾向にあるとの指摘があり、本遺跡についても、改変により失われた台地上に集落域があったとの想定もできよう。

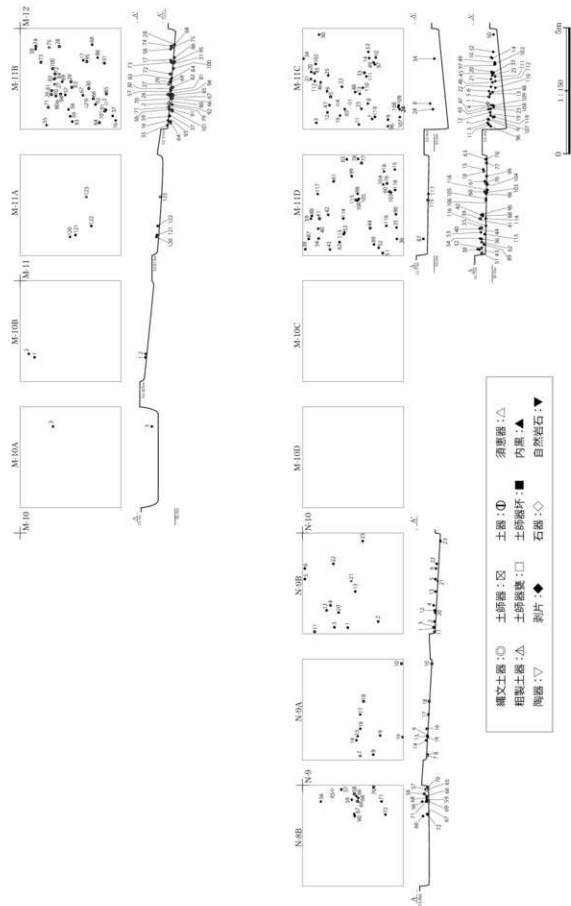
(2) 縄文土器

第1群 井草式 (第67図-1 写真図版二二)

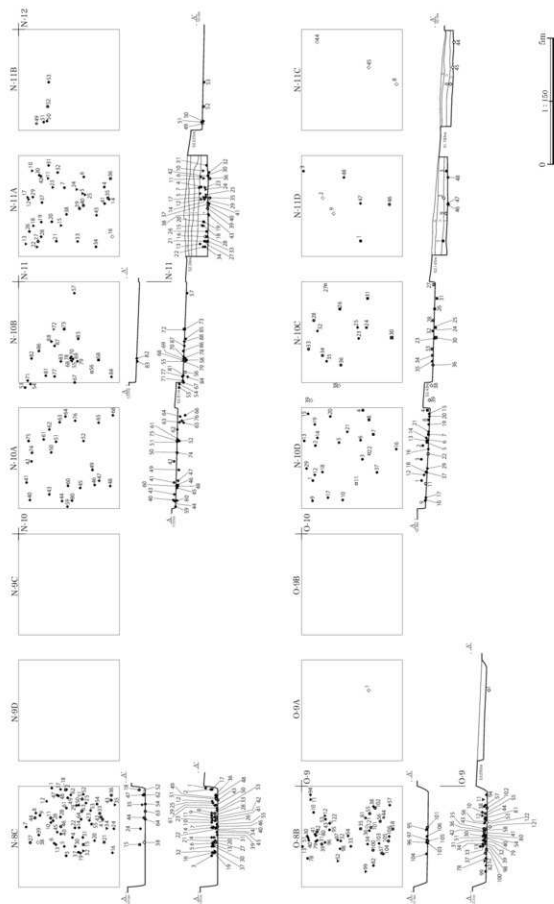
1は肥厚した口縁片である。口縁部は2帯の単節縄文をヨコ方向に施す。頸部の施文はない。体部は縄文を施す。胎土に透明ガラス質粒子の混入が目立つ。52.91g、井草1式であろう。



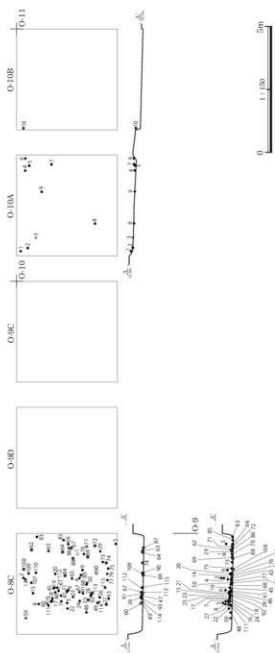
第 63 図 グリッド遺物出土状況図



第64図 グリッド遺物出土層位図(1)



第65図 グリッド遺物出土層位図(2)



第66図 グリッド遺物出土層位図(3)

11・12・13は貝殻腹縁文を充填した平行沈線で幾何学的な文様を描く。頸部に屈曲のある器形とみられる。11・13の内面はヨコ方向の丁寧なミガキが施される。11は44.49g、12・13は接合関係はないが同一個体とみられる小片を併せて、24.75g・42.83gである。8は沈線で幾何学的な文様を施す。13.37g。7は細沈線で鋸歯文を描く。平行する沈線間には刺突が斜めに施される。10.79g。13は剣先状の刺突を施す。裏面は微かに貝殻条痕がみえる。15.52g。14は剣先状の連続刺突を施す。器壁は薄く焼成は良好である。表面の貝殻条痕は消された可能性があろう。6.11g。10は細沈線で文様を施し、文様内の擦痕を擦り消す。6.01g。11・12・13・8は古段階、7・14・10は新段階とみられる。

この他、古段階とみられる破片は、内傾する口縁部で口縁上端部に沈線を施す小片1.74g、白色の器面に

第2群 天矢場式(第67図-2 写真図版二二)

2は外面にヨコ方向の擦痕が観察される。胎土には白色小礫が混入する。9.71g。小片のため明確ではないが、天矢場式の可能性があろう。

第3群 襷系文系の無文土器(第67図-3 写真図版二二)

3は無文の口縁部で、緻密な胎土と良好な焼成が観察される。4.79g。後期の可能性も否めないが、乾燥した器面と判断し、花輪台Ⅱ式の可能性を考えておきたい。

第4群 三戸式(第67図-4 写真図版二二)

4は平行な沈線を施す。7.57g。小片のため不明確ではないが、胎土の状況などから三戸式の可能性を指摘したい。

この他、帯状格子目文を施す口縁部片5.02g、帯状沈線文を施す体部片5.15g、帯状沈線文間に刺突が整列する体部片3.05gが出土する。

第5群 田戸下層式(第67図-5・6 写真図版二二)

5は平行沈線と沈線で描かれた三角形状の文様を配する。三角形状の文様の内部には貝殻腹縁文を充填すると推定した。17.39g。田戸下層Ⅰ層の破片であろう。6は体部の第一次区画文の破片とみられる。沈線間に刺突文を施す。刺突の断面は「V」字状である。74.58g。田戸下層Ⅱ層の破片であろう。

この他、図示していないが、平行沈線を施す体部2片(3.10g・7.93g)が出土する。小片のため判然としないが田戸下層Ⅰ層とみられる。

第6群 田戸上層式(第67図-7~14 写真図版二二)

11・12・13は貝殻腹縁文を充填した平行沈線で幾

沈線を施す体部片 1.32g、帯状の沈線で文様を描き内部に貝殻腹縁文を施す体部片 6片 27.93g、沈線のみが残る破片 3片 20.82g、貝殻腹縁文のみが残る破片 3片 20.82g が出土する。新段階とみられる破片は、表面は条痕に沈線を施し裏面擦痕の体部片 4.38g、平行な細沈線を施す体部片 2片 8.38g、鋸歯文を描く体部片 5.3g、短沈線をヨコ方向に施す体部片 4.36g、斜方向の刺突を施す体部片 0.92g が出土する。

第7群 出流原式 (第67図-15～26 写真図版二・二三)

18・19・20は口縁上端部に絡条体、口縁部下に明確な隆帯を施し、キザミを施文する。19・20の内面は貝殻条痕を施す。外面の条痕は極めて浅い。18は絡条体であろう。20は37.38g。19は胎土に透明ガラス質粒子の混入が目立つ。35.11g。18は9.14gである。16は口縁上端部に小四角状の刺突を施す。口縁部の文様、内面は不明瞭である。8.47g。15は絡条体圧痕を鋸歯状に配する。内面は貝殻条痕である。9.61g。型式が異なる可能性が残る。17は口縁上端部に絡条体圧痕、口縁部は刺突と沈線で文様を描く。11.64g。21は隆帯と沈線を配する。内面は櫛歯状条痕であろう。22は刺突と沈線で文様を描く。内面は磨滅する。17.23g。23・25は絡条体圧痕で文様を描く。25は7.96g、23は7.61g。24の内面は櫛歯状条痕、26の文様は絡条体圧痕とみられる。型式が異なる可能性が残る。24は19.91g、26は5.71gである。

第8群 細別型式不明の沈線文系 (第67図-27 写真図版二三)

27は細沈線を施す。同一個体とみられる2片を併せ30.98gである。

この他、小四角状の刺突を施す体部片 4.42g、へら状工具の先端で施文する体部片 3.44g、爪形の刺突を施す体部片 2片 11.43g、弛れた刺突を施す体部片 2片 6.90g、沈線で文様を施す体部片 8片 45.42g、隆帯の残る体部片 5.74g、有節沈線状の沈線を施す体部片 3.77g が出土する。他形式を含む可能性が残る。

また、胎土に金雲母を含み、1片 (2.68g) は内面に擦痕状の痕跡が観察される。

第9群 子母口式 (第67図-28 写真図版二三)

28は内外面に条痕を施すが工具は判然としなない。口縁上端部には絡条体を施す。7.16gである。

第10群 野鳥式 (第67図-30～36 写真図版二三)

31は微隆起線の区画内に斜方向の微隆起線を配する。微隆起線上には絡条体圧痕を施す。20.27g。30は口縁上端部に絡条体圧痕を施し、微隆起線と沈線で文様を描く。16.35g。33は沈線で文様を描く。口縁部は波状となる可能性があろう。外面は貝殻条痕を施す。9.28g。35は微隆起線で文様を描く。内・外面の貝殻条痕は浅い。14.07g。34は微隆起線で文様を描く。内外面は幅広い貝殻条痕で調整される。25.69g。36は沈線で文様を描く。外面は条痕が微かに観察される。器壁は薄い。4.95g。32は野鳥式の可能性を考え図示する。38.05g。いずれも内外面を条痕で調整する。量の多少はあるが、何れも胎土にガラス質粒子を含む。

この他、微隆起線で文様を描く口縁部 1片・体部 2片 12.28g、沈線で文様を描く口縁部 1片・体部 3片 17.68g、内外面を条痕で調整する口縁部 4片 26.93g、野鳥式とみられる微細片 2片 3.43g が出土する。

第11群 鶴ガ島台式 (第67図-29 写真図版二三)

29は突起片で外面は条痕で調整される。茅山下層式の可能性もあろう。8.01gである。胎土に白色粒子を含む。

第12群 茅山下層式 (第67図-37～52 写真図版二・三・四)

50の波頂部から垂下する隆帯はやや「ノ」字状で、両側に刺突を伴う。刺突は工具先端は浅い三つ山状である。70.39g。37は口縁上端部にキザミを施す。内面は条痕文、外面は擦痕状の調整が施される。28.13g。41・42は内側の口縁部片で口縁上端部にキザミを施す。42は5.50g、41は円形の刺突を施す。7.19g。40

は口縁上端部・外面に貝殻腹縁文を配する。4.55g。38は半載竹管で刺突を施す。11.43g。39は口縁部にキザミを施す。13.18g。49は隆帯に沿って刺突を施す。76.81g。44は複数列の刺突を施す。27.4g。43は隆帯を配し沈線区画内に先端の鋭いヘラ状工具で刺突を充填する。16.98g。45は押し引き状の刺突で文様を描く。隆帯上にはキザミを施す。27.90g。47は隆帯を配する。34.27g。48は櫛歯状の工具で凹形状のモチーフを描く。47.04g。52はコブ状の貼付文からキザミの沿う隆帯を配する。隆帯はやや弧状に見える。50.79g。51は平底の底部である。68.59g。器形や文様構成に判別できる破片はない。量の多少はあるが何れも胎土にガラス質粒子を含む。

この他、隆帯を配する体部片1片7.56g、隆帯に刺突を配する体部片3片55.68g、隆帯にキザミを配する体部片1片21.25g、隆帯に弛れたキザミを配する体部片1片9.25gが出土する。

第13群 茅山上層式 (第67図-53～58 写真図版二四)

53は波頂部の周囲及び内外面にキザミを施す。垂下する隆帯はやや弧状である。13.23g。54・56は口縁部に貝殻腹縁文を施す。56は10.08g、55は胎土に少量のガラス質粒子を含む。23.04g。54は内外面に条痕文のみが見える。口縁上端部に粗くキザミを配する。胎土に少量のガラス質粒子を含む。33.99g。58は貝殻腹縁文を施す。18.95g。57は底部付近の破片で貝殻腹縁文を施す。13.51g。

この他、口縁上端部にキザミを施す体部片4.95g、弛れた沈線を配する口縁部片9.79g、内外面に条痕文のみが見える口縁部片2片11.06g・体部片6.34g、貝殻腹縁文を配する体部片3片18.92gが出土する。貝殻腹縁文を配する体部片のうち2片は茅山上層式に並行する土器片の可能性のある。

第14群 下沼部式 (第68図-59～61 写真図版二四)

59は口縁端部が蛇行する形状であろう。13.62g。60は0段の絡条体圧痕を口縁上端部に間隔をあけて配する。胎土は脆弱である。5.80g。61はやや上げ底気味の尖底部である。18.66g。

第15群 常世2式 (第68図-63～72 写真図版二五)

67は口縁下に刺突を施す。63・64・65・66は口縁上端部、口縁部に絡条体圧痕を施す。64は口縁部の絡条体圧痕下に方向を違えた絡条体圧痕を配する。胎土に黒色透明ガラス質粒子を含む。25.16g。65・63の口縁部の絡条体圧痕は方向を違えて配される。65は11.58g、63は70.33g。66は胎土に黒色透明ガラス質粒子を含む。5.14g。68・69・70は体部に絡条体圧痕を施す。68は19.06g、69は8.65g、70は27.57g。71・72も体部に絡条体圧痕を施すが胎土や焼成は良好ではない。72は9.805g、71は胎土に白色透明ガラス質粒子を少量含む。13.26g。この他、口縁上端部と口縁部に絡条体圧痕を施す小片3.66g、体部に絡条体圧痕を施す14片133.63gが出土する。

第16群 遠下式と呼称されている土器 (第68図-73～76 写真図版二五)

75は波頂部から隆帯で区画した幅の狭い口縁部文様帯を作出し、内部に竹管状の工具で刺突を施す。12.72g。74は口縁部下の隆帯に刺突を伴う。隆帯には絡条体圧痕を施すが欠損により不明瞭である。21.43g。73は外面に縄文RLを施文する。27.33g。76は外面に櫛歯状工具による沈線、内面の条痕は磨滅するが櫛歯状工具の可能性があろう。12.74g。何れも胎土に白色小礫や透明ガラス質粒子を含むが73・74には目立つ。

第17群 条痕のみられる土器片 (第68図-77～81・83・87・88・118・119 写真図版二五～二六)

条痕を施す破片は2,142片ある。主体は貝殻条痕である。多くは茅山式の範疇と判断される。

口縁部6片、体部2片を図示する。何れも胎土に少量のガラス質粒子を含む。80は口縁部下の隆帯にキザミを伴う。内面の条痕は浅い。76.4g。77は波状口縁であろう。口縁上端部に貝殻腹縁文を施す。内外面

の条痕は浅い。10.44g。78は口縁上端部に粗くキザミを施す。貝殻条痕は外面にのみ見える。内面は磨滅により判然としなない。17.43g。83は口縁部に縦長の刺突を施す。同一破片とみられる1片を併せ5.73g。79は小突起あるいは波状口縁とみられる。15.51g。81は口縁上端部にキザミを施す。内面の条痕は浅い。外面は赤彩あるいは鉄分の付着がみられる。5.69g。87は内外面に条痕、外面に刺突を施す。24.01g。88は底部付近の破片で、凹線状の沈線が斜方向に施される。16.50g。この他、口縁上端部にキザミ、内外面に条痕を施す口縁部片4片20.28g、内外面に条痕を施す口縁部片11.18g、外面に条痕を施す口縁部片10.78g、無文の口縁部2.49g、剥落や大きな繊維脱落痕のある口縁部3片9.00g、刺突を施す口縁部1片・体部2片14.73g、凹線を施す口縁部1片、体部2片28.53g、沈線を施す体部片1.73g、貝殻腹縁を施す体部片4.55gが出土する。118・119は尖底部片である。何れも内外面に条痕を施す。119は20.19g。118は尖底付近まで条痕を施す。59.29gである。第9群以下、条痕は貝殻を主体に櫛歯状工具、擦痕状の痕跡が観察できる。

第18群 早期末葉から前期初頭 (第68図・82・84・85・89・90・93・94 写真図版二六)

93は外面に条痕あるいは櫛歯状工具による沈線が判然としなない。白色粒子や透明ガラス質粒子を少量含む。15.01g。この他、早期末葉とみられる破片は、内外面に条痕を施す口縁部5片、76.67g・体部片4片68.11g、内外面に条痕を施すが常世2式の可能性の残る体部片35.32g、内面に条痕を施し外面に絡条体あるいは縄文を施す体部片5.92g、外面に絡条体あるいは縄文を施す体部片6片30.03g、外面に条痕と沈線を施す口縁部10.35gが出土する。

82・84・85・90・94は外面に縄文、内面に条痕を施す。82・84の口縁部は小突起状である。82・84・90の内面の条痕は極めて浅い。胎土に透明なガラス質の細粒を含む。82は14.89g、84は11.31g、85は27.56g、90は28.88g、94は胎土に白色小礫を含む。55.00g。この他、内面に条痕、外面に縄文を施すとみられる体部片5片47.09g、縄文を施す体部片12片135.78g、内面は擦痕状で外面に縄文を施す体部片4.65gが出土する。何れも器面は脆弱である。

第19群 花積下層式

小片のため図示し得なかったが体部片2片が出土する。1片は0段多条縄文を施文する。胎土に繊維を含む。4.09g。1片はキザミを施す隆帯と0段多条縄文を施す。2.70g。

第20群 黒浜式 (第68図・86・91・92 写真図版二六)

86は内削の口縁端部で直線的に開く器形である。外面に単節縄文を施す。内面はケズられる。20.30g。92は複節縄文の地文に浅い押し引き状の沈線を施す体部片である。13.70g。91は単節縄文を施す体部片で、結節縄文が見える。繊維痕が顕著である。42.16g。何れも胎土に繊維を含む。この他、単節縄文を施す口縁部1片・体部5片22.06g、外面に単節縄文を施し外面をケズる体部片6片16.63g、半截竹管状工具で施文する体部片1.62gが出土する。何れも胎土に繊維を含む。

第21群 浮島式 (第68図・95～106 写真図版二六・二七)

95は半截竹管状工具による沈線で文様を描く口縁部片である。地文は貝殻腹縁とみられる。20.73g。浮島Ⅰ式とみられる。この他、浮島Ⅰ式とみられる擦糸文を地文とする体部片2片11.98gがある。104は変形爪型文下に時計回りの押し引き状に描かれる弧状の文様が僅かに残る。17.11g。浮島Ⅰb式の可能性を考えておきたい。105は貝殻腹縁を地文とする体部破片。下半の破片であろう。同一個体とみられる1片と併せ23.50g。浮島Ⅱ式の可能性が高いとみられる。この他、105と同種の体部片3片30.86gがある。97は口縁上端部の条線帯下に変形爪型文を横位に施す。98は口縁上端部の条線帯下に三角形の文様を施す。

49.04g。99は口縁部直下に三角文を施す。同一個体とみられる1片と併せ91.39g。101・102は変形爪形文を施す体部片である。101は37.61g、102は24.63g。100は変形爪形文による横位に施される矢羽状文であろう。半載竹管状工具によるとみられる。23.15g。97～100は浮島Ⅲ式であろう。96は口縁上端部のキザミ、口縁部の鋸歯状の文様の施文具は貝殻とみられる。7.73g。106は貝殻腹縁を「ハ」字状に施す。8.97g。103は半載竹管状工具による沈線下に貝殻腹縁がタテ方向に連続する。ロッキングの可能性も残るが判然としない。25.18g。その他、胎土や焼成の特徴から浮島式とみられる破片は半載竹管状工具による沈線を施す体部片5.91gがある。

第22群 諸磯式(第68図-107～110 写真図版二七)

110は地文に疎なら燃糸文1段Lを施し、半載竹管状工具で「米字文」的な文様を描く。半載竹管状工具の連結部上下には先端の細い棒状工具で縦長の刺突を施す。文様下には数条の半載竹管状工具による押し引きを施す。7.57g。燃糸文だが諸磯a式の可能性がある。その他、諸磯a式とみられる体部片2片がある。110と同種の体部片6.77g、縄文を地文とする小片21.42gである。109は波状の口縁部片である。断面は図右側の欠損部を図示した。欠損部には、イノシシなどの意匠があった可能性が考えられる。口縁部が屈曲する器形とみられる。ボタン状の貼り付けから浮線文が4条が口縁部に沿い、下部に対弧状に浮線文を配する。浮線文はキザミを伴う。判然としないが、地文は縄文であろう。27.91g。諸磯b式とみられる。107は「く」字に屈曲する口縁部片である。地文は燃糸文に見えるが判然としない。半載竹管状工具による沈線を粗く施す。15.77g。諸磯b式であろうか。その他、諸磯b式とみられる口縁部1片・体部3片13.65gがある。何れもキザミを伴う浮線文を施す。108は接合部で剥がれたとみられる体部片であろう。単節縄文RLを施す。3.53g。諸磯式の範疇と考えられる。その他、諸磯式の範疇と考えられる体部片6.04gが出土する。磨滅のため判然としないが、地文に半載竹管状工具による数条の沈線を施す。

第23群 前期とみられる縄文土器片(第68図-111～113 写真図版二七)

時期不明であるが、前期の可能性のある土器片を図示する。

113は沈線と棒状工具による文様を施す体部片である。文様は低平な円形の貼り付けを起点に施される。先端は細いが、さほど鋭利ではない棒状工具によるものとみられる。胎土に含まれる繊維は少ない。13.85g。111は半載竹管状工具による沈線と降帯を施す。燃糸文1段Lの地文を施す。胎土に繊維を含まない。内面の調整が第22群109と似るため、諸磯式の可能性もあろう。同一個体とみられる体部3片と併せ54.02g。112は単節縄文を地文とし結節文を施す。胎土に繊維を含まない。9.77g。

その他、前期とみられる破片は5片ある。

半載竹管状工具による沈線で米字文的な文様を施す体部片17.88gは黒浜式～諸磯式であろう。半載竹管状工具による沈線で円形が想起される弧状を描く体部片4.05gは浮島式あるいは諸磯式の可能性があろう。口縁部に縦位の条線帯を施す小片6.90g、無文部で菱形状の文様を施す体部片2.97g、爪形文を施す体部片4.38gは浮島式あるいは興津式であろう。

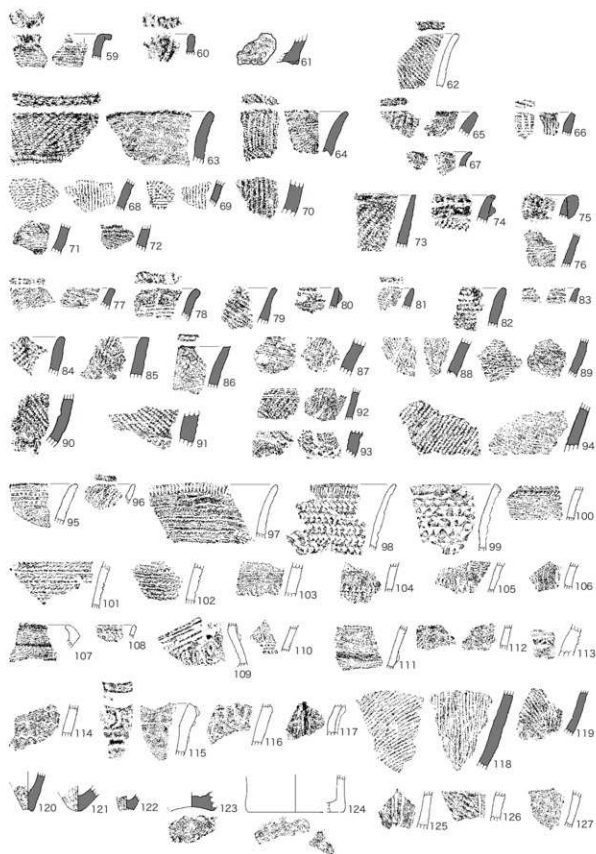
型式名は判断できないが、前期あるいは前期以降とみられる土器片は9片ある。無節縄文を施す体部2片は5.46gは前期以降であろう。地文は不明であるが結節文を施す体部2片14.38gは112と同種の可能性があろう。体部に燃糸文を施す体部片3片16.35gが出土する。このうち2片14.36gは113と似る。

第24群 前期末葉～中期初頭とみられる縄文土器片(第68図-62・114 写真図版二七)

62は外反する口縁部片で単節縄文RLを施文する。胎土にガラス質粒子を含む。41.44g。所謂、粟島台式であろう。



第67図 縄文土器実測図(1)



第68図 縄文土器実測図(2)

114は縄文を地文とし、ヨコ方向に結節文を施す。胎土に白色砂粒、白色小礫、透明ガラス質粒子を含む。32.83g。この他、同様の胎土の4片31.05gが出土する。口縁部片、剥落するが隆帯を施す体部片、無文の体部片である。

第25群 阿玉台式(第68図-115～117 写真図版二七)

115は断面三角形状の隆帯を施す。沈線は沿わない。30.49g。117は断面三角形状の隆帯が垂下する口縁部片で、沈線跡をぞった痕跡がみられる。17.48g。116は壁状圧痕がみえる体部片である。25.45g。阿玉台I b式とみられる。この他、胎土に金雲母や白色小礫などを含む体部片2片10.47g、胎土に金雲母などは含まないが阿玉台式の可能性が残る体部片4片74.61gがある。

第26群 中期とみられる縄文土器片(第68図-125・126 写真図版二七)

126は口縁部文様帯下の沈線が僅かに残る。体部には磨り消しを伴う数条一組の懸垂文が垂下する。加曾利EⅡ～Ⅲ式とみられる。21.58g。125は数条の垂下する沈線が施される。底部付近の破片であろう。加曾利EⅡ～Ⅲ式の可能性が考えられる。13.67g。

第27群 後期とみられる縄文土器片(第68図-127 写真図版二七)

127は平行する沈線が斜方向に延びる。半蔵竹管状工具とみられる。粗製土器の可能性を考えておきたい。18.45g。

第28群 底部片(第68図-120～124 写真図版二七)

型式の明らかでない底部片は54片ある。

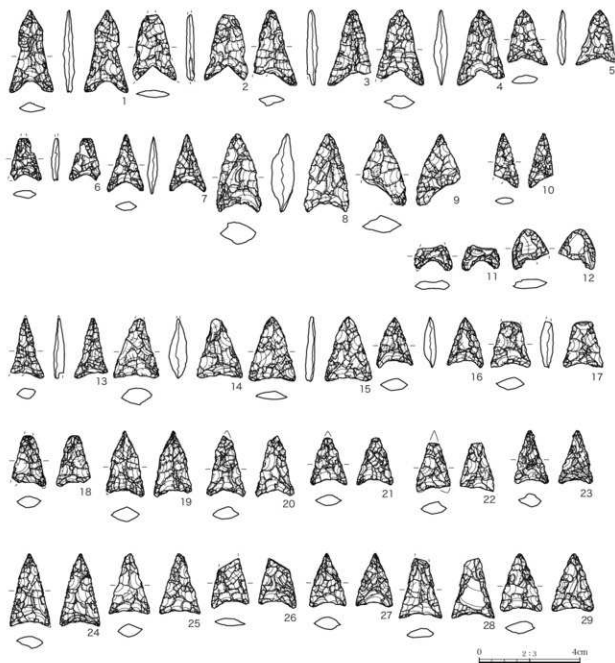
120・121・122は尖底である。121は外面に貝殻条痕を施す。透明ガラス質粒子を少量含む。21.01g。120は内面に貝殻条痕を施す。20.48g。122は外面に条痕を施す。櫛歯状工具あるいは絡糸体であろう。9.31g。123は上げ底気味の平底である。外面の整形は丁寧であるが内面は大きな繊維脱落痕が残る。27.44g。120・121・122・123は早期後半であろう。124は平底で体部外面はタテ方向にヘラミガキされる。底部の円板上に体部が立ち上がる。胎土は諸磯式などに似る。器形は後期中葉に似るが底部成形などから前期の可能性があろう。57.86g。

(3) 石器(第69～81図 第17・18表 写真図版二八・二九)

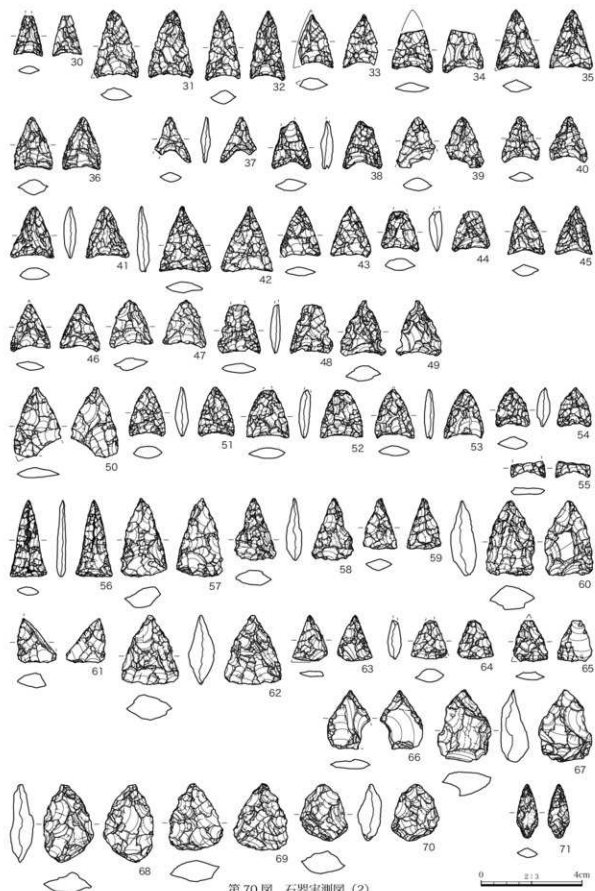
石器は、石鏃(1～74)、石鏃未製品(75～89・不掲載3点)、石錐(90～101)、石槍(102)、尖頭器(103～105)、くさび形石器(106～112)、石匙(113・114)、挿刺器類(115～150)、二次加工のある剥片(151～185)、二次加工のある剥片で一部に使用痕のあるもの(186～193)、使用痕のある剥片(194～223)、二次加工や使用痕が観察されない剥片(可能性のあるものを含め336片)、石核(224～231・不掲載1点)、礫器(232～236)、敲石(237)、三角錐状石器(238～240)、磨石・石皿類(241～269)が出土する。石器の観察については芹沢清八氏にご教示いただいた。

石鏃は、二等辺三角形状を呈し基部が凹基で深く側縁が直線的であるもの(1～11)、二等辺三角形状で基部が凹基で深く側縁が湾曲するもの(12)、二等辺三角形状で基部が凹基で浅く側縁が直線的であるもの(13～36)、正三角形状で基部が凹基のもの(37～54)、基部が平基のもの(56～67)、凹基のもの(68～70)、凸基のもの(71)、基部形状が不明のもの(72～74)に細別できる。8・9の側縁は若干丸みを持つ。32の平面形は先端部に屈曲がみられる。正三角形状の石鏃のうち、37～49の側縁は直線的、50～55は側縁が湾曲的で丸みを持つ。37の平面形は撥形状である。石鏃未製品の多くは製作過程で破損し放棄された可能性が考えられる。石錐の90～93はつまみを形づくるものである。94・95は欠損しているがつまみがあっ

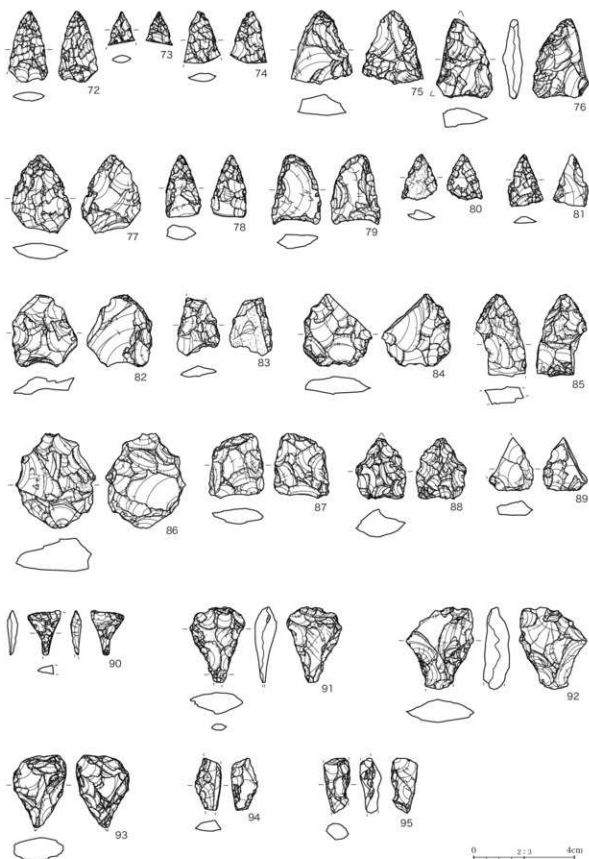
たと推定される。96～101は剥片の鋭利な部分を加工し錐部を作出する。石槍102は完成間近の未製品の可能性が残る。103～105は小型であることから尖頭器と判断した。製作中の破損品の可能性もあろう。くさび形石器(106～112)は両端部が細かく潰れており、櫛状の剥離が観察される。使用痕のある剥片のうち208は剥片の鋭利な縁辺を使用したとみられる。石核のうち224～227は層状チャートを使用する。平坦な礫面を上面(打面)とする。一部に使用痕が観察される。231は石器のようにも見えるが円礫の周縁から剥片を取る石材と判断される。礫器のうち234・236は片刃石器である。剥片石器の石材はチャートを主体とするが、黒曜石や珪質頁岩もみられる。個別の特徴や計測値は観察表に示した。



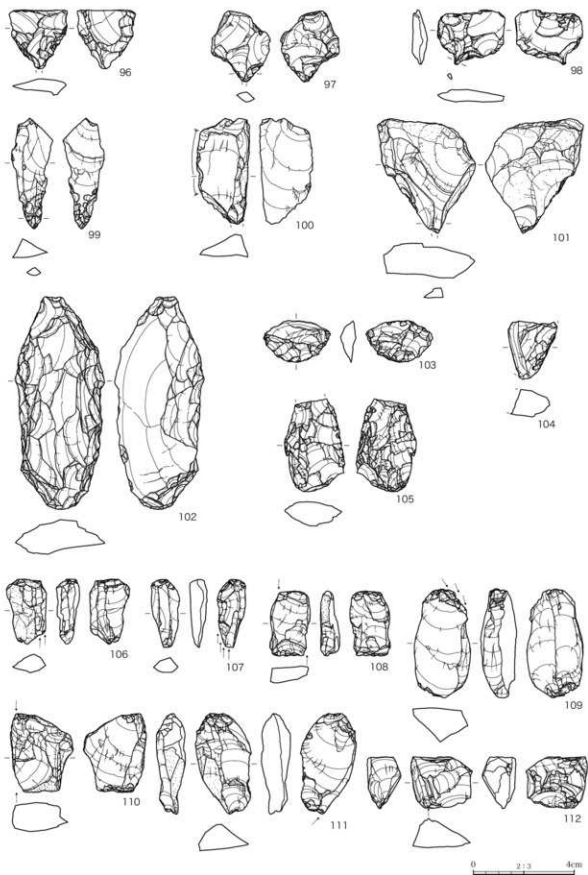
第69図 石器実測図(1)



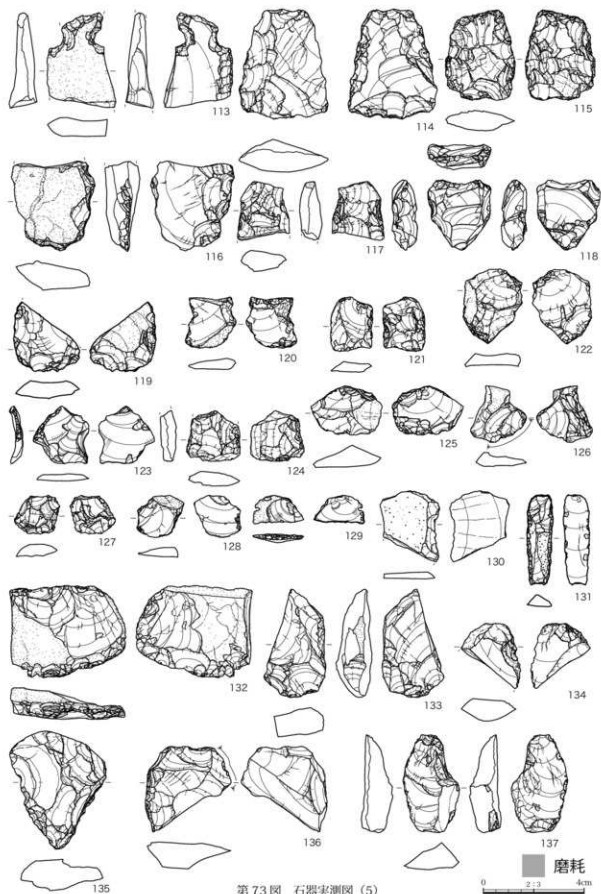
第70圖 石器実測圖(2)



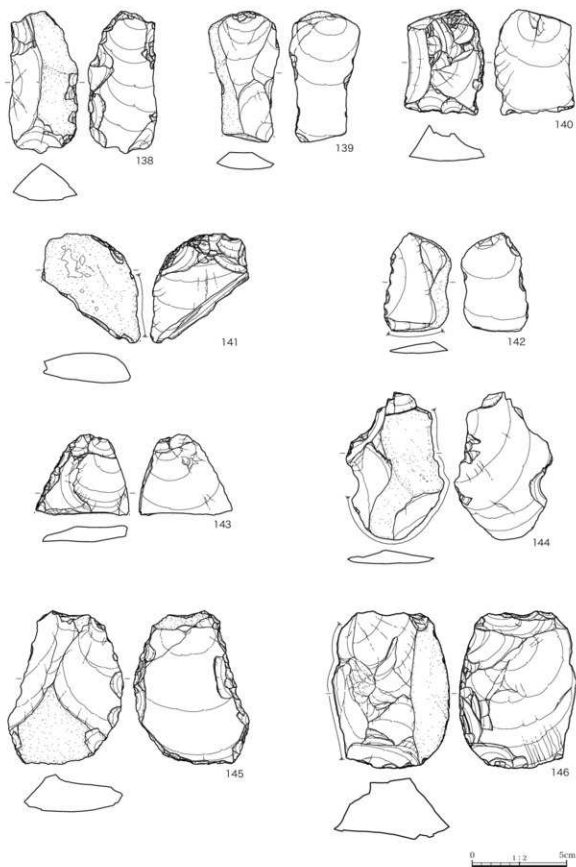
第71図 石器実測図(3)



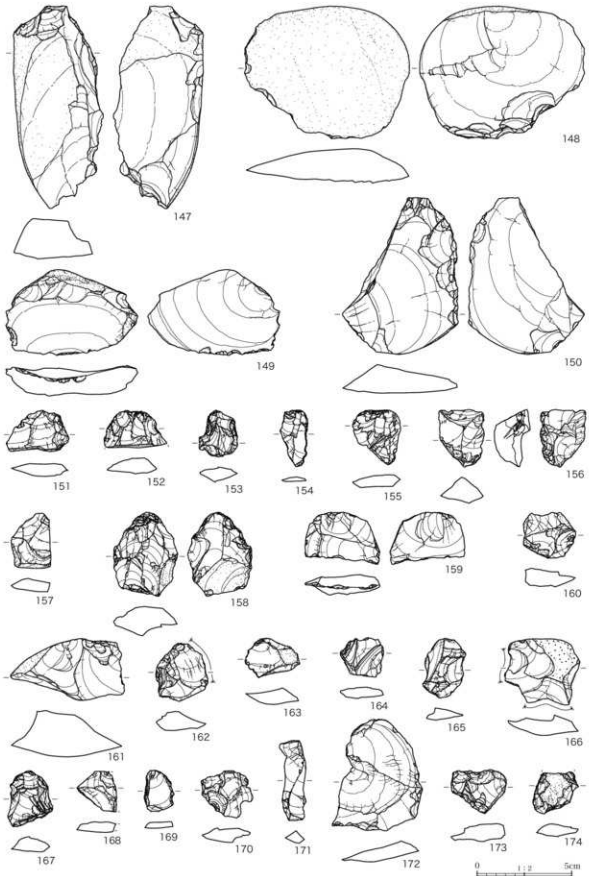
第72図 石器実測図(4)



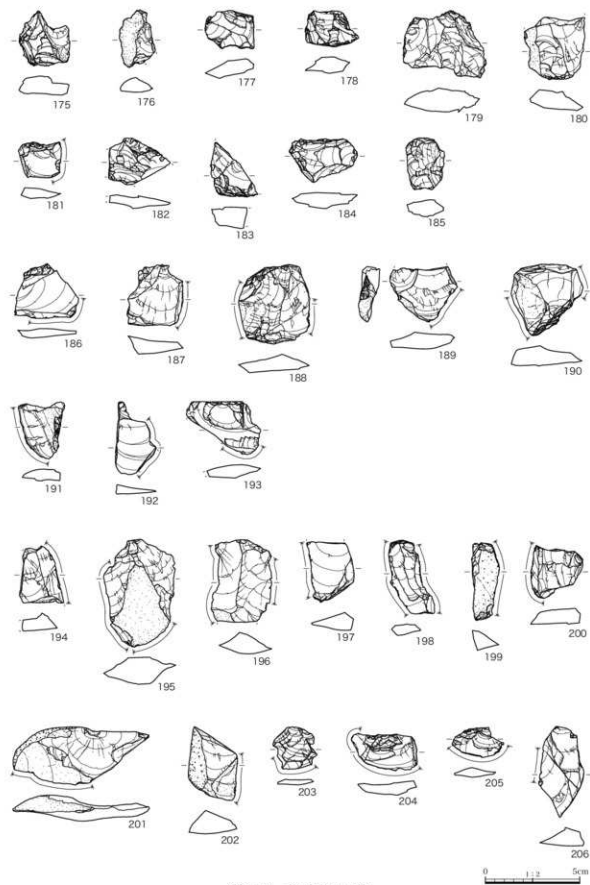
第73図 石器実測図(5)



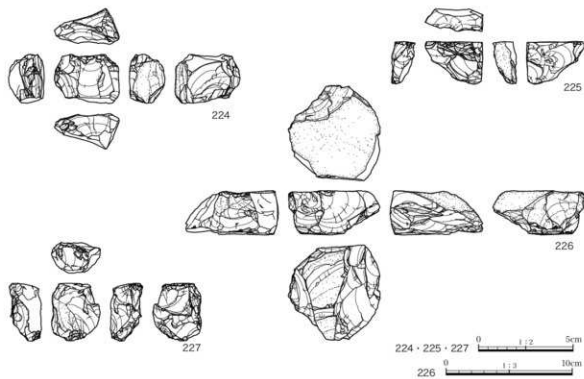
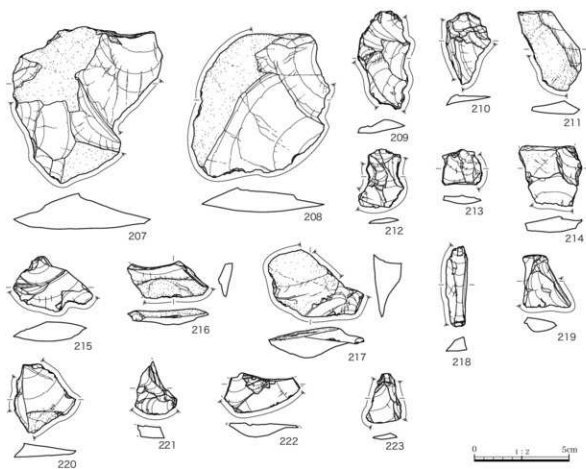
第74図 石器実測図(6)



第75図 石器実測図(7)



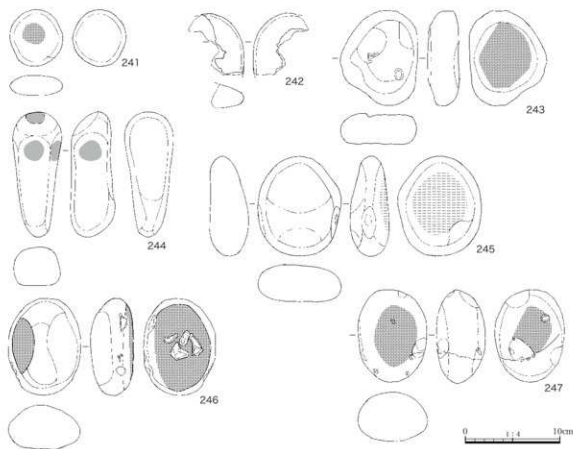
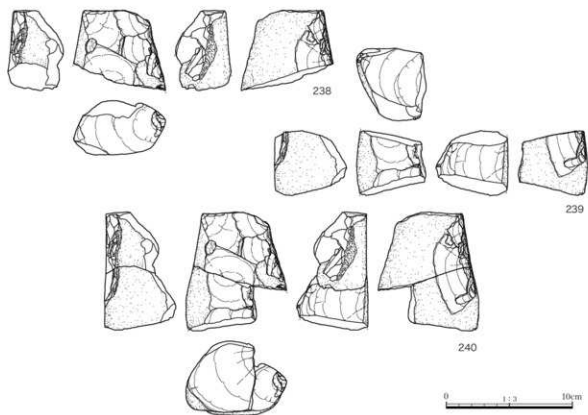
第76図 石器実測図(8)



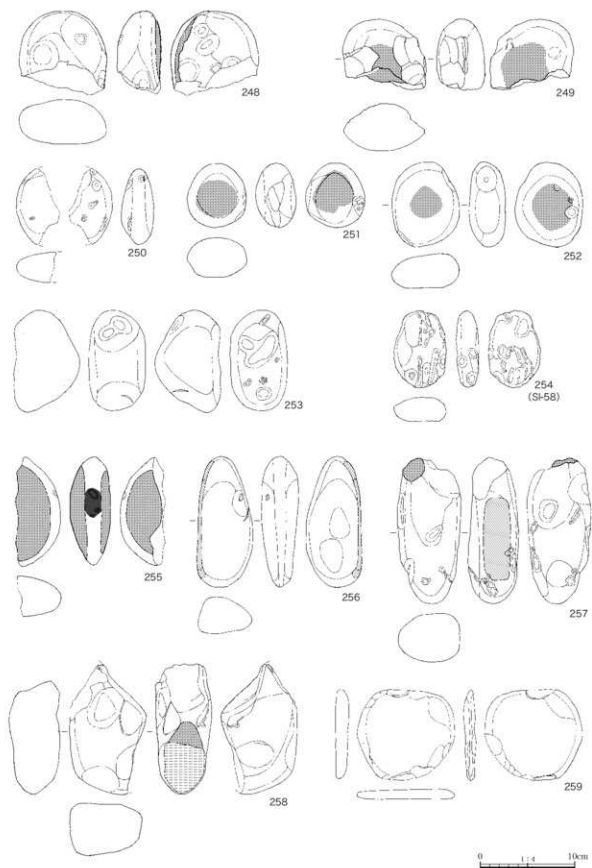
第77図 石器実測図(9)



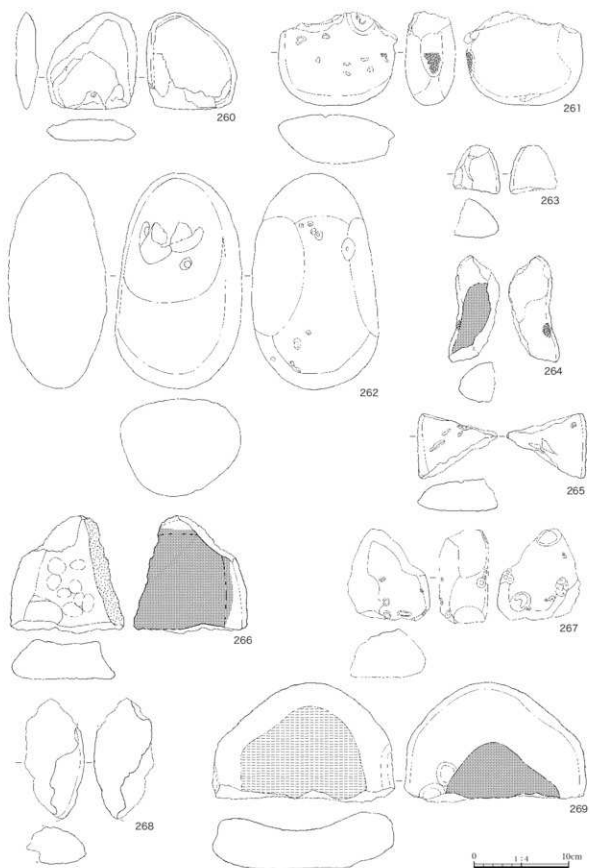
第78図 石器実測図(10)



第79図 石器実測図(11)



第80図 石器実測図(12)



第81図 石器実測図(13)

第17表 石器観察表(1)

№	区	クワッド (G)	C 柱番号	遺物名	目録 №	種類	遺存状況	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	特徴
1	A区			銃鏃	1	石鏃	左側部の一部欠損(片削り)	チャート	3.3	1.7	0.4	1.6	身体で先端部1段を削り、側面は部分滑面気味に磨削されている。基部は凹面に磨削されて凹面となる。身体は平く、側面は磨削面での凹面は浅く、上から下へ次第に薄くなる石鏃。
2	A区	N-9			2	石鏃	先端部・側部両側部欠損	チャート	(2.0)	(0.7)	0.3	1.3	身体が薄く、基部は前部が三角形に大きく凸起、側部の側面には基部から凹面部分の磨削が入る。
3	A区	N-11	b		4	石鏃	左側部欠損	チャート	(3.0)	(0.7)	0.4	1.5	二等辺三角形を先にする片削り型。磨削的な側面は側面中央にまでよく、磨削し-ンズ状態で発見。
4	A区			SI-15	5	石鏃	先端部・左側部欠損	チャート	3.0	(1.0)	0.5	1.9	両側面が平らと相対する。先端部は段状で丸頭状となり、側面は前部凹面に沿って凹面状。
5	A区	N-11	9		7	石鏃	欠存	チャート	2.2	1.6	0.3	0.9	先端が鋭く、両側面がほぼ平行な状態。側面は左右対称となる。身体は平基式で、側面は鋭い。
6	A区			SI-79	8	石鏃	先端部・両側部欠損	黒曜石	(1.7)	(1.2)	0.3	0.5	透明度の高い黒曜石を多用。小骨で二等辺三角形の両側面。断面は平基式で、側り分り状。
7	A区	M-11	e-1		10	石鏃	欠存	チャート	2.3	1.4	0.4	0.7	均整の取れた細めた細めた鋭い形状。表面的な二等辺三角形の両側面。
8	A区			SI-64	25	石鏃	欠存	貝質灰岩あるいは貝質燧石	3.1	1.8	0.9	3.7	交互に磨削により、側面がやや鋭角的となる大型な状態。断面は側面凹面で形成される。
9	A区			SI-79		石鏃	基部欠損	チャート	2.8	(1.7)	0.7	2.14	先端が鋭く、両側面がほぼ平行な状態。側面は左右対称となる。身体は平基式で、側面は鋭い。両側面から身体内に大きな鋭角の磨削し、そのため断面は磨削的な変形状態となる。
10	A区			SI-58		石鏃	左側部欠損	チャート	2.1	(1.0)	0.2	0.44	側面が二等辺三角形を先にし、基部側面は直「V」字状となる凹面。下側から連続する側面が身体中央の凹面により、厚く磨かれた石鏃。石目も非常に直。
11	A区	M-10	d			石鏃	上部欠損	黒曜石	(1.0)	1.5	0.4	0.4	基部は大きく凸起する凹面状で、両側面がほぼ平行な状態。側面は平基式で、側面は鋭い。基部は基部からの磨削によるものか、比較的透明度の高い黒曜石を多用。
12	A区			SI-58		石鏃	右側部欠損	チャート	1.6	(1.4)	0.4	0.72	身体が丸みを帯びる小型な石鏃で、基部は鋭く長い凹面状。背・側面には黒付状態の上側面のみならず、側面への磨削にて製作される。
13	A区	O-9	a-1		6	石鏃	左側部欠損	チャート	(2.4)	(1.3)	0.4	0.8	側面が下部が広がわり、基部が両面凹面状。側面は比較的鋭い二等辺三角形の平基。
14	A区			トレンチ	14	石鏃	先端部欠損?	チャート	(2.3)	1.8	0.7	2.2	側面が鋭角状で、凹面の取れた二等辺三角形を先にする。基部は鋭く直四角状で、断面は側面より側面を帯び、側面がほぼ平行な状態。比較的鋭く直四角状で、側面も薄くおぼろに丁寧な作り。
15	A区			SI-79	19	石鏃	欠存	チャート	2.6	1.8	0.4	1.3	側面が鋭角状で、凹面の取れた二等辺三角形を先にする。基部は鋭く直四角状で、断面は側面より側面を帯び、側面がほぼ平行な状態。比較的鋭く直四角状で、側面も薄くおぼろに丁寧な作り。
16	A区			SI-79	22	石鏃	欠存	チャート	2.0	1.4	0.5	1.1	側面に側面を帯びる小型な凹面。側面は比較的鋭い二等辺三角形の平基。
17	A区			SI-79	24	石鏃	先端部欠損	チャート	(1.8)	1.6	0.5	1.2	側面に側面を帯びる小型な凹面。側面は比較的鋭い二等辺三角形の平基。
18	A区	N-11	a			石鏃	先端部・両側部欠損	チャート	(2.0)	(1.3)	0.4	1	二等辺三角形を先にし、基部は鋭く直四角状。側面は側面より側面を帯び、側面がほぼ平行な状態。比較的鋭く直四角状で、側面も薄くおぼろに丁寧な作り。
19	A区			SI-58		石鏃	欠存	チャート	2.6	(1.5)	0.6	1.7	側面に側面を帯びる小型な凹面。側面は比較的鋭い二等辺三角形の平基。
20	A区			SI-58		石鏃	欠存	チャート	(2.4)	1.5	0.5	1.17	側面に側面を帯びる小型な凹面。側面は比較的鋭い二等辺三角形の平基。
21	A区	M-11			23	石鏃	先端部欠損	貝質灰岩	(1.9)	1.4	0.4	0.86	側面が鋭角状で、凹面の取れた二等辺三角形を先にする。基部は鋭く直四角状で、断面は側面より側面を帯び、側面がほぼ平行な状態。比較的鋭く直四角状で、側面も薄くおぼろに丁寧な作り。
22	A区	N-9			13	石鏃	先端部欠損	チャート	(1.9)	1.3	0.5	1.05	側面が鋭角状で、凹面の取れた二等辺三角形を先にする。基部は鋭く直四角状で、断面は側面より側面を帯び、側面がほぼ平行な状態。比較的鋭く直四角状で、側面も薄くおぼろに丁寧な作り。

No.	区	グリッド (G)	C 校番	遺物名 No.	注記 No.	種類	遺存状況	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	特徴
23	A区	N-10			2	石鏃	宍存	チャート	2.1	1.3	0.5	1.03	両側が直線的な二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。背面には前縁のきれたかうた痕まわりが断面に残る。
24	A区	N-8			38	石鏃	断面基部欠損	チャート	0.9	0.6	0.5	1.82	両側が直線的で長身な二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。本鏃は出土直後に破損状態に陥り得る。
25	A区	N-10			3	石鏃	宍存	チャート	2.4	1.6	0.5	1.41	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は両側が直線的で長身な二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
26	A区	N-8	c			石鏃	先端部欠損	チャート	0.9	1.5	0.3	0.86	二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。断面は直線的で、鏃頭は細かく、両側より削り出しられている。
27	A区	M-11			90	石鏃	宍存	チャート	2.1	1.4	0.5	1.13	二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。両側が直線的で、鏃頭は細かく、両側より削り出しられている。
28	A区	M-11			80	石鏃	先端部欠損	黒緑岩	0.4	1.7	0.4	1.45	両側が直線的で長身な二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
29	A区	M-10	d			石鏃	宍存	チャート	2.3	1.7	0.5	1.4	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
30	A区	M-10	d			石鏃	先端部欠損	チャート	0.6	1.1	0.3	0.48	二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。両側が直線的で、鏃頭は細かく、両側より削り出しられている。
31	A区	N-9			1	石鏃	左側部基部欠損	チャート	2.7	1.9	0.5	2.04	両側が直線的で長身な二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
32	A区			SI-58		石鏃	宍存	チャート	2.8	1.4	0.5	1.7	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
33	A区	M-11			63	石鏃	左側部欠損	チャート	0.21	0.4	0.5	1.17	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
34	A区	M-11	c			石鏃	先端部欠損	チャート	1.7	1.6	0.4	1.14	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
35	A区	O-8			122	石鏃	断面基部欠損	チャート	0.2-0.4	0.7	0.5	1.43	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
36	A区			SK-16		石鏃	宍存	チャート	2.1	1.5	0.6	1.57	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
37	A区	N-8	c-1		9	石鏃	左側部欠損	黒色石灰岩	1.8	0.4	0.4	0.5	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
38	A区			SI-79		石鏃	先端部欠損	黒緑岩	1.9	1.5	0.5	0.9	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
39	A区	M-11			20	石鏃	下半欠損	チャート	0.9	0.9	0.5	1.29	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
40	A区	O-10			5	石鏃	宍存	チャート	1.8	1.5	0.3	0.81	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
41	A区	M-11	北		16	石鏃	宍存	チャート	2.0	1.7	0.5	1.3	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。
42	A区			SI-79		石鏃	左側部基部欠損	チャート	2.6	2.0	0.5	1.9	両側が直線的とも思えるが、断面側に細かな加工の痕跡を残すため定かるとは、形状は二等辺三角形を呈し、基部は鋭い凹凹式。刃部は鋭く反り、腹面が平直で、鏃頭の加工は細かく観察が困難な点となる。二等辺三角形の形状により推定される。

第4章 遺構外の出土遺物

№	区	プリント (G)	G 柱番号	注目 番号	種類	遺存状況	石柱	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
43	A区		SI.58		石蔵	宍存	チャート	20	0.6	0.3	0.91	形状は正三角形に近く、基部もほぼ平直式の取端であった。断面は薄いつレズ状で、側面も上側から側面に緩やかな傾斜を有する。
44	A区		SI.79	23	石蔵	先頭部・左側部 部本端欠損	チャート	0.6	1.5	0.5	1.1	小型でやや円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
45	A区	MI		59	石蔵	宍存	チャート	1.9	1.5	0.4	1.05	形状は二等辺三角形に近く、基部はほぼ円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
46	A区	M10	b		石蔵	先頭欠損	チャート	0.9	1.6	0.3	0.79	正三角形に近く、基部はほぼ円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
47	A区	0.8		95	石蔵	宍存	黒色粘土岩	1.9	1.7	0.5	1.31	正三角形を呈し、基部はほぼ円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
48	A区	N11	a	18	石蔵	先頭部・左側部 部本端欠損	チャート	0.9	1.7	0.4	1.2	先頭に鋭角稜あり、二等辺三角形の平頭端で、断面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
49	A区	N10		30	石蔵	宍存	チャート	2.2	1.8	0.6	1.74	やや歪な正三角形で、基部はほぼ円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
50	A区	M11		88	石蔵	左側部欠損	チャート	0.8	0.9	0.4	1.92	側面が先頭から基部にかけて湾曲的となり、基部形状はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
51	A区	M10		11	石蔵	宍存	黒板質頁岩	1.9	1.4	0.5	1.2	側面を呈し、基部はほぼ円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
52	A区	N11	7	13	石蔵	先頭欠損	チャート	0.9	1.7	0.5	1.4	やや円錐状となり、基部はほぼ円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
53	A区	N11	8	12	石蔵	宍存	チャート	0.9	1.6	0.4	1.1	SIと相似形となる円錐状で、大きさを測定の入り方も類似する。
54	A区	M11	4	17	石蔵	宍存	チャート	1.5	1.3	0.5	0.9	側面が正三角形に近い円錐状の円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
55	A区	M11	c		石蔵	大平欠損	チャート	0.6	1.4	0.3	0.26	側面より欠損、基部はほぼ円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
56	A区	M10	d	26	石蔵	宍存	チャート	3.0	1.4	0.4	1.2	側面がほぼ正三角形に近い円錐状の円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
57	A区	N10		86	石蔵	宍存	チャート	3.1	1.8	0.8	3.53	側面がほぼ正三角形に近い円錐状の円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
58	A区		SI.58	15	石蔵	宍存	チャート	2.5	1.7	0.6	1.9	左側部がほぼ正三角形に近い円錐状の円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
59	A区	M11		87	石蔵	宍存	チャート	2.0	1.3	0.4	1.17	側面がほぼ正三角形に近い円錐状の円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
60	A区		SI.58	20	石蔵	宍存 本端部欠	チャート	3.0	1.9	1.0	5.1	側面がほぼ正三角形に近い円錐状の円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
61	A区	N.8	c		石蔵	上半欠損	チャート	(1.8)	1.5	0.6	1.24	側面より欠損小。一部の残る側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
62	A区		SI.8	28	石蔵	宍存	チャート	2.7	2.2	1.0	4.7	側面がほぼ正三角形に近い円錐状の円錐状。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
63	A区	M10	d		石蔵	基部欠損	黒質頁岩	(1.8)	(1.4)	0.2	0.6	右側部は側面より、基部は側面に欠損したと思われる。側面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。
64	A区	N11	d.2	27	石蔵	先頭部・左側部 本端欠損	チャート	(1.5)	1.4	0.5	1.0	側面は正三角形に近い平頭端で、断面はほぼ直線的な傾斜を有する。基部はほぼ円錐状平頭端、基部はほぼ円錐状。

№	区	グリップ (G)	遺物名 (C)	注記 (No.)	形態	保存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
65	A区	M-11	c		石鏃	先端・基部の一部欠損	チャート	(1.6)	(1.4)	0.4	0.85	正三角形を呈し、基部凹状は平直式。両面に素材の主要割断面が小さく残り、また素材に厚みが残った断面面がある。厚さ約1.5mmの厚みに割面を加え、用孔を先端が尖る字V字のV字形に加工する。基部凹状は平直式。石鏃の可能性もある。
66	A区	N-8	c		石鏃	右基部欠損	玉鏃	2.3	(1.7)	0.4	1.57	基部凹状は平直式。
67	A区		S179		石鏃 未製品	底面 製作途中状態	チャート	2.9	2.1	1.1	5.6	骨・樹皮に磨面を施す。基部凹状の厚みが減じまわす。製作途中状態。
68	A区		SK-81	30	石鏃 未製品	完好	チャート	3.1	2.0	0.9	4.8	先端に磨面が残り、基部の彫形も途中であることから未製品であろう
69	A区	N-9			石鏃	完好	赤色チャート	2.6	2.1	0.8	4.83	基部凹状は平直式。両面に素材の主要割断面が小さく残り、また素材に厚みが残った断面面がある。厚さ約1.5mmの厚みに割面を加え、用孔を先端が尖る字V字のV字形に加工する。基部凹状は平直式。石鏃の可能性もある。
70	A区	N-11	a	29	石鏃 未製品	完好	チャート	2.3	1.9	0.9	3.6	基部の厚みを減じられなかったため、石鏃の未製品と考えられる。
71	A区	N-10		38	石鏃	完好	黒輝石	2.1	0.8	0.4	0.6	小型の扁平な形状。骨・樹皮に素材の磨面及び割断面が残る。比較的厚みの均一に砥削を行っており、基部凹状は凹状である。
72	A区	N-11	d		石鏃	左基部欠損	チャート	2.8	(1.5)	0.3	1.46	鋭い彫形を呈す。基部の一部欠損。また基部凹状の欠損に伴い加工された可能性があるため、基部凹状については不明とする。基部は丁字状かつ凹状な形状により、断面が鋭いV字状となる。
73	A区	O-8	c	1	石鏃	下部欠損	チャート	(1.3)	(1.1)	0.3	0.38	断面の扁平な形状。先端が鋭く残り、基部は鋭く残り、その下の割断面が鋭く彫らる。基部には欠損部の割断面が下方から入る。
74	A区	N-8		3	石鏃	下部欠損	チャート	(2.1)	(1.4)	0.3	1.1	基部の厚みを減じられなかったため、石鏃の未製品と考えられる。
75	A区	N-11	d		石鏃 未製品	完好	チャート	2.9	2.4	0.8	4.82	両面に右側面に素材割断面の面あり。全周性に基部の凹状の厚みが確保されるが、右側面の厚みを減じることができずそのままに製成された未製品であろう。
76	A区	M-10	d		石鏃 未製品	製作途中状態	チャート	(3.1)	(2.2)	0.8	4.7	基部の厚みを減じまわす。製作途中に状態。
77	A区			518	石鏃 未製品	完好	チャート	3.1	2.4	0.6	4.44	左側面下方に素材の面が残る。素材割断面は鋭角な形状によって削り出し、形を削るための左非対称であり、また基部凹状の厚みから未製品であろう。
78	A区	M-10	e		石鏃 未製品	完好	黒輝石	2.5	1.4	0.6	2.09	鋭角の形状で、基部は素材となる削り出しの厚みのままである。基部からも方かのように作面には欠出しの痕跡があり、基部への加工と共に未製品と考えられる。
79	A区	N-11	a		石鏃 未製品	完好	チャート	2.8	1.9	0.5	3.42	左側面基部凹状が大きき動動するが、これは先端部欠損の動動によるものと認められる。基部凹状は鋭いV字。素材は骨・樹皮の厚みに主要割断面が形成されている。
80	A区	N-10		49	石鏃 未製品	完好	燧石(玉鏃)	1.8	1.4	0.4	0.7	基部の厚みを減じられなかったため、石鏃の未製品と考えられる。
81	A区	N-10	c		石鏃 未製品	完好	チャート	2.1	1.4	0.3	0.87	基部の厚みを減じられなかったため、石鏃の未製品と考えられる。
82	A区	M-11		112	石鏃 未製品	完好	チャート	2.9	2.6	0.7	4.95	基部の厚みを減じられなかったため、石鏃の未製品と考えられる。
83	A区	O-10		7	石鏃 未製品	先端部欠損	チャート	(2.3)	1.7	0.4	1.68	基部の厚みを減じられなかったため、石鏃の未製品と考えられる。

第4章 遺構外の出土遺物

No.	区	グリッド (G)	G 標高	遺物名 No.	注目 No.	形態	遺付状況	石付	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
84	A区	N-9		石鏝 未製品	20	石鏝 未製品	上部欠損	チャート	2.9	2.7	0.7	5.55	比較的大型の磨石片を素材とし、背面では中泓部にまでおよぶ磨面が施されている。その後、磨面加工を十分進め磨った段階にて欠損が生じ、磨面されたものである。
85	A区			石鏝 未製品	SK-16 付添	石鏝 未製品	左側縁欠損	チャート	(3.3)	(2.0)	0.7	4.76	磨面には比較的磨面が施され、左側縁部に残存するものの磨面も、磨面加工が十分進められたと見られる。磨面には付添部や磨面、また磨面のみならず、磨面加工が施されている。
86	A区			石鏝 未製品	SI-58	石鏝 未製品	完存	チャート	3.8	3.2	1.3	14.72	下部に面する磨面が施されている。骨・磨面の両縁から中心に向かって大きな凹面を呈している。磨面を削り出すことが、削り込みを促していると考えられる。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
87	A区	M-11		石鏝 未製品	67	石鏝 未製品	上部欠損	貝質頁岩	2.6	2.2	0.6	3.76	下部に面する磨面が施されている。骨・磨面の両縁から中心に向かって大きな凹面を呈している。磨面を削り出すことが、削り込みを促していると考えられる。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
88	A区	N-10		石鏝 未製品	75	石鏝 未製品	完存	チャート	(2.4)	2.0	1.1	4.73	下部に面する磨面が施されている。骨・磨面の両縁から中心に向かって大きな凹面を呈している。磨面を削り出すことが、削り込みを促していると考えられる。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
89	A区	M-10	d	石鏝 未製品	SI-79	石鏝 未製品	左側縁欠損	チャート	(2.1)	(1.7)	0.6	1.75	下部に面する磨面が施されている。骨・磨面の両縁から中心に向かって大きな凹面を呈している。磨面を削り出すことが、削り込みを促していると考えられる。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
90	A区	M-10	d	石鏝 未製品		石鏝 未製品	右側縁・ 左側縁欠損	チャート	(1.8)	(1.3)	0.4	0.5	右側縁及び左側縁に面する磨面から欠損する。薄く小型な石鏝。
91	A区	M-10	d	石鏝 未製品	31	石鏝 未製品	先端欠損	貝質頁岩?	(3.0)	2.2	0.9	4.4	背面に磨面、磨面に上部磨面を大きく含む。また基部周辺の磨面が丁寧でないこととから、石磨の可能性が高い。(石付戻定ではチャートである)
92	A区	M-10	b	石鏝 未製品		石鏝 未製品	先端欠損	チャート	(2.9)	2.1	0.9	5.37	磨面加工が施されている。磨面には磨面が施されている。
93	A区	M-10	d	石鏝 未製品		石鏝 未製品	両側縁欠損	チャート	(2.1)	1.0	0.4	1.12	当刃は石磨の未製品と考えられ、磨面加工が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
94	A区	M-10	d	石鏝 未製品	SI-79	石鏝 未製品	上部欠損	磨面石	(2.2)	1.0	0.8	1.7	石磨の刃部と思われる。先端と上部が欠損する。
95	A区			石鏝 未製品	SI-58	石鏝 未製品	下部欠損	チャート	(2.3)	2.3	0.6	3.27	磨石片の磨面を用い、磨面加工によって磨面を削り出す。
96	A区	M-10	d	石鏝 未製品		石鏝 未製品	下部欠損	チャート	(2.8)	2.3	0.4	4.92	磨面下部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
97	A区	M-10	d	石鏝 未製品		石鏝 未製品	下部欠損	チャート	2.2	2.7	0.6	3.2	上部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
98	A区	M-10	d	石鏝 未製品		石鏝 未製品	完存	チャート	4.4	1.6	0.7	3.88	磨面下部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
99	A区	N-10		石鏝 未製品	24	石鏝 未製品	完存	チャート	4.4	1.6	0.7	3.88	磨面下部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
100	A区	N-11	a	石鏝 未製品		石鏝 未製品	先端欠損	頁岩	(4.2)	2.1	0.9	8.56	磨面下部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
101	A区			石鏝 未製品	SI-52	石鏝 未製品	下部欠損	チャート	(4.5)	3.9	1.4	27.32	磨面下部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
102	A区	O-8	c	石鏝 未製品	37	石鏝 未製品	完存	丸山岩	8.4	3.6	1.4	47.53	磨面下部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。
103	A区	N-8		尖頭石	28	尖頭石	上部欠損	チャート	2.7	1.7	0.6	2.48	下部に面する磨面が施されている。磨面加工が施されていることから、磨面加工が施されていると見られる。

№	区	クワッド (G)	C 標高	日誌 No.	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
104	A区		SI-58		尖頭型 木製品	上方・ 左側欠損	チャート	12.3	1.9	1.1	9.25	彫りな削片は側面に脊・彫面から連続する鋭利な刃部あり。上方及び左側の欠損部は、尖頭部製作の際のものであろう。
105	A区		SI-58		木製品	完好	チャート	(3.7)	2.4	1.0	10.41	彫削面に打痕がある彫りな削片を用いる。両側面から溝部を加えて両面製作するもの。彫削に伴う先端の欠損により変質したと思われる。
106	A区		SK-92		網形石器	完好	チャート	2.6	1.6	0.9	3.37	上面に打面のある小型削片を両側面法により製作する。上下両面には磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。
107	A区		SI-80		網形石器	完好	チャート	2.7	1.1	0.7	2.02	上面に打面のある小型削片を用いる。両側面法により製作する。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。
108	A区	M-10	d		網形石器	完好	チャート	2.6	1.6	0.8	3.93	両側面法による彫りな削片を用いる。両側面法により製作する。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。
109	A区		SI-80		網形石器	完好	頁岩	4.3	2.2	1.4	13.71	上面に打面のある彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。
110	A区	M-11		17	網形石器	完好	チャート	3.1	2.5	1.1	11.04	中央部から両側の削片を用いる。上下両面を両側面法により製作する。そのために上下両方から彫りな削片が入る。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
111	A区	N-11	b		網形石器	完好	頁岩	4.0	2.2	1.2	8.96	上面に打面のある彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
112	A区				網形石器	完好	チャート	2.0	2.4	1.3	6.9	上面に磨面のある彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
113	A区		SI-58		石鏃 下半部・右側面欠損	完好	頁岩	13.0	2.7	(1.1)	9.7	上面に磨面を有する彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
114	A区	N-9			へら状 石器	完好	チャート	4.4	3.5	1.3	19.53	両側面に磨面を有する彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
115	A区	M-11		114	削器	完好	チャート	4.8	3.7	1.1	20.52	両側面に磨面を有する彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
116	A区		SI-79		削器	完好	チャート	13.0	3.3	1.4	16.8	両側面に磨面を有する彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
117	A区	M-10	d		削器	下半部欠損	チャート	12.3	2.1	0.9	4.5	両側面に磨面を有する彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
118	A区	N-11		53	削器	完好	チャート	3.7	3.4	1.3	18.36	両側面に磨面を有する彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。
119	A区	N-10		37	削器	上部欠損	頁岩削片	(3.7)	3.5	1.0	11.52	両側面に磨面を有する彫りな削片を用いる。両側面法による彫りな削片を用いる。上下両面に磨かれがみられ、右側面には両側面法による彫りな削片が認められる。また上下両面には磨かれた彫りな削片が認められるが、これも両側面法によるものである。

第4章 遺構外の出土遺物

No.	区	グリッド (G)	G 柱番号	遺構名	日記 No.	階層	遺構状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
120	A区	M10	d			階段	完好	チャート	2.7	2.7	0.6	4.94	石面に打面のある階段状の削片を用い、空面側に割面を施して刃部とする。
121	A区	O9	a			階段	完好	チャート	2.9	2.2	0.6	4.46	素材は右側面に打面がある幅長状の削片である。断面では彫りな打面及びハブを併せ、両側面に細かな縦長状の削片を加えて刃部とする。
122	A区	M11			9	階段	完好	チャート	3.9	3.1	0.7	12.13	石面に打面のある不定形な縦長状の削片を用い、ハブを中心に割面を施して刃部とする。上下面から見える痕跡は両側打面によるものかもしれない。
123	A区	N11	b			階段	完好	黒曜石	2.3	2.2	0.5	1.6	上面に打面のある不定形な削片を用い、左側面に刃部を作出する。
124	A区	M10	d			階段	上部欠損	チャート	(2.0)	2.1	0.6	3.0	縦長削片の両側面に刃部を作出する。
125	A区	M11			118	階段	完好	頁岩	2.6	3.8	1.2	9.77	上面に打面があり、背面に割面が付く幅長状削片を用い、裏面を下向きの上の打面付近に刃部を作出する。
126	A区	M11			102	階段	完好	チャート	3.0	3.0	0.7	6.32	上面の割面を打面とし、小より背面に割面が付く不定形削片を用いる。裏面の割面を中心に主要な割面を施してから刃部を作出する。また、右側に縦長の削片あり。
127	A区	N8	c			段部	上部欠損	チャート	2.0	2.4	0.7	3.77	上方に打面のある縦長状の削片を用いる。打面とは反対の打面側に急角の割面を加えて刃部とする。
128	A区		SI-19			階段	完好	チャート	2.2	2.5	0.5	3.8	上方に打面のある不定形削片を用いる。右側面には急角の、またそれ以外には細かな割面を加えて刃部とする。
129	A区	M10	d			段部	完好	黒曜石	1.5	2.7	0.5	1.64	上面に打面が、また背面に割面のある小形の縦長削片を用いる。素材下方を削り取り、その面に割面を垂直的に施して急角の刃部を作出する。磨削面の高い黒曜石を多用する。
130	A区		SI-58			階段	完好	頁岩	(3.7)	(3.2)	0.4	5.2	薄く、鋭角の不定形な削片を用い、右側面は外を削り取った後から右側面にかけ割面を施して刃部とする。
131	A区		SI-58			階段	完好	チャート	4.8	1.4	0.6	4.21	上面に類似チャート特有の平坦な割面、裏面に磨削による割面を大きく残す。大形で縦長状の削片を用い、打面を除く直線に断面側の割面を施して刃部とする。良質なチャートである。
132	A区	M11			12	階段	左側欠損	チャート	4.9	6.1	1.7	52.26	上面に類似チャート特有の平坦な割面、裏面に磨削による割面を大きく残す。大形で縦長状の削片を用い、打面を除く直線に断面側の割面を施して刃部とする。良質なチャートである。
133	A区	各部				段部	完好	チャート	4.3	2.5	1.4	14.2	彫りな打面のある彫りについて刃部とする。左側面は右側面にかけ割面を施して刃部とする。
134	A区		SI-58			階段	下部欠損	チャート	(3.4)	(3.1)	1.2	10.55	上面に打面のある彫りな削片を用い、両側面に加工を施して刃部を作出するものの、底部下方を大きく欠損する。
135	A区		SI-64付 蓋			階段	完好	火山岩	6.2	5.1	1.7	48.96	不定形で彫りな大割面を用い、両側面の背・裏面より割面を加えて両側に加工し、断面は除去された。右側面に使用痕あり。
136	A区	O8	c			階段	下部欠損	火山岩	4.5	4.5	1.4	25.61	上面に打面のある彫りな削片を用い、左側面にを中心に縦長の割面を施して刃部とする。打面は除去された。
137	A区		表裏			階段	完好	チャート	3.9	2.2	1.3	8.3	内側の断面にある大割面を用い、両側面に加工を施して刃部を作出する。裏面は不定形な削片を用い、右側面に加工を施して刃部を作出する。
138	A区	M11	a			階段	完好	火山岩	7.5	3.6	1.9	61.33	上面に打面があり、背面に割面のある断面三角形の削片・縦長削片を用い、彫りな両側面に割面を施して刃部を作出する。
139	A区	N11			34	階段	完好	火山岩	(6.0)	3.7	0.9	34.07	上面に打面があり、上面から左側面に割面のある縦長削片を用いる。両側面にかけ割面を施して刃部とする。彫りな削片を用い、右側面より割面を加えて両側に加工し、断面は除去された。右側面に加工を施して刃部を作出する。良質なチャートである。

№	区	ウツリ (G)	C 枚数	遺物名	日記 No.	器種	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
140	A区	O8	b			胡瓶	完好	砂岩	5.6	4.2	1.9	51.73	上部に打面があり、底面は三角形で斜行の縦長割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
141	A区	M12	a			胡瓶	完好	ホルンフェルス	6.8	5.2	1.6	42.54	上部に打面のある割片を用いる。下方を折り取り、下方の底面を待う端のみは横線が打面打痕がみられる。また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
142	A区	M10	d			胡瓶	完好	ホルンフェルス	5.2	3.5	0.6	16.37	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
143	A区			SI.58		胡瓶	下半欠損	ホルンフェルス	4.3	4.9	0.9	23.9	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
144	A区	N8	b			胡瓶	完好	安山岩	11.7	7.8	1.1	79.3	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
145	A区	N8			54	胡瓶	完好	砂岩	8.1	6.1	2.0	109.63	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
146	A区	O8			78	胡瓶	完好	ホルンフェルス	8.3	6.2	3.2	174.72	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
147	A区	O8			80	胡瓶	完好	黒い岩	10.7	4.8	2.1	117.85	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
148	A区	O8			26	胡瓶	完好	ホルンフェルス	7.0	8.7	1.8	133.8	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
149	A区			SI.58		胡瓶	完好	黒い岩	4.5	7.0	1.6	40.96	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
150	A区	M11			121	胡瓶	左側縁欠損	ホルンフェルス	8.3	6.1	1.5	80.13	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
151	A区	N10			13	RF	下半欠損	チャート	2.2	3.3	0.7	5.75	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
152	A区	N10	c			RF	下半欠損	チャート	2.0	3.3	0.8	6.47	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
153	A区	S95				RF	完好	チャート	2.5	2.0	0.8	3.73	厚み不均等な割片の縦縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
154	A区	N10			53	RF	完好	チャート	3.0	1.5	0.3	1.51	薄く小型な割片を用いる。その縦縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
155	A区	N9			8	RF	完好	チャート	2.9	2.5	0.7	5.68	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
156	A区	N9			12	RF	上部欠損	チャート	3.0	2.4	1.9	11.51	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
157	A区	N8	c			RF	完好	チャート	2.9	2.1	0.7	5.82	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
158	A区	L10	c			RF	完好	チャート	4.4	3.4	1.5	20.92	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
159	A区	M11			122	RF	完好	砂岩	2.8	4.0	1.1	9.43	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。
160	A区	M11			119	RF	完好	チャート	2.4	2.8	1.0	6.28	上部に打面のある割片を用いる。右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出し、右側縁全体に細かな刻線を連続的に、また下縁には直角の刻線を作出する。さらに上面の縦辺には横線が打面打痕がみられる。

第4章 遺構外の出土遺物

№	区	ゾナード (G) 種番	G 種番	遺物名	注記	部類	遺付状況	石柱	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
161	A区	M-11			59	RF	完好	49号	3.3	6.0	2.4	48.37	大型の厚みより取った厚質な不定形な割片を用い、底部を右側に二次加工し、特殊の可能性あり。
162	A区	M-11			38	RF	完好	49号	3.1	2.8	1.0	8.38	上方に前面のある不整形な割片を用い、右側縁上方以外の周囲に磨面を施す。また、底部を右側に傾けた微細な取目痕あり。
163	A区	M-10	d			RF	下部欠損	チャート	2.1	2.9	0.9	4.38	上方に前面のある不定形な割片を用い、下方を前面より欠損する。左側縁を中心に微細な二次加工を施す。
164	A区	M-11			54	RF	完好	49号	2.1	2.3	0.6	3.98	上部に前面のある不定形な割片を用い、底部を中心に下縁以外の周囲に微細な二次加工を施す。
165	A区	M-10	d			RF	完好	チャート	3.2	2.3	0.6	5.44	上部に前面のある不定形な割片を用い、背・後面の両側縁から二次加工を施す。一部には遺れに亘るものもある。
166	A区	M-11	d			RF	完好	ホルトフェルス	3.5	4.0	1.1	17.76	後面を若干不整形な割片を用い、斜向な面縁に二次加工を施す。
167	A区	M-11	c			RF	完好	チャート	2.9	2.4	0.8	5.57	上方に前面のある不定形な割片を用い、本底面は二次角状の磨面を、また上方では打点の痕跡を有する円形底の磨面を付与。
168	A区	O-8			19	RF	完好	チャート	2.1	(2.1)	0.6	2.43	上部に前面のある不定形な割片を用い、左側縁の下縁に微細な磨面を施す。同側縁の欠損部の作目を考へると、右側の可能性もあり得る。
169	A区	M-10	d			RF	完好	チャート	2.2	1.6	0.3	1.87	上部に前面のある不定形な割片を用い、側縁に微かな二次加工を施さざる。
170	A区	M-11	d			RF	完好	チャート	2.5	2.7	0.8	4.39	上部に前面のある不定形な割片を用い、頂縁の一部に背・後面から大削り二次加工を施す。
171	A区	M-11	c			RF	完好	チャート	4.2	1.4	0.7	3.1	上部に前面のあるやや凹凸した微細な磨面を用い、後面の先端部に微かな二次加工を施す。
172	A区	M-9	a			RF	完好	ホルトフェルス	5.9	4.8	1.1	29.97	上方に前面のあるやや大型な不定形な割片を用い、頂縁の一部に二次加工を施す。
173	A区	M-10	d			RF	完好	チャート	2.3	2.9	0.9	6.17	上部に前面のある不定形な割片を用い、ほぼ全縁に二次加工を加える。石柱は極めて粗造。
174	A区	M-11			62	RF	上部欠損	チャート	(2.2)	2.4	0.7	3.93	後面のある不定形な割片を用い、ほぼ全縁に二次加工を施す。
175	A区				519	RF	完好	チャート	2.9	2.7	1.0	8.07	不定形な割片・割片の両側に二次加工を施す。特に下縁では鋭角状となる。
176	A区	N-9	d		519	RF	下部一部欠損	赤色チャート	3.1	(1.9)	0.8	4.54	上部に前面のあり、背面に磨面を施す不定形な割片を用い、後面の両側縁を中心に二次加工あり。
177	A区	N-9	d			RF	完好	チャート	2.0	2.6	1.0	5.66	上部に前面のある不定形な割片から下縁に二次加工あり。特に下縁では鋭角状となる。
178	A区	N-11	d			RF	完好	チャート	1.9	2.8	0.9	5.02	上部に前面のあるやや厚質な不定形な割片を用い、その周囲をほぼ二次加工を施す。背面に粗造な石柱で、欠損箇所は磨面による。
179	A区				5179	RF	下部欠損	チャート	3.6	4.4	1.3	10.38	上部に前面のある厚質な不定形な割片を用い、その周囲をほぼ二次加工を施す。背面に粗造な石柱で、欠損箇所は磨面による。
180	A区				5179	RF	上下欠損	チャート	(3.3)	(3.2)	1.1	13.7	厚質な不定形な割片を用い、斜向な面縁に二次加工を施す。下部には微かな磨面が認められ、磨面打点が行われた可能性が高い。上縁の欠損もこれによるものと思われ。
181	A区				5158	RF	完好	チャート	1.9	2.3	0.6	2.97	上部に前面のある小型な不定形な割片を用い、前面部を中心に二次加工を施す。斜向な面縁に使用痕あり。
182	A区				5158	RF	左右側欠損	チャート	(2.5)	(3.3)	0.7	5.21	上部に前面のある不定形な割片を用い、右側縁上部及び下縁に二次加工を施す。欠損箇所はその縁と関連される。

№	区	ワッド (G)	C 校番	遺物名	注記 No.	器種	裏付状況	石材	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]	特徴
183	A区	M10	d			RF	上部欠損	チャート	(2.9)	(2.5)	1.1	8.09	上方に打面のある彫字の縦長削片を用い、下側には彫面から、また左側には背面から三角形の二次加工を施す。 横長削片の不定形な削片を用い、ほぼ全周縁に骨・彫面の双方から二次加工を施す。 上端に存在した打面もその際に除去される。
184						RF	完好	チャート	2.3	3.6	0.8	7.4	
185	A区	O9	b			RF	完好	チャート	2.7	2.0	0.9	6.68	上端に打面のある彫字の縦長削片を用い、右側を中心として二次加工を施す。 上方に打面のある不定形な削片を用い、右側から左側に二次加工し、また右側は下側に使用面となる。石材はほぼ完全に削片を削ぎ、チャート。
186	A区	M11			92	RF・UF	完好	チャート	2.9	3.4	0.5	6	上端に打面のある不定形な削片を用い、右側から左側に二次加工し、また右側は下側に使用面となる。石材はほぼ完全に削片を削ぎ、チャート。
187	A区	M117	c			RF・UF	完好	チャート	3.2	3.0	1.0	8.07	上端に打面のある彫字の縦長削片を用い、左側を削り取り残した後の三角形の二次加工を施す。また右側は右側に打面となる使用面あり。
188	A区	M10			2	RF・UF	完好	チャート	4.2	3.8	1.0	18.09	上端に打面のある彫字の縦長削片を用い、上下両面に施す。上下両面に施す。また右側は右側に打面となる使用面あり。 右側に彫面を施す使用面あり、素材の上下面に彫面あり、削ぎチャート使用面であることが分かる。
189	A区			SI8		RF・UF	上部欠損	珪質砂岩	(2.9)	3.6	1.1	8.53	右側を削ぎ取り上部を彫面より欠損する。左側の一部は三角形の打面、右側は右側に使用面あり。
190	A区			SI80		RF・UF	完好	チャート	3.8	3.8	1.1	15.92	上端に打面のある彫字の縦長削片を用い、下方に彫面を施す使用面あり。二次加工を施す。また右側は右側に使用面あり。
191	A区			SI80		RF・UF	完好	チャート	3.0	2.5	0.6	5.3	右側面に打面のある不定形な削片の打面に二次加工し、反打面の削片を左側に使用面あり。
192	A区	O9	b			RF・UF	完好	チャート	3.8	(2.2)	0.5	3.97	上方に打面のある彫字の縦長削片を用い、打面はその側に削除され、彫面左端には二次加工が施される。また右側は右側に使用面あり。
193	A区			SI58		RF・UF	下部一部欠損	チャート	2.8	3.9	0.7	9.82	彫面を持つ上部の平面面を打面とした不定形な削片を用い、右側にノッチ状の二次加工し、また削片の左側に使用面あり。
194	A区	N11	a			UF	完好	チャート	(3.0)	(2.3)	0.9	6.76	彫面を削ぎ取り上部の彫面を右側に使用面あり。上端の打面は除去される。
195	A区	N8			55	UF	完好	チャート	5.7	3.8	1.4	23.77	上端に打面があり、背面に彫面が大きく残る部分の縦長削片を用い、縦長削片は左側から右側へ下方にかけて使用面あり。
196	A区	N10			67	UF	下部欠損	珪砂岩	(4.4)	3.2	1.1	19.02	上部に打面のある彫字の縦長削片を用い、削片は右側に彫面を施す使用面あり。欠損部分は後述のもの、珪砂岩の可能性あり。
197	A区	M10	d			UF	上部欠損	チャート	(3.2)	(2.5)	1.0	7.86	右側及び下部に彫面のある彫面削片の縦長削片を用い、削片は左側に彫面を施す使用面あり。
198	A区	M11			37	UF	完好	チャート	3.9	2.4	0.6	6.04	上下両面に彫面のある彫片を用い、削片は右側に彫面を施す使用面あり。
199	A区					UF	完好	チャート	4.1	1.5	1.0	5.21	彫面を持つ上部の三角形の縦長削片の削片は右側に使用面あり。また上下両面に両側打面と思われる削片あり。
200	A区	M10	d			UF	完好	チャート	2.8	2.8	0.8	6.79	上方に打面のある彫字の縦長削片を用い、その一部を使用面から、削片は左側に彫面を施す使用面あり。
201	A区	M10	d			UF	完好	ホルンフェルス	3.1	7.2	1.4	23.28	上部に彫面を施す横長の不定形な削片、削片は右側に彫面を施す使用面あり。
202	A区			トレンチ 5		UF	完好	チャート	3.9	2.6	1.2	12.3	上下両面に自然面や彫面のある彫面三角形の削片、その鋭利な右側に彫面を施す使用面あり。
203	A区	O8			21	UF	完好	チャート	2.2	2.3	0.3	1.83	上端に打面のある彫字の不定形な削片、削片は左側の下方から下側にかけて彫面を施す使用面あり。

第4章 遺構外の出土遺物

No.	区	グリッド (G)	G 柱番号	遺構名	注記 No.	形状	遺物の状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
204	A区	M-10	d			UF	完好	チャート	2.0	3.5	0.8	5.6	上面に打面のある縦長割片。割片の両側面に磨面が使用痕あり。
205	A区			SI-58		UF	完好	チャート	1.6	2.7	0.5	1.61	上面に打面のある短辺状の割片。割片が下部に磨面が使用痕あり。
206	A区	M-10			1	UF	完好	チャート	4.8	2.4	1.0	10.45	上面に打面のある短辺状チャートより割製された短辺長尺の割片。割片が左側面に使用痕あり。
207	A区	M-10	d			UF	完好	ホルンフェルス	8.3	7.9	1.9	110.78	大型で表面のある不定形な割片。縁辺の割片が磨面に使用痕あり。
208	A区	O-8			10	UF	完好	ホルンフェルス	7.6	7.3	1.3	79.22	上面に打面のある不定形な大型割片。割片が縁辺に連続する磨面が使用痕あり。
209	A区			SI-79		UF	完好	チャート	5.2	2.8	0.7	9.06	上面に打面のある縦長割片。割片が右側面に磨面が使用痕あり。
210	A区			SI-64		UF	完好	灰山石	3.8	2.4	0.6	3.65	上面に打面のある短辺長尺の割片。割片が右側面に磨面が使用痕あり。
211	A区	M-10	d			UF	完好	ホルンフェルス	4.2	3.4	0.7	10.92	上面に打面のある短辺長尺の割片。割片が左側面下方に磨面が使用痕あり。
212	A区			SI-8		UF	完好	チャート	3.1	2.4	0.3	2.35	上面に打面のある薄、不定形な割片。割片が縁辺部に磨面が使用痕あり。
213	A区 東東部					UF	一部欠損	チャート	1.9	2.1	0.5	2.2	上面に打面のある縦長割片。割片が右側面に磨面が使用痕あり。
214	A区	N-11	c			UF	上部欠損	チャート	(3.2)	3.3	0.8	9.72	欠損する上方面は折角りによるものか。割片が上部面に使用痕あり。
215	A区	M-10	d			UF	完好	玉髓	2.9	4.2	1.0	8.51	上面に打面のある不定形な割片。割片が本端部分全体に使用痕あり。
216	A区			SI-19		UF	左側面欠損	チャート	2.0	(4.3)	0.6	5.54	右側上方面に打面のある短辺状の小型な割片。割片が右側面に磨面が使用痕あり。
217	A区			SI-10		UF	完好	チャート	3.6	5.0	1.6	18.92	上面に打面のある厚型な不定形な割片。割片が全周面に使用痕あり。
218	A区	N-11	a			UF	完好	チャート	4.3	1.1	0.7	3.47	上面に打面のある短辺状の小型な短辺長尺割片。割片が下部に磨面が使用痕あり。
219	A区	M-10	d			UF	完好	チャート	2.8	2.5	0.7	4.8	上面に打面のある不定形な割片。割片が磨面側に使用痕あり。
220	A区			SI-58		UF	完好	頁岩	3.7	3.3	0.7	7.54	上面に打面のある短辺長尺の不定形な割片。割片が下部に磨面が使用痕あり。
221	A区	M-10	d			UF	左側面欠損	頁岩(頁)	(2.8)	(2.2)	0.7	2.93	短辺長尺の割片を用いているものか。右側面は欠損する。そのため本表の形状は不明。
222	A区					UF	両側面欠損	チャート	(2.1)	(4.0)	0.7	5.15	短辺長尺の割片を用いているものか。右側面は欠損する。そのため本表の形状は不明。
223	A区					UF	完好	チャート	2.6	1.8	0.3	1.44	上面に打面のある小型な短辺長尺割片。割片が右側面に使用痕あり。
224	A区	M-11			68	石核	完好	チャート	2.6	3.4	1.9	19.49	素材の両側面の短辺チャートを用いる。両側面は右面に平坦面があるため、これらの両側面を打面として割片の剥離を行う。最終作業面を正面としたが、各部に剥離が行われている。
225	A区	M-11	b			石核	完好	チャート	2.3	3.0	1.2	9.5	右側面を打面として、割片取得に用いた際の作業の正産物である。その正産物は平坦面と、割片取得に用いた際の作業の正産物である。その正産物は平坦面と、右側面に磨面を打面とする割片の剥離が行われる。短辺チャートを使用した短辺長尺の石核。
226	A区 西側			SK-72		石核	完好	チャート	3.5	7.3	7.4	229.86	上下面に磨面のある短辺チャートを両側面に用いる。平坦面と右側面を打面として、割片の剥離を行う。石核としての厚みがなく、また磨面が多いことから、良好な素材割片は得られなかったようである。

№	区	グリッド (G)	C 柱番号	遺物名 No.	注記	種類	遺存状況	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
227	A区			SI-80		石核	完存	チャート	3.0	2.6	1.7	14.91	正面に磨る面は右側から裏面チャートの使用が判別できる。上面には平削り行面が認められ、最終剥離面が右側面にある。裏面では上下方向からの剥片剥離も認められる。
228	A区	N-8	b			石核	完存	礫岩	2.9	5.3	3.7	54.91	内側面の磨を認め、平削り面を剥離とする。最終剥離面は正面側の上方から、またその左側には下層石からの剥離がある。
229	A区			SI-58		石核	完存	チャート	2.7	4.2	2.0	20.64	磨削の大型削片を用い、平削り面に打面調整を繰り返して、最終削りの取得が行われる。削片の形状が採了した段階で、剥削した下層を使用する。
230	A区			SK-14		石核・押	完存	ホルンファエルス	6.3	6.0	3.3	130.12	方形面の準備を認出し、平削りに近い上面及び右側面下層を使用する。素材削片を包摂している。削り面は最終的な下層を中心として二次加工あり。
231	A区	M-11	b-2			石核	残核	ホルンファエルス	3.3	9.2	5.8	179.3	左側面・上面の両側面を打面とし、移動を繰り返しながら削片剥離を行う。
232	A区	N-8			61	片打石器	上部欠損	ホルンファエルス	5.3	4.1	1.9	44.47	小型の打面を用い、裏面と左側面に磨面を認す。裏面からの片面加工により、下層に磨削した剥離を施しては内側の刃部を伴出する。早期後半の片打石器の特徴を備える。
233	A区			SI-52		標部	完存	ホルンファエルス	11.9	4.6	3.7	262.01	標部の内磨を用い、右側面では左側面と平行になるように、また下方では裏面側から矢張り面に磨面を施しては内側の刃部を伴出する。
234	A区	M-10	d			標部	完存	ホルンファエルス	8.9	8.0	3.9	403.36	標部の内磨を用い、下層との高角削りの剥離を施して刃部を伴出する。左側部には使用に慣れた磨面が認められる。
235	A区	M-11			78	片打石器	完存	ホルンファエルス	6.0	6.9	2.4	127.64	骨・樹脂に磨面及び右側面の磨面を認す。裏面からの片面加工により、左及び下層に刃部を伴出する。
236	A区	M-10	d		2	片打石器	完存	ホルンファエルス	10.8	12.2	5.8	850.71	大型で準角削りに近い刃部石を用い、その一部に裏面側から削り面の大きな剥離を認す。この場合は早期に伴う片打石とされるが、平削り面を伴って剥片を剥離する石核とする考え方もある。(抽出品)
237	A区	N-10			1	礫石	完存	安山岩	10.8	5.3	4.5	408.13	打面が中央部に集中するが、その外側の剥離はその前に生じたものである。本来、スラップ形石器であった可能性もあり得る。
238	A区	N-11			26	三角礫核 石器	上下欠損	礫岩	6.4	7.0	(4.4)	229.65	239と結合部にある。新三角形の剥離を認す。側面に剥離や打面を加えることにより、さらに断面三角型に近づける。下層の欠損部にはその後の加工が認められる。
239	A区	N-11			41	三角礫核 石器	上下欠損	礫岩	6.5	5.5	5.7	209.57	238と結合するため、当該石器と判別できた。上下両面に右方向からの剥離により欠損する。右側の剥離は削りの取得と考えられることから、石核に転用した可能性もある。
240	A区	N-11			26	三角礫核 石器	上部・刃部欠損	礫岩	6.5	6.0	(5.7)	439.22	238と239の報告以前では、上部の上面の刃部を欠損する。素材に断面三角形の剥離を用い、側面の各面に磨面を施しつつ後部部分に剥離及び打面を伴出する。上面及び右側面は磨削からの影響によるもので、欠損ではなく削り面の剥離であろう。

第4章 遺構外の出土遺物

第18表 石器観察表(2)

(単位:cm・g)

番号 種類	分類・形状	残存率	磨面	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴	注記
241 磨石		完存	両面	6.00	5.65	2.10	97.34	表裏面磨滅。特に表面前上部付近に目立つ。火山岩製。	D区表層
242 磨石		1/4	両面	(6.20)	(5.10)	(2.50)	72.04	表裏面磨滅。輝石火山岩製。	S158
243 磨石		完存	両面	10.00	8.20	3.30	397.70	表裏面とも磨滅するが、磨滅のみ、石に含まれる粒子が露出し、表面はザラツクがある。玄武岩製。	S1-15
244 磨石		完存	全面	13.25	5.15	4.70	450.54	全面磨滅。自然磨の可能性が残る。輝石火山岩製。	S8北東
245 磨石	I 1 ㉓ II B エケ	完存	全面	10.55	8.85	4.30	536.85	全面磨滅。同上表面中央下部寄りを頂点としてなだらかに傾斜する。裏面中央はやや凹む。磨面の使用状況を示すものか。同上右側面に深い凹み。火山岩製。	O8-13
246 磨石	I 2 ㉓ II B オコ	完存	両面	10.20	7.60	4.60	460.15	表面山形の厚み。裏面扁平。裏面中央部は磨滅が薄く、浅い凹孔が顕著される。側面付近の凹は凹孔が最幅幅とであるか不明。輝石火山岩製。	S158-3
247 磨石		完存	両面	9.80	7.30	5.20	507.96	表裏面磨滅。同上左側面中央部は平坦。輝石デイスイト製。	S158
248 磨石	I 2 ㉓ II B オコ	1/2	全面	(8.35)	(9.30)	(4.80)	494.17	全面磨滅。凹は現状で安定する面を裏面とした。側面は平坦でなく鋭角に整形。表面はやや凹らむ。裏面は平坦。浅い凹みが各所にみられる。接地した際、裏面右側にできる隙間(断面図上の裏面右側)を右手で握むと表面中央部左よりの浅い凹みが手かかりとなる。矢掛部磨滅。デイスイト質の結核岩製。	M11-57
249 磨石	I 2 ㉓ I B エケ	1/2	両面	(7.50)	(8.60)	(5.10)	373.50	表面両側が傾斜するが、中央部付近に欠損に伴うかは不明。表裏面とも中央部付近に研滅面。裏面上部に石材の亀裂。右上部に僅かな凹み。中央の欠損部の破面は磨滅する部分がある。輝石火山岩製。	M11-61
250 磨石		1/2	両面	(8.00)	(4.50)	(3.40)	101.06	表裏面磨滅。輝石角閃石デイスイト製。	O8B
251 磨石		完存	全面	6.80	6.30	4.30	249.74	全面磨滅するが、特に表面右側に目立つ。上部を右手にあって、裏面の凹孔に人差指をあてて握った際の下面にあたる。玄武岩製。	S0-59
252 磨石		完存	両面	8.90	7.20	3.80	354.65	表裏面中央部磨滅。表面左下側の凹みは最幅幅か。輝石火山岩製。	A区表層
253 磨石		完存	全面	10.30	6.90	6.00	657.50	裏面平坦で接地すると安定する。この裏面とした。表面は軸山山状。全面磨滅するが、表裏面の磨滅跡著。表面下部に右手をあて、凹孔に人差指をあてて握ると安定して持つことができる。輝石火山岩製。	O9A
254 礫		完存		8.10	5.50	2.60	124.75	磨滅。同上左側をカマド外側に向けて直立。同上左側中央部色調変化。被熱か。輝石デイスイト製。	S158 カマド
255 礫石	IV 1 ㉓ II B エケ	一部残	両面	(11.40)	(4.70)	(4.40)	221.04	表裏面とも磨滅。側面中央の小孔は最幅幅か。凹道は凹すむ。火山岩製。	O8-9
256 礫石	III 4 ㉓ III B エケ	完存	全面	13.80	5.80	4.00	474.50	全面磨滅。タテに長い長門形状。同上左側面は平坦で直立する。左側面を底部とし、上方となる右側面を右手で握むと、裏面の浅い凹みに指がかかる。緑色岩製。	S8北東
257 礫石	III 4 ㉓ I B エケ	一部欠	全面	15.20	6.70	5.40	792.18	全面磨滅。同上、右側面は平坦で直立する。上部の破砕部(トーン)は破面の切合の境は鋭角に鈍い。破砕部を握むと破滅した縁に母指球があたり、表裏面の僅かな高低差の破面に親指・四指がつかかる点は16に似る。異状黒雲母花崗岩製。	M10-1
258 礫石		一部欠	-	(13.40)	(8.10)	(5.80)	851.79	同上、上下を破砕し、等長方形形状。上部のは破砕面は自然面か。段差なく鋭角磨滅する。下部の破砕面は段差を有し破砕状況を残す。表裏面の外面は下部の破砕面を除き滑らか。異状黒雲母花崗岩製。	O8-18
259 礫石	III 1 ㉓ IV B エケ	完存	両面	9.40	10.30	1.30	219.71	表裏面とも磨滅。同上上・下の凹縁を打ち欠くが磨滅。輝石火山岩製。	M10
260 礫石		完存	-	10.20	9.40	2.30	315.93	金色ガラス質粒子・白色ガラス質小粒(～0.2mm)を含む。燧文上部あるいは土師部の混和材か。表面下部中央付近の凹孔は棒状工具の痕跡とみられる。ホムンブール岩製。	A区表層
261 礫石	III 2 ㉓ I B オウ	1/2	-	(10.00)	(12.40)	(5.30)	687.34	表面扁平。裏面に凹らむ。表面の小孔が凹孔か不詳。明瞭な研滅面なし。側面中央部の欠損は最幅幅が外形加工であるのか不明。矢掛部は磨滅。輝石火山岩製。	S8-26
262 礫石		完存	全面	22.80	13.20	10.50	4089.24	同上裏面の破砕する部分を接地面とすると安定する。表面山形。表面から見て左側面は平坦。あるいはこの側が接地面の可能性もあろう。全面磨滅するが、左側面→表面→裏面の順に磨滅する。輝石火山岩製。	S179 カマド2
263 石皿	IV ㉓ II Aa エケ	一部残	全面	(5.20)	(5.00)	(4.20)	77.65	残存部は磨滅。側面は平坦でなく鋭角に整形。多孔質輝石火山岩製。	N11- 苜3

番号 種別	分類・形状	残存率	用途	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴	注記
264 石皿か	IV 5 ④ II C エケ	一部残	全面	(11.30)	(4.60)	(4.50)	172.87	表裏面不明。安定する方を裏面として作図。残存部は磨滅。側面は平坦ではなく三角形状。所々に凹みがあるが、欠損部であるのか凹みであるのか不明。磨滅が磨滅した部分は磨行痕の可能性を考慮し図示した。多孔質火山岩製。	N-11-d 各 部
265 石皿か	IV 1 ③ III C エケ	一部残	全面	(6.90)	(8.40)	(3.50)	142.21	表裏面不明。安定する方を裏面として作図。残存部は磨滅。表裏面とも凹みはあるが、凹みか不詳。側面は平坦ではなく鋭角。形状加工は不明。多孔質火山岩製。	N-11-44
266 石皿	II 1or2 ① II Aab エケ	1/4	裏・側	(12.40)	(12.00)	(4.30)	569.59	上が小さい台形状。表・側面は平滑な研磨で磨滅。表面は平坦で中央部に磨面。裏面の磨面は側縁より低い凹状で磨滅するが小さな凹みが顕著。右側面の磨面は磨滅して平坦。最終後の二次利用も考えられる。多孔質火山岩製。	N-11-45
267 石皿		一部残	両面	(9.30)	(8.50)	(5.20)	318.34	裏面平坦。表面磨面は傾斜する。表・裏やや磨滅。多孔質輝石火山岩製。	N-11 各 4
268 石皿か		一部残	両面	(12.3)	(6.3)	(3.9)	214.28	裏面平坦。表裏面磨滅。多孔質火山岩製。	D区表探
269 石皿	II 2 ① II Aab エケ	1/2	全面	(12.20)	19.20	5.20	1100.74	全面を研磨により磨滅。本来の形状を活かしていると判断される。両側面中央部は最終後研磨して直線的な形状を作出。裏面中央部は平坦で接地面。表面は凹状に磨滅し磨面とする。磨面周辺に研磨の痕跡が残る。裏面の凹みは不詳。欠損部磨滅。多孔質輝石火山岩製。	O-8-121

第3節 弥生時代の出土遺物

(1) 調査の概要

小片のため図示し得ないが、弥生土器の可能性のある破片が5片 35.04gが出土する。沈線で文様を描く小片は中期の可能性が考えられる。N-9 グリッド、A 西区から出土する。その他、N-9・10・11 グリッドから1片づつが出土する。

第4節 古墳時代～古代の出土遺物

(1) 調査の概要

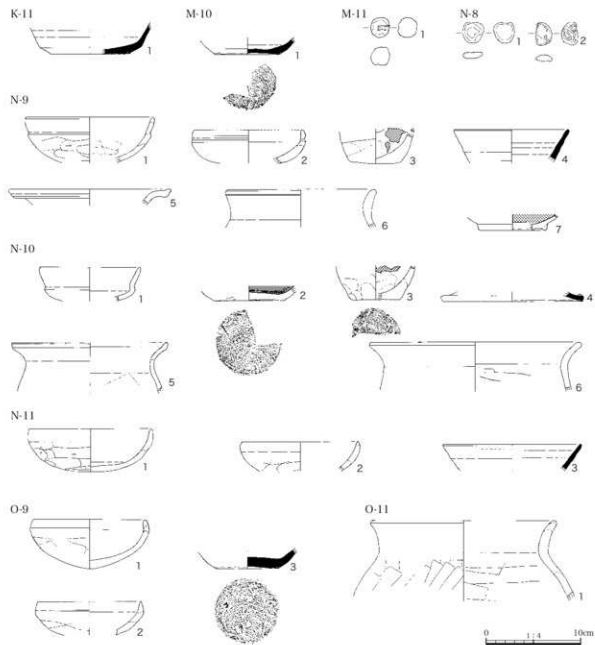
遺構外における古墳時代以降の遺物は、縄文時代の遺物同様にグリッド調査において、小片が散在する状況にある。出土状況を見ると、竪穴建物跡付近の谷部に設定したグリッド (M-11、N-9・10・11) に多くみられる。今回の調査によって確認された遺構が現状よりも深かった可能性や、失われた遺構があったと考えられる。また、当該期の集落範囲が、今回、確認された建物跡が確認された範囲に限られていたと考えることもできよう。

土坑や溝状遺構など中・近世以降とみられる遺構から出土した古墳時代以降の遺物については、流れ込みの可能性が高いと判断される。

報文の記載にあたり、土師器環については、遺構出土と同様に胎土は a～d、口縁部形状は①～④に分別する。土師器鉢は口縁部の形状で判別したが、体部については、甕体部とした破片に紛れている可能性はあろう。反軸陶器については、小片のため時期の判別が困難である。中世以降に分別すべきものを含む可能性は否めない。なお、報文中の NO 付きの番号は第 64～66 図の番号に対応する。

各器種の出土状況を見ると、土師器環は (a) が主体であるが、O-9 グリッドでは、土師器 (d) が目立つ。しかし、グリッドを一律に調査し得ていない状況であり、大まかな傾向である点を明記する。

第4章 遺構外の出土遺物



第82図 遺構外の出土遺物実測図(1)

第19表 遺構外出土遺物観察表(1)

K-11		(単位:cm)			
番号 図柄	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1	口:— 底:[8.3]	口縁作りか 三和座か ロタロ使用 外:体下が屈曲して立ち上がる	内外 2.5Y5/2 稍 灰黄	胎土 焼成 白色胎子少量、雲 母粒子微量	A区 K-11 南内 底部 1/8 残存
環	高:[3.4]			且	
M-10					
番号 図柄	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1	口:— 底:[6.8]	ロタロ成形 益子産か 底面回転車切り	内外 10YR6/4 に ふい黄橙	胎土 焼成 白色胎子・透明方 ラス質粒子微量	A区 M-10SK-60 付 近
環	高:[1.8]			不良	底部 1/3 残存

第4節 古墳時代～古代の出土遺物

M-11					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 保存状況
1 土玉	長:2.0 幅:1.9 厚:1.9	最大長2.1 8.44g 不整な円形 同上:表面に平載竹貫状の工具痕が見える	10YR5/2 灰黄緑	白色粒子・透明ガラス質粒子微量 良	A区M-11C No.5
N-8					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 保存状況
1 小罐	長:2.1 幅:2.1 厚:0.6	最大幅2.3 4.92g 黒色土 不整な円形で同上表面は凹状 裏面は平坦 丁寧に磨削	N3/0 暗灰		A区N-8C
2 小罐	長:2.3 幅:1.7 厚:0.7	最大長2.4 2.89g 白色土 平円状で同上表面は凸状 裏面は平坦 磨滅するが小さな凹凸が残る	2.5Y7/2 灰黄		A区N-8C
N-9					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 保存状況
1 土師器 片	口: [13.4] 底: ー 高: (4.8)	立ち上がり丸味 内:ヘラケズリ→ヨコナデ (ヨコナデ下にヘラケズリ痕残る) 外:ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ	内外:7.5YR6/6 黒	白色粒子・雲母粒子少量 良	A区N-9D 口縁部1/4残存
2 土師器 杯	口: [11.6] 底: ー 高: (3.5)	立ち上がり丸味 内:ヨコナデ 割落面著 外:口ヨコナデ 体断面劣化(磨滅や小さい凹) 内→外 (口) ウルシ仕上げ	内外:10YR7/3 に 赤・黄緑	雲母粒子少量 良	A区N-9B 口縁部1/6残存
3 刺刺土器	口: ー 底: [5.4] 高: (3.7)	灯明皿転用 口縁面にもスス付着→破損後転用 内:ヘラケズリ→ナデ (ヨコ) スス付着 外:ナデ (ヨコ) →口ヨコナデ 底: [彫り] ヘラケズリ→方向	内外:10YR8/3 灰 黄緑	黒色粒子多量、黒色ガラス質粒子、透明ガラス質粒子・雲母粒子少量 良	A区N-9 No.21N-10B 口縁部一部、体→底部1/2残存
4 須恵器 杯	口: [12.1] 底: ー 高: (3.5)	益子産 ロウロ使用	内外:7.5Y5/1 灰 黄緑	白色粒子・雲母粒子少量 良	A区N-9A 口縁部1/12残存
5 土師器 常総甕	口: [17.2] 底: ー 高: (1.7)	口つまみの形状は8世紀中葉だが小片すぎてもわからない	内外:7.5YR5/4 に 赤い黒	白色粒子多量、黒色ガラス質粒子少量 良	A区N-9C 口縁部1/8残存
6 土師器 甕	口: [16.0] 底: ー 高: (4.0)	口縁部の形状は「く」でもなく「コ」でもない 内外:ヨコナデ	内:10YR6/3 に 赤い黄緑 外:7.5YR7/4 に 赤い黒	砂粒多量 良	A区N-9B 口縁部1/8残存
7 比類陶器 甕類か	口: ー 底: [7.2] 高: (1.7)	内面に融がかる 高台を貼り付け後の口ロ成形	内外:10YR6/2 灰黄緑		A区N-9A/N-10 No.72N-10C、表録 底部1/2残存
N-10					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 保存状況
1 土師器 杯	口: [10.6] 底: ー 高: (3.6)	立ち上がり上平丸味 内:ヨコナデ 外:体上ナデ→口ヨコナデ 内→外 (口) ウルシ仕上げ 不磨滅と同一か	内外:10YR7/3 に 赤い黄緑	黒色ガラス質粒子微量 良	A区N-10D 口縁部1/6残存
2 土師器 碗	口: ー 底:7.0 高: (1.5)	ロウロ使用 内面黒色処理 内:体→底ミガキ (体ヨコ→底→方向) 黒色処理 底部回転糸切り	内:2N/0 黒 外:10YR6/4 に 赤い黄緑	白色粒子多量、雲母粒子・砂粒少量 良	A区N-10 No.55.68 底部3/4残存
3 刺刺土器	口: [5.0] 底: ー 高: (3.6)	最大径: [8.3] 灯明皿転用 内:ヘラケズリ→ナデ 外:ナデ (ヘラケズリの痕跡はないがヘラケズリ後か) 底部回転ヘラ切り	内外:2.5Y8/2 灰 白	雲母粒子少量、透明ガラス質粒子微量 良	A区N-10A 底部1/2残存
4 須恵器 甕	口: [14.6] 底: ー 高: (1.0)	益子産 ロウロ成形	内外:7.5Y5/1 灰 黄緑	白色粒子多量、砂粒微量 良	A区N-10D O-9? 口縁部1/6残存
5 土師器 甕	口: [16.4] 底: ー 高: (5.4)	常総型 内:ヘラケズリ→ナデ→口ヨコナデ 外:体ナデ→口ヨコナデ	内外:5YR5/6 明 赤黒	雲母粒子・砂粒少量 良	A区N-10D 口縁部1/6残存
6 土師器 甕	口: [22.4] 底: ー 高: (5.2)	口内面割着? 内:ヘラケズリ→ナデ→口ヨコナデ (痕跡深く、ナデで消えない) 外:体上ナデ→口ヨコナデ	内:7.5YR6/6 黒 外:10YR6/6 明黄 黒	白色粒子少量、雲母粒子多量 良	A区N-10 No.56 口縁部一部残存

第4章 遺構外の出土遺物

N-11					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 環	口：〔13.1〕 底：一 高：4.5	立ち上がり丸味 内：ヘラケズリ→ヨコナデ 外：ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内→外（口）ウルシ仕上げ	内：10YR5/3 にぶ い黄緑 外：10YR8/3 浅黄 緑	緻密 白色粒子・ 透明ガラス質粒子 少量	A区N-11D 谷No.1 1/2 残存
2 土師器 環	口：〔12.3〕 底：一 高：〔3.1〕	立ち上がり丸味 内：ヨコナデ 外：ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 内→外（口）ウルシ仕上げ	内：10YR5/3 にぶ い黄緑 外：10YR6/3 にぶ い黄緑	雲母粒子少量	A区N-11A 口縁部 1/8 残存
3 須恵器 環	口：〔14.6〕 底：一 高：〔2.8〕	磁子産 ロクロ成形 谷津人窯跡か	内外 7.5Y5/1 灰 緑	白色粒子少量、砂 粒微量	A区N-11B 口縁部 1/8 残存

O-9					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 環	口：〔11.9〕 底：一 高：5.2	ウルシ仕上げ 内：ナデ→口→体ヨコナデ 口端部分的に剥落 外：成物焼 体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ 体上位部分的にヒビ、 成形時の乾燥によるものか 一部剥落	別れ口：10YR7/4 にぶい黄緑 内：5YR6/6 橙 外：7.5YR6/4 に ぶい橙	緻密 白色粒子微 量、黒色ガラス質 粒子少量	A区O9C 口縁部 1/2、体→底 部 1/6 残存
2 土師器 環	口：〔11.0〕 底：一 高：〔3.5〕	内：口→体上ヨコナデ 口端剥落 外：体ヘラケズリ→体上ナデ→口ヨコナデ ヘラケズリ粗く器面に焼が残る 口の焼は僅かであるが焼直上は沈殿状に残る 内→外（口）ウルシ仕上げ	内：10YR4/1 粗灰 外：10YR8/3 浅黄 緑	やや緻密 透明ガ ラス質粒子・黒色 ガラス質粒子微量	A区O9C 口縁部 1/4 残存
3 須恵器 環	口：一 底：6.7 高：〔2.2〕	最大径：〔10.4〕 円柱作り 磁子産か ロクロ使用	内外 7.5YR5/6 明褐色	雲母粒子・砂粒多 量、礫（φ1～2mm） 微量 不目	A区O9D 底部完存

O-11					
番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況
1 土師器 甕	口：〔19.2〕 底：一 高：〔8.5〕	若干「コ」の字状 胴体上垂る 内：ヘラケズリ（ヨコ）→口ヨコナデ 口端黒色劣化（焼成によるものか） 体部分的に汚れ付着 外：ヘラケズリ（タテかナメ）→口ヨコナデ 口端剥離	内：10YR7/3 にぶ い黄緑 外：7.5YR8/4 浅 黄緑	金雲母・黒色ガラ ス質粒子・白色粒 子	A区O11A 表 灰 口縁部 1/6 残存

(2) 古墳時代以降の出土遺物

1) A区

【A区グリッド】

A区J-9・10（第16図）

出土遺物は確認されない。

A区K-9・10・13グリッド（第16図）

出土遺物は確認されない。

A区K-11グリッド（第16・82図 第19表）

〈南西（cグリッド主体）〉 須恵器環1が出土する。

〈グリッド内〉 土師器環類体部1片3.27g、土師器甕体部片1片22.76gが出土する。

A区K-12グリッド（第16図）

〈グリッド内〉 土師器微細片0.71gが出土する。

A区L-9（第16図）

〈南東部（cグリッド主体）〉 土師器環（a）は①種あり3片・不明1片、体部1片の4片35.6g、（b）は体部片2片7.79gが出土する。7世紀前葉と判断されるものが1片あるが、概ね7世紀代と判断される。土

師器埴(ロクロ使用・黒色処理)は体部1片6.69gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕(薄手・常総型か)は体部片2片6.75gが出土する。土師器甕は体部片4片76.77gが出土する。

〈北東部(aグリッド主体)〉土師器甕(薄手・常総型か)体部1片61.11gが出土する。土師器甕は体部片1片5.50gが出土する。

須恵器は甕片1片7.28gが出土する。外面に平行叩きを施す。9世紀代の新治産とみられる。

磁器は2片が出土する。1片(8.85g)は内外面に薄緑色釉を施し、内面に雁が連なるような帯状の文様が一巡する。1片(2.12g)は白磁で外面に蓮弁状の印刻を施す。

〈グリッド内〉土師器環(a)口縁部形状①2片・体部4片5.88gが出土する。

L9グリッド周辺では、L9・M9付近から土師器甕6片61.85g、土師器甕(常総型)5片55.56g、土師器微細片1.99gが出土する。

A区L-10(第16図)

〈グリッド内〉土師器高環裾部1片2.15g、土師器甕体部1片13.13gが出土する。

A区L-11～13(第16図)

出土遺物は確認されない。

A区M-9(第16図 写真図版二・三)

L9・M9付近からの出土遺物についてはL9に記載する。

A区M-10(第16・82図 第19表)

〈a区〉土師器環は(a)②稜あり1片7.80g、(b)①稜あり1片3.40gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高環は裾部(No.123)13.98gが出土する。

〈b区〉土師器環は(a)①稜なし①2片・体部2片16.46gが出土する。(b)体部2片4.04g、(d)体部1片2.83gが出土する。7世紀代と判断される。

〈c区〉土師器台付甕1片12.83gが出土する。8世紀後葉～9世紀中葉であろう。

〈d区〉土師器環(a)①1片5.53g、(c)③1片14.76gが出土する。7世紀代と判断される。土師器甕体部18片179.08gが出土する。土師器甕(常総型)頸部2片13.99gが出土する。この他、土師器微細片20.85gが出土する。

〈北東部(aグリッド主体)〉土師器鉢類あるいは甕類頸部1片4.27g、須恵器環底部(新治産か)1片9.48g、(三養産か)1片7.75gが出土する。

〈グリッド内〉土師器環(a)①稜あり1片・稜なし1片、③稜あり2片24.41g、体部2片27.80gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高環は裾部1片3.97gが出土する。この他、土師器微細片6.56gが出土する。この他、土師器微細片9.86gが出土する。

須恵器環は1が出土する。益子産9世紀第2四半期と考えられる。この他、須恵器環体部(三養産か)1片3.91g、甕体部(新治産)1片16.05gが出土する。甕片は外面に平行叩きを施す。9世紀代とみられる。

A区M-11(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈a区〉土師器環は(a)①稜あり1片・体部微細片4.64gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高環は裾部1.98g出土する。土師器甕は体部1片5.07gが出土する。この他、土師器微細片12.82gが出土する。

〈b区〉土師器器種不明1片3.24gが出土する。

〈c区〉土師器環は(a)①稜なし1片・②1片、体部7片39.15gが出土する。7世紀代と判断される。土師器高環は環・脚接合部1片11.82gが出土する。土師器甕は口縁部1片・体部2片50.59gが出土する。

この他、土師器体部2片7.24gが出土する。

A区M-12 (第16図)

出土遺物は確認されない。

A区N-8 (第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈c区〉 土師器微細片 13.23gが出土する。

A区N-9 (第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈a区〉 土師器環は(a) ①稜あり1片・稜なし1片・③1片、体部2片18.38gが出土する。7世紀代と判断される。土師器埴(口縁使用・内面黒色処理)は口縁部3片・体部1片13.46gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕は口縁部2片・体部12片(No.7・No.10を含む)55.40gが出土する。土師器鉢類あるいは甕類口縁部1片1.82g、土師器微細片25.37gが出土する。

須恵器環は4の他に、口縁部1片2.02gが出土する。益子産とみられる。4は7世紀前葉とみられる。

〈b区〉 土師器環は2の他に、(a) ①稜あり2片・不明1片、体部9片54.92g、③1片6.45gが出土する。2は7世紀前葉、これ以外は7世紀代と判断される。この他、環とみられる破片4片13.21gが出土する。土師器甕は6の他に、体部7片74.71gが出土する。6は9世紀前葉～中葉とみられる。土師器甕(常総型)は体部6片20.71gが出土する。9世紀代と判断される。この他、土師器微細片30.69gが出土する。

粗製土器は3が出土する。6世紀末葉～7世紀初頭とみられる。

〈c区〉 土師器環は(a) ①1片・③3片・不明2片、体部4片、微細片を併せ54.78g、(d) ①稜あり1片、体部2片24.13gが出土する。7世紀代と判断される。土師器環で赤彩を施す体部片2片1.37g、赤彩の可能性のある破片1片1.37gが出土する。土師器高環は裾部1片1.78gが出土する。土師器甕は体部12片75.96gが出土する。土師器甕(常総型)は口縁部2片14.06gが出土する。9世紀代と判断される。この他、土師器微細片59.11gが出土する。

須恵器環は口縁部1片12.67gが出土する。産地は不明である。三義産の可能性はあろう。

〈d区〉 土師器環は1の他に、(a) ①稜あり1片・稜なし2片・③稜あり3片・不明2片、体部5片、微細片を併せ84.07g、(b) 口縁部1片、体部8片59.80g、(d) ①稜あり1片・稜なし1片6.86g、③口縁部2片・体部2片38.29gが出土する。不掲載の(a) ①稜なしの1片、③の2片は6世紀末葉・7世紀初頭～7世紀中葉、1は7世紀前葉、これ以外は7世紀代と判断される。この他、環とみられる破片6.02gが出土する。土師器甕は体部3片20.72gが出土する。9世紀代と判断される。この他、土師器微細片24.59gが出土する。

〈グリッド内〉 土師器甕(常総型)は体部1片7.35gが出土する。この他、土師器微細片8.17gが出土する。

A区N-10 (第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈a区〉 土師器微細片1片1.51gが出土する。

粗製土器は3が出土する。6世紀末葉～7世紀初頭とみられる。

〈b区〉 土師器環は(a) ①稜なし2片・不明1片、体部(No.58を含む)6片、微細片を併せ42.39g、(b) ①稜あり1片・体部2片(No.73を含む)12.29g、(d) ①稜なし1片・体部1片7.73gが出土する。7世紀代と判断される。この他、環とみられる体部3片18.43gが出土する。土師器埴(口縁仕上げ・内面黒色処理)は2が出土する。No.55・No.68が接合する。9世紀前半とみられる。土師器甕(薄手)は体部5片16.37g出土する。土師器甕は6の他に、体部3片27.69g出土する。土師器甕(常総型)は微細片1.80gが出土する。6は8世紀後葉～9世紀前葉と見られる。この他、土師器微細片3.69gが出土する。

須恵器環は底部2片が出土する。何れも底部は回転系切りで切り離す。産地は不明であるが、三義産(3.29g)・新治産(7.69g)の可能性が考えられる。

〈c区〉(a)①稜あり3片・稜なし2片・不明1片(No.30)、体部8片(No.31を含む)、微細片を併せ75.49g、(b)①稜あり2片・③1片、体部14片74.81g、(d)①稜なし1片・不明2片、②稜なし1片(No.26)体部4片39.02g、赤彩を施す模倣灰口緑部1片1.16gが出土する。7世紀代と判断される。この他、環とみられる4片54.73gが出土する。土師器壙(ロクロ使用・内面黒色処理)は体部1片・底部1片8.83gが出土する。底部は回転系切りで切り離す。土師器甕(薄手)3片13.43gが出土する。土師器甕は口緑部2片・体部8片(No.27を含む)102.29gが出土する。No.27は胎土は緻密である。この他、土師器微細片4.41gが出土する。

須恵器環は体部1片1.31gが出土する。産地は不明である。

〈d区〉土師器環は1の他に、(a)①稜あり9片・稜なし1片・不明1片、②稜なし3片、③稜あり5片(No.4を含む)、体部9片(No.8を含む)、微細片を併せ103.49g、(b)③稜あり4片・不明1片、体部14片90.48g、(d)①稜なし1片・不明1片7.18gが出土する。不掲載の(a)①1片は6世紀末葉～7世紀初頭、1は7世紀中葉、この他は7世紀代と判断される。bの体部片のうち1片はへら記号とみられる沈線が観察される。土師器壙(ロクロ使用・内面黒色処理)は口緑部2片・体部2片・底部2片30.67gが出土する。底部は回転系切りで切り離す。土師器高環は環・脚接合部1片3.58gが出土する。土師器鉢は口緑部1片14.71gが出土する。土師器甕は口緑部5片・体部16片(No.7・11・22を含む)222.47gが出土する。甕口緑部のうち1片は油煙状の付着物が残る。No.7・11・22の胎土は緻密で、No.7・22の器面は赤色変化する土師器甕(常盤型)は5の他に、口緑部2片・体部10片42.91gが出土する。5は9世紀後半の小形甕あるいは台付き甕の可能性が考えられる。この他、土師器微細片48.87gが出土する。

須恵器環は口緑部(益子産)1片1.75g・底部1片4.43gが出土する。底部は二次底面である。須恵器蓋は4(益子産)が出土する。

〈北東(a区主体か)〉土師器環は(a)①稜なし1片2.78gが出土する。

〈グリッド内〉土師器微細片84.05gが出土する。

灰軸陶器は高台付環7(図はN-9)(26.19g)が出土する。A区表採の小片と接合する。

A区N-11(第16・82図 第19表)

〈a区〉土師器環は(a)①稜あり4片・稜なし3片、③稜あり4片・不明1片、体部14片、微細片と併せ190.26g、(b)③稜あり2片・不明1片、体部2片22.20g、(d)②稜なし2片、③稜あり2片35.04gが出土する。(a)①稜ありの1片は6世紀末葉～7世紀初頭、これ以外は7世紀代と判断される。土師器甕は体部2片15.37gが出土する。この他、土師器微細片83.98gが出土する。

須恵器蓋1片3.15gが出土する。新治産の可能性が考えられる。須恵器甕は2片が出土する。外面にタテ方向の平行明きを施す。9世紀代の新治産であろう。b・d区出土の破片と同一個体とみられる。併せて74.92gである。

〈b区〉土師器環は(a)体部1片、微細片と併せ14.23g、(b)体部5片29.52gが出土する。7世紀代と判断される。この他、土師器微細片37.83gが出土する。

須恵器環は口緑部1片10.08gが出土する。8世紀第4四半期の益子産であろう。須恵器甕は2片が出土する。a・b・d区から出土する破片と同一個体とみられる。〈a区〉に記載する。

〈c区〉土師器環は(a)①稜あり1片、微細片と併せ25.32gが出土する。7世紀代と判断される。土師器壙(口

クロ使用)は1片2.13gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕は体部2片32.64gが出土する。うち1片はd区出土の1片と同一個体とみられる。この他、土師器微細片27.86gが出土する。

〈d区〉土師器環は1(a)①の他、(a)①稜あり1片・稜なし1片、体部5片、微細片と併せ72.17g、(b)①稜あり1片、体部4片25.14gが出土する。7世紀代と判断される。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は1片1.55gが出土する。9世紀代と判断される。土師器甕は体部2片18.50gが出土する。うち1片はc区出土の1片と同一個体とみられる。この他、土師器微細片9.21gが出土する。

須恵器甕は2片が出土する。a・b・d区から出土する破片と同一個体とみられる。〈a区〉に記載する。

〈北東(c区主体か)〉(d)体部2片11.49gが出土する。7世紀代と判断される。

〈北西(a区主体か)〉土師器甕体部1片6.67gが出土する。

A区N-12(第16図)

出土遺物は確認されない。

A区O-8(第16図)

〈c区〉土師器甕体部6片53.79gが出土する。同一個体とみられる。この他、土師器微細片2.34gが出土する。

A区O-9(第16・82図 第19表 写真図版二九)

〈a区〉土師器環は(a)微細片6.22g、(b)①稜あり1片、体部4片、微細片と併せ19.86g、(d)体部3片8.24gが出土する。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は同一個体の口縁部2片・体部1片、異個体の体部1片・底部1片、微細片と併せ28.01gが出土する。土師器甕は口縁部1片、体部15片117.44gが出土する。体部片は器厚の狭い、胎土の粗密のあるものを一括する。土師器甕(常総型)は口縁部2片、体部19片、微細片を併せ9.69gが出土する。体部は胎土に金雲母の混入が少ない。この他、土師器微細片33.46gが出土する。

粗製土器1片9.05gが出土する。口・底径の差が小さく高さのない形状とみられる。6世紀末葉～7世紀初頭と判断される。

〈b区〉土師器環は(a)①稜あり4片、稜なし2片、②稜なし2片、③稜あり4片、不明2片、体部2片、微細片と併せ99.72g、(b)①稜あり1片・不明1片、体部6片51.88gが出土する。(d)①稜なし1片、体部2片15.47gが出土する。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は体部3片10.11gが出土する。土師器甕(常総型)は口縁部1片、体部4片20.08gが出土する。体部は胎土に金雲母の混入が少ない。この他、土師器微細片46.80gが出土する。

須恵器環は口縁部片1片2.4gが出土する。益子産であろう。

〈c区〉土師器環1(d)①の他、(a)①稜あり2片、③稜あり1片、体部2片、微細片と併せ56.51g、(d)③稜あり2片11.38gが出土する。1は7世紀前葉、これ以外は7世紀代と判断される。この他、赤彩を施す体部2片3.59gが出土する。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は口縁部1片2.89g、体部2片5.50gが出土する。体部のうちの1片は墨書とみられる(写真図版二九)。土師器甕は口縁部1片、体部7片、微細片と併せ57.82gが出土する。

須恵器環は体部片1片1.37gが出土する。産地は不詳であるが、三倉産の可能性もあろう。須恵器甕は体部1片23.18gが出土する。益子産であろう。

〈d区〉土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)は口縁部2片、底部2片、微細片と併せ57.21gが出土する。底部は回転糸切りで切り離す。土師器甕は口縁部1片、体部1片15.70gが出土する。この他、土師器微細

片 4.41g が出土する。

須恵器環は3の他、体部2片が出土する。3は9世紀第2四半期～中葉とみられる。体部片のうち、1片は益子産で3.65g、1片は7.29gで三義産の可能性があろう。

〈グリッド内〉土師器環は(d)口縁部1片2.76gが出土する。土師器甕(常総型)は体部1片35.51gが出土する。

A区O-10 (第16図)

〈a区〉土師器環は(a)稜あり1片・不明1片、体部2片、微細片を併せ17.08g、(b)②稜あり2片、③2片、不明1片、体部7片41.39g、(d)②稜あり1片・稜なし1片、体部1片14.95gが出土する。

須恵器環は体部1片3.40gが出土する。産地は不明であるが、胎土は白味が強く、小礫を含む。

〈グリッド内〉土師器甕は口縁部2片、頸部2片、体部11片79.90gが出土する。口縁部片のうちの1片は油煙状のスガが付着する。土師器甕(常総型)は体部8片33.88gが出土する。この他、土師器微細片38.34gが出土する。

A区O-11 (第16・82図 第19表)

〈a区〉土師器甕1が出土する。7世紀中葉あるいは9世紀中葉の何れかと考えられる。

A区P-8 (第16図)

〈d区〉土師器微細片3.36gが出土する。

A区P-9 (第16図)

〈グリッド内〉須恵器鉢類口縁部1片99.59gが出土する。手捏ねで器厚がある。益子産とみられる。

A区P-10 (第16図)

出土遺物は確認されない。

【トレンチ】

A区トレンチ5 (T5) (第8・83図 第20表 写真図版一七)

土師器環(a)①1の他に、土師器環(a)①稜あり2片・稜なし1片・不明1片、体部2片67.54g、(b)①稜なし1片3.76g、(d)体部3片18.13gが出土する。1は7世紀中葉頃まで、この他は7世紀代と判断される。

【A区内】

A区南東部 (第16図 写真図版二)

土師器甕体部1片3.18gが出土する。

A区南西部 (第16図)

土師器甕口縁部1片0.71gが出土する。

A区谷部 (東側) (第16図)

土師器甕体部1片12.96g、須恵器甕体部1片11.70gが出土する。

A区内 (第16図)

土師器環は2・3の他に、①稜なし2片、③稜あり4片、体部5片、微細片を併せ82.32g、(b)微細片1.58g、(d)①稜あり1片、体部3片42.70g、赤彩を施す体部片1片2.07gが出土する。2は6世紀末葉～7世紀初頭、3は7世紀前葉あるいは中葉と判断される。土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)口縁部1片、微細片を併せ3.05gが出土する。土師器碗(ロクロ使用)体部1片・微細片4.98gが出土する。土師器高坏は裾部1片14.91gが出土する。7世紀中葉とみられる。土師器甕は口縁部7片、体部20片145.00gが出土

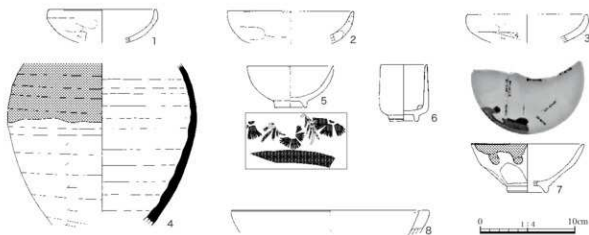
第4章 遺構外の出土遺物

する。土師器甕（薄手）は口縁部2片、体部9片64.76gが出土する。土師器甕（常総型）は口縁部3片、体部17片、底部1片244.95gが出土する。

須恵器甕は体部1片、底部1片が出土する。体部はタテ方向の平行叩きを施す。9世紀代の新治産と考えられる。底部片80.83gは益子産とみられる。底部の器壁は厚い。

自然釉の付着する須恵器は3片が出土する。坏体部1片3.83g・底部1片1.93g、高台付坏1片6.77gである。体部は新治産とみられる。底部は回転糸切りで切り離す。産地は不明であるが三義産の可能性が考慮される。

瓦は2片が出土する。男瓦1片32.70gは内面に布目痕が観察される。1片17.26gは片面が剥離してお



第83図 遺構外の出土遺物実測図(2)

第20表 遺構外出土遺物観察表(2)

番号 器種	寸法	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 保存状況
1 土師器 甕	口: [11.6] 底: 一 高: (3.5)	立ち上がり丸嘴 ウルシ仕上げ 内: ココナデ 外: ヘラケズリ→体上ナデ	内外: 10YR7/3 に ふい黄褐色	黒色粒子少量 良	A区T5 口縁部1/10 残存
2 土師器 坏	口: [13.7] 底: 一 高: (3.4)	内: ココナデ 外: 体ヘラケズリ→体上ナデ→口ココナデ 痕跡薄い 内→外 (口) ウルシ仕上げ	内外: 10YR8/3 浅 黄褐色	白色粒子・雲母粒 子微量 良	A区表層 口縁部1/6 残存
3 土師器 坏	口: [12.6] 底: 一 高: (2.95)	立ち上がり丸嘴 内: ココナデ 口縁部削れている 外: 体ヘラケズリ→体上ナデ→口ココナデ 内→外 (口) ウルシ仕上げ	内外: 10YR6/4 に ふい黄褐色	赤色粒子・黒色粒 子微量 良	A区表層 口縁部1/6 残存
4 須恵器 甕	口: 一 底: 一 高: (17.1)	ロケロ成形後、体下半ヘラナデ 体上自然釉 最大径: [20.0]	内外: 10YR6/2 灰 黄褐色	砂粒多量、白色粒 子少量 良	A区表層 体部一部残存
5 磁器 小碗	口: [9.2] 底: 3.4 高: 4.3	丸形 足込み無し 外: なでしこ(青・黄) 葉(緑) 体下金褐色・薄黄色を帯状に配する。 高台: 底 釉が薄いか剥がれているか 文様は染料 大正末葉～昭和初期の壺産品か	内外: 5PB9/0		A区SK60付近 SD-59 口→体部1/3、底部1/2 残存
6 磁器 小碗	口: [5.2] 底: 3.0 高: 6.0	筒形 内: 無文 甬土の小塊か この上から染付 外: 枝・葉・手描き 高台: 底 釉が薄いか剥がれている 大正末葉～昭和初期の壺産品か	内外: 10B9/1 文様: 2.5YR2/0		A区SK60付近 口縁部1/6 残存、底 部完存
7 磁器 大碗	口: 12.0 底: [4.4] 高: 5.1	SD-59の10と同時期 大正末葉～昭和初期か 内外: 鉄軸系下 外: 蓮弁(六弁)を印刷 高台直無軸	内外: 5YR8/0		A区表層 1/2 残存
8 内瓦土器	口: [20.8] 底: 一 高: (2.8)	小片であるが残れなく立ち上がる	内: 5YR4/4 にふ い赤褐色 外: 5YR2/1 黒褐色	金雲母粒子多量、 砂粒少量 良	D区東 口縁部一部残存

り詳細は不明である。

A西区(第16図 写真図版一六)

土師器環(a)口縁部1片1.57g、(b)体部1片5.42g、土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)体部1片9.58g、土師器甕口縁部1片・体部7片60.48g、土師器甕(常総型)体部5片27.62g、土師器碗(ロクロ使用)或いは須恵器環体部1片3.28gが出土する。土師器碗(ロクロ使用)は9世紀代とみられる。

須恵器甕は体部3片、底部2片が出土する。体部のうち2片は益子産で24.21g、1片は外面に平行叩きを施す新治産とみられ6.99gである。底部2片の産地は不詳であるが、1片(3.43g)は三養産、1片(12.56g)は南那須産の可能性が考慮される。

ii) B区

出土遺物は確認されない。

iii) C区

【トレンチ】

トレンチ15-C(T-15-C)から土師器碗(ロクロ使用・内面黒色処理)微細片0.44gが出土する。プラスチック片の確認もあるため、地形の改変時の混入と判断される。C区に所在するものか、他所からの搬入であるかも不明である。

iv) D区

【D区内】

土師器環(a)①稜あり1片1.91g、土師器甕体部3片30.77g、土師器甕(常総型)1片0.58g、土師器微細片2.97gが出土する。

須恵器環は口縁部1片・体部1片6.13gが出土する。益子産とみられる。

第5節 中・近世以降の出土遺物

(1) 調査の概要

調査区内、グリッド内に散見される。小片が多く、時期の判別が難しい。多くは大正時代末葉から昭和初期の量産品の陶磁器とみられる。土師質土器・瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器・磁器に区分して記載する。土師質土器は、土師器環と混同する可能性は否めない。また、現代の瓦片、ガラス片なども確認されるため、地形の改変に伴い他所から流入した可能性も考えられる。

磁器は、遺構(A区第16・37・62・90号土坑)、グリッド(L-9)出土の磁器についても、本節において記載する。

(2) 中・近世以降の出土遺物

i) A区

【土師質土器】

手控ねの土師質土器小皿は、N-9-aグリッドから体部2片7.12g、N-11グリッド北西部から体部1片4.69g、SK-10との間から体部2片5.29g、A区表採で体部5片24.91gが出土する。

第4章 遺構外の出土遺物

ロクロ成形の土師質土器小皿はM-10-dグリッドから底部1片6.42g、A区内から底部1片4.56gが出土する。

【内耳土器】

M-10グリッドから底部1片3.85g、M-11-aグリッドから体部1片、5.42g、M-11-cグリッドから体部1片7.42g、A区内から口縁部1片・体部1片46.93gが出土する。何れも胎土に金雲母を含む。

【瓦質土器】

K-11グリッドから片口口縁部1片133.34gが出土する。

【無軸陶器】

0-9グリッドから、香炉あるいは手焙状の体部1片4.33gが出土する。推定される形状は茶道具の灰器に似る。

A区から香炉あるいは手焙とみられる口縁部1片8.44gが出土する。口縁部下に花文を陰刻する。その他、器種不明の体部1片26.15gが出土する。

【施軸陶器】

A区N-9(第16図)

筒状製品の体部下端片1片2.98gが出土する。内外面に暗茶褐色の鉄軸を施す。外面下端は無軸である。茶入の可能性もあろう。

A区N-10(第16図)

〈c区〉皿類体部1片1.63gが出土する。外面は無軸であるが、内面に白濁軸を施す。器壁は薄い。

A区M-10(第16・83図 第20表 写真図版二九)

〈d区〉筒状製品の体部片1片13.27gが出土する。内外面に茶褐色の鉄軸を施す。外面は明瞭に残るロクロ目に軸が溜まり濃いめの色調となる。茶入の可能性もあろう。

〈グリッド内〉磁器小碗5・6は大正時代末葉から昭和初期の量産品であろう。

A区内(第16図)

〈南西〉皿類底部1片5.54gが出土する。高台の付く可能性もある。内外面に白褐色軸を施す。

〈西〉急須状の体部1片1.52gはA区内から出土する破片の同一個体あるいは同形の量産品であろう。

〈谷部(東側)〉小形壺とみられる口縁部1片6.53gは内面上端部から外面に茶色軸を施す。

〈A区内〉小筒碗体～底部1片23.77gは内外面に白濁色軸を施す。内面は無文であるが、外面は梅木文を描く。

皿類とみられる底部1片5.78gは内面に白濁色軸を薄く施す。外面は無軸であるが、軸下の素地の部分の可能性もあろう。底部に2mmほどの高台状の高まりがあり、目跡が残る。中世の可能性が考慮される。

瓶あるいは壺類とみられる体部1片13.96gは内面に褐色軸、外面に黒褐色軸を施す。鉄軸であろう。

急須とみられる体部片1片1.56gは〈西〉から出土する破片の同一個体あるいは同形の量産品であろう。

器種不明の体部1片20.37gは内面に茶褐色の鉄軸を施す。外面は無軸である。

【磁器】

A区内(第16・83図 第20表 写真図版二九)

磁器大丸碗7は大正時代末葉から昭和初期の量産品であろう。その他、中丸碗或いは中丸碗と推定される破片11片、飯盛碗3片、碗類1片、皿類1片、皿或いは鉢類1片が出土する。

中丸碗は、第59号溝状遺構3と同じ文様を持つ1片(7.39g)、外面に須臾で文様を描く1片(1.97g)、

内面に呉須で「呉服」と記し外面体～底部に鉄軸を施す1片(6.08g)、内外面無文の1片(6.13g)、同じく無文の口縁部1片・体部1片(27.38g)、やや濁った白色軸を施す1片(1.64g)、内面無文・外面体下部に圏線と図柄不明の文様を描く破片4片(23.72g)である。図柄不明の4片は肥前系に似る在地の製品と考えられる。大正時代～昭和初期の製品の可能性がある。

飯盛碗は、内外面に第59号溝状遺構と同様の緑色軸を施す3片(65.37g)、外面に橙色・オリーブ色で意匠不明の文様をプリントする口縁部1片(14.09g)である。

碗類は、A区第16・62号土坑と同種で外面に意匠不明の文様を描く1片(2.45g)である。

皿或いは鉢類は、内外面に呉須で文様を描く体部片1片(4.46g)で、内面は重線状、外面は牡丹とみられる文様を型紙で施す。第59号溝状遺構7と同種の手法とみられる。

A西区内(第16図 写真図版一六)

器種不明の体部2片(3.37g)が出土する。

ii) D区

D区内(第7・83図 第20表)

内耳土器8が出土する。

第6節 土玉・小礫・粘土塊等

(1) 調査の概要

時期の判別が困難な遺物を記載する。土玉は1点、小礫は3点を報告する。

(1) 土玉

A区M-11(第16・82図 第19表 写真図版二九)

<c区> 土玉は1(No.5)が出土する。

(2) 小礫

A区N-8(第16・82図 第19表 写真図版二九)

<c区> 小礫は1・2が出土する。礫石の可能性が考えられる。1は黒色で丁寧な研磨が観察される。2は白色で磨滅するが研磨であるか判別できない。

A区N-9

軽石1片9.15gが出土する。

(3) 粘土塊等

粘土塊は、N-10グリッドから1点5.94g、N-10-dグリッドから3点6.79g、A西区から1点3.69gが出土する。遺構内からの出土した443.92gをあわせ、総量460.34gが出土する。多くは破砕片で不整形であるが、手で丸めたような形状のものもある。また、草本類の茎などを混和剤とした痕跡が確認されるものがある。焼成の具合や色調は土師器に似るが、時期などの詳細は不明である。

第5章 総括

第1節 調査の概要

今回の調査では、竪穴建物跡11軒・土坑43基・ピット12基・溝状遺構4基が確認された。各区の内訳は、A区:竪穴建物跡11軒・土坑28基・ピット5基・溝状遺構2基、A西区:土坑2基・ピット2基、B区:土坑5基・溝状遺構1基、C区:土坑3基・ピット5基・溝状遺構1基、D区:土坑1基、D南区:土坑4基であり、A区に集中する傾向にある。遺物は遺物収納箱(小)約48箱分が出土する。グリッドや調査区内から出土する縄文時代の土器片、石器・剥片類が主体である。遺構からの遺物出土量は総じて少ない。破片数・重量は報文中に記載した。

基本土層(第3章第1節)の確認から、現況の地形は削平および客土により改変されたものであることが明らかであり、本来は、A西区北東部-C区東端部-D東区付近を頂部として、東・西・南側の谷部へ傾斜する地形であったと想定される(第84図)。A区は調査区の鹿沼軽石層の平面的な範囲やトレンチ6などの堆積状況から、遺構重複部を囲むように比較的険しい傾斜があったと考えられる。遺構は、狭量な平坦面あるいは緩斜面が選地されたのであろう。A西区は北東端部から南方向へ緩やかに傾斜し、B区に至る。東・西側の谷部はB区南側で合流し南方向へ延びる。B区は谷部に沿って比較的急勾配で西・南側へ傾斜する。C・D区は西側の谷部に向けた傾斜地である。今回の調査では、東側の谷部に面するA区に遺構が集中する傾向が認められた。A区の北側については、確認調査のトレンチの設定もなく不明であるが、谷を挟んだ大坂遺跡(第6図)や調査区南方に位置する三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡(第6図・第21表)の遺構配置から、A区のような遺構がある可能性が残る。

A区では遺構確認面での遺物の確認が顕著であったため、グリッド杭を基準にした面的な掘削による調査を行った。A区に堆積する黒色土(第84図)より、一定量の縄文時代早期～前期の土器片や石器が出土したことから、調査時にはこの時期の遺物包含層と捉えたが、その後の整理作業時の検討から、この層が基本土層(第9～11図)3層下の4・5層にあり、層中に土師器等後世の遺物も少量含むほか、早期前半～前期後半までの幅広い型式が大きなレベル差・層位差なく出土していることが確認された。また、ある程度の平面的なまとまりもみられるものの、調査区内の広い範囲に亘っての包含層の調査を行っておらず、遺物集中の平面的な広がりについても不明なことなどからも、第一的な遺物廃棄によるプライマリな縄文時代早期～前期の包含層と捉えることは難しいと判断するに至った。また、土師器、須恵器、粗製土器、土玉の多くが竪穴建物跡周囲のM-11-dグリッド、N-8-bグリッド、N-9-a・bグリッドに出土する傾向にあることから、竪穴建物構築時に整地作業が施された可能性も推定でき、このような人的要因、縄文時代以降の斜面崩壊・地すべり、浸食等の自然的要因、削平・客土などの人為的な地形改変に伴う台地上部に堆積していた遺物群の斜面下方への移動など、調査区内における包含層の成因・性格については、更なる検討が求められる。

第2節 縄文時代

調査区内の採集遺物、グリッドから土器、石器が出土する。遺構の確認はない。

縄文土器の分別は報文中に記載した。何れも小片で、図示し得た破片は少ない。また、小片のため型式に分別できない破片も多い。このような状況下ではあるが、草創期・早期の各型式の出土がある点、比較的出土量が多い点は今回の調査の特徴といえよう。型式ごとの出土量を見ると、多くは条痕文系の破片であるが主

たる時期は茅山上層式期と推定される。

条痕については、条痕の幅に広・狭が観察されたため、当初は、特広:2.5 mm前後・広:2.05 mm前後・中:1.55 mm前後・狭:1.0 mmを基本に観察したが、特定の結果を得られず、報文には記載しなかった。

石器は、石鏃 74 点、石鏃未製品 18 点（不掲載 3 点を含む）、石錐 12 点、石槍 1 点、尖頭器 3 点、くさび形石器 7 点、石匙 2 点、搔削器 36 点、二次加工のある刮片 35 点、二次加工のある刮片で一部に使用痕のあるもの、使用痕のある刮片 8 点、使用痕のある刮片 36 点、二次加工或使用痕が観察されない刮片 336 点（可能性のあるものを含む）、石核 8 点、礫器 5 点、敲石 1 点、三角錐状石器 3 点、磨石・石皿類 29 点が出土する。石鏃は茎を持つ形状の出土は第 70 図・71 のみである。71 は唯一の凸基有茎鏃であり、後期中葉の可能性があらう。石鏃の多くは早期の土器に伴う可能性が考えられる。また、堀込型石鏃 1 点が出土する（第 70 図・56 可能性のある石鏃 34・57・64）。共伴が指摘されている天矢場式は図示した 1 片のみが出土する。本来は相当数の土器量があったと判断できる。石鏃などの刮片石器の出土量とともに、刮片の出土量が多い点は特徴的である。刮片は二次加工或使用痕を伴うものが多い。本調査区南に位置する二ノ谷遺跡・三ノ谷遺跡・三ノ谷東遺跡・諏訪山遺跡・諏訪山北遺跡などでは草創期後半～早期初頭の多数の陥し穴状土坑が確認（第 2 章参照）され、広義の狩り場的な特徴がみられる。本調査区については弓矢による狩り場とすることも可能であるが、使用痕のない二次加工の刮片や石核の出土から、推定される台地上の生活面は、狩り場ではなく、石器製作を伴う居住施設を有する可能性が指摘できる。また、当該時期には台地の突端部から遺物が出土する事例が多いとの指摘があることから、東・西側の谷の合流点に位置する本遺跡が集落跡である可能性を指摘しておきたい。

礫石器については、大きさに偏在性がみられたことから、従来の観察法に加え、手で持てる大きさか否かを加味して分別を行った。

I 手で持つことが可能（掴む） II 手で持つことが困難（置く） III 掴むことも置くことも可能

IV 不明（破片）

形状 I 円形 2 長円形 3 隅丸方形 4 棒状 5 形状不明（破片）

①両面平坦 ②両面膨らみ ③片面膨らみ・片面平坦

i 厚さ 5.1 cm 以上 ii 厚さ 4.1 cm 以上 iii 厚さ 3.1 cm 以上 iv 厚さ 3.0 cm 以下

整形 A 形状加工 B ほぼ自然礫 C 不明

a 外面 b 磨面

使用痕 凹孔 ア両面 イ片面 ウ側面 エなし オ不明

敲打痕 カ両面 キ片面 ク側面 ケなし コ不明

個別の観察で注意された点は以下のとおりである。

256・257・258 は何れも図上の側面に自立可能な平坦面を持つ。自立した場合の長さ（最大長）・幅（最大幅）は近似する。特に、256・257 の側面は平坦であり、観察表のとおり持つと安定して持つことができる。現状の長さ・幅（平坦面を下にした場合の長さ）が近似しており、257 の破砕面の磨減を考慮するならば、大きさを調整するための破砕である可能性があらう。また、厚みに差異があり、道具としての使用方法の違いも示唆される。

264・263・248・244 の形状・厚さは異なるが、何れも側面は鋭角である。同種の礫石器の可能性もあらう。

249 は中央の欠損部に磨減部分が観察される。使用に伴う磨減あるいは磨面である場合、欠損は外形加工、

欠損後の二次利用の可能性があろう。

ほぼ同大・同形状の礫石器が認められる。完存の磨石 246・245、推定 1/2 欠損の 248・249 である。

第3節 古墳時代～古代

(1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は A 区に 11 軒が確認された。基本土層から想定される地形からは、竪穴建物跡が選地される平坦面あるいは緩斜面が現農道下にあたる M・N・O 8 グリッド付近に続いており、竪穴建物跡の選地範囲が広がる可能性が指摘できる。弥生時代後期以降の集落内の建物跡の配置をみると、台地の頂部よりも低地面を見下ろす落ち際にある傾向が指摘されている。調査区内 N 8 グリッドに遺構の確認がないことから、現道下の O 9 グリッド付近に遺構がある可能性が考えられる。しかし、現実的には、現農道沿いの第 12・93 号竪穴建物跡が削平により掘り方向が露出する状況であり、その残存状況の可否は判断し得ない。

本調査によって確認された 11 軒の竪穴建物跡は 7 世紀代と 8 世紀第 4 四半期～9 世紀代に大別される(第 21 表)。

7 世紀代の竪穴建物跡は第 8・19・58 号竪穴建物跡の 3 軒が確認された。どれも谷の落ち際にあり、同程度の距離を置いて分布する。各々の主軸に斉一性はないが、谷の方向を意識したものととも考えられる。カマドは谷とは反対側の壁に設置される。第 58 号竪穴建物跡については西壁への設置ともみえるが、これも谷とは反対側の北壁が意図されたと判断される。

8 世紀第 4 四半期～9 世紀代の竪穴建物跡は第 4・15・64 号竪穴建物跡の 3 軒が確認された。時期を判別し得なかった竪穴建物跡のうち、詳細が判然としない第 79 号竪穴建物跡を除く第 9・12・62・93 号竪穴建物跡については、規模や主軸に共通性がみられ、同時期の遺構と捉えておきたい。これら 7 軒の竪穴建物跡の配置をみると、第 64 号竪穴建物跡付近に集中する傾向にある。遺構の配置からは詳細不明の第 79 号竪穴建物跡を 9 世紀代と捉えることもできよう。この時期の竪穴建物跡は、カマドの有無によって二大別が可能である。カマドを設置する竪穴建物跡は第 12・62・64 号竪穴建物跡で、第 93 号竪穴建物跡は第 21 号土坑をカマドとする可能性がある。カマドは、7 世紀代とは異なり、谷側の壁に設置される。東壁が意図されたと判断される。カマドの設置のない竪穴建物跡は、北東壁にテラス状の段差を持つ第 9・15 号竪穴建物跡、第 4 号竪穴建物跡である。遺構分布図からはグリッドの南北軸 10 を境に谷側にカマドの設置のない竪穴建物跡、山側にカマドを設置する竪穴建物跡の配置が読み取れる。

竪穴建物跡の埋没状況を見ると、7 世紀代、8 世紀後半～9 世紀代にどれも、大きく幾度かにわたり埋め戻し、廃絶したと考えられる。建物跡に伴う遺物の出土が少ないが、廃絶にあたって建物外に持ち出す行為があったのであろう。カマドのある竪穴建物跡は、カマドを被覆した後、床面を埋め戻したと判断される。カマドは火床を洗い、焼土やロームで埋め戻し、カマド上部を壊した後カマド全体を埋め戻したであろうことが覆土の堆積状況から読み取れる。調査時の最上層は自然埋没の堆積層とみられることから、建物の全てを被覆するものではなかったか、被覆層の時間の経過による落ち込み等があるものと考えられる。第 58 号竪穴建物跡のカマド右ソデからは、構築の際の呪具や鎮魂具として用いられたと想定できる白色礫の出土があり、建物跡の構築・廃絶にあたっては儀礼的なプロセスが伴ったと考えられる。7 世紀代・8 世紀後半～9 世紀代の 2 時期ともカマドの火床をさらい、焼土や炭を交互に重ねるなど儀礼的なプロセスがみられること、(3) に後述するように、8 世紀後半以降の集落運営は有力富豪層机下の運営の一貫と考えられることから、伝統的な習俗に基づくものと考えられる。



第84図 A区全体図

(2) 出土遺物

土師器・須恵器の坏・甕、粗製土器などの土器片、鈔帯、図示し得ない小片ではあったが、石製祭具双孔円板の小片、緑釉陶器片などが出土する。総じて、小片で、遺構内外ともに出土量は少ない。遺構の時期判別は当然のことながら遺物の時期によるものであるが、遺構については図示し得なかった小片も念頭において行った。調査区内やグリッド調査で出土した遺物の中には、図示し得なかったが、6世紀末葉～7世紀初頭と判断される土師器坏片がある。また、粗製土器も同様に6世紀末葉～7世紀初頭と判断される。石製祭具双孔円板は、6世紀末葉～7世紀前半とみられる。本調査区の主体となる時期は、竪穴建物跡が示す、7世紀代、8世紀第4四半期～9世紀代であるが、時間的な上限を求めるならば、6世紀末葉の可能性を考慮しておきたい。

土師器は7世紀代の坏に特徴がみられる。形状は模倣坏であり、細部にヴァリエーションがみられる。視覚的な色調や胎土については、白色・橙色・赤色に大別できる。赤色については赤彩や赤彩に類するものを表す。器面はウルシ処理の有無に大別される。磨滅等でウルシの痕跡がなくなったものや判別が難しい程度に薄くなったものもあるが、ウルシ処理を施すものが多い。ウルシは内面から外面口縁部付近に塗布されるものが多い。遺物観察表の記号は以下を示す。

・色調・器面処理

a 色調白色ウルシ仕上げ b 色調白色 c 色調橙色ウルシ仕上げ d 色調橙色 e 赤色

・形状

特徴は以下に分別でき、記号で示した。

①身模倣

稜をもって立ち上がる

稜明瞭	ヨコナデの沈線が伴うものあり	口縁部	直立 丸みをもって立ち上がる
-----	----------------	-----	-------------------

稜不明瞭 ヨコナデの沈線のみものあり

稜なし

「」状に立ち上がる	口縁部	丸みをもって立ち上がる 直立
-----------	-----	-------------------

②身模倣

稜をもって立ち上がる

稜明瞭	ヨコナデの沈線が伴うものあり	口縁部	直立 丸みをもって立ち上がる
-----	----------------	-----	-------------------

稜不明瞭 ヨコナデの沈線のみものあり

稜なし

③蓋模倣

稜をもって立ち上がる

稜明瞭	ヨコナデの沈線のみものあり	口縁部	外反して立ち上がる 外傾して立ち上がり、口縁部中位で直立 丸みをもって立ち上がる
-----	---------------	-----	--

土師器の環以外の器種については、小片のため判別ができないものが多く、鉢類は胎土が緻密で、内外面の仕上げが丁寧、被熱の痕跡や付着物のないもの、甕類は胎土が粗く、内外面の仕上げが簡素（粗いヘラケズリなど）、被熱の痕跡や付着物が観察されるものとした。

須恵器は環を主体に甕類が出土する。判別し得た産地は栃木県益子窯、茨城県新治産、茨城県三和窯跡群産、胎屋産であるが、三和山窯跡群産・南那須窯跡群産の可能性のあるものがある。何れも9世紀代とみられる。時期ごとの消長を追える数量ではないが、9世紀中葉には三和窯跡群産の比率が高い。本調査区の位置する下野市の南隣である小山市にあり、本調査区から約18.0km南方に位置する金山遺跡（小山市東野田）の調査において、9世紀中葉に三和窯跡群産のものが主体となることが報告されている。本調査区においても同様の傾向が見て取れる。

粗製土器は、第58・64・79号竪穴建物跡N-9・10グリッド、O-9グリッドからあわせて6点が出土する。第64号竪穴建物跡4、第79号竪穴建物跡5はスス状の付着物がみられ、灯明皿へ転用されたことがわかる。出土状況を見ると、第64号竪穴建物跡では、覆土上層にあり、8世紀後葉以前の鈎帯や9世紀中葉の土師器甕（常陸型）がほぼ同レベルで出土する。現状での建物跡被覆最上層あるいは後世の自然堆積層の境目付近にあたる。スス状の付着物について、理化学分析等は行っていないが、目視した様子は油煙状である。あくまで、感覚的ではあるが、粗製土器の時期にそぐわないように感じられる。第64号竪穴建物跡埋没後に遺棄されたものであるとも考えられるが、鈎帯7点に近接して出土することに留意するならば、第64号竪穴建物跡産絶の儀礼に関わる祭具として用いられた可能性を指摘しておきたい。

スス状の付着物があり、灯明皿に転用されたこと判断されるのは、須恵器の他に、須恵器環（第62号竪穴建物跡（不掲載）・第64号竪穴建物跡13）、須恵器高台付環（第64号竪穴建物跡14）、土師器碗（ロクロ使用・内面ウルシ仕上げ 第64号竪穴建物跡6）、不掲載須恵器環・N-10-d土師器甕口縁部1がある。灯火を用いる祭祀などの行為が少なくとも9世紀代までは行われた可能性を考えておきたい。

緑釉陶器片は第64号竪穴建物跡・P-11から2片が出土する。器種や時期の判別は難しいが、緑釉陶器自体の出現時期は本調査区の遺構の時期からは9世紀代の可能性が考えられる。狭量な地形を遡地し、数軒程度で展開する集落跡からの出土は、鈎帯7点とともに、留意すべき点であろう。

石製祭具双孔円板はA西区から1片が出土する。片面が剥落し破片自体も小さい。石材は薄い緑色の粘板岩製であり、6世紀末葉～7世紀前半とみられる。竪穴建物跡の時期に先行するが、7世紀代の第8・58号竪穴建物跡の床面やカマドからは複数時期が想定でき、産絶時期を7世紀前葉とすれば、時的に符号する。粘板岩製の石製祭具については、近年、6世紀～7世紀代の集落跡である埼玉県行田市北大竹遺跡からの出土例がある。北大竹遺跡は石製祭具や子持勾玉が纏まって出土したことから、古代国家の形成を地方から考える上で学術的価値が高いとの評価がある。本調査区出土の1片についても留意したい。

鈎帯は、第64号竪穴建物跡から鉤貝半欠1点・巡方5点（大3点・小2点）・鉤尾1点の計7点が出土する。報文の記載どおり、銅製で黒漆が塗布され、『養老令衣服令』に定められた六位以下の帯金具「烏油装」に相当する。金属製の帯金具については、延暦15（797）年に禁止令が發布されているため、8世紀末葉以前の時期を推定できる。出土状況からは鈎帯として使用できる状態は想定し得ない。しかし、表裏面を留める鉤の残存状況が良好であり、金具自体の破損はないと判断できる。また、「烏油装」帯の金具装着個数は、これまでに10～12個が知られているが、本調査からの出土数はこれには満たない。このような状況などから、革帯を挟んだまま切断された可能性が一考される。出土層位をみると、1・2は1かいは2層中から同レベルで、3～7は5層中から3・4と5～7が上下に確認される。第64号竪穴建物跡の層位は1～4層（E

群)は自然埋没、5層以下(A～D群)は廃絶の関わる埋土と判断しており、廃絶に関わる埋土最上層に「烏油装」鈎帯が切断された状況で出土すると考えられる。第3章第3節(2) 竪穴建物跡に記載のとおり、竪穴建物跡の廃絶に際して、習俗的な儀礼のプロセスを経たことを想定したが、鈎帯が祭具とされ、第64号竪穴建物跡廃絶時に撤下された可能性を提示しておきたい。また、先述の粗製土器4は6世紀末葉から8世紀初頭とみられ、20・21層から出土する。習俗的な儀礼のプロセスに関わる灯明具として、一回性の祭具に使用したものを埋め戻した可能性を考慮しておきたい。

(3) 集落の変遷

先述のとおり、今回の調査においてはA区への遺構の集中がみられる。第2章第2節歴史的環境の記載のとおり、本調査区東側の谷を挟んだ台地にあり、A区を目視できる位置関係にある大坂遺跡は谷(A区東側の谷)を西側に見る位置にあり、本調査区と同時期とみられる遺構が確認されている。本調査区の西側については、先述の地形の改変により、遺構の痕跡が一掃された可能性もあるが、遺物の出土も疎であることから積極的に遺構の存在は肯定し得ない。このため、A区を集落域として、その変遷を考えたい。

A区については、東側の谷に面した狭量地に展開する。竪穴建物跡の時期は6世紀末葉～7世紀前葉、8世紀第4四半期～9世紀代であり、遺構の空白期(7世紀後半～8世紀前半)を挟んだ2時期の変遷が考えられる。遺物の出土が少なく、同時存在の竪穴建物跡を明確に把握できないが、遺構間の位置関係をみても、2軒以下の集落域であったと思われる。調査区周辺で同時期の遺跡には、本調査区南側の同じ谷筋に面して、三ノ谷遺跡、二ノ谷遺跡、三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡、谷館野東遺跡、上芝遺跡がある(第6図・第21表)。上芝遺跡は9世紀中葉以前・以後の2時期に大別される掘立柱建物跡を有する遺構配置にあり、本調査区などとは同列に考えることはできないが、これ以外の遺跡は、本調査区をはじめ、竪穴建物跡2～3軒を単位とし、出土遺物が少ない点は、各遺跡に共通した特徴である。集落が2～3軒程度の小規模な集団で展開するのか、散在する小規模な集団を基本とする共同体的な纏まりがあったかは明らかにし得ないが、同じ谷筋に特徴の似た集落が展開することからは、自然条件に合わせた小規模な小支谷の開発行為が関連するものと考えられる。谷の肥沃地や生産性などの理由で集落が遷地されたのであろう。

周辺の遺跡を含めた集落の時期をみると、8世紀第1四半期までの遺構を有する本調査区前半期、三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡と、8世紀後半～9世紀代の遺構を有する本調査区後半期、三ノ谷遺跡、二ノ谷遺跡、谷館野東遺跡に2大別できよう。周辺の遺跡とは異なる本調査区の特徴は7世紀後半～8世紀前半に遺構の空白期があることである。この空白期については、調査区周辺への移動や気候変動などによる移住、社会情勢の変化などの理由が考えられよう。

気候変動については第22・23表のとおり、7世紀後半～8世紀前半に降水量に変化はないが、寒冷化が認められる。8世紀前後に寒冷化の緩みが見取れるが、8世紀第1四半期の竪穴建物跡が大多数を占める三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡については、この寒冷化の緩みに関連した集落展開とも考えられる。本調査区を含め寒冷化による集落様相の変化があった可能性は否定できない。

また、調査区周辺へ移動した可能性も考えられるが、確認調査などが実施されておらず不明である。

社会情勢の変化については、北方約2.2kmに位置する下野薬師寺跡との関連は考慮すべきであろう。下野薬師寺の創建は7世紀代の天武天皇の時代とされ、8世紀中頃には官寺化に伴い「造薬師寺司」が設置される。下野薬師寺周辺には、造営・改修・維持を担ったと考えられる薬師寺南遺跡や落内遺跡、多功南原遺跡が位置する(第6図)。何れも、100軒を超える竪穴建物跡や掘立柱建物跡を有し、軒数の増減はあるものの、7

世紀代から連続と続く大規模集落である。大規模集落の周辺には衛星的に小規模集落の分布がみられることが指摘されている。本調査区の遺構の空白期を直接的に理由付けるものではないが、多功南原遺跡の集落の推移は参考になるべき事項と考えられる。

多功南原遺跡は本調査区北方約4.0kmに位置し、調査担当者は「薬師寺の初期荘園的な背景の中で拡大を計った集落の様相から推察すると、行政的な手続きを経て集落を形成した後、統括権を掌握した大形建物跡居住者はこの地を代々基盤として成長した郡司層か官人を輩出でき得る都領氏族と考えられる」とする(山口2014)。8世紀前半～中葉頃に集落拡大し、8世紀中葉～9世紀前半が最盛期を迎えるが、下野薬師寺の活況と連動するような集落の拡大とみられている。集落は複数のブロックに区画されるが、西地区南東大形建物群中にある第452円形有段遺構から、ほぼ完形の土師器環約80点の出土が知られている。中には「酒杯」の墨書を持つものがあり、8世紀後半に土師器を用いての大饗宴があったことが推定されている。これとは別に、南東地区大形建物群からの須恵器を用いた大饗宴が考えられており、土師器・須恵器の違いを饗宴参加者の身分差としている。土師器の大饗宴は、「大土木工事などの負担体系に関する饗宴や農業共同体における農耕に伴う労働への対価として催された饗宴・祭礼」と指摘されており、大土木工事を下野薬師寺のみ

第21表 本調査区及び周辺諸遺跡 竪穴建物跡一覧

時期	主軸	大きさ (東西×南北×深さ)	柱	カマド	特徴	
第8号竪穴建物跡	7世紀前半 N-32° W	5.7 × (5.2) × 0.5	主柱穴4本か	カマド 北端中央部	2時期以上 6世紀末葉の可能性あり	
第58号竪穴建物跡	7世紀前半 N-33° W	6.29 × 5.6 × 0.7	主柱穴4本か	カマド 北端中央部	3時期以上	
第19号竪穴建物跡 (7世紀代)	N-36° E	{5.0} × 4.7 × -	不明	不明	カマドは重複により欠 北カマドか	
第4号竪穴建物跡	8世紀第4四半期?	N-37° E	2.96 × 2.74 × 0.2	不明	掘方露出	
第15号竪穴建物跡	8世紀第4四半期?	N-46° E	2.65 × 2.8 × 0.85	-	ステップ状施設あり	
第64号竪穴建物跡	9世紀中葉	N-50° E	一辺3.66 × 0.5	2穴か	カマド 南端隅部	2時期以上か
第62号竪穴建物跡	9世紀中葉前後か	N-45° E	{2.8} × 2.78 × 0.1	不明	カマド 東壁	
第9号竪穴建物跡 (9世紀代)	N-37° E	2.82 × 2.44 × 0.72	-	-	ステップ状施設あり	
第12号竪穴建物跡	不明	N-13° E	1.36 × (2.4) × -	不明	カマド 東壁	
第79号竪穴建物跡	不明	(N-36° E)	-	不明	カマド (東壁)	掘方露出 カマド位置・主軸などから9世紀代の可能性あり
第93号竪穴建物跡	不明	N-25° E	一辺5mほどか	不明	SK-217 (東側)	掘方露出 大きさからは7世紀代か

遺跡名	軒数	遺構名	時期	大きさ (南北×東西×深さ)	柱	火処	
三ノ谷	2	D4 SI-004	8世紀後半	6.28 × 6.24 × 0.3	4	カマド	時期不明の竪穴1軒
		C3 SI-003	9世紀末葉	3.12 × 2.8 × 0.25	0	カマド	
二ノ谷	2	D5 SI-006	8世紀中頃に近い後半	4.4875.18 × 0.22	2	カマド	
		D5 SI-001	8世紀後半	4.58 × 5.18 × 0.2	4壁	カマド	
三ノ谷東・谷畑野北	10	D3 SI-002	7世紀末～8世紀第1四半期	2.90 × 3.7 × 0.65	1人口	カマド	
		D3 SI-009	8世紀初頭～8世紀第1四半期	5.94 × 5.86 × 0.59	5 主4入り口1	カマド	
		D3 SI-008	8世紀第1四半期	2.95 × 3.73 × 45	2人口など	カマド	
		D3 SI-0010	8世紀第1四半期	4.70 × 4.85 × 45	4	カマド	
		D3 SI-005	8世紀第1四半期	3.43 × 4.26 × 0.69	1人口	カマド	
		D3 SI-001	8世紀第1四半期	2.25 × 3.65 × 0.3	2入り口・カマド前	カマド	
		D3 SI-007	8世紀第1四半期	3.6 × 4.97 × 0.35	2人口	カマド	
		D4 SI-008	7世紀後半～8世紀前半	5.45 × 5.41 × 0.38	5 主4入り口1	カマド	
谷畑野東	6	D4 SI-004	8世紀第1四半期	5.95 × 5.75 × 0.61	5 主4入り口1	カマド	
		D4 SI-009	8世紀第1四半期	6.56 × 6.3 × 0.29	4	カマド	
谷畑野東	6	C2 SI-004	9世紀中葉以前	3.26 × 不明 × 0.36	西1/3区外 東壁3入り口1	カマド	
		SI-001	9世紀中葉以前	4.60 × 4.16 × 0.70	小穴複数	カマド	
		SI-004	9世紀中葉以前	2.36 × 2.44 × 0.5	小穴複数	カマド	
		SI-005	9世紀中葉以前	3.38 × 2.82 × 0.3	人口1?	カマド	
		SI-007	9世紀中葉以前	4.76 × 4.20 × 0.88	4	カマド	
		SI-002	9世紀中葉以降	4.540 × 3.96 × 1.0	0	カマド	

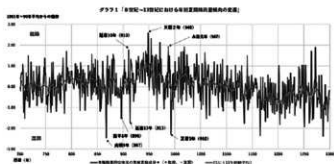
独立柱建物群を配置する上、
芝遺跡の直側に隣接

ならず、本遺跡付近の下野国分寺・尼寺、官道整備などの事業と捉えられている（山口2014）。多功南原遺跡の集落拡大時期・最盛期、大饗宴の時期が、本調査区を含む小規模集落の空白期に近い点は留意すべきで、本調査区や周辺の小規模集落がこのような大土木工事のために移住するような社会動向があったことが指摘されている。また、天平17（745）年には聖徳太子永年私財法の施行によって、貴族・豪族や寺院などによる水田開発が活発化する点も留意されよう。本調査区を含め、周辺諸遺跡の集落展開については、気候変動と社会情勢の変化が相まう様相を反映した可能性を考慮にいれておきたい。

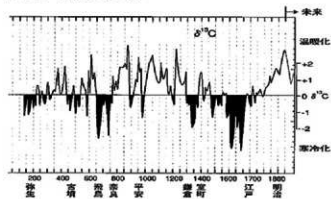
第64号竪穴建物跡から出土する釣帯については、前述のとおり、革帯を挟んだまま切断された可能性を指摘した。集落内から出土する同様の腰帯具についての「腰帯の着用者と上下（主従）関係を結んだ者へ帯の一部を切断し、分配した」との指摘（田中2002）は興味深い。釣帯、調査区内から出土する石製祭具片、緑釉陶器片なども一介の小規模集落では保有し得ない遺物と考えられ、多功南原遺跡のような大規模集落との関連が想起される。一案ではあるが、本調査区前半期や三ノ谷東遺跡・谷館野北遺跡などの小規模集落・共同体が、一時期、多功南原遺跡などの大規模集落に集約され、8世紀第4四半期に水田開発のため、本調査区後半期や、三ノ谷遺跡、二ノ谷遺跡、谷館野東遺跡などの各所へ集落の形成をするような社会事情があった可能性を提示しておきたい。付け加えるならば、調査内から9世紀代とみられる鉄鉢形土器片が出土することからは仏教施設と関連のある集落である可能性も考えておきたい。

本調査区後半期の竪穴建物跡をみると、周辺の遺跡には見られない、カマドの敷設のない竪穴建物跡が確認され、且つ、第9・15号竪穴建物跡のようにステップ状の施設の敷設もある。（第9・15号竪穴建物跡の床面には被熱の痕跡はないが、炭化物が確認されることを付記する。）多功南原遺跡では住居・長期貯蔵施設・簡易貯蔵施設・井戸の組み合わせによる遺構配置が確認されているが、本調査区のカマドのない竪穴建物跡についても住居以外の貯蔵施設的な竪穴建物跡である可能性は否定できない。また、竪穴建物跡の配置をみると、谷を意識したとみられる7世紀代とは異なり、建物の主軸には規則性がうかがえる。また、カマドの位置も7世紀代とは反対側となる谷側の壁面へ付設される。この7世紀代とは異なる規制性についても社会事情に即した可能性、官道等の整備による土地の利用状況の変化などの可能性を考えておきたい。

第22表 気候変動表（1）



第23表 気候変動表（2）



第4節 中世以降

(1) 土坑・溝状遺構

土坑39基を確認した。A区30基、B区5基、C区3基、D区1基である。

A区の土坑の配置をみると、概ね東側の谷に平行あるいは直交する。N・8・0・9・0・10グリッドに位置し谷に直交する第46～49・57・82～84号土坑、0・9・10・11グリッドに位置し谷に平行する第50・51・53号土坑の配置からは第59号溝状遺構を結ぶ区画が想定できよう。これらの土坑は溝の形態ではないため、区画溝に沿った施設の可能性も考えられる。第85号溝状遺構や第14・16～18・52・81・96・97号土坑も区画に類する遺構と考えられる。各土坑の規模や深さは不統一であるが、地形によるものか、用途によるものかは判然としない。第14・72号土坑から出土する陶磁器片が近代の製品である可能性があることや、第45号土坑からビー玉が出土することなどから、近代以降の掘り込みである可能性が高いと考えられる。第95号土坑の堆積が耕作土直下であることから、客土以前の地割を示す可能性があろう。B区で確認された5基についても谷に向かう傾斜に直交する。A区同様の用途が想定される。第91号土坑から出土する磁器の年代から大正時代～昭和時代初期の遺構の可能性を考慮しておきたい。

A区第22号土坑やD区第75号土坑のような円形の掘り込みについては判然としない。また、第94・95号土坑のような焼土の堆積がみられる掘り込みについても、掘り込み面など不明な点が多い。

(2) 出土遺物

第59号溝状遺構や各グリッド、調査区内から出土する磁器は、藍色釉を施す鉢類(SD-59-9・確認調査T8が接合)、接合はしないが、緑色釉を施す小碗(SD-59-6・確認調査T8)・市松に梅文を描く小碗(SD-59-3・A区表採・確認調査T8)など同種の破片が出土する。大正時代末葉～昭和時代初期の量産品とみられる。同じ文様を描く数茶碗の可能性があろう。土坑や溝状遺構に伴う可能性が考えられる。また、茶道具とみられる破片の出土がある。灰器に似る無釉陶器が0・9グリッドから、茶人とみられる破片がM-10-dから出土する。小片のため時期の推定は難しい。確認調査では重なった状態の寛永通宝が確認されている。これらは、低地を主体とした土地利用が連続となされた傍証となろう。

時期は判然としないが、扁平な小礫が出土する。N・8・1・2、不掲載の5点である。不掲載の5点の出土位置・寸法・石材は、第19号竪穴建物跡：長軸2.9cm・短軸2.3cm・重さ10.75g・砂岩、第58号竪穴建物跡：長軸2.2cm・短軸1.8cm・重さ4.22g・玉髓、第64号竪穴建物跡：長軸1.5cm・短軸1.3cm・重さ1.74g・玉髓、N-10-b：長軸1.7cm・短軸1.4cm・重さ2.11g・砂岩、N-11-a：長軸1.8cm・短軸1.4cm・重さ2.04g・頁岩である。砂岩を石材とする第19号竪穴建物跡・N-10-bには研磨の痕跡はないが、これ以外の3点は研磨されたような光沢を持つ。色調は第58号竪穴建物跡出土・N-11-a出土のものが黒色、第64号竪穴建物跡出土のものが白色である。これらの3点と図示した2点(第82図N-8・1・2)については、平面形が正円形ではないことや形状に斉性がないことなど不詳な点も多いが、礫石の可能性を考えておきたい。

〈第22・23表出典〉

北川浩二ほか 1998 「屋久杉年輪の炭素同位体比変動から推定される過去2000年間の気候変動」『気象研究ノート』

董生 衛 2021 「平安時代の災害と新たな神まつり 文献史料と気候変動データからみた祭礼の成立」『古代の祭りと

災害 疾病・災害・祟り』國學院大學學術資料センター編

〈参考文献〉

- 木村泰彦 2002 「銅鈎から石鈎へ」『鈎帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 篠原浩恵 2003 「霞内西遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第275集』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 篠原浩恵 2010 「ローム・焼土・炭化物-竪穴建物跡にみる特徴的な覆土堆積事例-」『池上悟先生選賢記念論文集』
- 田中広明 2002 「腰金具の変遷と諸問題」『鈎帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 津野 仁ほか 1996 「金山遺跡Ⅳ」『栃木県埋蔵文化財調査報告第179集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 中川あや 2002 「中国出土の腰帯金具-日本出土資料との比較を中心に-」『鈎帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 中村信博 2017 「堀込型石鐮の研究」『石鐮を中心とする押圧剝離系石器群の石材別広域編年の整備』科学研究費補助金 基盤研究(c)
- 藤田典夫 1999 「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 山口耕一ほか 1999 「多功南原遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第222集』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 山口耕一 2014 「下野国 河内・都賀郡の地域開発-多功南原遺跡を中心に-」『古代東国の考古学3 古代の開発と地域の力』高志書院

附章 自然科学分析

第1部 篠崎遺跡発掘調査に係る自然科学分析

(株) 火山灰考古学研究所

1. はじめに

北関東地方中央部に位置する栃木県域には、日光火山群や那須火山はもちろんのこと、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山、さらには中部地方、中国地方、九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く降灰している。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代、さらに岩石記載の特徴などがテフラ・カタログ（町田・新井, 2011）などに収録されており、考古遺跡でテフラに関する調査分析を行い、年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、考古遺物包含層や遺構の層位や年代に関する情報が得られるようになっている。

下野市篠崎遺跡における発掘調査では、多くの地点で層位や具体的な年代が不明な遺構や土層が認められたところから、現地で地質調査を実施して土層層序の記載を行うとともに、高純度で採取した試料を対象とした実験室内でのテフラ分析（テフラ検出分析）により、指標テフラの検出同定を行うことになった。土層調査分析の対象地点は、A区トレンチ3、A区第79・80号竪穴建物跡、A区トレンチ5、A区SI-15壁面、A区トレンチ6とその下部、A区トレンチ9、B区トレンチ12、B区トレンチ13、C区トレンチ15-C西壁、C区トレンチ15-A（P-65脇）、C区トレンチ15-B南壁、C区トレンチ15-D東壁、D区トレンチ21南壁（SK-75脇）、D区トレンチ22A東壁の14地点である。

2. 調査地点の土層層序

(1) A区トレンチ3

下位より灰色粘質土（層厚2cm以上）、砂混じり黄灰色土（層厚9cm）、成層したテフラ層（層厚11cm）、灰色砂質土ブロック混じりでやや暗い灰褐色土（層厚8cm）、黒灰色泥質土（層厚9cm）、黒褐色土（層厚30cm）、暗褐色土（層厚19cm）、やや暗い灰褐色土（層厚20cm）、灰色粗粒火山灰に富む白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚9cm）、灰色粗粒火山灰混じり黒色土（層厚5cm）、盛土（層厚10cm）が認められた（図1）。

(2) A区第79・80号竪穴建物跡

下位の旧第80号竪穴建物跡の覆土（22層）は白色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚24cm）で、上位の第79号竪穴建物跡の覆土は炭化物を多く含む白色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚19cm）である（図2）。

(3) A区トレンチ5

下位より黒色土（層厚22cm以上）、ローム粒子混じり黒褐色土（層厚30cm）、ローム粒子を多く含む黒褐色土（層厚29cm）、最上部に土器片を含む灰褐色土（層厚17cm）、やや灰色がかかった褐色土（層厚15cm）、白色粗粒火山灰を多く含む暗褐色土（層厚28cm）、やや灰色がかかった褐色土（層厚9cm）が認められた（図3）。

(4) A区SI-15 壁面

SI-15 壁面では、遺構基盤のいわゆるローム層を観察できた(図4)。ここでは、下位より黄褐色土(層厚22cm以上)、褐色土(層厚17cm)、黄色細粒軽石に富む灰色土(層厚29cm、軽石の最大径5mm)が認められた。これらのうち、最上位の灰色土中に多く含まれる黄色細粒軽石は、岩相から赤城産テフラ(Ag-KP、約4.5万年前以前、新井,1962、守屋,1968、町田・新井,2011など)に由来するものと考えられる。

(5) A区トレンチ6・6下部

ここでは、断片的ではあるがローム層の断面を観察できた(図5・6)。ローム層は、下位より黄色土(層厚9cm以上)、白色粗粒火山灰に富む灰色がかった黄色土(層厚10cm)、褐色土(層厚28cm)、やや灰色がかった褐色土(層厚12cm)、基底が不明瞭な厚い黄色軽石層(層厚29cm以上、軽石の最大径6mm)、暗灰褐色土(層厚26cm)からなる(図5・6)。これらのうち、厚い黄色軽石は、層相からAg-KPに同定される。

(6) A区トレンチ9

ここでも断片的にローム層の断面を観察できた(図7)。ローム層は、下位より褐色土(層厚5cm)、白色粗粒火山灰混じり褐色土(ブロック状、最大層厚7cm)、灰色がかった褐色土(層厚20cm以上)、やや暗く灰色がかった褐色土(層厚13cm)、マンガン層(層厚0.2cm)、リモナイト層(層厚0.3cm)、黄色がかった灰色土(層厚2cm)、リモナイト層(層厚0.2cm)、成層した厚いテフラ層(層厚45cm)からなる。このうち、成層したテフラ層は、主体部が粒径の良くそろった黄色細粒軽石層(層厚44cm、軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径3mm)で基底部に逆級化構造をもつ黄色砂質細粒火山灰層(層厚1cm)が認められる。この成層したテフラ層は、層相からAg-KPに同定される。

(7) B区トレンチ12

下位より黄～灰色細粒軽石を多く含む褐色土(層厚3cm以上、軽石の最大径2mm)、黄褐色土(層厚17cm)、灰色がかった黄色土(層厚26cm)、白色粗粒火山灰を多く含む灰色がかった黄色土(層厚14cm)、灰白色粗粒火山灰混じり灰褐色土(層厚24cm)、黄色軽石層ブロック混じり暗灰褐色土(層厚11cm)が認められた(図8)。

(8) B区トレンチ13

下位より橙褐色スコリアを少し含む黄色土(層厚10cm以上、スコリアの最大径6mm)、黄色土ブロック混じり灰褐色土(層厚7cm)、ローム粒子混じり暗灰褐色土(層厚15cm)、やや暗い灰褐色土(層厚10cm)、灰褐色土(層厚16cm)、灰色がかった褐色土(層厚12cm)、攪乱土(層厚7cm)が認められた(図9)。

(9) C区トレンチ15C 西壁

下位より橙褐色細粒スコリアをわずかに含む暗灰褐色土(層厚17cm、スコリアの最大径2mm)、灰褐色土(層厚12cm)、灰色がかった褐色土(層厚13cm)、白色粗粒火山灰混じり灰褐色土(層厚19cm)、やや締った褐色土(層厚9cm)が認められた(図10)。

(10) C区トレンチ 15-A (P-65 脇)

下位より暗灰褐色土(層厚 3cm)、成層した厚いテフラ層(層厚 129cm)、灰褐色作土が認められた(図 11)。このうち、成層したテフラ層は主体部が粒径の良くそろった黄色細粒軽石層(層厚 128cm)で、基底部に黄色細粒火山灰の薄層(層厚 1cm)が伴われる。これらのうち、成層したテフラ層は、層相から Ag-KP に同定される。

(11) C区トレンチ 15-B 南壁

下位より灰色がかかった黄色土(層厚 10cm 以上)、暗灰褐色土(層厚 30cm)、黄色がかかった灰色土(層厚 13cm)、灰色がかかった黄色土(層厚 19cm)、炭化物混じり黄色土(層厚 16cm)、やわらかい灰褐色土(層厚 32cm)が認められた(図 12)。

(12) C区トレンチ 15-D 東壁

下位より黒みをおびた褐灰色土(層厚 12cm)、暗灰褐色土(層厚 10cm)、灰色がかかった褐色土ブロック混じり灰褐色土(層厚 10cm)、灰色がかかった褐色土(層厚 11cm)、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土(層厚 23cm)、灰褐色砂質土(層厚 12cm、旧作土)、褐色土ブロック層(層厚 13cm、盛土)が認められた(図 13)。

(13) D区トレンチ 21 南壁 (SK-75 脇)

下位より黄灰色シルト層(層厚 4cm 以上)、灰色シルト層(層厚 17cm)、黄色シルト層(層厚 12cm)、炭化物混じり灰色泥質土(層厚 9cm)、黄灰色泥質土(層厚 8cm)、灰色土(層厚 6cm)、成層したテフラ層(層厚 12cm)、黒色土(層厚 26cm)、暗灰褐色土(層厚 14cm)が認められた(図 14)。そして、その上位に黒色土(層厚 6cm)と褐色土ブロック層(層厚 43cm)が人為的に盛られている。

(14) D区トレンチ 22-A 東壁

下位より黄色土(層厚 3cm 以上)、ローム粒子混じり暗灰褐色土(層厚 9cm)、黒色土(層厚 15cm)、黒灰褐色土(層厚 10cm)、灰色がかかった褐色土ブロック混じり暗灰褐色土(層厚 13cm)、基底部に土器片を含む灰色がかかった褐色土(層厚 8cm)、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土(層厚 15cm)、炭化物混じり灰褐色土(層厚 8cm)、褐色ブロック層(層厚 10cm 以上、盛土)が認められた(図 15)。

3. テフラ分析(テフラ検出分析)

(1) 分析試料と分析方法

上述の観察地点で採取された試料のうちの 79 点を対象に、含まれるテフラ粒子の特徴や量などを定性的に明らかにするテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 電子天秤を用いて試料 8g ずつを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

1) 検出されたテフラ粒子の特徴

テフラ検出分析の結果を表1～4に示す。この分析では、Ag-KPより上位の多くの試料で、次の少なくとも7種類の火山ガラスを認めることができた。これらの火山ガラスのほかに、タイプaの産出層準より下位には、層相や重鉱物組成に特徴のあるテフラが複数の層準から検出された。

タイプa：無色透明のバブル型ガラス。黒土中のこのタイプには、やや薄手のものも認められる。

タイプb：淡褐色のスポンジ状軽石型ガラス。産出層準には、斜方輝石や単斜輝石が多く含まれている。

タイプc：Ag-KPより上位の多くの試料に含まれる破片状や塊状の分厚い中間型や繊維束状軽石型の火山ガラスで、色調は淡灰色、灰色、淡褐色、無色透明などである。

タイプd：タイプcと共存することもある白色のスポンジ状や繊維束状の軽石型ガラス。このタイプが検出されるテフラ層には、重鉱物（磁鉄鉱など不透明鉱物以外のもの）に斜方輝石および単斜輝石が認められる。

タイプe：良く発泡した灰白色のスポンジ状軽石型ガラス。

タイプf：さほど発泡が良くない白色のスポンジ状軽石型ガラスで、斑晶に角閃石や斜方輝石をもつ。このタイプの産出層準では、火山ガラスが付着したやや粗粒の角閃石が認められる。

タイプg：比較的良く発泡した淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラス。多産層準では斜方輝石や単斜輝石が目立つ。

2) 各地点でのテフラ粒子の産状

・A区トレンチ3

ここでは、試料23や試料21に比較的多くのタイプcやタイプdの火山ガラスが認められた。タイプcがほとんどに、またタイプaが比較的下位の試料に少量ずつ含まれているが、試料11や試料9にはやや薄手のものも含まれている。試料7以上ではタイプeが認められ、試料5以上にはタイプfが含まれている。

・A区第79・80号竪穴建物跡

何れの竪穴建物跡覆土のほとんどの試料に、タイプaやタイプcのほか、タイプeやタイプfが少量ずつ含まれており、特徴的なテフラの濃集は認められなかった。

・A区トレンチ5

試料30～8にタイプcが、また試料10以上にタイプeが少量ずつ含まれている。試料14には、薄手のタイプaがわずかに含まれている。試料6より上位ではタイプfが認められる。試料4と試料2にはタイプgが含まれているが、試料2に多い。

・A区SI-15壁面

Ag-KPの軽石が多く含まれる灰色土の下位より採取された2試料では、火山ガラスは認められなかった。

・A区トレンチ6下部

Ag-KPがブロック状に含まれる土層より下位の白色粗粒火山灰に富む土層から採取された試料1には、重鉱物に斜方輝石や角閃石、それに少量の単斜輝石が含まれている。

・B区トレンチ12

同じく、Ag-KPの下位から採取された5試料では、火山ガラスは認められなかった。軽石が認められた最下位の試料17には、粗粒の斜方輝石や単斜輝石のほかに、角閃石が少量認められた。細粒の斜方輝石の

中に扁平な形態をもつものが含まれている。白色粗粒火山灰が多く含まれる土層から採取された試料7には、斜方輝石や角閃石が多く含まれている。

・B区トレンチ 13

黒土の断面が良好な本地点では、多くの試料でタイプaやタイプcが検出されたものの、タイプe～gは検出されなかった。

・C区トレンチ 15-C 西壁

ここでは、タイプaやタイプcのほかに、試料3と試料2でタイプe、試料2と試料1でタイプfとタイプgが認められた。後者は試料1に多い。

・C区トレンチ 15-B 南壁

何れの試料からもタイプaが検出されたものの、試料2にやや多い。この試料2や試料1には斜方輝石や単斜輝石が多く mafic な産状を呈する。試料1には、ほかにタイプbも認められる。

・C区トレンチ 15-D 東壁

試料2でタイプe～gが認められるが、タイプgは上位の試料1に多い。

・D区トレンチ 21 南壁 (SK-75 脇)

成層したテフラ層の下部から採取された試料4には、タイプdが比較的多く含まれる。それより下位にはタイプcが認められるが、そのうち最下位の試料7の火山ガラスは上位と比較して粗粒である。

・D区トレンチ 22-A 東壁

試料3および試料2でタイプe、試料2にタイプf、そして試料2と試料1にタイプgが認められた。タイプgは試料1に多い。

4. 考察

(1) テフラ粒子の由来について

一般的に後期旧石器時代以降の堆積物と考えられている Ag-KP より上位の火山灰土から検出された火山ガラスのうち、タイプaは、その岩相から約3万年前に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 2011 など) に由来すると推定される。黒土の中部でわずかに認められた薄手のものについては、約7,300年前に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 町田・新井, 1978, 2011 など) に由来するのかもしれない。

多くの斜方輝石や単斜輝石と共存するタイプbは、約2.4～2.9万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 2011, 早田, 2019 など) に由来すると考えられる。

タイプcは、約2万年前の浅間大窪沢テフラ群 (As-Ok Group, 中沢ほか, 1984, 早田, 2019 など) や、約1.5～1.65万年前の浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011 など) で代表される浅間火山軽石流期 (荒牧, 1968) のテフラに由来する可能性が高い。タイプdは、産出層準の層相や岩相から、As-YP 主体部を特徴づけるものであろう。タイプeは、岩相から、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 坂口, 2010) と考えられる。

タイプeについては、6世紀初頭の榛名二ツ岳浅川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) や、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011 など) の可能性が考えられる。テフラの分布と本遺跡の位置関係からは、前者の可能性がより高いことから、ここでは Hr-FA と考えておきたい。さらに、タイプfは、岩相

から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 2011)と考えられる。

これらのほか、タイプIの産出層準では、やや灰色がかった白色のスポンジ状軽石型ガラスがわずかに認められる。この火山ガラスの一部が繊維束状に発泡し、光沢をもつものが多いことから、浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 2011)に由来するのかもしれない。

一方、今回の発掘調査では、Ag-KPより下位でもテフラを認めることができた。そのうち、濃集する白色粗粒火山灰は、層位や重鉱物の組み合わせから、約5万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石(Hr-HP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011など)と考えられる。B区において、それ(試料7)より下位の軽石を多く含む試料17から検出された粗粒の鉱物は、赤城行川テフラ群(Ag-Nm Group, 鈴木, 1990, 町田・新井, 2011)と考えられる。また、同層準付近で認められる細粒で扁平な斜方輝石や角閃石は、その岩相から約5.5万年前以前に中国地方の大山火山から噴出した大山吉倉軽石(DKP, 町田・新井, 1979, 2011など)に由来すると推定される。

なお、B区トレンチ13の最下部で認められた橙褐色スコリアに関しては、いわゆるローム層の最上部付近に層位があることから、約1.4～1.5万年前に男体火山から噴出した男体今市スコリア(Nt-I, 原田, 1943, 町田・新井, 2011など)と考えられる。今後、火山ガラスや鉱物の屈折率特性を明らかにして、指標テフラとの同定精度をさらに向上させると良い。

(2) 指標テフラからみた土層および遺構の層位と年代

・A区トレンチ3

試料23が採取された成層したテフラ層は、As-YPに同定される。試料11付近には、薄手のバブル型ガラスが含まれていることから、K-Ahの降灰層準のある可能性がある。そして、試料3付近には、As-CおよびHr-FAの降灰層準があったと考えられる。

・A区第79・80号竪穴建物跡

第79・80号竪穴建物跡ともに、その層位はHr-FAより上位で、As-Bより下位と推定される。

・A区トレンチ5

ここでは、試料14付近にK-Ah、試料10付近にAs-C、試料6付近にHr-FA、そして試料2付近にAs-Bの降灰層準があったと考えられる。

・A区SI-15壁面

試料2および試料1とともに、AT、As-BP Group、浅間火山軽石流期の火山ガラスが認められないことから、Ag-KPより下位と考えて矛盾はない。

・A区トレンチ6とその下部

試料1採取層準はHr-HP降灰層準と考えられることから、土層はAg-KP以下と考えられる。

・A区トレンチ9

本地点でも、Ag-KPの下位にHr-HPの降灰層準が認められた。

・B区トレンチ12

ここでは、Ag-KPブロック混じりの下位に、DKPやAg-Nm Groupを含む土層、さらにHr-HPの濃集層準が認められた。

- ・B区トレンチ 13

Nt-Iを含むローム層最上部の上位の黒土の断面が認められたものの、As-C以上の指標テフラは検出されなかった。

- ・C区トレンチ 15-C 西壁

試料3付近にAs-C、試料2付近にHr-FA、そして試料1付近にAs-Bの降灰層準があったと推定される。

- ・C区トレンチ 15-B 南壁

いわゆる暗色帯の上位の試料2付近にATとAs-BP Group、そして試料1付近にもAs-BP Groupがあったと考えられる。試料1採取層準には炭化物も存在していて、旧石器時代の遺物包含層の可能性もあるかもしれない。最終氷期の山火事の痕跡であっても興味深い。

- ・C区トレンチ 15-D 東壁

試料2付近にAs-CとHr-FA、また試料1付近にAs-Bの降灰層準があったと考えられる。試料1には、As-Aが混在している可能性もある。

- ・D区トレンチ 21 南壁 (SK-75 脇)

試料8付近にAs-Ok Group、とくにAs-Ok1の降灰層準があったと考えられる。それより上位の成層したテフラ層は、As-YPに同定される。

- ・D区トレンチ 22-A 東壁

試料3付近にAs-C、試料2付近にHr-FA、そして試料1付近にAs-Bの降灰層準があったと考えられる。

赤城火山南麓など群馬県域では、縄文時代中期を中心に明色の淡色黒ボク土(層)が、暗色の腐植質土壌中に形成されている(早田,1990)。その成因については不明な点が多いものの、本遺跡でもK-Ah降灰前後以降に形成された可能性がある明色の土層の存在を確認できた。ただ、本遺跡では地点によって、As-Cの降灰後にも明色土の形成が続いたように見える。土層が薄いため上位からの攪乱の影響も考えられるが、今後その形成過程の解明を実施できると良い。

5. まとめ

下野市篠崎遺跡の発掘調査に際して、野外調査(地質調査)とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、下位より大山倉吉軽石(DKP,約5.5万年前以前)、赤城行川テフラ群(Ag-Nm Group)、赤城鹿沼軽石(Ag-KP,約4.5万年前以前)、始良Tn火山灰(AT,約3万年前)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group,約2.4~2.9万年前)、浅間大窪沢テフラ群(As-Ok Group,約2万年前)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP,約1.5~1.65万年前)、男体今市スコリア(Nt-I,約1.4~1.5万年前)、浅間C軽石(As-C,3世紀後半)、榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA,6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B,1108年)など数多くの指標テフラを検出することができた。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編,10,p.1-79。
 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフラクロノロジーの基礎的研究,第四紀研究,11,p.254-269。
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53,p.41-52。

- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法，日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」,p.136-149.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質，地研専報，no.14,p.1-45.
- 原田正夫（1943）関東ロームの生成に就いて，東大土肥教室報告，3,p.1-140.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義，科学，46,p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰，第四紀研究，17,p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫（1979）大山倉吉軽石層-分布の広域性と第四紀編年上の意義，地学雑，88,p.313-330.
- 町田 洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺（第2刷）」，東京大学出版会，336p.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序，日本第四紀学会講演要旨集，no.14,p.69-70.
- 坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器，群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」,p.103-119.
- 坂口 一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向-中居町一丁目遺跡 H22 の水田耕作地と周辺集落との関係-，群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡 3」,p.17-22.
- 早田 勉（1989）6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害，第四紀研究，27,p.297-312.
- 早田 勉（1990）群馬県の自然と風土，群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編 1 原始古代 1」,p.37-129.
- 早田 勉（2019）北関東地方西部における旧石器時代の火山噴火と環境変化，令和元年度岩宿フォーラム講演要旨集，p.19-25.
- 鈴木毅彦（1990）テフクロノロジーからみた赤城火山最近 20 万年間の活動史，地学雑，99,p.60-75.

表1 A区試料のテフラ検出分析結果(1)

地点	試料	軽石			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態	
A区トレンチ3	1	*	**	pm(sp), md	灰白, 白, 淡灰	色調	opx, cpx, (am)
	3	**	**	pm(sp)	灰白, 白		opx, cpx, am
	5	**	**	pm(sp), md	灰白, 白, 淡灰		opx, cpx, am
	7	*	(?)	pm(sp), md	灰白, 淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	9	*	*	md, bw, pm(fb)	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	11	**	(?)	md, bw	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	13	**	(?)	md, pm(fb), bw	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	15	**	(?)	md, bw	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	17	*	*	md, bw	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	19	**	*	md, bw	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	21	**	**	md, bw, pm(fb)	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	23	**	**	pm(sp), fb, md	白, 無色透明		opx, cpx
25	*	*	md, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白		opx, cpx	
A区79・80号期2建物跡	1	*	*	pm(sp), md	灰白, 白, 無色透明		opx, cpx, (am)
	3	**	(?)	pm(sp), md, bw	白, 灰白, 無色透明		opx, cpx, am
	5	**	(?)	pm(sp), md	白, 無色透明		opx, cpx, am
	7	(?)	(?)	pm(sp), md, bw	灰白, 淡灰, 淡褐		opx, cpx, am
	9	(?)	(?)	md, bw, sc	無色透明, 黒		opx, cpx, am

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

bw: パブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ak: カンラン石, apx: 斜方輝石.

cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, mc: 雲母. 重鉱物の () は量が少ないことを示す.

表2 A区試料のテフラ検出分析結果(2)

地点	試料	軽石			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態	
A区トレンチ5	2	*	***	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 白, 灰白	色調	opx, cpx, (am)
	4	*	*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 白, 灰白		opx, cpx, am
	6	**	**	pm(sp)	白, 灰白		opx, cpx, am
	8	**	**	pm(sp), md	灰白, 淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	10	**	**	pm(sp), md	灰白, 淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	12	*	*	md	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	14	*	*	md, bw, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白		opx, cpx, am
	16	*	*	md	淡灰, 淡褐, 無色透明		opx, cpx, am, (s)
	18	*	*	md, pm(sp)	淡灰, 無色透明, 白		opx, cpx, am
	20	(?)	(?)	md	淡灰, 淡褐, 無色透明		opx, cpx, am
	22	(?)	(?)	md, bw	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	24	*	*	md, bw	淡灰, 無色透明		opx, cpx, am
	26	(?)	(?)	md	淡灰		opx, cpx, am
	28	(?)	(?)	md	淡灰		opx, cpx, (am)
30	*	*	md, pm(sp)	淡灰, 白		opx, cpx, (am)	
A区SI-15断面	1						opx, cpx, am
	2						opx, cpx, am
A区トレンチ6下部	1						opx, am, (cpx)

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

bw: パブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ak: カンラン石, apx: 斜方輝石.

cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, mc: 雲母. 重鉱物の () は量が少ないことを示す.

表3 B・C区試料のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		非晶物 (不透明鉱物以外)	
		量	色調	最大径	量	形態 色調		
B区トレンチ12	3						am, opa, (spx)	
	7						opa, am	
	11						opa, am, cpx	
	15						opa, am, cpx	
	17						opa, cpx, am	
B区トレンチ13	1			(*)	nd	淡灰	opa, cpx, am	
	3			(*)	nd, bw	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am	
	5			*	nd, pm(bsp)	淡灰, 無色透明, 白	opa, cpx, am	
	7			(*)	nd, bw	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am	
	9			(*)	nd	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am	
	11			(*)	nd	無色透明	opa, cpx, am	
C区トレンチ15-C西壁	1			***	pm(bsp)	淡灰, 淡紫, 褐, 白	opa, cpx, (am)	
	2	(*)	白	2.1mm	**	pm(bsp)	淡灰, 淡紫, 褐, 白, 灰白	opa, cpx, (am)
	3			*	pm(bsp), md	灰白, 無色透明	opa, cpx, am	
	4			*	nd	淡灰, 無色透明	opa, am, cpx	
	5			*	nd, pm(fb)	淡灰, 淡紫, 無色透明	opa, cpx, am	
C区トレンチ15-B南壁	1			(*)	bw, md, pm(bsp)	無色透明, 淡紫	opa, cpx, (am)	
	2			*	bw, pm(fb)	無色透明	opa, cpx, (am)	
	3			(*)	bw, pm(fb)	無色透明	opa, am, cpx	
	4			(*)	bw, pm(fb)	無色透明	opa, am, cpx	
	5			*	nd	淡灰, 淡紫	opa, am, (spx)	
C区トレンチ15-D東壁	1			**	pm(bsp)	淡灰, 淡紫, 褐, 白, (灰)白	opa, cpx, (am)	
	2	(*)	白	2.9mm	*	nd	淡灰, 淡紫, 褐, 白, 灰白	opa, cpx, am
	3			(*)	nd	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am	
	4			(*)	nd	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am	
	5			(*)	nd	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am	
	6			(*)	nd	無色透明, 淡灰	opa, cpx, am	

****, とくに多い; ***, 多い; **, 中程度; *, 少ない。

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ol: カンラン石, opa: 斜方輝石,

cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, asc: 雲母, 非晶物のφは量が少ないことを示す。

表4 D区試料のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		非晶物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態 色調	
D区トレンチ21南壁	1			*	nd, pm(bsp)	淡灰, 淡紫, 無色透明	opa, cpx, (am)
	2			(*)	nd	淡灰, 灰	opa, cpx, (am)
	4			**	pm(bsp, fb)	黄白, 白, 無色透明	opa, cpx
	5			*	nd, pm(bsp)	無色透明, 灰, 淡紫	opa, cpx, (am)
	6			*	nd, pm(bsp), bw	淡灰, 淡紫, 無色透明	opa, cpx
	7			*	nd, pm(bsp)	淡灰, 無色透明, 白	opa, cpx
	8			(*)	bw, pm(fb, sp)	無色透明, 淡紫	opa, cpx
	9			(*)	bw, nd	無色透明, 淡灰	opa, am, cpx
	D区トレンチ22-A	1			***	pm(bsp), sc	淡灰, 淡紫, 褐, 黒, 明灰
2				*	pm(bsp)	淡灰, 淡紫, 褐, 白, 灰白	opa, cpx, (am)
3				(*)	nd, pm(bsp)	淡灰, 無色透明, 灰白	opa, cpx, am
4				(*)	nd	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am
5				(*)	nd, pm(bsp)	淡灰, 淡紫	opa, cpx, am
6				(*)	nd	淡灰, 淡紫, 無色透明	opa, cpx, am
7				(*)	nd	淡灰, 無色透明	opa, cpx, am

****, とくに多い; ***, 多い; **, 中程度; *, 少ない。

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型, ol: カンラン石, opa: 斜方輝石,

cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, asc: 雲母, 非晶物のφは量が少ないことを示す。

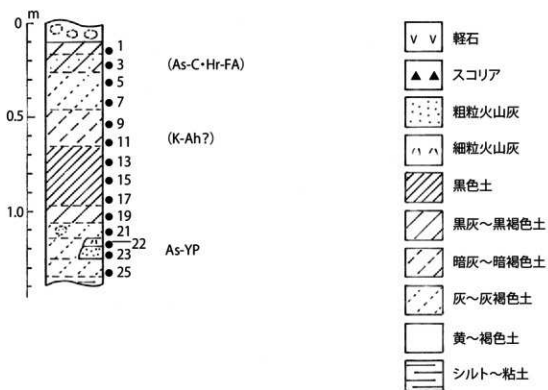


図1 A区トレンチ3の土層柱状図

●：テフラ分析試料の層位，数字：テフラ分析の試料番号。



図2 A区第79・80号竪穴建物跡の土層柱状図

●：テフラ分析試料の層位，数字：テフラ分析の試料番号。

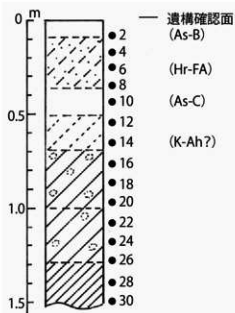


図3 A区トレンチ5の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

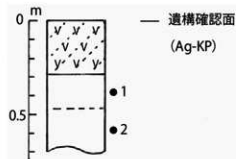


図4 A区SI-15の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

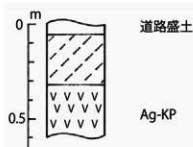


図5 A区トレンチ6の土層柱状図

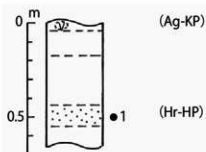


図6 A区トレンチ6下部の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

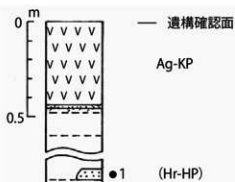


図7 A区トレンチ9の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

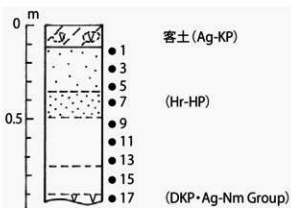


図8 B区トレンチ12の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

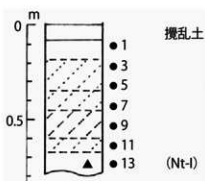


図9 B区トレンチ13の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

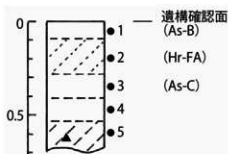


図10 C区トレンチ 15-C 西壁の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

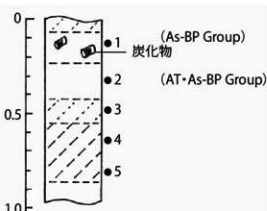


図12 C区トレンチ 15-B 南壁の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

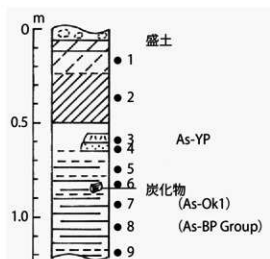


図14 D区トレンチ 21 南壁 (SK75 脇) の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

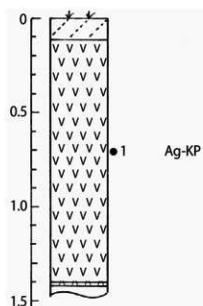


図11 C区トレンチ 15-A (P-65 脇) の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

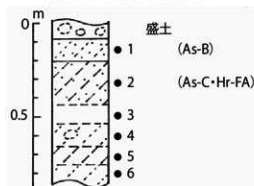


図13 C区トレンチ 15-D 東壁の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

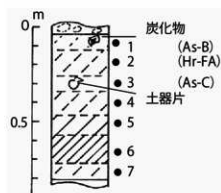


図15 D区トレンチ 22-A 東壁の土層柱状図
●: テフラ分析試料の層位。
数字: テフラ分析の試料番号。

第2部 篠崎遺跡発掘調査に係る出土石器等岩石肉眼鑑定

栃木県下野市篠崎遺跡の岩石肉眼鑑定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

栃木県下野市篠崎遺跡から出土した縄文時代の剥片石器類 1370 点、礫石器 32 点、礫群の礫 104 点の計 1506 点を対象として、岩石肉眼鑑定を行った。本報告では石質に関する資料を作成すると共に、周辺地質との比較から産地について検討を行った。以下にその結果を報告する。

1. 試料

試料の詳細は結果とともに表 1 に記す。剥片石器の試料が大半である。

2. 分析方法

当社技師一名が栃木県埋蔵文化財センターに赴き、岩石肉眼鑑定を行った。岩石肉眼鑑定は、野外用ルーペを用いて行い、岩石表面の鉱物や組織を観察し、五十嵐 (2006) の分類基準に基づき、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。なお、正確な岩石名の決定には、岩石薄片作成観察、蛍光 X 線分析および X 線回折分析などを併用するが、今回は実施していないため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名である点に留意されたい。

3. 結果

鑑定結果は、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターより提供された台帳をもとに作成した岩石肉眼鑑定結果の表 1 に示す。また、剥片石器の出土地点別の石質組成を表 2、礫石器の石質組成を表 3、礫群構成礫の石質組成を表 4 に示す。なお、岩石肉眼鑑定で土器片？、須恵器片？および炭化物とした遺物は考察から記述を除外している。

表 1 (1) 岩石肉眼鑑定結果

遺物名	遺物番号	数値	石材	器種
S-4		1	安山岩	燧石礫(小)
S-4		1	ホルンフェルス	燧石礫(小)
S-4		1	無灰品質安山岩	燧石礫(小)
S-8		1	消炭風化岩	自然礫
SI-8	6	1	デイサイト	自然礫片
SI-8	PG	1	流紋岩	自然礫片
SI-8	2層目	1	流紋岩	自然礫片
SI-8	南東	1	チャート	石礫 62
SI-8	2層目	1	ホルンフェルス(剥片)	
SI-8	北西	1	チャート	剥片
SI-8	北西	2	ホルンフェルス	剥片
SI-8	北西	1	黒曜石	剥片
SI-8	北東	1	チャート	剥片
SI-8	南西	3	チャート	剥片
SI-8	南西	2	ホルンフェルス	剥片
SI-8	砂のべた	1	ホルンフェルス	剥片
SI-8	2層	2	ホルンフェルス	剥片
SI-8	床下	2	チャート	剥片
SI-8	PG	1	シルト岩	燧石礫(小)
SI-8	北西	1	砂岩	燧石礫(小)
SI-9		2	流紋岩	燧石礫(小)
SI-12	付近	1	黒曜石	剥片
SI-12	付近	1	砂岩	剥片
SI-15		1	チャート	石礫 4
SI-15		2	チャート	剥片

遺物名	遺物番号	数値	石材	器種
SI-19		1	砂岩	基石?
SI-19		1	ホルンフェルス	(剥片)
SI-19		6	チャート	剥片
SI-19		1	無灰品質安山岩	剥片
SI-19	B-B' 砂礫土	1	チャート	剥片
SI-58		1	無灰品質安山岩	-
SI-58		1	玉髄	基石?
SI-58		1	チャート	石礫 58
SI-58		1	チャート	石礫 60
SI-58	掘方	1	玉髄	剥片
SI-58	掘方	1	黒曜石	剥片
SI-58	掘方	6	チャート	剥片
SI-58	掘方	1	ホルンフェルス	剥片
SI-58	掘方	1	無灰品質安山岩	剥片
SI-58 ①		1	頁岩	剥片
SI-58 ②		1	黒曜石	剥片
SI-58 ③		6	チャート	剥片
SI-58		34	チャート	剥片
SI-58		4	頁岩	剥片
SI-58		1	黒曜石	剥片
SI-58		2	砂岩	剥片
SI-58		1	石英	剥片
SI-58		1	デイサイト	剥片
SI-58		2	ホルンフェルス	剥片
SI-58		1	無灰品質安山岩	剥片

表1(2) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種	遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
SI-58 ②		1	多孔質安山岩	破砕礫(小)	SK-45	一括	1	ホルンフェルス	破砕礫
SI-58		1	安山岩	破砕礫(小)	SK-47	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)	
SI-58		5	砂岩	破砕礫(小)	SK-52	1	砂岩	(削片)	
SI-58		9	ホルンフェルス	破砕礫(小)	SK-81	1	チャート	-	
SI-58		1	溶結凝灰岩	破砕礫(小)	SK-87	1	軽石火山溶結凝灰岩	破砕礫(小)	
SI-58		1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	SK-95	付置	1	チャート	
SI-58		8	安山岩	礫	SD-59	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	
SI-58		6	輝石安山岩	礫	SD-59	220	1	流紋岩質凝灰岩	礫
SI-58		6	砂岩	礫	SD-59	221	1	ホルンフェルス	礫
SI-58		1	チャート	礫	SD-59	220	1	輝石安山岩	礫
SI-58		1	デイサイト	礫	SD-59	220	1	砂岩	礫
SI-58		7	ホルンフェルス	礫	K-11	南西	1	チャート	削片
SI-58		3	流紋岩	礫	L-9	南東	3	チャート	削片
SI-58		8	流紋岩質凝灰岩	礫	L-12	北採	1	ホルンフェルス	破砕礫
SI-62		2	チャート	削片	L-12	D	1	デイサイト質凝灰岩	破砕礫(小)
SI-64		1	玉髄	基石?	L-12	D	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)
SI-64		1	チャート	石籠 8	M-9	C	1	ホルンフェルス	(削片)
SI-64		1	流紋岩	(削片)	M-10	Dフク土	1	流紋岩質溶結凝灰岩	自然礫片
SI-64		1	頁岩	削片	M-10	フク土	1	砂岩	自然礫片
SI-64		1	流紋岩質凝灰岩	削片	M-10	グリッド表採	1	流紋岩	石籠 51
SI-64		2	チャート	削片	M-10	D	1	チャート	石籠 91
SI-64	カマド	1	チャート	削片	M-10	3	1	チャート	削片
SI-64	SB	1	チャート	削片	M-10	D	1	チャート	削片 76
SI-64	覆土	1	砂岩	削片	M-10	D	1	チャート	削片 90
SI-64		1	ホルンフェルス	破砕礫	M-10	D	1	チャート	削片 117
SI-70	6	1	輝石角閃石デイサイト	自然礫(人取大内溝)	M-10	D	1	チャート	削片 92
SI-70		1	黒曜石	-	M-10	D	1	チャート	削片 98
SI-70		1	チャート	自然礫	M-10	D	1	チャート	削片 124
SI-70		5	流紋岩	自然礫	M-10	D	1	チャート	削片 56
SI-70		1	黒曜石	石籠 38	M-10	Dフク土	19		削片
SI-70		1	黒曜石	石籠 6	M-10	Dフク土	2	黒曜石	削片
SI-70		1	チャート	石籠 15	M-10	Dフク土	3	ホルンフェルス	削片
SI-70		1	チャート	石籠 42	M-10	フク土	2	頁岩	削片
SI-70		1	チャート	石籠 16	M-10	フク土	31	チャート	削片
SI-70		1	チャート	石籠 44	M-10	フク土	6	安山岩	削片
SI-70		1	チャート	石籠 17	M-10	フク土	1	凝灰岩	削片
SI-70		1	安山岩	(削片)	M-10	フク土	6	黒曜石	削片
SI-70		1	玉髄	削片	M-10	フク土	3	ホルンフェルス	削片
SI-70		2	チャート	-	M-10	フク土	1	デイサイト	削片
SI-70		24	チャート	削片	M-10		11	チャート	削片
SI-70		1	頁岩	削片	M-10	D	2	ホルンフェルス	削片
SI-70		1	砂岩	削片	M-10	D	12	チャート	削片
SI-70		1	凝化安山岩	削片	M-10	D	1	安山岩	削片
SI-70		1	黒曜石	削片	M-10	D	2	黒曜石	削片
SI-70		1	ホルンフェルス	破砕礫	M-10	D	1	無灰品質安山岩	削片
SI-70		1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫	M-10	D	2	ホルンフェルス	削片
SI-70		3	砂岩	破砕礫	M-10	D	1	砂岩	破砕礫
SI-70		1	凝灰岩	破砕礫(小)	M-10	D	1	流紋岩	破砕礫
SI-70		2	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	M-10	Dフク土	8	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)
SI-70		3	砂岩	破砕礫(小)	M-10	Dフク土	8	ホルンフェルス	破砕礫(小)
SI-70		1	安山岩	破砕礫(小)	M-10	Dフク土	6	砂岩	破砕礫(小)
SI-70		4	ホルンフェルス	破砕礫(小)	M-10	Dフク土	2	流紋岩	破砕礫(小)
SI-70	カマド No.2	1	火山溶結凝灰岩	礫	M-10	Dフク土	2	デイサイト	破砕礫(小)
SI-80		2	安山岩	自然礫(小)	M-10	Dフク土	2	溶結凝灰岩	破砕礫(小)
SI-80		1	流紋岩質凝灰岩	-	M-10	Dフク土	1	輝石安山岩	破砕礫(小)
SI-80		1	ホルンフェルス	(削片)	M-10	Dフク土	1	変色白い岩	破砕礫(小)
SI-80		1	安山岩	削片	M-10	Dフク土	1	多孔質安山岩	破砕礫(小)
SI-80		1	流紋岩	削片	M-10	Dフク土	1	デイサイト質凝灰岩	破砕礫(小)
SI-80		1	流紋岩	破砕礫	M-10	フク土	7	砂岩	破砕礫(小)
SI-80		1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫	M-10	フク土	4	ホルンフェルス	破砕礫(小)
SK-14		1	溶結凝灰岩	自然礫片	M-10	フク土	1	石英	破砕礫(小)
SK-14		1	流紋岩	破砕礫(小)	M-10	フク土	2	安山岩	破砕礫(小)
SK-16		3	黒曜石	削片	M-10	フク土	2	凝灰岩	破砕礫(小)
SK-16		15	チャート	削片	M-10	フク土	2	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)
SK-16		2	ホルンフェルス	削片	M-10	フク土	1	多孔質輝石安山岩	破砕礫(小)
SK-16		1	ホルンフェルス	破砕礫	M-10		4	輝石安山岩	礫
SK-17		1	砂岩	破砕礫	M-10		2	チャート	礫
SK-17		1	砂岩	破砕礫(小)	M-10		6	ホルンフェルス	礫
SK-18		1	チャート	削片	M-10	D	1	シルト岩	-
SK-18		1	砂岩	削片	M-11	B	1	ホルンフェルス	(削片)

表1 (3) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
M-11	B	1	無明品貫安山岩	(削片)
M-11	C	3	砂岩	(削片)
M-11	C	2	ホルンフェルス	(削片)
M-11	11	1	ホルンフェルス	(削片)
M-11	13	1	ホルンフェルス	(削片)
M-11	18	1	凝灰質シルト岩	自然産
M-11	84	1	輝石安山岩	自然産
M-11	B	1	流紋岩	自然産
M-11	79	1	チャート	石礫未製品
M-11	80	1	チャート	石礫未製品
M-11	A	1	ホルンフェルス	石礫7
M-11	C No.1	1	チャート	石礫7
M-11	北東	1	チャート	石礫41
M-11	A	1	玉髄	-
M-11	A	2	砂岩	-
M-11	3	1	チャート	削片
M-11	4	1	チャート	削片 54
M-11	15	1	チャート	削片
M-11	16	1	チャート	削片
M-11	19	1	チャート	削片
M-11	21	1	ホルンフェルス	削片
M-11	22	1	砂岩	削片
M-11	24	1	黒曜石	削片
M-11	32	1	チャート	削片
M-11	35	1	チャート	削片
M-11	36	1	ホルンフェルス	削片
M-11	B No.2	1	ホルンフェルス	削片 231
M-11	39	1	チャート	削片
M-11	40	1	ホルンフェルス	削片
M-11	42	1	ホルンフェルス	削片
M-11	43	1	チャート	削片
M-11	45	1	ホルンフェルス	削片
M-11	46	1	チャート	削片
M-11	47	1	チャート	削片
M-11	48	1	チャート	削片
M-11	49	1	チャート	削片
M-11	53	1	チャート	削片
M-11	56	1	砂岩	削片
M-11	58	1	頁岩	削片
M-11	65	1	黒曜石	削片
M-11	69	1	砂岩	削片
M-11	83	1	流紋岩	削片
M-11	96	1	チャート	削片
M-11	97	1	黒曜石	削片
M-11	98	1	チャート	削片
M-11	103	1	チャート	削片
M-11	105	1	チャート	削片
M-11	106	1	チャート	削片
M-11	107	1	チャート	削片
M-11	108	1	チャート	削片
M-11	109	1	チャート	削片
M-11	110	1	ホルンフェルス	削片
M-11	111	1	チャート	削片
M-11	113	1	チャート	削片
M-11	116	1	チャート	削片
M-11	117	1	チャート	削片
M-11	A	1	玉髄	削片
M-11	A	1	頁岩	削片
M-11	A	1	無明品貫安山岩	削片
M-11	B	1	砂岩	削片
M-11	B	12	チャート	削片
M-11	B	2	ホルンフェルス	削片
M-11	B	1	無明品貫安山岩	削片
M-11	C	1	砂岩	削片
M-11	C	1	石英	削片
M-11	C	38	チャート	削片
M-11	C	7	ホルンフェルス	削片
M-11	D	2	チャート	削片
M-11	D	1	無明品貫安山岩	削片
M-11		1	チャート	削片

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
M-11	6	1	ホルンフェルス	削片
M-11	7	1	チャート	削片
M-11	8	1	チャート	削片
M-11	10	1	チャート	削片
M-11	北西	1	砂岩	削片
M-11	14	1	ホルンフェルス	破砕産(小)
M-11	25	1	ホルンフェルス	破砕産
M-11	34	1	ホルンフェルス	破砕産
M-11	50	1	ホルンフェルス	破砕産(小)
M-11	52	1	砂岩	破砕産(小)
M-11	55	1	輝石安山岩	破砕産(小)
M-11	86	1	流紋岩	破砕産(小)
M-11	104	1	ホルンフェルス	破砕産(小)
M-11	120	1	砂岩	破砕産(小)
M-11	B	1	凝化安山岩	破砕産(小)
M-11	B	2	ホルンフェルス	破砕産(小)
M-11	B	2	流紋岩	破砕産(小)
M-11	B	2	流紋岩貫凝灰岩	破砕産(小)
M-11	C	2	安山岩	破砕産(小)
M-11	C	2	砂岩	破砕産(小)
M-11	C	2	多孔質安山岩	破砕産(小)
M-11	C	1	デイサイト貫凝灰岩	破砕産(小)
M-11	C	2	ホルンフェルス	破砕産(小)
M-11	C	5	流紋岩	破砕産(小)
M-11	C	6	流紋岩貫凝灰岩	破砕産(小)
M-12	北西	1	チャート	削片
N-8	4	1	ホルンフェルス	(削片)
N-8	5	1	ホルンフェルス	(削片)
N-8	7	1	砂岩	(削片)
N-8	12	1	砂岩	(削片)
N-8	17	1	砂岩	(削片)
N-8	23	1	チャート	(削片)
N-8	31	1	ホルンフェルス	(削片)
N-8	49	1	流紋岩	(削片)
N-8	B	1	安山岩	(削片)
N-8	B	1	頁岩	(削片)
N-8	30	1	安山岩	自然産(小)
N-8	32	1	安山岩	自然産
N-8	19	1	チャート	自然産削片
N-8	C No.1	1	無明品貫安山岩	石礫 37
N-8	5	1	チャート	削片
N-8	6	2	ホルンフェルス	削片
N-8	8	1	砂岩	削片
N-8	13	1	チャート	削片
N-8	14	1	ホルンフェルス	削片
N-8	16	1	チャート	削片
N-8	22	1	砂岩	削片
N-8	24	1	チャート	削片
N-8	25	1	ホルンフェルス	削片
N-8	29	1	砂岩	削片
N-8	39	1	チャート	削片
N-8	40	1	チャート	削片
N-8	45	1	ホルンフェルス	削片
N-8	47	1	チャート	削片
N-8	48	1	砂岩	削片
N-8	50	1	チャート	削片
N-8	52	1	頁岩	削片
N-8	53	1	チャート	削片
N-8	56	1	チャート	削片
N-8	59	1	チャート	削片
N-8	66	1	チャート	削片
N-8	68	1	チャート	削片
N-8	B	4	チャート	削片
N-8	B	5	ホルンフェルス	削片
N-8	B	1	流紋岩	削片
N-8	C	3	頁岩	削片
N-8	C	1	頁岩	削片
N-8	C	1	黒曜石	削片
N-8	C	5	砂岩	削片
N-8	C	34	チャート	削片

表1(4) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	形種	遺構名	遺物番号	数量	石材	形種
N-8	C	8	ホルンフェルス	削片	N-10	12	1	チャート	削片
N-8	C	4	流紋岩	削片	N-10	14	1	チャート	削片
N-8	C	14	チャート	削片	N-10	15	1	チャート	削片
N-8	C	1	チャート	石礫未製品	N-10	16	1	無灰品質安山岩	削片
N-8	34	1	流紋岩質溶結凝灰岩	破砕礫	N-10	17	1	チャート	削片
N-8	34	1	流紋岩質溶結凝灰岩	破砕礫	N-10	18	1	チャート	削片
N-8	62	1	安山岩	破砕礫	N-10	20	1	ホルンフェルス	削片
N-8	67	1	安山岩	破砕礫	N-10	21	1	チャート	削片
N-8	B	1	チャート	破砕礫	N-10	23	1	チャート	削片
N-8	10	1	安山岩	破砕礫(小)	N-10	25	1	チャート	削片
N-8	20	1	流紋岩	破砕礫(小)	N-10	29	1	砂岩	削片
N-8	35	1	溶結凝灰岩	破砕礫(小)	N-10	32	1	砂岩	削片
N-8	C	3	輝石安山岩	礫	N-10	35	1	砂岩	削片
N-8	C	1	デイサイト	礫	N-10	40	1	ホルンフェルス	削片
N-8	C	1	流紋岩	礫	N-10	41	1	チャート	削片
N-8	C	4	流紋岩質凝灰岩	礫	N-10	42	1	チャート	削片
N-8	C	1	デイサイト質凝灰岩	礫	N-10	43	1	ホルンフェルス	削片
N-8	C	6	砂岩	礫	N-10	44	1	チャート	削片
N-8	C	4	チャート	礫	N-10	44	1	ホルンフェルス	削片
N-8	C	8	ホルンフェルス	礫	N-10	44	1	無灰品質安山岩	削片
N-9	4	1	ホルンフェルス	(削片)	N-10	45	1	チャート	削片
N-9	A	1	流紋岩	(削片)	N-10	46	1	チャート	削片
N-9	D	1	シルト岩	自然礫	N-10	47	1	チャート	削片
N-9	C	1	ホルンフェルス	自然礫(小)	N-10	48	1	チャート	削片
N-9	D	3	安山岩	自然礫片	N-10	50	1	チャート	削片
N-9	D	1	チャート	削片	N-10	51	1	砂岩	削片
N-9	2	1	頁岩	削片	N-10	52	1	ホルンフェルス	削片
N-9	D	1	ホルンフェルス	削片	N-10	57	1	ホルンフェルス	削片
N-9	D	1	黒曜石	削片	N-10	59	1	砂岩	削片
N-9	植付原層土	1	チャート	削片	N-10	60	1	チャート	削片
N-9	住居	1	チャート	-	N-10	61	1	ホルンフェルス	削片
N-9	3	1	チャート	削片	N-10	62	1	チャート	削片
N-9	5	1	ホルンフェルス	削片	N-10	63	1	チャート	削片
N-9	6	1	チャート	削片	N-10	64	1	輝石安山岩	削片
N-9	14	1	チャート	削片	N-10	65	1	チャート	削片
N-9	15	1	チャート	削片	N-10	66	1	流紋岩	削片
N-9	16	1	流紋岩	削片	N-10	69	1	砂岩	削片
N-9	17	1	チャート	削片	N-10	70	1	チャート	削片
N-9	19	1	チャート	削片	N-10	71	1	チャート	削片
N-9	22	1	チャート	削片	N-10	74	1	チャート	削片
N-9	23	1	チャート	削片	N-10	76	1	チャート	削片
N-9	A	1	無灰品質安山岩	削片	N-10	77	1	チャート	削片
N-9	A	8	チャート	削片	N-10	78	1	チャート	削片
N-9	C	14	チャート	削片	N-10	79	1	チャート	削片
N-9	C	1	頁岩	削片	N-10	80	1	チャート	削片
N-9	C	1	安山岩	削片	N-10	81	1	チャート	削片
N-9	D	2	チャート	削片	N-10	83	1	チャート	削片
N-9	D	2	砂岩	破砕礫	N-10	84	1	頁岩	削片
N-9	D	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	N-10	85	1	チャート	削片
N-9	D	1	流紋岩	破砕礫(小)	N-10	87	1	チャート	削片
N-9	9	1	砂岩	破砕礫(小)	N-10	88	1	チャート	削片
N-10	B	1	砂岩	礫石?	N-10	B	12	チャート	削片
N-10	C	1	流紋岩	自然礫片	N-10	C	6	チャート	削片
N-10	C	1	珪化流紋岩	自然礫片	N-10	C	1	砂岩	削片
N-10	D	5	砂岩	自然礫片	N-10	C	3	ホルンフェルス	削片
N-10	D	7	ホルンフェルス	自然礫片	N-10	C	1	黒曜石	削片
N-10	D	2	流紋岩	自然礫片	N-10	C	6	チャート	削片
N-10	D	2	安山岩	自然礫片	N-10	C	12	チャート	削片
N-10	D	4	流紋岩質凝灰岩	自然礫片	N-10	C	2	頁岩	削片
N-10	D	1	流紋岩	自然礫片	N-10	D	18	チャート	削片
N-10	D	1	安山岩	自然礫片	N-10	D	4	チャート	削片
N-10	D	3	流紋岩	自然礫片	N-10	D	2	ホルンフェルス	削片
N-10	D	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片	N-10	D	4	チャート	削片
N-10	54	1	砂岩	(削片)	N-10	D	1	ホルンフェルス	削片
N-10	D	1	チャート	(削片)	N-10	南西	1	チャート	削片
N-10	D	2	砂岩	(削片)	N-10	19	1	チャート	破砕礫
N-10	5	1	チャート	削片	N-10	82	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫
N-10	6	1	チャート	削片	N-10	C	2	流紋岩	破砕礫
N-10	9	1	砂岩	削片	N-10	B	5	ホルンフェルス	破砕礫(小)
N-10	10	1	チャート	削片	N-10	B	3	凝灰岩	破砕礫(小)

表1 (5) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数値	石材	部種
N-10	C	1	砂岩	破砕體 (小)
N-10	C	1	安山岩	破砕體 (小)
N-10	C	1	スコリア	破砕體 (小)
N-10	C	2	流紋岩質凝灰岩	破砕體 (小)
N-10	C	5	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-10	C	4	砂岩	破砕體 (小)
N-10	C	5	流紋岩	破砕體 (小)
N-10	C	3	安山岩	破砕體 (小)
N-10	D	3	流紋岩質凝灰岩	破砕體 (小)
N-10	B	1	無灰品質安山岩	-
N-11	A	1	安山岩	-
N-11	16	1	ホルンフェルス	石積か
N-11	A	1	頁岩	基石?
N-11	12	1	多孔質安山岩	自然破片
N-11	10	1	ホルンフェルス	自然破片
N-11	11	1	ホルンフェルス	自然破片
N-11	13	1	ホルンフェルス	自然破片
N-11	岩No5	1	ホルンフェルス	自然破片
N-11	24	1	安山岩	自然破片
N-11	C	1	砂岩	自然破片
N-11	C	1	チャート	自然破片
N-11	17	1	ホルンフェルス	自然破片
N-11	22	1	ホルンフェルス	自然破片
N-11	28	1	ホルンフェルス	自然破片
N-11	15	1	流紋岩	自然破片
N-11	A	1	流紋岩	自然破片
N-11	B	4	流紋岩	自然破片
N-11	25	1	流紋岩質凝灰岩	自然破片
N-11	A	1	流紋岩質凝灰岩	自然破片
N-11	C	1	流紋岩質凝灰岩	自然破片
N-11	18	1	流紋岩質凝灰岩	自然破片
N-11	B	1	チャート	石積 3
N-11	9	1	チャート	石積 5
N-11	8	1	チャート	石積 53
N-11	7	1	チャート	石積 52
N-11	A	1	チャート	石積 48
N-11	岩No2	1	チャート	石積 64
N-11	A	1	チャート	割片 70
N-11	A	1	チャート	(割片)
N-11	A	2	チャート	割片
N-11	A	1	ホルンフェルス	割片
N-11	A	1	赤玉	割片
N-11	A	1	安山岩	割片
N-11	B	1	安山岩	割片
N-11	D	1	輝石安山岩	割片
N-11	A	5	頁岩	割片
N-11	B	1	頁岩	割片
N-11	D	1	頁岩	割片
N-11	A	4	黒曜石	割片
N-11	B	1	黒曜石	-
N-11	C	1	黒曜石	割片
N-11	A	1	砂岩	割片
N-11	B	1	砂岩	割片
N-11	D	1	砂岩	割片
N-11	C	1	石英	割片
N-11	19	1	チャート	割片
N-11	29	1	チャート	割片
N-11	30	1	チャート	割片
N-11	38	1	チャート	割片
N-11	47	1	チャート	割片
N-11	48	1	チャート	割片
N-11	50	1	チャート	割片
N-11	51	1	チャート	割片
N-11	A	60	チャート	割片
N-11	B	5	チャート	割片
N-11	C	6	チャート	割片
N-11	D	7	チャート	割片
N-11	岩No6	1	チャート	割片
N-11	19	1	ホルンフェルス	割片
N-11	A	2	ホルンフェルス	割片

遺構名	遺物番号	数値	石材	部種
N-11	B	4	ホルンフェルス	割片
N-11	C	1	ホルンフェルス	割片
N-11	D	1	ホルンフェルス	割片
N-11	A	1	無灰品質安山岩	割片
N-11	A	2	安山岩	割片
N-11	33	1	安山岩	破砕體 (小)
N-11	32	1	砂岩	破砕體 (小)
N-11	14	1	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	A	1	安山岩	破砕體 (小)
N-11	A	1	砂岩	破砕體 (小)
N-11	D	1	デザート質凝灰岩	破砕體 (小)
N-11	A	3	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	A	1	流紋岩	破砕體 (小)
N-11	23	1	流紋岩質凝灰岩	破砕體 (小)
N-11	A	2	流紋岩質凝灰岩	破砕體 (小)
N-11	A	6	安山岩	破砕體 (小)
N-11	B	2	安山岩	破砕體 (小)
N-11	A	5	砂岩	破砕體 (小)
N-11	D	1	砂岩	破砕體 (小)
N-11	D	2	砂質頁岩	破砕體 (小)
N-11	D	1	多孔質安山岩	破砕體 (小)
N-11	A	1	黒化安山岩	破砕體 (小)
N-11	B	1	黒化安山岩	破砕體 (小)
N-11	31	1	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	37	1	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	42	1	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	43	1	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	A	3	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	北西	1	ホルンフェルス	破砕體 (小)
N-11	D	1	流紋岩	破砕體 (小)
N-11	A	1	流紋岩質凝灰岩	破砕體 (小)
N-11	C	1	流紋岩	破砕體 (小)
N-11	D	1	流紋岩	-
O-8	76	1	流紋岩質凝灰岩	自然破片
O-8	Bフク土	1	チャート	-
O-8	43	1	流紋岩質凝灰岩	(割片)
O-8	2	1	ホルンフェルス	割片
O-8	3	1	チャート	割片
O-8	4	1	チャート	割片
O-8	5	1	ホルンフェルス	割片
O-8	6	1	ホルンフェルス	割片
O-8	7	1	チャート	割片
O-8	8	1	チャート	割片
O-8	15	1	チャート	割片
O-8	16	1	チャート	割片
O-8	17	1	チャート	割片
O-8	20	1	チャート	割片
O-8	22	1	チャート	割片
O-8	23	1	チャート	割片
O-8	24	1	チャート	割片
O-8	28	1	チャート	割片
O-8	30	1	チャート	割片
O-8	32	1	ホルンフェルス	割片
O-8	36	1	無灰品質安山岩	割片
O-8	38	1	チャート	割片
O-8	40	1	チャート	割片
O-8	45	1	チャート	割片
O-8	46	1	チャート	割片
O-8	47	1	チャート	割片
O-8	49	1	ホルンフェルス	割片
O-8	51	1	チャート	割片
O-8	53	1	チャート	割片
O-8	54	1	チャート	割片
O-8	57	1	チャート	割片
O-8	61	1	チャート	割片
O-8	63	1	ホルンフェルス	割片
O-8	65	1	チャート	割片
O-8	66	1	チャート	割片
O-8	67	1	チャート	割片
O-8	68	1	ホルンフェルス	割片

表1(6) 岩石肉眼鑑定結果

遺構名	遺物番号	数量	石材	器種	遺構名	遺物番号	数量	石材	器種
0-8	70	1	流紋岩	割片	O-10	6	1	頁岩	割片
0-8	73	1	チャート	割片	O-10	8	1	チャート	割片
0-8	75	1	チャート	割片	O-10	9	1	黒曜石	割片
0-8	77	1	チャート	割片	O-10	10	1	チャート	割片
0-8	79	1	チャート	割片	P-8		2	チャート	割片
0-8	81	1	ホルンフェルス	割片	P-8	D	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)
0-8	85	1	ホルンフェルス	割片	トレンチ	16JF5	1	チャート	石礫 14
0-8	91	1	チャート	割片	トレンチ	16JF5	1	砂岩	割片
0-8	92	2	チャート	割片	トレンチ	16JF5	2	チャート	割片
0-8	93	1	チャート	割片	トレンチ	16JF5	2	ホルンフェルス	割片
0-8	94	1	チャート	割片	トレンチ	16JF5	1	無節高質安山岩	割片
0-8	96	1	チャート	割片	トレンチ	16JF5 SK 52	1	チャート	割片
0-8	97	1	チャート	割片	トレンチ	16JF5 SK 52	1	砂岩	破砕礫
0-8	98	1	チャート	割片	トレンチ	16JF5	1	ホルンフェルス	破砕礫
0-8	103	1	チャート	割片	A区	表採	1	多孔質安山岩	車門礎・住 13cm
0-8	104	1	頁岩	割片	A区	土山表採	1	輝石安山岩	門礎
0-8	106	1	チャート	割片	A区	表採	1	デイサイト質凝灰岩	自然礫
0-8	107	1	ホルンフェルス	割片	A区	表採	1	消粘凝灰岩	自然礫
0-8	109	1	チャート	割片	A区	谷部	1	流紋岩	自然礫
0-8	110	1	安山岩	割片	A区	表採	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片
0-8	111	1	チャート	割片	土山	表採	1	輝石安山岩	自然礫片
0-8	112	1	チャート	割片	A区	表採 No.1	1	チャート	石礫 1
0-8	115	1	チャート	割片	A区	土山	2	玉髄	割片
0-8	Bフク土	1	チャート	割片	A区	表採	6	チャート	割片
0-8	Bフク土	1	チャート	割片	土山	表採	3	チャート	割片
0-8	C	1	チャート	割片	A区	表採	2	ホルンフェルス	割片
0-8	Cフク土	5	チャート	割片	A区	表採	1	輝石安山岩	割片
0-8	D	2	頁岩	割片	A区	西側	2	チャート	割片
0-8	29	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	A区	表採	1	砂岩	割片
0-8	31	1	砂岩	破砕礫(小)	A区	表採	1	チャート	割片
0-8	33	1	砂岩	破砕礫(小)	A区	西側	1	安山岩	破砕礫
0-8	34	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)	A区	西側	1	流紋岩	破砕礫
0-8	41	1	砂岩	破砕礫(小)	A区	表採	1	砂岩	破砕礫(小)
0-8	48	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)	A区	表採	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)
0-8	50	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)	土山	表採	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)
0-8	52	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	A区	表採	1	輝石安山岩	礫
0-8	11	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	A区	表採	2	砂岩	礫
0-8	12	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)	A区	谷部	1	チャート	-
0-8	12	1	安山岩	破砕礫(小)	A区	表採	1	チャート	-
0-8	14	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)	A区	表採	4	安山岩	-
0-8	82	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)	A区	表採	1	頁岩	-
0-8	86	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	B区	SK 87	1	輝石火山凝灰岩	破砕礫(小)
0-8	99	1	砂岩	破砕礫(小)	B区	表採	1	チャート	割片
0-8	B	1	砂岩	破砕礫(小)	D区	表採	1	ホルンフェルス	割片
0-8	Bフク土	1	安山岩	破砕礫(小)	D区	表採	1	輝石安山岩	礫
0-8	Bフク土	3	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)	D区	表採	1	黒雲母花崗閃緑岩	礫・入道大
0-8	Bフク土	1	砂岩	破砕礫(小)					
0-8	Bフク土	2	ホルンフェルス	破砕礫(小)					
0-8	Cフク土	1	流紋岩	破砕礫(小)					
0-8	Cフク土	2	輝石安山岩	破砕礫(小)					
0-8	Cフク土	1	流紋岩質凝灰岩	破砕礫(小)					
0-8	Cフク土	2	ホルンフェルス	破砕礫(小)					
0-8	B	1	輝石安山岩	礫					
0-8	B	2	安山岩	礫					
0-8	B	1	砂岩	礫					
0-8	B	2	チャート	礫					
0-8	B	2	ホルンフェルス	礫					
0-9	C	1	流紋岩	自然礫					
0-9	A No.1	1	チャート	石礫 13					
0-9	B	1	砂岩	割片					
0-9	B	3	ホルンフェルス	割片					
0-9	B	1	チャート	割片					
0-9	B	1	チャート	割片					
0-9	C	1	頁岩	割片					
0-9	D	1	黒曜石	割片					
0-9	C	2	安山岩	破砕礫(小)					
0-9	C	1	ホルンフェルス	破砕礫(小)					
O-10	A	1	流紋岩質凝灰岩	自然礫片					
O-10	1	1	黒曜石	割片					
O-10	4	1	チャート	割片					

報告書編纂時に改定

表 2 (1) 剥片石器石質組成

石材	遺構	A区 N8c	A区 N9	A区 S18	A区 S19	B区	D区	K11	L12	L9	M10	M11	M12	M9	N10	N11	N11a	N8	O10	O10a	O8	O8d	O9	P8	S4
灰山群																									
	藤江安山岩	2									1	2			1	1				2					
	多礼貫安山岩	1									1	2			2										
	多礼貫藤江安山岩										1														
	無麻呂貫安山岩		1								1	3			3	1		1		1					1
	安山岩		5								9	2			7	14		6		3		2			1
	藤江角閃岩ダイヤサイト																								
	ダイヤサイト										3														
	凝灰岩		2								4	11			15	11		7							1
	輝綠岩										10	3			1	5		1		2					1
灰山群付帯																									
	ダイヤサイト付帯凝灰岩		1						1		1	1			1										
	凝灰岩付帯凝灰岩		1								10	8			11	7				1	10				
	凝灰岩付帯輝綠岩										1				1			2							
	輝江火山噴出凝灰岩																	1							
	輝綠岩										2							1							
	スクリア										3				3										
	堆積付帯														1										
	砂岩		2								15	15			22	12		12							6
	砂岩付帯																								1
	砂岩		1								2	1			3	8		6		1		1	2		1
	シルト岩										1														
	凝灰シルト岩																								
	チャート	13	15	35	1					3	81	86	1		101	97		54		33					2
	凝灰岩																								
	電光岩																								
	ホルンフェルス	2	1	4					2		22	30		1	30	30		20							4
	電光岩																								1
	凝灰安山岩										1				2										
	電光れい岩																								
	凝灰岩																								
	石巻																								
	玉巻																								
	赤玉																								
	赤石																								
	赤石																								
	上野片?	2	1								5	1			3	2				1					1
	黒部片?																								
	黒部片?																								
	成化物																								
	合計	35	16	56	1	1	1	1	3	3	175	169	1	1	201	198	1	110	7	1	99	2	12	3	3

表3 礫石礫石質組成

部種名	石皿	石皿か	磨石	磨石か	小礫	部種不明	合計
石質							
深成岩類							
黒雲母花崗閃緑岩					1	1	
大山岩類							
玄武岩				1	1	2	
多孔質安山岩	2	2					4
多孔質輝石安山岩	3						3
輝石安山岩			4			5	9
安山岩			2		1	3	
輝石角閃石デイサイト					1	1	
輝石デイサイト			1		1	2	
黒雲母流紋岩					1	1	
流紋岩					1	1	
火山砕屑岩類							
デイサイト質溶結凝灰岩			1			1	
流紋岩質溶結凝灰岩						1	1
変成岩類							
ホルンフェルス					1	1	2
緑色岩						1	1
合計	5	2	7	2	2	14	32

表4 礫群構成礫石質組成

石質	数値
深成岩類	
黒雲母花崗閃緑岩	1
大山岩類	
輝石安山岩	16
安山岩	10
デイサイト	2
流紋岩	4
火山砕屑岩類	
デイサイト質凝灰岩	1
流紋岩質凝灰岩	13
火山凝灰岩	1
堆積岩類	
砂岩	15
チャート	9
変成岩類	
ホルンフェルス	24
その他	
土層片?	8
合計	104

4. 考察

遺跡が所在する下野市薬師寺地内は姿川と田川に挟まれた台地と低地が入り組む地形をしており、発掘調査時に、台地は削平を受けているとの所見が得られている。本遺跡から出土した石器・石製品、礫群の礫の主要な岩石礫の供給源としては、鬼怒川流域の地質が想定される。鬼怒川水系の地質は、20万分の1地質図幅「宇都宮」(須藤ほか,1991)および20万分の1地質幅「日光」(山元ほか,2000)で概要を把握できる。

鬼怒川は栃木県と福島県の県境にある帝釈山地を源流として広大な流域面積を有しており、各種の地質が分布する。鬼怒川上流域の基盤は足尾帯に属するジュラ紀堆積岩コンプレックスであり、硬質の砂岩、頁岩、チャートなどから構成される。ジュラ紀堆積岩コンプレックスを構成する砂岩、頁岩、チャートなどは後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に貫かれて、接触変成作用を被っている。鬼怒川流域においては、足尾帯および花崗岩類はさらに前期中新世～鮮新世のデイサイト・流紋岩質火砕岩によって覆われている。花崗岩類および前期中新世～鮮新世のデイサイト・流紋岩質火砕岩には、中新世の流紋岩およびデイサイト・流紋岩岩脈が各所に貫入している。第四紀火山も流域に数多く存在し、男体火山、女峰赤碓火山などの日光火山群や、高原火山といった玄武岩・デイサイト溶岩・火砕岩などを構成岩石とする火山が点在している。

姿川は、宇都宮市鞍掛山を源流とし、宇都宮市西部、壬生町、下野市を経て小山市で鬼川に合流する。足尾帯の堆積岩コンプレックス、後期白亜紀～前期古第三紀の奥日光流紋岩類と呼ばれる流紋岩・デイサイト質火砕岩、新第三紀のデイサイト、流紋岩・デイサイト軽石凝灰岩、礫岩・砂岩、凝灰岩などが分布している。

鬼怒川支流の田川上流においては、ジュラ紀堆積岩コンプレックスを構成する砂岩、頁岩、チャートなどが分布する。新第三紀中新世の玄武岩・安山岩溶岩・同質火砕岩、流紋岩溶岩・同質火砕岩、奥日光流紋岩類、中期中新世の砂岩、泥岩などが分布している。

これらの地質背景に基づき、以下では出土石材の産地について検討し、岩石の大分類別に述べる。なお、地質に関する記述は、須藤ほか(1991)および山元ほか(2000)のほか、日本の地質「関東地方」編集委員会(1986)を参考としている。

深成岩類の中では、斑状黒雲母花崗岩、黒雲母花崗閃緑岩が確認された。鬼怒川源流域に分布する花崗岩類および花崗閃緑岩類、もしくは足尾山地に分布する後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に由来すると考えられる。

火山岩類の中では、流紋岩および安山岩が主体となっており、輝石安山岩、多孔質安山岩、多孔質輝石安山岩、無斑品質安山岩、輝石角閃石デイサイト、デイサイト、黒曜石が確認された。流紋岩は、斜長石斑晶が表面に散在し、緻密な岩相を示し、鬼怒川流域に分布する中新統～鮮新統に由来すると考えられる。安山岩、輝石安山岩、多孔質安山岩および多孔質輝石安山岩は、鬼怒川流域に分布する新第三系や、未変質で新鮮な火山ガラスが認められ、北関東の第四紀火山に噴出したとみられる。輝石角閃石デイサイト、デイサイトは、流紋岩類と同様の産地が推定される。黒曜石は、栃木県高原山、東京都神津島、長野県和田峠などの産地が想定されるが、産地を正確に判定するには、成分分析を併用することが望まれる。無斑品質安山岩は、同質と推定される石材が、栃木県内において姿川流域の河床礫や段丘礫層中から確認されている（森嶋ほか、2006）。河床礫として入手されたものとみられる。

火山砕屑岩類の中では、流紋岩質凝灰岩が主体となっており、デイサイト質凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、軽石火山礫凝灰岩、溶結凝灰岩、凝灰岩、スコリアが確認された。デイサイト質凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、軽石火山礫凝灰岩、火山礫凝灰岩、溶結凝灰岩は、鬼怒川流域に分布する奥日光流紋岩類、新第三紀の流紋岩・デイサイト質火砕岩に由来する。スコリアは、多孔質な岩相を示し、斑晶鉱物として輝石が観察されるものもある。第四紀に活動した火山噴出物に由来するとみられる。

堆積岩類の中では、チャートが主体となっており、砂岩、砂質頁岩、頁岩、シルト岩、凝灰質シルト岩が確認された。砂岩、砂質頁岩、頁岩、チャートは堅硬緻密質であり、足尾帯の主要岩相である。シルト岩および凝灰質シルト岩は、軟質の岩相を示す。シルト岩および凝灰質シルト岩は、肉眼では岩石表面の構成粒子の識別が困難であり、風化岩に判定される可能性もあるが、原岩は不明である。岩石薄片作製鑑定による岩石が望まれる。

変成岩類の中では、ホルンフェルス、緑色岩が確認された。ホルンフェルスは、一般には泥岩を源岩とし、地下深所で、花崗岩などの貫入による接触変成作用により生じた岩石である。足尾帯に分布する頁岩と花崗岩の接触変成部に存在する。緑色岩は、足尾山地に分布する古期堆積岩類に随伴する緑色岩類に由来する岩石であると考えられる。

変質岩類の中では、風化安山岩および変はんれい岩が確認された。変はんれい岩は、はんれい岩が変質を被って形成された岩石で、鬼怒川流域には分布が認められない岩石である。遺跡に移入された石材であるか判定を行うために、正確な岩石名の決定を、岩石薄片作製鑑定などにより実施することが望まれる。風化安山岩は、やや緻密質であるが、風化により表面に微粉が被覆している。火山岩類の安山岩類と同様の産地が推定される。

鉱物の中では、石英、玉髓および赤玉が確認された。石英および玉髓は、火山岩類や堆積岩類中の脈や晶洞部に生じる鉱物である。白色を示すものから無色透光性を示すものまでが確認された。火山岩類や堆積岩類中の脈や晶洞部に生じる鉱物で、鬼怒川水系の新第三系に産地が推定される。赤玉は、流紋川上流域の新第三紀の流紋岩・デイサイトの変質部に由来すると考えられる。

引用文献

五十嵐俊雄,2006,考古資料の岩石学,バリノ・サーヴェイ株式会社,194p.

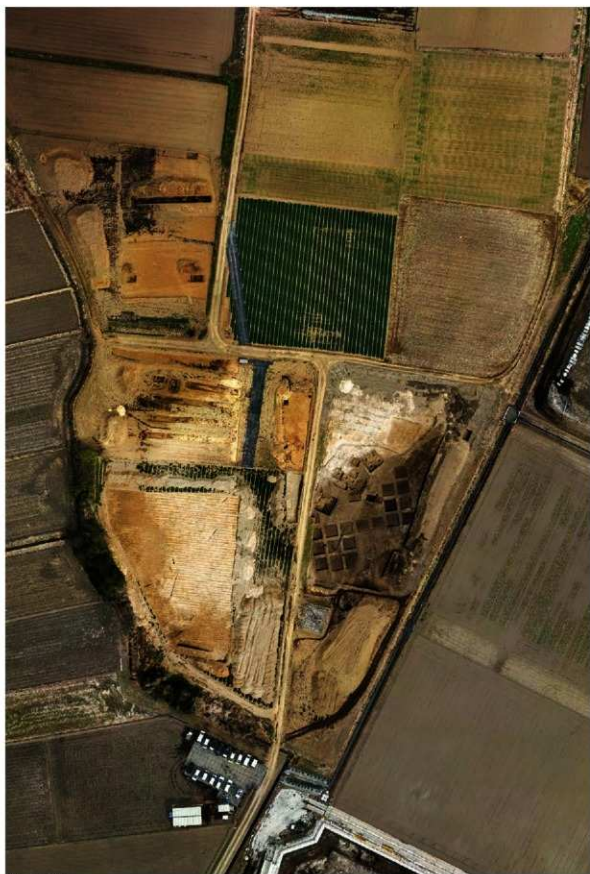
森嶋秀一・布川嘉英・竹下欣宏,2006,栃木県域における黒色安山岩の産地に関する諸問題.栃木県立博物館 研究紀要 一人文一,23,29-53.

日本の地質「関東地方」編集委員会,1986,日本の地質3「関東地方」,共立出版,p.335.

須藤定久・牧本 博・秦 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨・駒澤正夫・広島俊男,1991,20万分の1地質図幅「宇都宮」,地質調査所.

山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久,2000,20万分の1地質図幅「日光」,地質調査所.

写真図版



調査区全景



調査区全景（南西から）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



調査区全景（北東から）



A区北西端部から（北西から）



A区南東端部から（南東から）



A区西壁中央部付近から（西から）



A区M-9付近（南東から）



A区 M-9 付近 (北西から)



第 4 号竪穴建物跡全景 (南西から)



第 8 号竪穴建物跡全景 (南東から)



第 8 号竪穴建物跡全景 (北東から)



第 8 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)



第 8 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南西から)



第 8 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)



第 8 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)



第8号竪穴建物跡遺物出土状況（南から）



第8号竪穴建物跡遺物出土状況（南から）



第8号竪穴建物跡柱穴 p1（南東から）



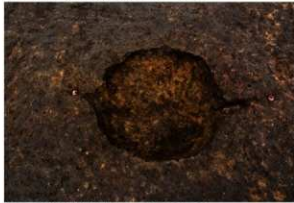
第8号竪穴建物跡柱穴 p2（南東から）



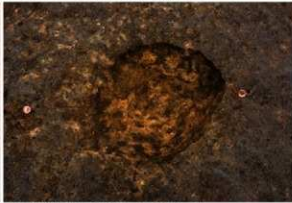
第8号竪穴建物跡柱穴 p3（南東から）



第8号竪穴建物跡柱穴 p4（南東から）



第8号竪穴建物跡柱穴 p5（南東から）



第8号竪穴建物跡柱穴 p6（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド（東から）



第8号竪穴建物跡カマド遺物出土状況（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド土層堆積状況（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド土層堆積状況（東から）



第8号竪穴建物跡カマド掘り方（南東から）



第8号竪穴建物跡カマド掘り方（東から）



第9号竪穴建物跡全景（南東から）



第9号竪穴建物跡全景（南西から）



第 12・93 号竪穴建物跡全景 (南東から)



第 12・93 号竪穴建物跡全景 (南西から)



第 12 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (西から)



第 12 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 (南から)



第 15 号竪穴建物跡全景 (南東から)



第 15 号竪穴建物跡全景 (南西から)



第 15 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)



第 15 号竪穴建物跡土層堆積状況 (北東から)



第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘（北東から）



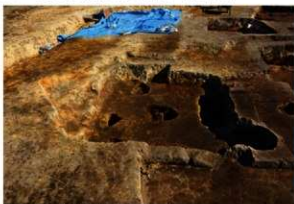
第 19・64・79 号竪穴建物跡完掘（南東から）



第 19 号竪穴建物跡全景（手前）（南西から）



第 19 号竪穴建物跡全景（南から）



第 64 号竪穴建物跡全景（南西から）



第 64 号竪穴建物跡全景（北西から）



第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況（北西から）



第 64 号竪穴建物跡土層堆積状況（北東から）



第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況（南東から）



第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況（南東から）



第 64 号竪穴建物跡 鈿帯出土状況（北西から）



第 64 号竪穴建物跡 鈿帯出土状況（北西から）



第 64 号竪穴建物跡 鈿帯 (23・24) 出土状況（北西から）



第 64 号竪穴建物跡 鈿帯 (25・26) 出土状況（北西から）



第 64 号竪穴建物跡 鈿帯 (27・28・29) 出土状況（北西から）



第 64 号竪穴建物跡掘り方（南東から）



第 64 号竪穴建物跡掘り方（北東から）



第 64 号竪穴建物跡カマド（北から）



第 64 号竪穴建物跡カマド掘り方（北から）



第 79 号竪穴建物跡付近遺物出土状況（南東から）



第 79 号竪穴建物跡カマド確認状況（北西から）



第 79 号竪穴建物跡カマド（北西から）



第 79 号竪穴建物跡カマド



第 79 号竪穴建物跡土層堆積状況（南西から）



第 58 号竪穴建物跡全景 (南東から)



第 58 号竪穴建物跡全景 (北東から)



第 58 号竪穴建物跡土層堆積状況 (南東から)



第 58 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)



第 58 号竪穴建物跡掘り方 (南から)



第 58 号竪穴建物跡掘り方 (西から)



第 58 号竪穴建物跡作業風景 (北西から)



第 58 号竪穴建物跡作業風景 (南東から)



第 58 号竪穴建物跡カマド (南東から)



第 58 号竪穴建物跡カマド (北東から)



第 58 号竪穴建物跡カマド材散布状況 (南から)



第 58 号竪穴建物跡カマド土層堆積状況 (南東から)



第 58 号竪穴建物跡カマド遺物 (第 39 図 8) 出土状況 (南東から)



第 58 号竪穴建物跡カマド (第 80 図 254) 遺物出土状況 (北東から)



第 58 号竪穴建物跡カマド掘り方 (南東から)



第 58 号竪穴建物跡カマド掘り方 (東から)



第 62 号竪穴建物跡全景（北西から）



第 62 号竪穴建物跡カマド（北西から）



第 5 号土坑全景（南東から）



第 6 号土坑全景（南から）



第 14 号土坑全景（南西から）



第 21 号土坑全景（東から）



第 21 号土坑土層堆積状況（東から）



第 21 号土坑土層堆積状況（西から）



第 45 号土坑全景 (西から)



第 46 号土坑全景 (東から)



第 47 号土坑全景 (南東から)



第 48 号土坑土層堆積状況 (南東から)



第 50 号土坑全景 (南東から)



第 54 号土坑全景 (東から)



第 81 号土坑全景 (南東から)



第 82・83 号土坑全景 (南西から)



第 84 号土坑全景（南東から）



第 86 号（奥）・87 号（手前）土坑全景（南東から）



第 92 号土坑全景（北西から）



第 92 号土坑作業風景（北西から）



第 94 号土坑土層堆積状況（南東から）



第 95 号土坑土層堆積状況（南西から）



第 96 号土坑全景（南東から）



第 97 号土坑全景（東から）



第7号ピット全景（東から）



第11号ピット全景（南西から）



第59号溝状遺構（南西から）



第59号溝状遺構（北から）



第59号溝状遺構（南東から）



第85号溝状遺構（北東から）



第14号土坑作業風景（北から）



A区調査作業風景（南東から）



A 西区全景（南から）



B 区全景（北東から）



B 区全景（南から）



C 区全景（東から）



D 区全景（南東から）



D 区全景（西から）



D 東区全景（南から）



D 南区全景（東から）



A区トレンチ1 (南東から)



A区トレンチ2・第54号土坑土層堆積状況 (南西から)



A区トレンチ3 (南から)



A区トレンチ4北面 (南西から)



A区トレンチ5西面 (南東から)



A区トレンチ6南面 (北東から)



A区トレンチ7 (南東から)



A区トレンチ11 (南西から)



B区トレンチ 13 (南西から)



C区トレンチ 15-c・d (南東から)



D区トレンチ 19 (西から)



D区トレンチ 22 (東から)



D区トレンチ 23 (北から)



A区グリッド (南から)



A区グリッド調査作業風景 (北西から)



A区作業風景 (南西から)



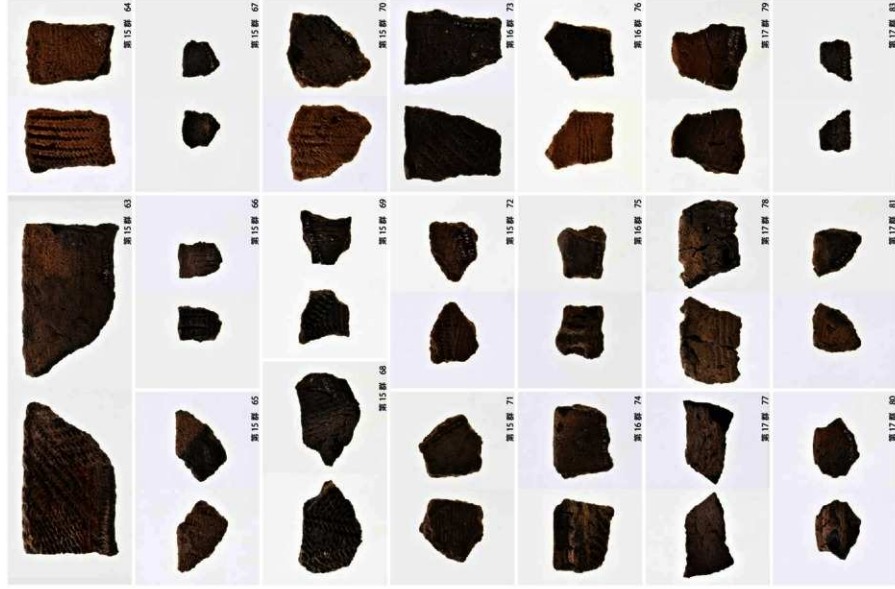






















第 64 号竪穴建物跡出土 銅帯



写真1 A区トレンチ3



写真2 A区第79・80号竪穴建物跡



写真3 A区トレンチ5



写真4 A区トレンチ6下部



写真5 B区トレンチ12



写真6 B区トレンチ13



写真7 C区トレンチ 15-C



写真8 C区トレンチ 15-A



写真9 C区トレンチ 15-B



写真10 C区トレンチ 15-D



写真11 D区トレンチ 21



写真12 D区トレンチ 22

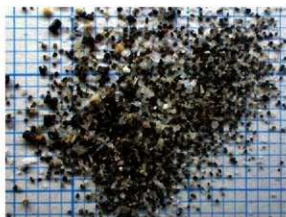


写真1 A区トレンチ5・試料2 (As-B 混在)

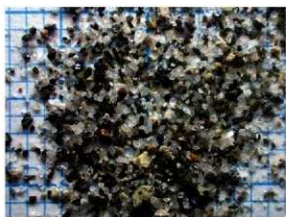


写真2 A区トレンチ5・試料6 (Hr-FA 混在)

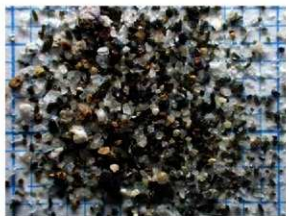


写真3 A区トレンチ5・試料10 (As-C 混在)

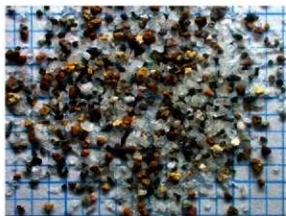


写真4 D区トレンチ21・試料4 (As-YP)



写真5 D区トレンチ21・試料8 (As-Ok1 混在)



写真6 C区トレンチ15-B・試料2 (As-BP G 混在)

何れも落射光下で撮影、背後は1mmメッシュ。



1. A区表採 多孔質安山岩



2. N-9a 無斑晶質安山岩



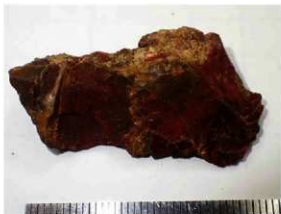
3. SI-12 付近 砂岩



4. SI-79 チャート



5. L-12 表採 ホルンフェルス



6. N-11a 赤玉

報告書抄録

ふりがな	しのざきいせき
書名	篠崎遺跡
副書名	県営農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第417集
編著者名	篠原浩恵
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫 474 番地 TEL0285-44-8441
発行機関	栃木県 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2024年3月28日（令和6年3月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 東 経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
しのざきいせき 篠崎遺跡	しもつけし 下野市 やくしじょうち 薬師寺地内	下野市	2180	36° 38' 78"	139° 86' 69"	2023001 ～2023030 20230403～ 20240328	7,226 m ²	農地整備事業（経営体育成型）薬師寺・柴地区における埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
篠崎遺跡	集 落 跡	縄文時代 古墳～奈良・平安時代 中近世	竪穴建物跡 土 坑 ピット 溝状遺構	11 縄文土器・石器・土師器・ 43 須恵器・鈔帯・陶磁器・ 12 古銭 等 4	縄文時代早期～前期を主体とする包含層 古墳時代終末期～奈良・平安時代、中・近世の集落跡

要 約	<p>篠崎遺跡は下野市自治医大駅周辺の市街地から東へ約1.5km、北東から南西に伸びる台地上及び緩斜面に立地する。縄文時代（草創期～後期）～古代にかけての包含層を確認し、早期を主体とする縄文土器・石鐮等の石器・二次加工や使用痕のある剥片・剥片、土師器・須恵器などが出土した。古墳時代終末期～古代の集落跡は谷部に面して展開する。今回の調査による地形復元からは、谷部に面した狭量地が選地され、7世紀後半～8世紀前半にかけてに集落の空白期があることが明らかとなった。</p>
-----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第417集

篠崎遺跡

～ 県宮農地整備事業（軽宮体育成型）薬師寺・集地区における埋蔵文化財発掘調査～

発行 栃木県

宇都宮市瑞田 1-1-20

TEL 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

TEL 028 (643) 1011

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441

発行日 令和6年3月28日発行

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
